平成27年9月期
関西大学審査学位論文

博士学位論文

青年期における親子関係の実証的研究

―　母－青年関係を中心に　―

関西大学大学院心理学研究科　心理学専攻

１０Ｄ８５０３

小高　恵

論文内容の要旨

発達心理学的な観点からみると，青年期は親子関係の転換の時期（Grotevant & Cooper, 1986; Laursen, Coy, & Collins, 1998），また再形成の時期である。この時期は，子どもから大人になる移行期であり，青年期の発達の主題は，アイデンティティの確立であり（大野, 2010），青年期は親から心理的に自立する時期でもある。この時期の親子関係は心理的離乳という言葉で表わされるように青年が親離れしていく時期にある（西平, 1990）。

ところで，親子関係の視点から青年の「心理的自立」という概念を捉えると，これまで心理的自立について様々な見方がなされている。古くは，L. S. Hollingworth が心理的離乳という言葉を用いて心理的自立を説明している（平石, 2006, 2007）。また D. Ausubel は脱衛星化という言葉を用いて，青年期の自立を捉えている（西平, 1990）。さらに Blos (1967) は青年期を第二の個性化という言葉を用いて自立を捉えている。これらの自立の捉え方は，親から分離することに主眼が置かれていたように思われる。

しかし，1980 年代に入り，自立を親からの分離の側面だけから捉えるのではなく，親との良好な関係を維持しながら個性化する方向へと進んでいくものとして捉えられるようになる。例えば，Grotevant & Cooper (1985, 1986) は青年―両親間の言語的コミュニケーションの中で分離的側面と結合的側面を包括する「個性化（individuation process）モデル」を提唱している。このモデルでは，青年―両親間の分離的側面と結合的側面は親子の言語的コミュニケーションの中で同時に生起しているとし，分離的な側面と結合的な側面の二つの視点を統合する立場をとっている。このように，最近の研究においては，親からの心理的自立は単に親から分離するだけではなく，親との関係をうまく保ちながら，親とは別の個人として行動し，その責任をとれるようになることを意味するものとなってきている。

さらに，親―青年関係は，個人の心理的側面と関係しているということが報告されている。例えば，平石（2000a）は，親―青年関係の結合性と独自性に注目し，青年期後期においても親子間コミュニケーションのあり方が青年の人格発達と関係していることを示唆している。また，渡邉・平石（2010）は，中学生の母子を対象に，中学生から高校生の母親の養育スキルはどのように変化するのかを子どもとその母親を対象に 3 年 3 時点の縦断

調査を行い，階層的重回帰分析により検討している。その結果，継続的に理解･関心スキルを用いた関わりをすることが，子どもの母子相互信頼感に影響を及ぼし，間接的に子どもの心理的適応に影響を及ぼしていることを報告している。さらに水本・山根（2011）は，青年期の女性を対象に調査を行い，母娘関係が娘の発達や適応に影響を与えていることを報告している。このことから，青年期の親子関係は青年の適応と関係することが予想され，青年期の親子関係研究を行うことは，非常に意義あるものと考える。

本論文においては，母―青年関係に焦点を当て，探索的因子分析を用いた母―青年関係の構造分析，動的因子分析を用いた母と娘の相互作用分析を行い，青年と母とのコミュニケーションの構造，両者の相互作用について明らかにすることを第一の目的とする。次に，母―青年関係と青年の心理的側面との関連について明らかにすることを第二の目的とする。本論文は，次のⅣ部 9 章で構成する。

第Ⅰ部　親―青年関係研究についての研究展望

序章　親子関係研究の歴史

序章では，親子関係研究の歴史について概観し，親子関係が，その時代のイデオロギーや社会的，経済的，文化的な状況によって変化する側面が大きいことを論じ，親子関係研究の意義を議論した。

第 1 章　親子関係研究の概観 1－方法論から見た親子関係研究－

第 1 章では，1960 年代以降の親子関係研究に焦点を当て，「子どもに対する親の態度・行動（親→子）に関する視点」と「親に対する子どもの態度・行動（子→親）に関する視点」の二つの視点から，これまでの親子関係研究について議論した。

次に方法論的な立場から親子関係研究について概観した。青年期の親子関係研究は，親の養育態度・行動の研究から親―青年関係の両者の相互作用についての研究に広がり，またその分析手法は因子分析法を用いた横断的方法を軸にしながら，構造方程式モデリング（SEM ：Structural Equation Modeling）や動的因子分析などを用いた縦断的研究へと広がってきたことを報告した。

最後に，我が国における最近の親子関係研究の動向と展望について述べた。最近の親子関係研究においても対象者を青年のみとする研究が多いこと，また縦断研究は依然として多くないことを報告するとともに，関連文献を踏まえて縦断研究の重要性を論じた。

第 2 章　親子関係研究の概観 2－親子関係と青年の心理的側面との関連－

第 2 章では，親子関係とアイデンティティ，自尊心，パーソナリティ等の心理的側面との関係について，これまでなされてきた親子関係研究を概観した。青年期後期においても親と子の関係は，青年の心理的側面に影響を及ぼしている可能性があることについて論じた。

第 3 章　本論文の目的と方法

第 3 章では，青年期における親子関係研究で残されている課題について検討し，本論文の構成と目的を示した。最後に，第 4 章～第 8 章のそれぞれの調査概要について論じた。

第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション

第 4 章　青年の母に対する態度・行動についての構造分析

第 4 章では，2004 年に大学生を対象に行った，青年の母に対する態度・行動についての構造を明らかにすることを目的とした。これまで，小高（1998, 2010）は因子分析により，その構造を検討していたが，本章では，探索的因子分析に加え，この分野での新しい試みとして，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により，青年の母に対する態度・行動の構造について検討した。その結果，青年の母への態度・行動の構造が男女で類似した「母との情愛的絆の因子」,「母からのポジティブな影響の因子」,「母との対立の因子」「母への服従の因子」,「母に対する客観視の因子」,「母とは別の独自の生き方の因子」の 6 因子で構成されることを明らかにした。

第 5 章　青年の母―青年関係の相関分析的研究

第 5 章では，大学生の母子関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」の関連を明らかにするために，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により両者の相関分析を行った。まず「母の子に対する態度・行動」の構造分析を因子分析法により行った結果,「受容の因子」と「統制の因子」の 2 因子を得た。次に「子の母に対する態度・行動」の構造分析を因子分析法により行い，その結果,「母との情愛的絆の因子」,「母からのポジティブな影響の因子」,「母との対立の因子」,「母への服従の因子」,「母に対する客観視の因子」,「母とは別の独自の生き方の因子」の

6 因子を得た。最後に両者の関連性について，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により両者の関連を検討した結果，母を統制的であると認知するほど，青年は母に服従するが，その一方で反発を感じていること，また母を受容的であると認知するほど，青年は母からポジティブな影響を受け，情愛的絆が強いと感じ，対立的でないと認知していることが明らかとなった。

第 6 章　母娘関係の日々の相互作用の分析　－動的因子分析を適用して－

第 6 章では，中学 1 年生の一組の母娘関係に焦点を当て，動的因子分析（dynamic factor analysis：DFA）により分析を行い，母と娘の日々の影響過程を明らかにした。母と娘それぞれが毎日，一日を振り返り，母娘関係の質問紙に，それぞれに回答するという形式の調査を 144 日間実施し，まず時間経過を入れない方法で，各尺度についての下位尺度（小包）を因子分析法により構成し，因子と小包化した下位尺度の関係が成立することを母と娘，別々の SEM により確認した。次に母娘関係の相互作用の分析を行い，最後に，前々日から前日と当日の影響過程を検討するために，得られた母娘関係の相互作用に時間的な遅れ（ラグ）を入れた DFA を行った。その結果，その日の母娘関係が，次の日の母娘関係に影響することが確認され，また両者の影響過程については，その日の「母の統制の因子」から次の日の「娘の親和志向の因子」へ，またその日の「娘の親和志向の因子」から次の日の「母の受容の因子」へというように，娘と母の関係は独立した関係ではなく，日々互いに影響を及ぼしあうということが明らかとなった。

第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係

第 7 章　母―青年関係と個人志向性・社会志向性の関連性について

第 7 章では，大学生を対象に，青年の母への態度・行動と個人志向性・社会志向性との関連を明らかにするために，青年の母への態度・行動の青年の心理社会的適応への影響を SEM により，男女の 2 集団の同時分析を行った。その結果，男女共に，母への親和志向的な態度は社会志向性と関係しており，母への客観的独立志向的な態度は個人志向性と関係していた。すなわち母への親和志向的な関係は，他者との調和的共存や社会適応と，また母からの客観的独立志向的な関係は，自他の差異性を強調する個性や独自性を尊重することと関係していることが明らかとなり，大学生においても，母子関係が青年の心理社会的適応に重要な役割を果たしていることを考察した。

第 8 章　母娘関係と情動性の関連性について

第 8 章においては，中学 1 年生の母娘の 3 組のペアを対象に，日々の母娘関係と情動性の変化から，変数に潜在する因子を探索的因子分析（P 技法因子分析）により探索し，母娘関係と母娘の情動性との関連性を明らかにした。まず，探索的因子分析により，それぞれの組み合わせで母娘関係については 5 つの因子が，情動性については母と娘に関する 2 因子の合計 7 因子が得られた。母娘関係に関する 5 因子については，対象者によって類似した因子とそうでない因子が認められる結果となった。それぞれの 5 つの因子は，全く同一ではないが，共通する因子群が存在した。それらは，「娘の認知する母との親和的関係」に関する因子群と「娘の認知する母への反抗的態度・行動」に関する因子群，「母の認知する娘との親和的関係」に関する因子群であった。

次に，3 組に共通して得られた母娘関係の因子と母娘の情動性との関係を明らかするために，共通に負荷を示す項目を選択し，これらの項目を用いて，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行ったところ，適合度の高いモデルを得ることができたが，母娘関係と情動性との関連は，それぞれの母娘の組み合わせで違いが認められた。娘の情動性と母の情動性が母娘関係を介して間接的に関連する場合や，娘の情動性と母の情動性が母娘関係とは関連するが娘の情動性と母の情動性が間接的に関連しない場合や，娘の情動性と母の情動性が直接的に関連する場合などのパターンが存在することが明らかとなった。これらの結果は，娘の情動性と母の情動性の関連は，いくつかの道筋が存在することを示唆するものであり，その道筋はその母娘ペアによって異なるということを考察した。

第Ⅳ部　総括的討論

第 9 章　全体考察

ここでは，本研究の全体を総括した。次に母―青年関係を中心とした本研究の成果について述べた。母―青年関係の統合的な枠組みの概念的枠組みについて，大学生における青年の母への態度・行動が「母への親和志向」「母からの客観的独立志向」の 2 つの次元に集約されること，また母の青年の態度・行動は「受容」と「統制」の 2 つの次元に集約されることを考察した。また大学生の母子関係についての性差について，これまでのなされた多くの研究で母娘関係が親密であるという研究結果が報告されているが，本研究はこれ

らの結果を支持するものであることを議論し，母娘関係が親密であることの理由について考察した。さらに，第 7 章の結果を踏まえ，母―青年関係が青年の心理社会的適応と関係していることを議論し，母―青年関係が青年期後期においても青年の心理社会的適応に影響を及ぼしている可能性があることを考察した。次いで，中学生を対象にした母娘関係のペアデータの研究結果からも,母と娘が日々互いに影響を及ぼしあっていることを考察し，両者の相互作用の重要性を指摘した。

最後に親―青年関係の今後の課題と可能性について議論し，本研究の限界と今後の研究の展開の可能性について論じた。

目　次

第Ⅰ部　親―青年関係研究についての研究展望 …… 1
序章　親子関係研究の歴史 …… 2
1. はじめに …… 2
2. 親子関係のあり方の変遷 …… 2
3. 本格的な親子関係研究の始まり …… 3
4. 本章のまとめ …… 9

第１章　親子関係研究の概観 1－方法論から見た親子関係研究－ …… 10
1.　親子関係の二つの研究のアプローチ …… 10
(1) 子どもに対する親の態度・行動(親→子)に関する研究の概観 …… 10
(2) 親に対する子どもの態度・行動(子→親)に関する研究の概観 …… 16
2. 方法論から見た親子関係研究の概観 …… 22
(1) 古典的な探索的因子分析的研究 …… 22
(2) 構造方程式モデリングを用いた因果関係研究と縦断的研究 …… 22
(3) 時間経過を入れた親子関係の相互作用に関する研究 …… 23
(4)　P 技法データと動的因子分析 …… 24
3. 我が国における最近の親子関係研究の動向と展望 …… 28
4. 本章のまとめ …… 35

第２章　親子関係研究の概観 2－親子関係と青年の心理的側面との関連－ …… 37
1. 親子関係とアイデンティティ，自尊感情，自己受容との関連についての研究 … 37
2. 親子関係とパーソナリティ特性，及び心理的適応との関連についての研究 …… 40
3. 親子関係と子どもの社会化との関連についての研究 …… 44
4. 親子関係と職業意識，食行動との関連についての研究 …… 45
5. 本章のまとめ …… 46

第 3 章　本論文の目的と方法 …… 47
1.　親子関係研究についての課題 …… 47
(1) 親―青年関係の相互作用を捉えることの意義 …… 47
(2) 親―青年関係の分析方法を検討することの意義 …… 47
(3) 親―青年関係と青年の心理的側面との関係を捉えることの意義 …… 48
2.　本論文の構成と目的 …… 49
(1) 第Ⅰ部　親―青年関係研究についての研究展望 …… 49
(2) 第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション …… 50
(3) 第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係 …… 50
(4) 第Ⅳ部　総括的討論 …… 50
3.　調査方法 …… 52
(1) 第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション …… 52
(2) 第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係 …… 53

第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション …… 54
第 4 章　青年の母に対する態度・行動についての構造分析 …… 55
1.　目的 …… 55
2.　方法 …… 55
(1) 対象者 …… 55
(2) 調査時期 …… 55
(3) 測定変数 …… 55
(4) 分析手続き …… 57
3.　結果 …… 57
(1) 青年の母への態度・行動についての構造分析 …… 57
(2) 青年の母への態度・行動の性差について …… 62
(3) SEM による母子関係モデルの構築 …… 62
4.　考察 …… 69
5.　本章のまとめ …… 69

第 5 章　青年の母―青年関係の相関分析的研究 …… 71
1.　目的 …… 71
2.　方法 …… 71
(1) 調査対象者 …… 71
(2) 質問項目 …… 71
(3) 調査時期 …… 71
(4) 分析手続き …… 71
3.　結果 …… 72
(1) 母の青年に対する態度・行動についての探索的因子分析 …… 72
(2) 青年の母に対する態度・行動についての探索的因子分析 …… 77
(3) SEM による母子関係モデルの構築 …… 82
4.　考察 …… 89
5.　本章のまとめ …… 93

第 6 章　母娘関係の日々の相互作用の一分析　－動的因子分析を適用して－ …… 94
1.　目的 …… 94
2.　方法 …… 94
(1) 調査参加者と測定期間 …… 94
(2) 質問項目 …… 95
(3) 分析方法 …… 95
3.　結果 …… 96
(1) 母娘関係の 4 尺度ごとの P 技法因子分析と下位尺度(小包)の構成 …… 96
(2) 時間経過を入れないラグ 0 モデルの分析結果 …… 99
(3) 時間経過を入れたラグ 2 モデルの分析結果 ……107
4.　考察 ……113
独自性と結合性の観点からの考察 ……114
5.　本章のまとめ ……115

第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係 ……117
第 7 章　母―青年関係と個人志向性・社会志向性の関連性について ……118

1. 目的 ……118
2. 方法 ……120
(1) 調査対象者 ……120
(2) 倫理的配慮 ……120
(3) 調査時期 ……120
(4) 質問項目 ……120
(5) 分析手続き ……121
3. 結果 ……121
(1) 母への態度・行動についての因子分析の結果 ……121
(2) 母―青年関係の性差について ……122
(3) 個人志向性・社会志向性尺度の妥当性の検討 ……123
(4) 母―青年関係と個人志向性・社会志向性との関連について ……124
4. 考察 ……130
(1) 母―青年関係の因子構造と性差について ……130
(2) 母―青年関係と心理社会的適応との関連について ……131
5. 本章のまとめ ……133

第８章　母娘関係と情動性の関連性について ……134
1. 母娘関係の個別記述的な分析　（分析 1） ……134
1-1. 目的 ……134
1-2. 方法 ……134
(1) 対象者と測定期間 ……134
(2) 質問項目 ……135
(3) 分析手続き ……135
1-3. 結果 ……136
(1) 母娘関係の項目と情動性の項目についての因子分析 －1－ ……136
(2) 母娘関係の項目と情動性の項目についての因子分析 －2－ ……140
(3) 母娘関係の項目と情動性の項目についての因子分析 －3－ ……144

1-4. 考察 ……148

2. 母娘関係の普遍性と個別性の分析
－3 組の母娘の 2 者関係の同時分析から－ （分析 2） ……157
2-1. 目的 ……157
2-2. 方法 ……157
(1) 対象者と測定期間 ……157
(2) 質問項目 ……157
(3) 分析手続き ……157
2-3. 結果 ……157
2-4. 考察 ……163
3. 全体考察 ……167
4. 本章のまとめ ……167

第Ⅳ部 総括的討論 ……169
第 9 章 全体考察 ……170
1. 本研究結果の総括 ……170
2. 本研究の成果 ……172
(1) 母―青年関係の統合的な枠組みの提供と方法論的試み ……172
(2) 母―青年関係と青年の心理的側面との関係 ……173
(3) 母―青年関係の性差について ……176
3. 親―青年関係研究の今後の課題と可能性 ……177
(1) 親―青年関係研究の今後の課題 ……177
(2) 親―青年関係研究の可能性 ……178

引用文献 ……179

第Ⅰ部　親―青年関係研究についての研究展望

序章　親子関係研究の歴史

1.　はじめに

人間が出生して，最初に関係する対人関係は，多く場合，親（養育者）であろう。人間の場合，子どもは未熟な状態で生まれるため，親の世話が必要となる。一方，子どもは親の世話を引き出すような行動を示す。例えば，乳児が示す微笑は，親の養育行動を喚起し，子どもに対する親の愛着を促進する機能をもつと言われている（高橋，1994）。このように出生直後から親と子は互いに影響を与え合っており，子どもにとって親は身近な人間であり，子どもの発達に大きな影響力を持つと考えられる。子どもの発達に親が多大なる影響を与えていることは，親子関係研究が始まる以前から指摘されてきた（小野寺，2014）。次節では，1930 年代に Levy, D.M.が行った本格的な親子関係研究が始まる以前に，親子関係がどのように捉えられてきたのかということについて概観する。

2.　親子関係のあり方の変遷

親子関係のあり方はいつの時代も同じなのであろうか？子どもは何ものにも代え難いものであるのだから，いつの時代も，どの文化においても子どもの価値は絶対的なものであり普遍なものであると考えている人も少なくないであろう。また母親は子の世話をするのが当たり前であって，母親の愛は慈愛に満ちたものであり，それはいつの時代も変わらないと思う人もいるのではないだろうか。しかしながら，過去の親子関係をみるとそうではない。例えば，古代ギリシャ時代のアテネの民主主義的な教育とスパルタの全体主義的な教育からもわかるように，子どもの持つ価値の違いは文化によって異なるということが窺われる。さらに紀元前 450 年ごろ制定された，古代ローマ最古の法典である「十二銅板法（十二表法）」においては，父親の権力が絶対的なものであることが記されている(山田，1962)。

Badinter (1980)によれば，17～18 世紀のフランスでは，多くの乳児が生まれてすぐに里子に出され，子どもを大切にするという考えはなかったとされている。そのこともあって乳幼児の死亡率は高く，人口減少が国家に損失を与えることが危ぶまれた。そこで子どもの死亡率を引き下げるために，母親の責務が求められるようになったのである。母親に対して子どもへの授乳が礼讃され，母親の手で子どもを養育することが求められるように

なり，母であることが女の第１の役割という考えが浸透していったようである。

我が国においては，「育児は母親の仕事で，子どもにとって母親が最善だ」とする母親観がある。しかしながら，これも古来普遍のものではない。日本においては，古くから子どもは何にもまさる宝であるという子宝思想があり，江戸時代においては，父親も子育てにかかわっていた。また農村では明治，大正から昭和初期頃までは子育てを町ぐるみで行っていたのである。ところが，その一方で，明治に入ると，富国強兵のため，「良妻賢母教育」が国の政策として始まり，「男は仕事，女は家庭」という性別役割分業体制が始まり，母親の手に子育ての責任が委ねられるようになったようである（大日向, 1999）。

アメリカにおいては，1946 年に「スポック博士の育児書」が出版され，それまでの厳格な育児から寛容な子育てへと移り変わってきたとされる（森山, 2010）。それ以前の伝統的な生活観のもとでは，育児とは理性的な訓練としてとらえられ，幼児は規則正しい生活をすべきという信念が強かったようである。子どもの自立性や自発性を大切にすべきと提唱したこの育児書の影響は大きく, 多くの母親から注目され, 当時の母親が子育てする上で，この育児書を指針にしてようである。しなしながら，スポックの育児書は，中産階級をモデルとして描かれており，労働者階級の家族や働く母親，狭いアパート暮らしの一家などには,「育児書」の助言を実践することは難しかったようである。特に母親は一日中子どもに対して注意を向けなければならなくなるというように，その負担はかえって重くなったという指摘もある（森山, 2010）。

このように親子関係のあり方は，いつの時代においても普遍なものではなく，その時代のイデオロギーや社会的，経済的，文化的な状況によって変化する側面が大きいと思われる。

3.　本格的な親子関係研究の始まり

親子関係の概念が最初に登場したのは，Levy（1931）の過保護（Maternal Overprotection）の研究であるとされている（Holden & Miller, 1999）。Levy (1943) は，過保護という視点から親子関係を捉えており，過保護の定義を①母親が長期にわたって子どもと一緒にいること，②母親が子どもを赤ちゃん扱いにすること，③母親が子どもを成長させようとせず，危ない目にあわせないようにすることとし，人の問題行動の大きな原因の一つが母親の過保護だと言及している（小野寺，2014)。

養育態度・行動を体系的に理論化したのは，Symonds (1937) である。Symonds (1939)

は親子関係の基本次元を Figure 0-1 に示すような受容―拒否，支配－服従の二つの軸で捉え，親子関係を「無視」「残忍」「過保護」「甘やかし」に分類している。さらに宮城(1960)は，Symonds（1939）の研究を元に親の養育態度と子どものパーソナリティとの関係を Figure 0-2 に示している。この Symonds の研究は，今日の親子関係の基本概念となったと考えられる。

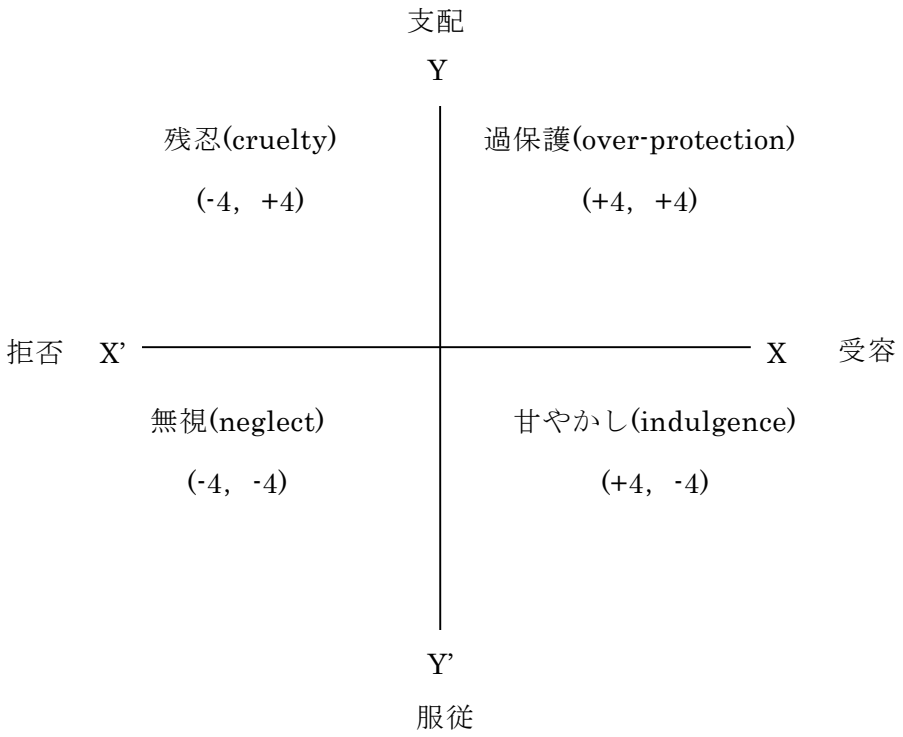


Figure 0-1 Symonds (1939, P.20) による養育態度の 4 分類

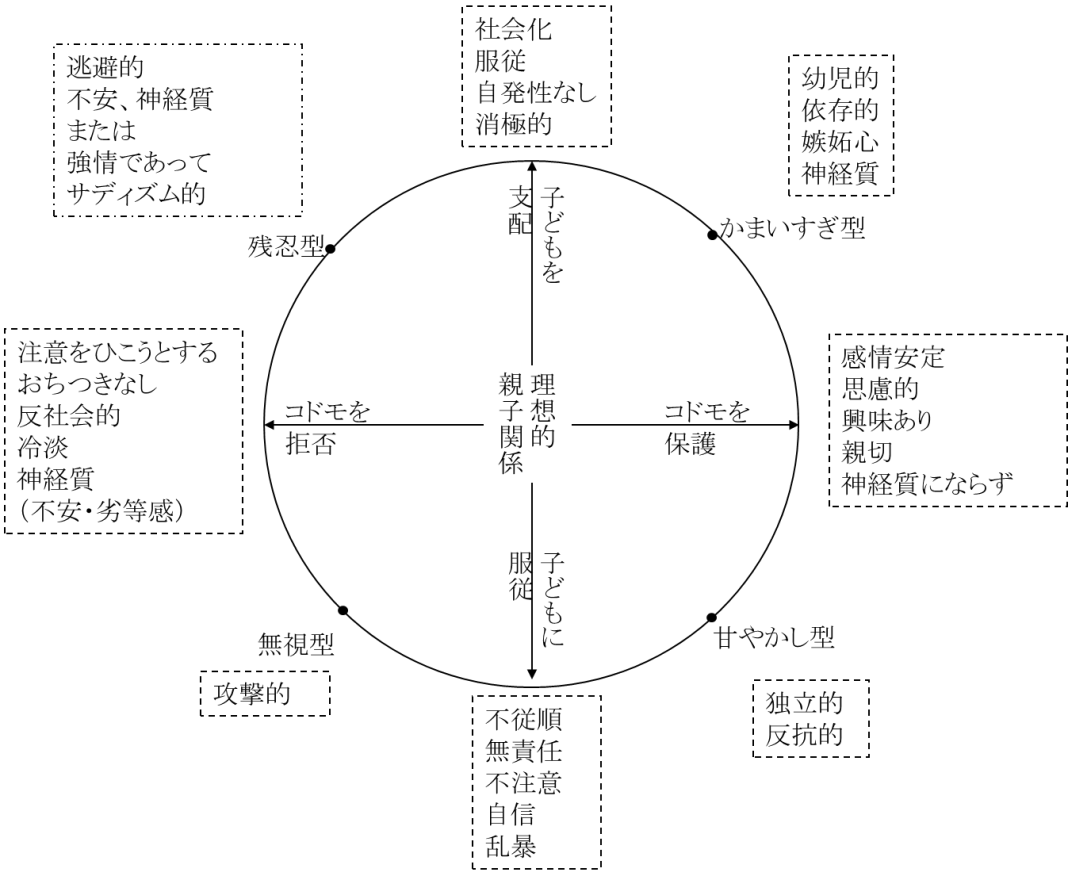


Figure 0-2　親の養育態度と子どもの性格（宮城, 1960, P.103）

Holden & Miller (1999) は，親の養育態度・行動の概念について，過去の親子関係研究についてまとめている（Table 0-1)。また Rohner (2004a) は，受容―拒否の次元は，多くの研究で認められているとし，1930 年代～2001 年までになされた研究の中で，親の受容―拒否に関する研究について Table0-2 のようにまとめ，受容－拒否の次元が，親子関係の中でも特に重要な次元であるとしている。

Table 0-1 1931-1988 に出版された養育特性の枠組みについて(Holden & Miller, 1999)

著者	特性
Levy (1931, 1943)	過保護
Watson (1934)	甘やかし 対 厳しい家庭の躾
Hattick & Stowell (1936)	甘やかし，押し付け，適切な行動
Symonds (1938)	受容，拒否
Baldwin, Kalhorn, & Breese (1945)	拒否的，きまぐれな，受容的（「民主―独裁」「甘やかし―無関心」の次元上で変化する）
Lafore (1945)	独裁者，協力者，妥協する人，なだめる人
Crandall & Preston (1955)	愛情，保護，活発的統制，強制的統制
Brody (1956)	敏感な，敏感でない，不十分に敏感な，もしくは極度に敏感な
Sears, Maccoby, & Levin (1957)	攻撃的／懲罰的，許容的／厳しい，暖かい，応答的
Schaefer (1959)	受容，過度な甘やかし，保護的な甘やかし，過保護，所有欲，権威主義的支配，相入れない要求，拒否，無視，自由放任，民主的，協力的
Spitz (1965)	拒否，甘やかし，不安を装った敵意，動揺，周期的気分の変動，意識的に補償された敵意
Moulton, Burnstein, Liberty, & Altucher (1966)	母 対 父のしつけ的な支配と高い愛情と低い愛情
Ainsworth, Bell, & Stayton (1971)	高い感受性 対　鈍い感受性
Baumrind (1971)	権威主義的親，信頼できる親，許容的親
Martin (1981)	関与 対 自律性
Koch, Chandler, Harder, & Paget (1982)	親の防衛様式としての，抑圧，否定，防衛機能，感情転移，投影
Pulkkinen (1982)	子ども中心 対 親中心，指導的態度と利己的な態度
Abelman(1985)	誘導的躾 対 厳しい躾
Sameroff & Feil (1985)	共生的，断定的，補償的，釣り合いのとれた親の思考の基準
Raphael-Leff (1986)	手助け 対 監視
Metcalf & Gaier (1987)	前向きな努力，過保護，無関心，葛藤
McCord (1988)	攻撃的，非攻撃的，懲罰的

注）Holden & Miller (1999)の表を引用し，訳したものである

Table 0-2　親の受容―拒否に関する研究と主要な尺度（Rohner(2004a)より引用）

年代	実例となる研究	使用された主要な尺度
1930-1960 年代	Cole, 1933; Foley, 1932; Symonds, 1939, 1949; Witmer, Leach, & Richman, 1938	臨床的評価と関連する尺度
	Baldwin, Kalhorn, & Breese, 1945, 1949; Champney, 1941; Medinnus, 1959; Waters & Crandall, 1964	Fels の親の行動評価尺度
1950-1970 年代	Schaefer, 1959, 1961; E. Schluderman & Schluderman, 1970; S. Schluderman & Schluderman,1971, 1983	親の行動尺度の子どもの報告（CRPBI）
1960 年代	Roe & Siegelman, 1963; Siegelman, 1965a	親子関係尺度(Parent-Child Relations Questionnaire)
1960 年代～	Baumrind, 1966, 1989, 1991; Gray & Steinberg, 1999; Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling, 1992; Steinberg, Elman, & Mounts, 1989	養育スタイルの指標; CRPBI を含んだ自己報告
	Khaleque & Rohner, 2002; Rohner, 1960, 1975, 1986, 2004b; Rohner & Britner, 2002; Rohner & Cournoyer, 1994; Rohner & Venrziano, 2001	親の受容―拒否尺度（PARQ）; PARQ／統制；親密なパートナーの受容拒否尺度；パーソナリティ評価尺度；異文化間の研究；民俗学的フィールドワーク
1980 年代～	Amato & Booth, 1997; Barber & Thomas, 1986; Peterson, Rollins, & Thomas, 1985; Rollins & Thomas, 1979; Whitbeck, Conger, & Kao, 1993	多様な尺度の開発
	Arrindell, Gerlsma, Vandereycken, Hongeman, & Daeseleire, 1998; Emmerlkamp & Heeres, 1988; Perris, Arrindell & Eisemann, 1994; Perris, Jacobsson, Lindström, von Knorring, & Perris, 1980	EMBU（Egna Minnen Beträffande Uppfostran）尺度
	Parker, 1983a, 1983b, 1986; Torgersen & Alnaes, 1992	親の絆尺度
1990 年代～	Downey & Feldman, 1996; Downey, Khouri, & Feldman, 1997; Feldman & Downey, 1994	拒否感質問紙
	Chen, Dong, & Zhou, 1997; Chen, Hastings, Rubin, Chen, Cen, & Stuart., 1998; Chen, Liu, & Li 2000; Chen, Wu, Chen, Wang, & Cen, 2001	子育ての習慣 Q ソート法, CRPBI と他の尺度

1930 年代から 1980 年代にかけての研究は，親の養育スタイルは受容―拒否の次元が共通して集約できる。この次元は，その後の研究でも大きな枠組みとなった。

一方，我が国においては，品川・品川（1958）が親子関係診断尺度を考案している。彼らは臨床心理学的経験に基づいて，①消極的拒否，②積極的拒否，③厳格，④期待，⑤干渉，⑥不安，⑦溺愛，⑧盲従，⑨矛盾，⑩不一致の 10 個の型に分け，論理的妥当性によって，項目を収集し，質問紙を作成している。そして，これらの中の矛盾・不一致以外の 8 つの型を，Figure 0-3 に示すように，「支配」―「服従」と「保護」―「拒否」の二次元に位置づけている。この図は，Symonds の「受容」―「拒否」，「支配」―「服従」で表される図と類似している。

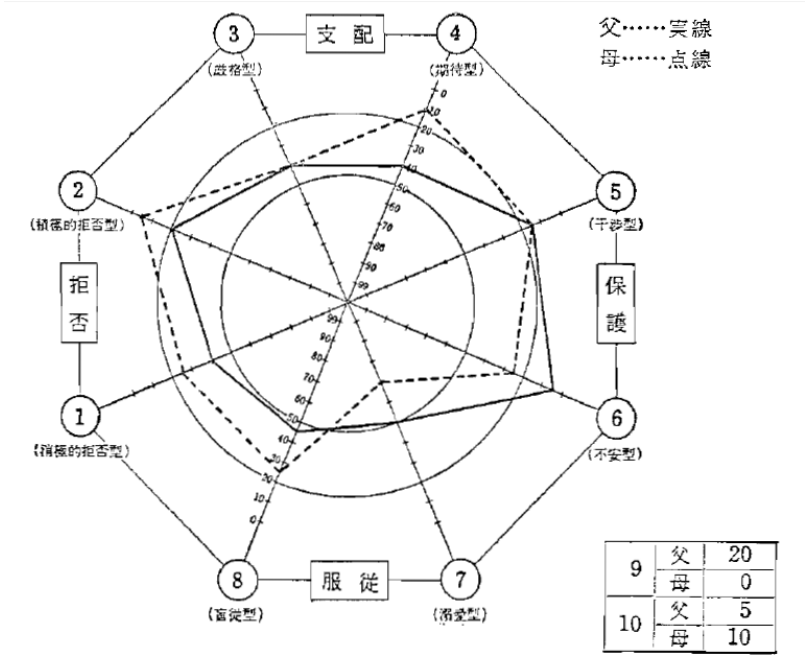


Figure　0-3　親子関係の診断(品川・品川, 1958, P.20)

ところで，親子関係の初期の研究においては親の養育態度・行動についての研究が多くを占め，両者の相互作用というよりも，むしろ親から子への態度・行動について検討されていたようである。親子関係研究で大事なことは，その関係が親から子への一方通行ではなく，「親から子へ」「子から親へ」という相互作用を明らかにすることであり，両者の関係を捉えることが重要であると考える。

4. 本章のまとめ

本章においては，まず親子関係のあり方は，いつの時代においても普遍なものではなく，その時代のイデオロギーや社会的，経済的，文化的な状況によって変化する側面が大きいということについて論じ，次に親子関係研究の初期の研究を紹介した。

第１章　親子関係研究の概観１

－方法論から見た親子関係研究－

序章においては，初期の親子関係研究の歴史について紹介した。本章においては， 1960 年代以降の親子関係研究に焦点を当て，「子どもに対する親の態度・行動（親→子）に関する視点」と「親に対する子どもの態度・行動（子→親）に関する視点」の二つの視点から青年期の親子関係を捉え，さらに親子関係研究の方法論の観点から親子関係の諸研究について概観する。

1.　親子関係の二つの研究アプローチ

親子関係を捉える時，その影響過程から，「親から子への影響過程(親→子)」と「子から親への影響過程（子→親）」の 2 つを挙げることができる。ここでは，「親から子への影響過程 : 子どもに対する親の態度・行動（親→子）」に関する研究と「子から親への影響過程：親に対する子どもの態度・行動（子→親）」に関する研究について概観する。

(1)　子どもに対する親の態度・行動(親→子)に関する研究の概観

親子関係に関する 1960~1970 年代の代表的な研究は, Slater (1962) , Roe & Siegelman (1963), Siegelman (1965b) や Schaefer (1965a, 1965b)が行っている。これらの研究は，子が評定する親の子への態度・行動に関する尺度の開発を中心として展開した。Slater (1962) は，男子大学生を対象に，56 個の項目を用いて調査を行い，クラスター分析により，ESW (Emotional Supportiveness and Warmth ：情緒的支持と温かさ)と IDD: (Inhibitory Demands and Discipline：抑圧的要求としつけ）の概念を見出している。Roe & Siegelman (1963) は親の養育行動について特徴を整理し，Figure 1-1 のようなモデルを提案している。彼らは，Parent-Child Relations Questionnaire (PCR) を作成し，大学生，成人の男女を対象に調査を行い，因子分析を行い，LR(Loving-Rejecting：愛情―拒否)，CD(Casual-Demanding：寛大―厳格)，O(Over Attention：過保護)の 3 つの因子を抽出している。

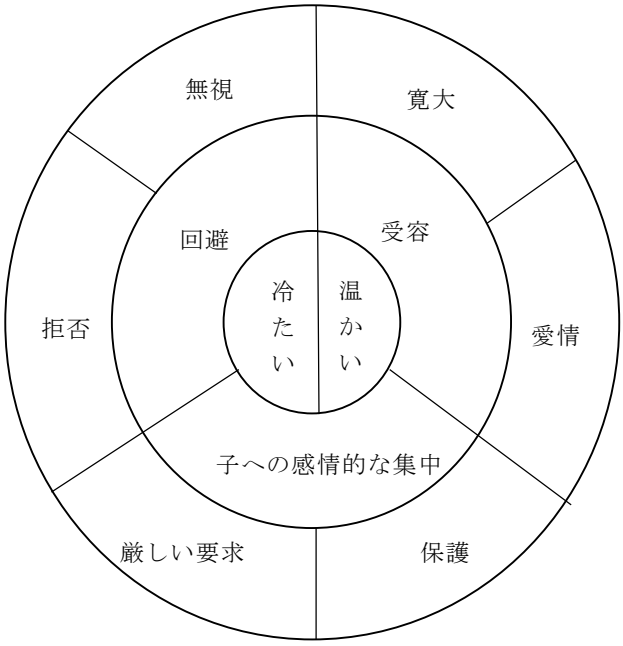


Figure 1-1　Roe & Siegelman (1963, P.356) の親子関係領域の仮説的モデル

Siegelman (1965b)の研究においては，Schaefer とは別の Bronfenbrenner Parent Behavior Questionnaire を用いて調査を行い，主成分分析を行い直交回転により分析を行っている。その結果，①愛情 (Loving) ②罰 (Punishment) ③ 厳しい要求 (Demanding) の因子が存在することを報告している。

Schaefer (1965a)は 26 尺度 260 項目からなる親の養育行動に関する尺度を作成し，Schaefer (1965b)では，この Children's Reports of Parental Behavior Inventory (CR-PBI) を出発尺度として因子分析を行い，①受容 対 拒否 (Acceptance vs Rejection)，②心理的自律性 対 心理的統制 (Psychological Autonomy vs Psychological Control) ，③厳しい統制 対 ゆるい統制 (Firm Control vs Lax Control) の 3 つの因子を見いだし，Figure 1-2 に示すような親子関係の球体モデルを提案している。この図のプロットは，前者 2 つの軸によって表されているが，同じように，球体の表面は，この 3 軸で表されるというものである。

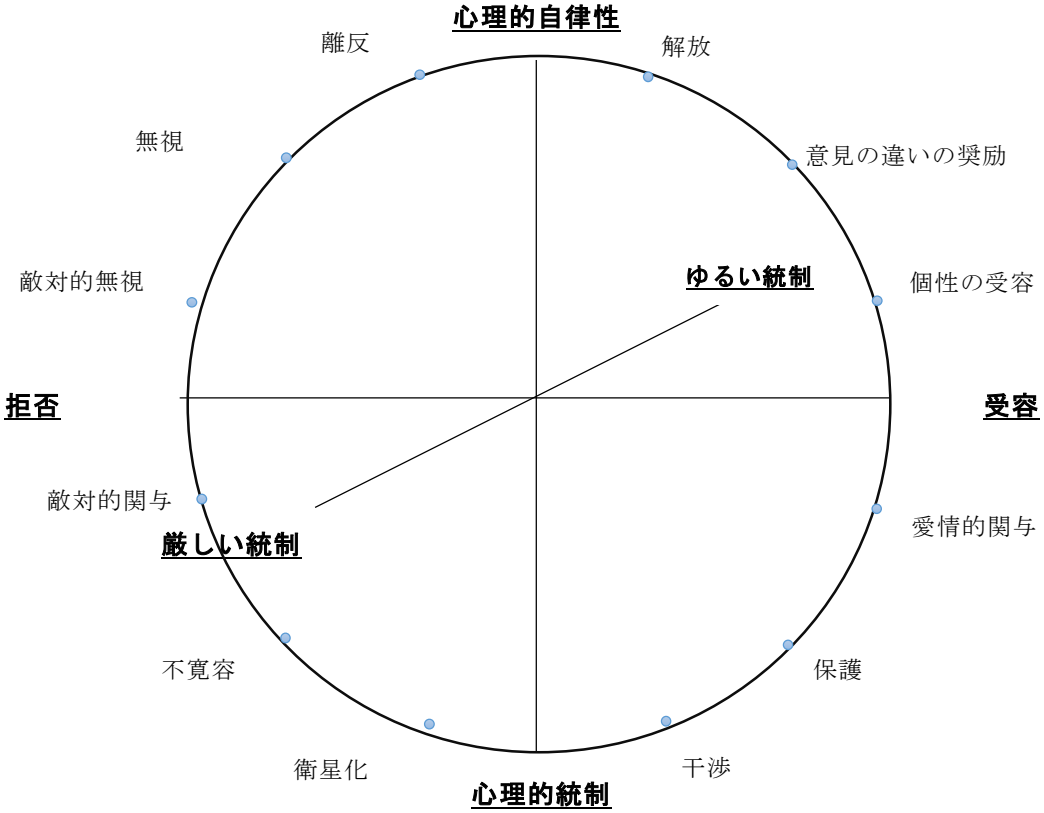


Figure 1-2 親の養育行動の 3 次元の球体モデル（Schaefer, 1965b, P.557）

Renson, Schaefer, & Levy (1968)は，CRPBI をベルギーの高校生の生徒に回答してもらい，これらを因子分析し，その結果が，親の子への行動の球体モデルがアメリカとベルギーの間おいても妥当であることを確認している。また，Schludermann & Schludermann (1970) は，Schaefer の CRPBI の短縮版を用いて調査を行い，その結果，CRPBI の改訂版が基本的に Schaefer の研究と同じ 3 つの因子を得たとことを報告している。親の養育態度・行動に関する研究が行われている中で，Goldin（1969）は，過去になされた多くの親子関係の研究を整理している。その中で, Schaefer の受容 対 拒否（Acceptance versus Rejection）と Siegelman の愛情(Loving)が類似しており，Schaefer の心理的自律性 対 心理的統制(Psychological Autonomy versus Psychological Control）と Siegelman の厳しい要求(Demanding)が類似しているとしている。そして，Schaefer と Siegelman の研究の因子分析の結果を元にして，①Loving（愛情）, Acceptance-Rejection（受容―拒否），

②Demanding（厳しい要求）, Psychological Control-Psychological Autonomy（心理的統制―心理的自律性），③Punishment（罰），④Loving（愛情）と Demanding（厳しい要求）の交差面（①と②の交差面）の 4 つに分類している。また, Paitich & Langevin (1976) は The Clarke Parent-Child Relations Questionnaire (PCR) の標準化を行い，主成分分析により，「Affection（愛情）」と「Strictness and Aggression（厳格さと攻撃）」の 2 因子を抽出しており，前者が Goldin のいう「Loving（愛情）」因子に匹敵し，後者が「Demanding（厳しい要求）」と「Punishment（罰）」を一つにした因子に対応すると述べている。

一方，我が国において，因子分析の手法を用いて親子関係研究が行われて研究がなされた初期の研究としては，山下・三浦・森・八重島・島田（1962, 1964）が挙げられる。彼らは，母子関係に関する 48 項目を因子分析法の一つである Thrustone の完全セントロイド法により分析を行い，①細部関与（過保護干渉的な態度・行動），②垂直的親愛（許容寛容的な態度・行動），③情動（感情的統制的な態度・行動），④水平的親和（民主的な態度・行動）の因子を得ている。これとは別に児玉・宮本・北村（1965）は親子関係を家庭のしつけという観点から検討を行っている。彼らは，日本のしつけにどのような因子が働いているのかということを検討するために，一応因子分析を用いて分析している。その結果，①家庭の雰囲気の冷たさあたたかさ，②家庭の結合と分離，③放任，④権威独裁，⑤民主傾向の 5 つのしつけの因子が存在することを報告している。

また，小嶋（1967, 1968, 1969, 1970）は，親の養育態度・行動の全体を捉えるために，Schaefer の CR-PBI の尺度を用いて，因子分析の手法により行っている。Kojima (1975) は Schaefer の研究を元として，親の養育態度・行動を親の報告と子どもの報告の両者を因子分析し，その認知構造の検討を行っている。そしてその結果，親と子どもに類似した 3 つの因子，すなわち①心理的統制(Psychological Autonomy vs Psychological Control)，②受容―拒否(Acceptance vs Rejection)，③ゆるい統制(Firm Control vs Lax Control)の 3 個の因子が存在することを報告している。このことは，前述した Schaefer の研究で得られた因子と類似しており，因子的妥当性のある結果と言えよう。辻岡・山本（1975a）は，斜交回転を用いた因子分析の手法により，Schaefer（1965a,1965b）の子どもの認知する親の養育態度・行動の（26 尺度，260 項目）因子構造の検討を行っている。彼らは高校 1 年生を対象に調査を実施し，その結果，親の養育態度・行動は，①情緒的支持（ES: Emotional Support），②同一化（ID: Identification），③統制（CO: Control），④自律

性（AU: Autonomy）の 4 つの次元で認知されているということ，また高次の次元では，Figure 1-3　に示すように，親の養育態度・行動は，「受容―拒否」「統制―自律性」の二次元に集約されることを見出している。

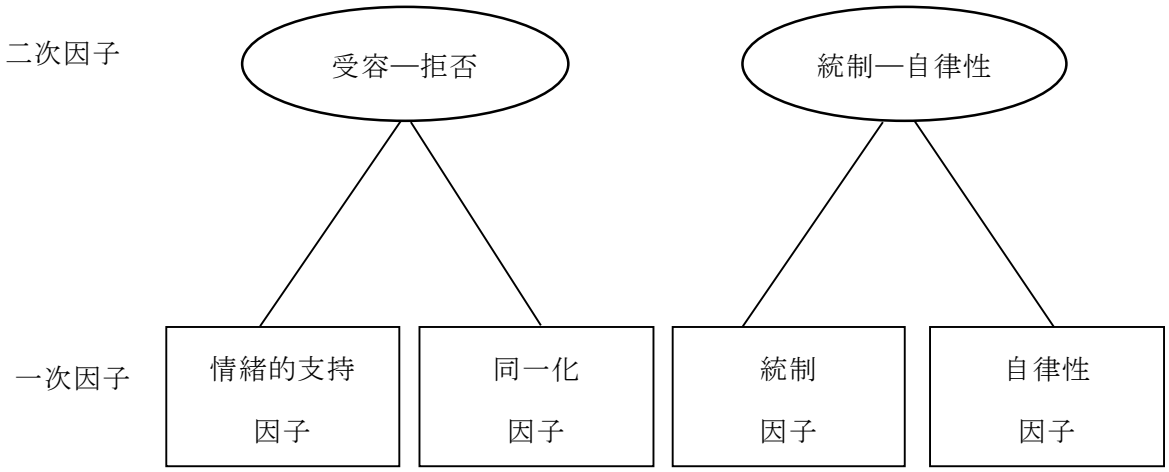
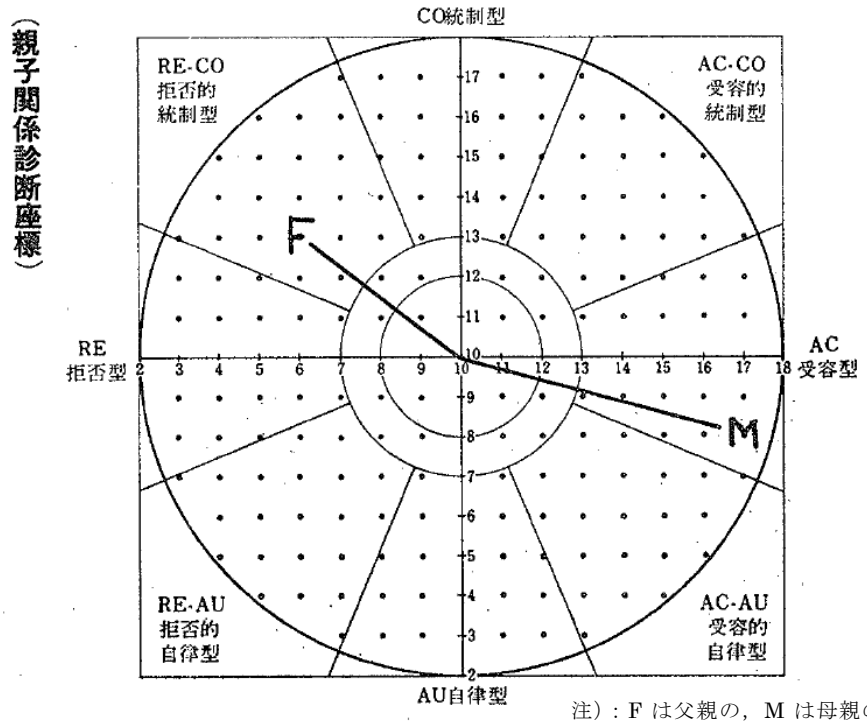


Figure 1-3　親子関係の階層構造（辻岡・山本, 1975a）

さらに辻岡・山本（1975b）においては，Schaefer の CR-PBI の改訂版(18 尺度，192 項目)においても，斜交プロクラステス法により，同じ 4 つの一次因子が存在することを確認している。さらに，辻岡・山本(1976)はこれら 4 因子を元にして，息子→父，息子→母，娘→父，娘→母の 4 群に共通した項目を因子的真実性の原理に基づいて選択し，因子的に妥当な，また信頼性の高い 4 尺度 40 項目から成る「親子関係診断尺度　EICA」の質問紙法を考案している。辻岡・山本（1978）は，作成した EICA を中学 2 年生，3 年生に実施し，この尺度を標準化し，「受容―拒否」「統制―自律性」の 2 つの次元により，Figure1-4 に示すような親子関係の類型を行うことを可能にしている。



注）：F は父親の，M は母親の得点をプロットしたものである。

Figure 1-4　親子関係の類型（辻岡・山本, 1978, P.23）

辻岡・山本（1977）は，さらに，小嶋(1969, 1975)の Schaefer の CR-PBI（18 尺度 192 項目）の研究を再分析している。彼らは，小嶋の 3 因子解が，共通性を推定しない主成分解に基づく Varimax 解であり，第 4 番目の因子が無視されていると主張し，親の報告と子の報告について，の 36 尺度を用いて，因子数を 7 つと定め，主因子法を行い，Promax 解を求めている。彼らは，息子と父，息子と母，娘と父，娘と母，さらにこれら 4 種の組み合わせを結合したデータ（結絆サンプル）の 5 種についての因子解も求めており，結絆サンプルの Promax 解を標的行列として斜交 Procrustes 法を適用し，4 つの組み合わせで類似した因子，すなわち親と子どもそれぞれの「情緒的支持の因子」「統制の因子」「自律性の因子」と親と子どもに共通した「同一化の因子」を得たと報告している。

辻岡・小高（1991）は，辻岡・山本（1977）の研究を Schönemann(1966)の直交 Procrustes 法を適用し再分析している。辻岡・山本(1977)の研究では，組み合わせごとに因子間相関が異なっていたが，直交 Procrustes 法を用いることで，組み合わせごとの因子構造を同一の因子間空間で比較可能となるのである。そしてその結果，辻岡・山本と類似した 7 つ

の一次因子，すなわち親と子どもそれぞれの「情緒的支持の因子」「感情的統制の因子」「自律性の因子」と親と子どもに共通した「同一化の因子」を抽出している。辻岡らはさらに，得られた因子間相関を用いて，二次因子分析を行い，その構造を分析している。その結果，「受容の因子」「感情的統制の因子」「自律性の因子」の 3 つの因子が存在することを確認している。さらに辻岡・小高（1993）の研究において，上位概念として，「受容」「統制」の 2 つの因子を確認したと報告している。

これとは別に，古川（1972)は小学 6 年生の児童とその両親を対象に親のリーダーシップ行動測定に関する研究を行っている。彼女は，親子関係に重要と思われる項目 60 項目の質問紙を作成し，これを因子分析し，Performance Factor（しつけ・訓練：P 機能） と Maintenance Factor（情緒的相互作用：M 機能）の 2 因子を見いだしている。そして，それぞれの因子から 10 項目ずつ項目を選択し，尺度を構成し，その尺度得点の平均点で 2 分割することにより，PM 型，P 型，M 型，pm 型という 4 類型に親の行動を分類している。古川の研究で得られた 2 因子とこれまでの親子関係で得られた因子とを対応づけるならば，P 機能は「統制」に該当し，M 機能は「受容」に該当すると思われる。

これらの研究からもわかるように，親の子への態度・行動は，「受容の次元」と「統制の次元」の非常に安定した二つの次元に集約できることが多くの研究において認められているといえる。

(2) 親に対する子どもの態度・行動(子→親)に関する研究の概観

1970 年代後半～1990 年代においては，親の子への態度・行動だけではなく，子の親への態度・行動についての実証的研究が，分離・個体化などの心理的離乳の観点から行われるようになってきた(Hoffman, 1984; Rice, Cole, & Lapsley, 1990)。我が国においては，小沢・湯沢(1989a, 1989b, 1989c)は，西平(1988)の青年期の心理的離乳のへ視点から親への態度・行動について検討している。彼らは，親のプロセスにおいて生じる心理事象を捉える 5 つの側面を元にして，心理的離乳に関する項目を収集し，これを因子分析し，5 つの因子（①親子の対立，②親への甘え，③親への信頼感，④親から子への世代交替，⑤親から仲間への離脱）を抽出し，これらの尺度得点を用いて，男女の比較を行っている。その結果，「親への甘え」「親から仲間への離脱」尺度において男女差が認められ，男子よりも女性の方が「親への甘え」が強く，女性よりも男子の方が「親から仲間への離脱」が強いという結果を報告している。

高木・藤田(1988)は大学生を対象に，青年が親を自分の中でどのように位置づけ，親からの影響をどのように認識しているのかということを検討するために，大学生に対し，父親，母親との関係を振り返らせ，その中から嬉しかったこと，または悲しかったことを記述させ，そのことがその後の自分にどのように影響しているかということを記述させている。そして，その回答結果に基づき，親からの影響や親への意識に関する質問項目を収集し，これを因子分析し，父親との関係，母親との関係の各 6 尺度（1. 親からの精神的支持，2. 親からの人生観・考え方への影響，3. 親への感謝・愛情，4. 親からの精神的独立性，5. 親からの心理的圧迫，6. 生き方モデルとしての親） 28 項目からなる質問紙を構成している。

小高(1998)は，高木・藤田(1988) ，小沢・湯沢(1989a, 1989b, 1989c)を参考に，青年の親への態度・行動についての研究を行い，その概念を(a)親に対する信頼感，(b)親からの精神的支持，(c)親からの影響，(d)親への感謝・愛情，(e)生き方モデルとしての親，(f)親からの精神的独立，(g)親に対する軽蔑，(h)親からの心理的圧迫，(i)親への尊敬，(j) 1 人の人間としての親，(k)親よりも仲間との関わり合い，(l)親への依存，(m)親への従順さ，(n)親への恨み，(o)価値観の継承，(p)親への反抗・対立，(q)親とのコミュニケーションの 17 個に整理している。そして，これに関する 105 項目を収集し，大学生を対象に調査を行い，息子→父，息子→母，娘→父，娘→母，それら全てを合わせた結絆サンプルについて主成分分析を行い，結絆サンプルの主成分解を標的行列として，それぞれの組み合わせの主成分解に対して，Schönemann の直交プロクラステス回転を施し，結絆サンプルで行った Promax 法と Rotoplot 法により回転を行っている。その結果，この 4 つの組み合わせに類似した 5 つの一次因子（「親からのポジティブな影響の因子」「親との対立の因子」「親への服従の因子」「親との情愛的絆の因子」「一人の人間として親を認知する因子」）の存在を確認している。そして，「親への親和志向の因子」と「親からの客観的独立志向の因子」の 2 つの二次因子が存在することを確認している。

小高は，この 2 つの上位概念を用いて，Figure 1-5 のような青年の親への態度・行動を 4 つの型に分け，心理的離乳の仮説モデルを提案し，それぞれの型を Table1-1 のように説明している。そして，それぞれの型について，西平 (1990)の第 1 次心理的離乳，第 2 次心理的離乳，第 3 次心理的離乳の概念と井上(1975)の信頼→批判→理解の道筋と対応づけている。すなわち，親を理想化し，親に対して服従的である A 型は「信頼（前第 1 次心理的離乳）の段階」に対応し，親からの離脱に重点を置き，親に対して反抗的な態度で接し

ている B 型，C 型は「批判（第 1 次心理的離乳の段階）」に対応し，親を対等な人間として認知し，より親と高次な関係にある D 型「理解（第 2 次心理的離乳）の段階」に対応しているとしている。

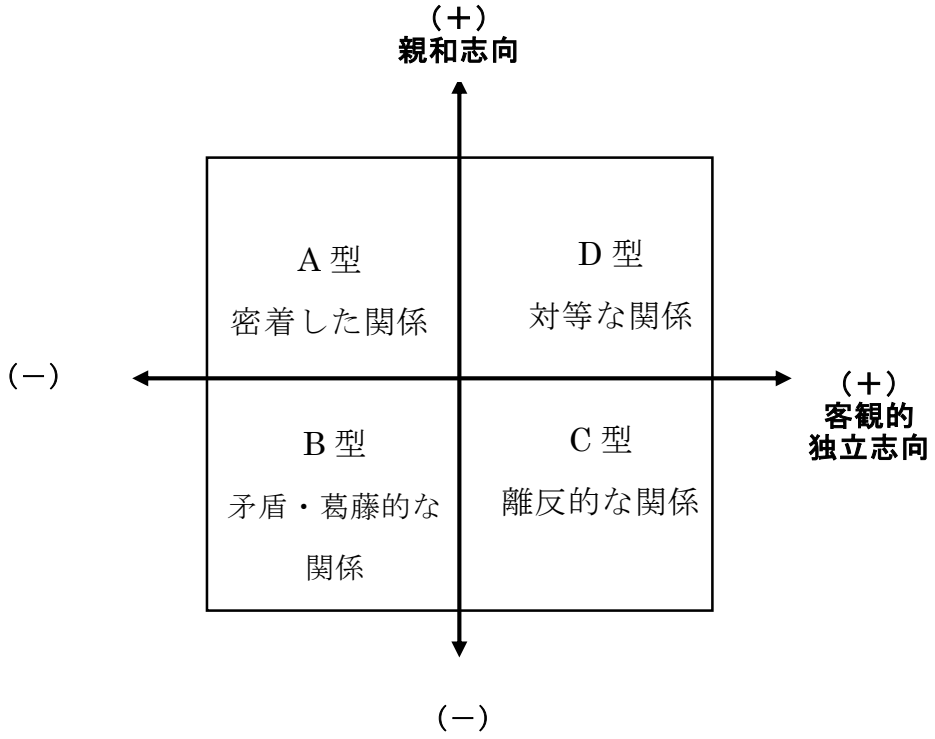


Figure1-5 青年の心理的離乳の仮説モデル（小高, 1998, P.94）

Table1-1　親子関係の 4 つの型（小高, 1998）

	親和志向	客観的独立志向
A 型（密着した親子関係）：親と情愛的な絆を感じ，親を尊敬し，親に服従した親子関係である。つまり，親と子が密着した関係にあると考えられる。	（＋	－）
B 型（矛盾・葛藤的な親子関係）：親に対して距離を置いて冷静に接することができないが，その一方で情愛的な絆は弱いといった矛盾・葛藤的な親子関係である。	（－	－）
C 型（離反的な親子関係）：親に反発を感じ，親と距離を置いた親子関係である。	（－	＋）
D 型（対等な親子関係）：親を 1 人の人間として認め，しかも親に対して尊敬の念を持っており，親に対して感謝しているというようにレベルの高い親との子の関係である。	（＋	＋）

さらに小高（2000）は，小高（1998）で得られた 5 因子を元にして，5 尺度，各 5 項目からなる親―青年関係尺度の作成を試みており，その結果，因子的に妥当な，かつ α =0.722～0.872 の信頼性の高い尺度を作成している。

この他にも，杉村・山崎・竹尾（2002）は，青年期における日本の親子関係のあり方を検討するために，青年期の「親子関係の親密さ」について研究している。彼らは，相互依存性や関係性の特徴を取り入れた「親との子の関係性の認知」を測定する尺度の構成を試みている。彼らはまず日本人の親子関係の先行研究や文献を整理し,「共感性」,「未分化性」,「許容性（甘え）」,「気持ち主義」,「率直性」,「従属性」,「貸借関係をもつことへの抵抗」,「プライバシー」といった，親子関係に関する項目を収集し，因子分析法により「共感（親密性）因子」「従属因子」「依存因子」の 3 つの因子を抽出している。また山崎・竹尾・杉

村(2002)は，杉村ら(2002)が作成した質問紙を元にして，各項目の背景に持つ価値観を測定する項目を用いて，親子関係の価値観について検討している。そして，親子関係の価値観について 4 つの因子，すなわち「1. 親密性：互いに理解し，受容するような暖かい親子関係をもつことへの価値観を示す因子」「2. 従属：子が親の期待に沿おうとすることへの価値観を表す因子」「3. 一体感(甘え)：被許容，願望充足，一体感など従来指摘されてきた『甘え』への価値観を表す因子」「4. 依存：親に心理的に依存し自立していないことに対する価値観を示す因子」が存在することを報告している。さらに竹尾・杉村・山崎（2002）は杉村らや山崎らの尺度を確認的因子分析法により親子関係の親密さ尺度の構成を試み，山崎・杉村・竹尾（2002）では，小高（1998）の「情愛的絆」と「服従」の尺度との相関をみているが，「情愛的絆」と「親密」との間で，「服従」と「従属」との間で高い相関を認められたことを報告している。最近の研究では，水本・山根（2011）が二つの軸（「信頼関係」と「心理的分離」）を確認しており，これらの因子をみると小高（1998）の「親への親和志向の因子」,「親からの客観的独立志向の因子」と類似しているように思われる。

以上から，青年の親への態度・行動は，親から離れていく側面といった離反的な側面と，親との新たな結びつきを再構築するという親和的な側面があり，青年の親への態度・行動は，「親和（信頼）志向」と「独立（分離）志向」の二つの軸で捉えることができると思われる。

第 1 章第 1 節では，子どもに対する親の態度・行動と親に対する子どもの態度・行動の二つの視点から親子関係研究について概観した。親子関係研究を行う上では，それぞれの視点から捉えることも大切であるが，これら二つの捉え方を併せて研究することも大切であると考える。例えば，落合・佐藤(1996)は，親の青年に対する態度・行動から心理的離乳の過程を明らかにしている。彼らは，中学生，高校生，大学生，大学院生を対象に，親子関係についての調査を行い，落合(1995)で提唱された Table1-2 に示すような 5 段階仮説を提唱し，この仮説について，因子分析を用いて検討している。

Table 1-2 心理的離乳への 5 段階過程仮説（落合・佐藤, 1996, P.11）

段階	親子関係	内容
5	対等な親子関係	子は子でありながら親になり，親は親でありながら子になる親子関係
4	手を切る親との関係	子との心理的距離を最も大きくとる，子と手を切る親との関係
3	成長を念じる親との関係	目の届かない遠くに行ってしまった子を信じ，成長を念じる親との関係
2	守る親との関係	子を目の届く範囲において，子を危険から守る親との関係
1	抱え込む親との関係	子を手の届く範囲において，子を抱え込み養う親との関係

その結果，仮説と類似した 6 つの因子（子が親から信頼・承認されている親子関係の因子，親が子を危険から守る親子関係の因子，親が子と手を切る親子関係の因子，親が子を頼りにする親子関係の因子，子が困った時には親が支援する親子関係の因子，親が子を抱え込む因子）を抽出している。そして心理的離乳に至る親子関係の変化について，「1 親が子どもを抱え込む親子関係 ／親が子と手を切る親子関係」，「2 親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係」，「3 子どもである青年が困った時に，親が助けたり，励まして子どもを支える親子関係」，「4 子どもが親から信頼・承認されている親子関係」，「5 親が子どもを頼りにする親子関係」，というような 5 段階を経過しながら，心理的離乳へと向かって発達的に変化していくことを考察している。小高（1998）は，これら両者を併せて心理的離乳について次のように考察している。青年が親から信頼され頼りにされていると認知する状態，また青年自身が親を一人の人間として信頼する状態にある時，その青年は親から精神的に独立しているといえるのではないか，また親が青年を信頼せずにいつまでも干渉するということは，青年の自立を妨げることになるのではないか，青年が親に対して反抗したり，また一人の人間として親を認知したりすることができないことは，青年の未熟さを表しているのではないかと述べている。すなわち，親と子が互いに信頼し，信頼される関係にある時，その親子関係は成熟した関係にあるとしている。小高（1998）が述べるように，両者を統合して親子関係を考えることも大事な視座ではないだろうか。これにより，親→子，子→親の両方の関係を見て全体の親子関係全体を捉えることができ

ると考えられるからである。

2. 方法論から見た親子関係研究の概観

前節では，親子関係の捉え方という観点から青年期の親子関係研究を概観した。ここでは，親子関係研究の分析手法の（方法論的な）視点から，さらに親子関係研究について概観する。

(1) 古典的な探索的因子分析的研究

第 1 節で述べたように，1960 年代以降，親子関係研究は，因子分析の手法を用いて研究されることが多く，横断的な研究が多くなされてきた。親子関係に潜在する因子を確認する方法は，探索的因子分析から Varimax 法，Promax 法，Rotoplot 法による回転によって確認したり（辻岡・山本, 1975a, 1975b），Procrustes 法に回転によって確認したりする方法(辻岡・山本, 1977)が，伝統的な方法としてなされてきた。しかしながら，これらの因子軸の回転は，複数の標本から得た因子パターン行列を対象とするため，各変数の共通性は，それぞれの標本において推定される。それ故，共通性の大きさと独自性の大きさを操作的に扱うことができないという点で古典的な方法論の限界がある（清水, 2003b)。確かに，どのような因子が存在するのかを明らかにするためには，これらの古典的な方法論も有効な方法であるが，この方法では，現代の構造方程式モデリング（Structural Equation Modeling：以下，SEM）からみると，モデルの適合度が示されていないという弱点を指摘できよう。親―青年関係研究を行う上で，親―青年関係を詳細に検討するためには，後述する SEM による分析が必要と思われる。

(2) 構造方程式モデリングを用いた因果関係研究と縦断的研究

2000 年に入ると, これまでは実施されることが少なかった縦断的な調査とその分析に多変量解析を適用した研究，そして，縦断的データの分析に SEM を用いた研究が行われるようになってきた。例えば，De Goede, Branje, Delsing, & Meeus(2009)は，青年を対象に Network of Relationships Inventory 尺度を用いて，青年期初期から中期と，青年期中期から後期の親子関係と友人関係の影響過程を調べている。彼らは，1 年ごとの 5 期の縦断調査データをパス解析により分析し，第 1 期から第 5 期にわたる親―青年関係と友人関係との間の影響過程を検討している。その結果，青年期初期から中期においては，親―青年関係から友人関係により強い影響があり，中期から後期では相互に同等の影響を持つよ

うになることを報告し，親との関係の認知が友人関係の認知に汎化し，青年の友人関係の対人スキルや原理が親との関係に汎化するのではないかとしている。また Willoughby & Hamza（2011）は，9 年生から 12 年生の生徒を対象に 1 年ごとに 4 年間にわたる縦断研究を行っている。彼らは，知覚された親のモニタリング，青年の友人・学校活動・自由時間についての親への開示，問題行動の時系列の関連についてパス解析を行い，親のモニタリングや青年の開示が問題行動の抑制に影響することを報告している。

我が国においては，酒井・菅原・木島・菅原・眞榮城・詫摩・天羽（2007）が，小学校高学年の児童を対象とした 2 年間の縦断調査で収集したデータに，学校での反社会的行動と自己志向性との間の影響関係について，家族に抱く信頼感を調整要因として含めたこれらの 3 変数間の相互影響性について SEM による分析を適用している。その結果，家族に抱く信頼感の高低にかかわらず小学校高学年の学校での反社会的な行動経験の多さが 2 年後の自己志向性の低下に影響すること，そして親やきょうだいに抱く信頼感は同時点での反社会的行動経験には有意に関わるものの長期的な影響力は弱いということを明らかにしている。また渡邉・平石（2010）は，中学生の母子を対象に，中学生から高校生の母親の養育スキルはどのように変化するのかを子どもとその母親を対象に 3 年 3 時点の縦断調査を行い，階層的重回帰分析により，継続的に理解･関心スキルを用いた関わりをすることは子どもの母子相互信頼感に影響を及ぼし，間接的に子どもの心理的適応に影響を及ぼしていることを報告している。さらに長期的な縦断研究として，山岸(2009)の研究が挙げられる。彼女は，20 名の女性を対象として，短大在籍時からの 11 年間にわたる断続的な面接調査から，成人期の母親認知の変化について，青年期から成人期への母親認知が関係しているとしている。

(3) 時間経過を入れた親子関係の相互作用に関する研究

両者の相互作用を扱った代表的な研究としては，青年―両親の言語的コミュニケーションを検討した平石(2000a, 2000b, 2007)の研究がある。彼によると，青年―両親関係の研究は「分離や独立などを強調する視点」と「青年の両親間の結びつきの重要性を強調する視点」に大別できるとしている。そして今日ではこの二つの視点を統合する「分離と結合を統合する視点」で研究がなされている（平石, 2000a, 2000b；久保田, 2009）。平石（2007）によると，Grotevant & Cooper (1985, 1986)は青年―両親間の言語的コミュニケーションの中で分離的側面と結合的側面を包括するモデルを提案しており，青年―両親間の分離

的側面と結合的側面が同時に生起しているという立場をとっている。平石（2007）は分離と結合がどのように生起しているのかをみるために親と子の会話を通した研究を行っているが，その研究方法は，親と青年の両方を対象にした実験実施日の一日に限定した研究であり，観察者によって親子関係を記述するものである。平石（2007）においては，発話の時系列のやり取りを数量化によらないイディオグラフィックな方法による分析も行っており，親子の時系列での親子のコミュニケーションを詳細に捉えているという点で非常に意義があると思われる。

縦断的調査のデータ解析に SEM による分析が導入されたことにより，親子間の相互関係と時間経過の中での親子間のこれらの影響の関係性として捉えることができるようになってきたことは既に述べた。縦断的な研究の展開の方向は，より長い期間を時間軸として設定して親子間のダイナミックスを捉えようとするものである。このような方向からの研究を，ここではマクロな視点からの縦断研究と呼ぶことにする。このような研究は，大規模調査により変数の構造を明らかにし，大きな変化を追求することを目的としている。このため親子間の個々の因子として，ダイナミックな動きをとらえることが難しいと思われる。個々のダイナミックな動きをとらえるためには，親子関係の相互作用のデータを時間経過の中で蓄積し解明していく必要があると思われる。すなわち平石(2007)の研究のようなミクロな視点からの研究が必要であるということである。ミクロな視点からの分析は，マクロな視点からの分析では捉えられない短い時間経過の中での親子関係を捉えることができることがそのメリットとして挙げられる。そこで次にミクロな視点からの分析として時間経過の変化を捉えることのできる有効な動的因子分析について紹介したい。

(4) P 技法データと動的因子分析

ある個人の日々の心的な変化を複数の変数を用いて毎日繰り返して測定する方法を Cattell(1946) は P 技法(P-technique)と命名した。これは複数の変数を十分に大きな調査参加者において測定する R 技法の参加者数を調査機会に置き換えたものでもある（Figure 1-6 を参照）。

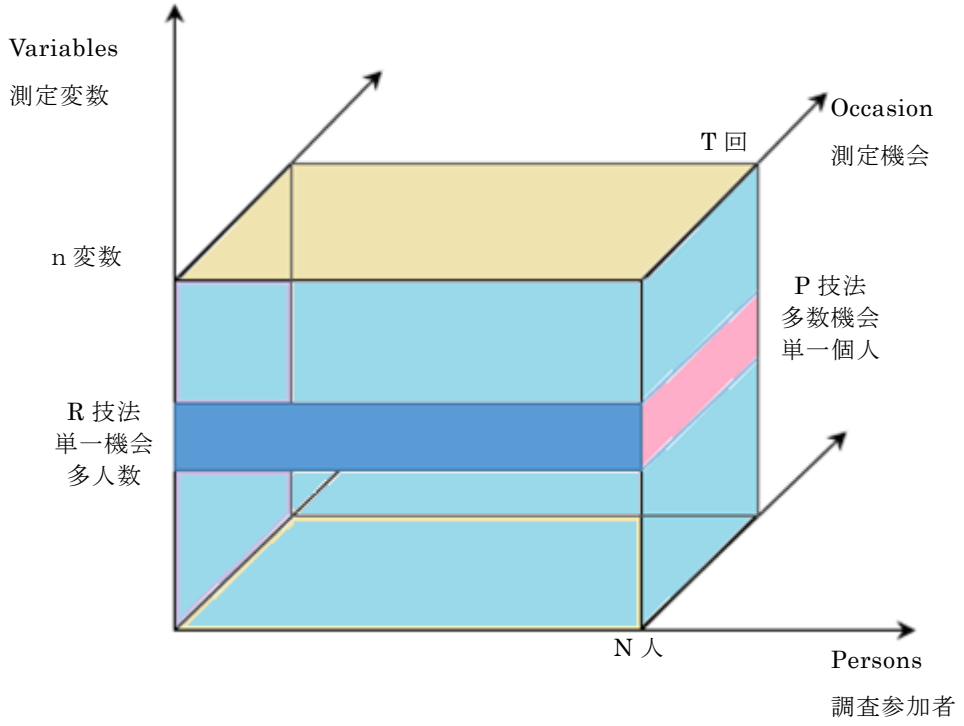


Figure 1-6 「人×変数×機会（ N×n×T)」の 3 次元立方体のデータボックス

(紺田, 2010a, P.1)

彼は，変数に潜在する因子の探索と同じように，日々の測定に潜在する因子を毎日の繰り返し測定から抽出できると考えた。しかしながら，P 技法因子分析では観測変数あるいは潜在変数において時系列データとしての特徴である系列依存性を説明することができない(紺田・清水, 2015)。

Molenaar (1985)は，この点を解決しようと，計量経済学での時系列分析方法論（Engle & Watson, 1981; Geweke, 1977） を心理測定分野に導入し，因子(潜在変数)において系列依存性を取り扱うモデルである動的因子分析(dynamic factor analysis: 以下，DFA)を提案した（紺田・清水, 2015)。この因子分析モデルは，測定した変数から因子を特定し，時間的な遅れであるラグ(lag)を分析に取り入れることによって, 時間の遅れの関係を示し，時間経過での影響の大きさを推定しようとするものである(Figure1-7 を参照)。DFA は共分散構造分析モデルを応用することにより，個人を繰り返し測定して得られた多変量データに潜在する因子をラグ因子として特定し，持続的な時系列構造をラグ因子間のパス関係から検討しようとするものである（紺田・清水, 2015)。

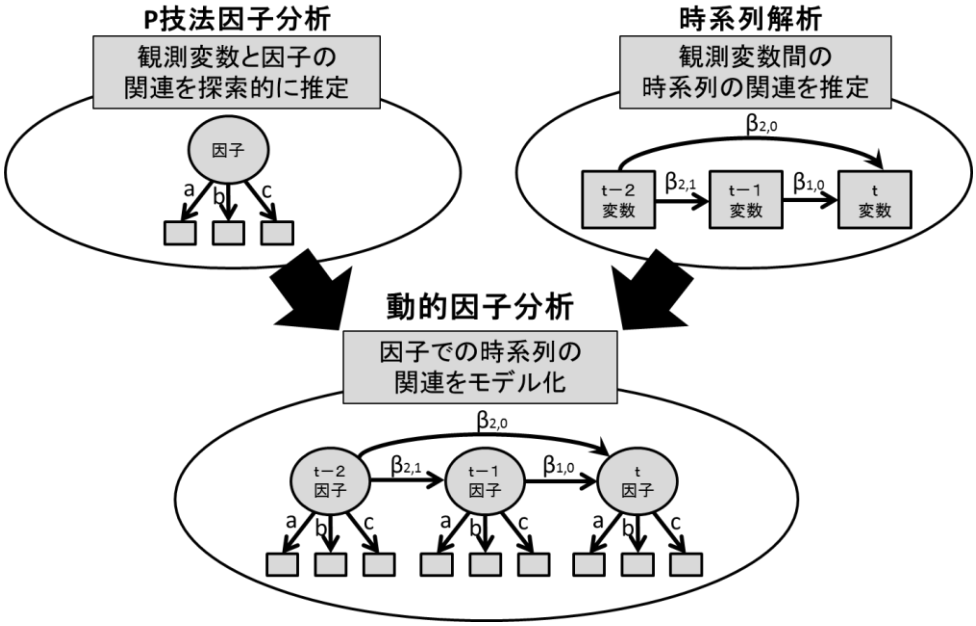


Figure　1-7　動的因子分析の模式図(小高・紺田, 2015, P.112)

因子を想定しない観測変数でのパスでは，測定誤差を内包したままに影響を議論することになる。因子分析により因子を同定することの利点は，測定誤差を取り除いた因子において，より精確な時間経過の影響を推定することができることにある。この方法では，当日(t)の親の養育態度・行動が，前日(t-1)の養育態度・行動からどの程度の影響を受けているのか，また前々日(t-2)の養育態度からどの程度影響を受けるのかを因子的に不変な養育態度・行動の因子間のパス係数から推定することができるわけである。言い換えれば，各日の親子関係の構造は同じと仮定し，その中で，前々日から前日と当日への影響過程を検討するものである。なお，この時間経過を入れない当日だけを分析の対象とする場合はラグ 0 で，これは Cattell の P 技法因子分析(探索的因子分析)に相当する(Molenaar, 1985)。DFA では，時間経過をラグ 1(t-1)因子やラグ 2(t-2)因子として，ラグ 0 因子への影響の大きさを SEM の解析ソフトによって推定を行うことができる。なお，DFA が分析の対象とする共分散行列は，Figure1-8 に示すようなブロック・トープリッツ行列（BT 行列）であ

る(Wood & Brown, 1994)。この技法は，例えば，親子関係のような二者関係に広げることも可能となる（Gonzalez & Griffin, 2012)。

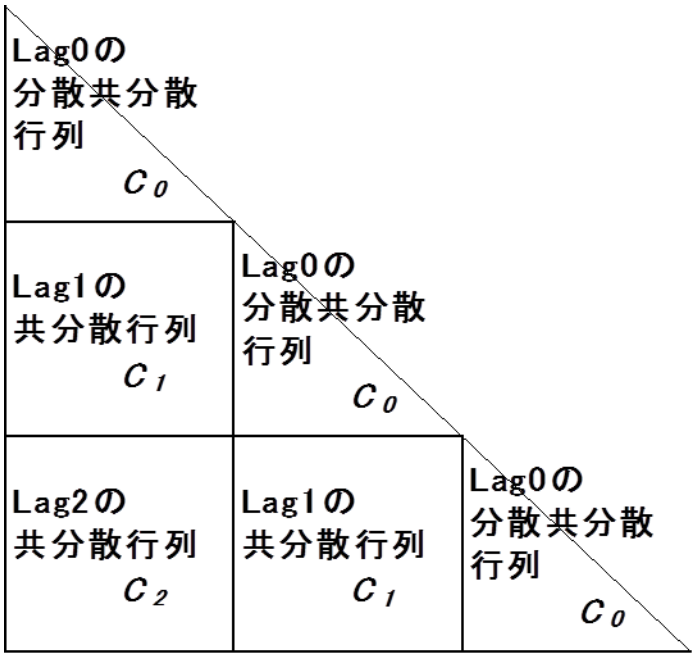


Figure 1-8　ラグ数を 2 とした時のブロック・トープリッツ行列（小高・紺田, 2015, P.113）

さてここで, P 技法や DFA を用いた二者関係の中でも, 親子関係研究をみることにする。まず，Hooker,　Nesselroade, Nesselroade, & Lerner（1987）は，約 100 日間，2 歳の子を持つ母親 5 人を対象に，気質尺度（Dimensions of Temperament Survey）を用いて，子どもの行動と母親自身の行動について報告してもらい，それを P 技法因子分析により分析している。その結果，それぞれの母親で，自分の行動と子の行動の因子が類似した構造となっていること，対象者間では共通する因子と固有の因子が認められたことを報告している。つまり，それぞれの母子の中で個別にみられる構造と共通している構造があるということを意味すると考えられる。また Hershberger, Corneal, & Molenaar（1995）は，娘と継娘（それぞれの 7 人ずつ）を対象に，80 回の測定により，父と娘関係と継父と継娘関係の感情的な反応パターンを分析し，P 技法因子分析により因子を確定し，ラグ 0 とラグ

1 の共分散行列を用いて動的因子分析を行っている。その結果，時間経過を入れたラグ 1 において，娘では，父親とのやり取りの中での没頭する感情は愛情と関係していたが，継娘では，怒りや不安と関係したことを報告している。

さらに Schermerhorn, Chow, & Cummings（2010）は，8 歳から 16 歳までの子どもをもつ両親を対象に 15 日間にわたり，P 技法で収集した両親間のコンフリクトの時系列データを分析するための回帰分析の一種であるダイナミック・システム・モデリングツールにより分析している。その結果，両親がコンフリクトにある間の子どもの感情や行動が，そのコンフリクトが終わる時の両親間のポジティブな感情やネガティブな感情等と関連していることを報告している。

3. 我が国における最近の親子関係研究の動向と展望

上記で概観したように，青年期の親子関係研究は，親の養育態度・行動の研究から親―青年関係の両者の相互作用についての研究に広がり，またその分析手法は因子分析法を用いた横断的方法を軸にしながら，SEM を用いた縦断的研究へと広がってきている。しかしながら，親と子を同時に対象とした二者・多数者研究や縦断研究を行うことは時間とコストを要するため，研究全体に占める割合は少ない（小高, 2012）。

ここで，我が国における 2001 年から 2014 年の 14 年間の青年心理学研究と発達心理学研究で掲載された親―青年関係研究を整理する。2001 年から 2014 年に発達心理学研究に掲載された論文（特別論文を除く）を対象に検索し，親子関係に関する 89 の研究を「調査対象」「標本サイズ」「研究デザイン」「主な分析手法」の観点から検討し，論文の分類を試みると，Table1-3 のようになる。まず「調査の対象者」についてみると，親子関係の研究で，乳幼児期の子どもに関係する研究は 59 件と多くの割合を占めていた。また，青年期の子どもに関する親子関係研究（主として，子が中学生，高校生，大学生である研究）は 24 件であり，発達心理学研究においては，乳幼児期を対象とした研究が多い結果となっているのがわかる。次に「研究方法」についてみると，横断研究は 61 件と半数を超えており，発達心理学研究において，横断研究が数多くなされていることがわかる。「分析手法」についてみると，χ^2 や分散分析法を用いた研究が多い。潜在変数を採用した SEM を用いた研究は 7 件と全体の 10 分の 1 以下と少なかった。潜在変数を設けた SEM を用いた研究は，因果関係を確認する有効な方法であり，最近，心理学の多くの分野では，徐々に増えてきている。しかしながら，発達心理学研究においては，その占める割合は少ないよ

うである。

Table 1-3　発達心理学研究の親子関係に関する研究の一覧

著者名(発表年)	調査対象	標本サイズ	研究デザイン	主な分析手法
高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤(2008)	歩行開始期の子どもをもつ母親と子	3組	縦断研究(1か月半に1回)	事例分析
高田(2002)	2－4カ月の乳児とその家族	5名	縦断研究(家庭を数回訪問)	カテゴリー分類，相関分析
坂上(2002)	15か月から27カ月の子どもとその母	1組	縦断研究(月3回)	カテゴリー分類，質的分析
岡本・菅野・根ケ山(2003)	初産妊婦	33名	縦断研究(胎動日記)	カテゴリー分類
川田・塚田・川田(2005)	生後5ヶ月から15ヶ月までの子と母親	8組	縦断研究(1ヶ月に1度)	カテゴリー分類
小松(2006)	幼児とその母親	1組	縦断研究(断続153日)	カテゴリー分類
矢藤(2007)	乳児とその母	23組	縦断研究(7ヶ月齢と12ヶ月齢の2回)	カテゴリー分類，分散分析，順位検定
常田(2007)	乳児とその母親	1組	縦断研究(2～9ヶ月齢，1，2週間おきで1回)	カテゴリー分類，χ^2検定，分散分析
塚田(2008)	生後12ヶ月時から24ヶ月時までの母子	3組	縦断研究(5回)	カテゴリー分類，事例分析
菅野・岡本・青木・石川・亀井・川田・東海林・高橋・八木下(川田)(2009)	生後0ケ月～2歳になるまでの母親	24名	縦断研究(2歳になるまでの間3ヶ月ごとの縦断研究)	カテゴリー分類
岩田(2009)	3人きょうだいとその母親	1組	縦断研究(約2年に9回)	カテゴリー化，χ^2検定
飯塚(2009)	子どもとその母親	20組	縦断研究(週に1回)	カテゴリー分類，分散分析
小林・北川(2009)	初産婦	21名	縦断研究(妊娠期から出産1年半後の間の3時点)	カテゴリー分類
菅井・秋田・横山・野澤(2010)	幼児とその母親	20組	縦断研究(1歳半，2歳，3歳の3回)	カテゴリー分類と分散分析
荘島(2010)	青年の母親	1名	縦断研究(1年半に3回)	カテゴリー分類
岡本・菅野・東海林・八木下(川田)・青木・石川・亀井・川田・高橋(2010)	母親(妊娠期～5歳まで)	10名	縦断研究(7年間に20回)	カテゴリー分類
岡本・菅野・東海林・高橋・八木下(川田)・青木・石川・亀井・川田・須田 (2014)	生後0～15ヶ月の乳児とその母親	12組	縦断研究	カテゴリー分類

（Table 1-3 の続き）

著者名(発表年)	調査対象	標本サイズ	研究デザイン	主な分析手法
塚田(2001)	7カ月～12カ月の乳児とその母親	7組	縦断研究（月1～2回）	時系列分析
西條(2002)	生後1カ月の乳児とその母親	16組	縦断研究（1カ月～7カ月まで1カ月おきの縦断研究）	回帰分析，質的分析
小松(2003)	幼稚園児の母親	235名	縦断研究（7月と11月の2回）	項目化，分散分析
小野寺(2003)	妊娠7-8ヵ月の夫婦（親に成って3年間まで）	68組	縦断研究（3回）	因子分析，t検定，分散分析，重回帰分析
小野寺(2005)	妊娠7-8ヵ月の夫婦（親に成って3年間まで）	68組	縦断研究（3回）	因子分析，t検定，分散分析
安藤・無藤(2008)	妊娠中の女性（産後1年まで）	407名	縦断研究（5回）	相関分析，重回帰分析，SEM(潜在成長モデル)
菊池・松本・菅原(2011)	幼児をもつ父母	父親280名，母親321名	縦断研究（4歳時と5歳時の2回）	主成分分析，分散分析，重回帰分析
篠原(2011)	幼児とその母親	3歳時29名，4歳時31名	縦断研究（生後6カ月と3歳時，4歳時）	ノンパラメトリック検定，パス解析
佐藤・内山 (2012)	生後9ヶ月児とその母親	28組	縦断研究（生後9ヶ月と生後12ヶ月）	分散分析
石島・根ケ山 (2013)	生後5ヶ月の母子	1組	縦断研究（生後5ヶ月から3ヶ月間，7回の観察）	分散分析，カテゴリー分類
菅野(2001)	2，3歳児の母親	25名	横断研究	カテゴリー分類，双対尺度法
金・仲(2002)	3，4，5歳児とその父母	46組	横断研究	カテゴリー分類，分散分析
福田(2003)	4，5歳児をもつ父母	28家庭	横断研究	カテゴリー分類，重回帰分析
坂上(2003)	生後18カ月～36カ月児の母親	25名	横断研究	カテゴリー分類
徳田(2004)	第1子が0歳から3歳で家庭で子育て中心の生活を送っている女性	11名	横断研究	カテゴリー分類
金丸・無藤(2004)	2歳前半の子とその母親	41組	横断研究	カテゴリー分類，χ^2検定
山岸(2004)	女子短期大学生	97名	横断研究	カテゴリー分類，分散分析
長屋(2005)	0～24ヶ月児の母親	120名	横断研究	カテゴリー分類，χ^2検定，相関分析
外山(2008)	1～3歳児とその母親	44組	横断研究	カテゴリー分類，分散分析，χ^2検定
上村・加須屋(2008)	30ヶ月齢の男児の父母	20組	横断研究（縦断研究の中の1時点）	カテゴリー分類，分散分析，相関分析

（Table 1-3 の続き）

著者名(発表年)	調査対象	標本サイズ	研究デザイン	主な分析手法
根ヶ山(2010)	通園する園児とそのきょうだいの親	315名	横断研究	分散分析
島・上嶋・小林・小原(2012)	第1子が9ヶ月の母親	29名	横断研究	カテゴリー分類，回帰分析
深瀬・岡本 (2012)	66-86歳の高齢者	17名	横断研究	カテゴリー分類
山根 (2012)	高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親	19名	横断研究	カテゴリー分類
大島 (2013)	成人初期の子どもを持つ中年期の母親	22名	横断研究	カテゴリー分類 グラウンデッド・セオリー手法
尾山・仲 (2013)	5-6歳の幼児とその保護者	50組	横断研究	カテゴリー分類，分散分析
飯塚(2013)	NICUに入院し，子どもが保育器に入ることによって母子間に分離の期間が1ヶ月程度あった母親	8名	横断研究	カテゴリー分類（グループ分析）
齋藤・内田(2013)	3-6歳児とその母親	29組	横断研究	分散分析
蒲谷 (2013)	5-9ヶ月の乳児とその母親	38組	横断研究	カテゴリー分類，回帰分析
神谷(2002)	青年期後期から成人期にわたる男性	97名	横断研究	相関分析，χ^2検定
小泉・菅原・前川・北村(2003)	小学校高学年の子どもをもつ母親	377名	横断研究 （縦断研究の中の1時点）	χ2検定，t検定，重回帰分析
小原(2005)	0歳児を持つ母親と1歳児を持つ母親	118名	横断研究	相関分析，重回帰分析，分散分析
加藤・近藤(2007)	3歳児とその父母	72組	横断研究	相関分析，分散分析
石・桂田(2010)	2～6歳児を持つ母親	272名	横断研究	重回帰分析・分散分析・χ^2検定
西條(2004)	1-13ヵ月の乳幼児を持つ母親	298名	横断研究	数量化1類
大鐘(2011)	母子通園施設を利用している母親	52名	横断研究	KJ法，数量化Ⅲ類，t検定
中島・岡田・松岡・谷・大西・辻井 (2012)	発達障害児の保護者	139名	横断研究	t検定，相関分析
北村・無藤（2001）	27歳～34歳の成人女性	415名	横断研究	因子分析，重回帰分析・分散分析
平山（2001）	中学生とその父親・母親	161組	横断研究	主成分分析，分散分析
若原(2003)	大学生	研究1：698名， 研究2：16名	横断研究	因子分析，分散分析，質的分析
清水(2004)	41～60歳の女性	1041名	横断研究	因子分析，χ^2検定
藤永・品川・渡邊・荻原・佐々木・堀(2005)	ダウン症児の母親	152名	横断研究	因子分析，相関分析，χ^2検定
江上(2005)	2～6歳の子を持つ母親	183名	横断研究	主成分分析，分散分析
川島(2005)	中学生とその家族	131組	横断研究	因子分析，主成分分析，パス解析，分散分析
塩崎・無藤(2006)	幼稚園に通う父親・母親	1097組	横断研究	因子分析，パス解析
中谷・中谷(2006)	3～4歳の子どもを持つ母親	270名	横断研究	因子分析，パス解析

（Table 1-3 の続き）

著者名(発表年)	調査対象	標本サイズ	研究デザイン	主な分析手法
森下(2006)	3～5歳の子どもの父親	224名	横断研究	主成分分析，因子分析，相関分析，パス解析
小坂・柏木(2007)	幼児の両親	1062組	横断研究	因子分析，t検定，分散分析，判別分析
加藤(2007)	2-5歳の子どもをもつ主養育者	306名	横断研究	因子分析，χ^2検定，分散分析，重回帰分析
田中(2009)	幼稚園に通う3歳から6歳の子の母親	311名	横断研究	因子分析・重回帰分析
青木(2009)	幼児をもつ父母	185組	横断研究	因子分析，相関分析，t検定，パス解析
水本・山根(2010)	大学生女子とその母親	大学生女子173名 母親149名	横断研究	因子分析・分散分析
竹尾・高橋・山本・サトウ・片・呉(2009)	小学生,中学生,高校生	532名	横断研究	分散分析，χ^2検定，因子分析
小林(2009)	3～4ヶ月児をもつ母親	242名	横断研究	パス解析
加藤・石井・牧野・土谷(2002)	3歳半の子をもつ父親・母親	293組	コホート	パス解析，t検定
朴・杉村(2009)	3～5歳児の親	259名	横断研究	因子分析，パス解析
大島(2009)	青年期後半の女子とその両親	153組	横断研究	パス解析
山内(2010)	高校生とその母親	97組	横断研究	パス解析
氏家・二宮・五十嵐・井上・山本・島(2010)	中学生とその両親	2083組	横断研究	因子分析・分散分析，パス解析
松岡・岡田・谷・大西・中島・辻井(2011)	保育園，小学校，中学校に通う子どもの保護者	7521名	横断研究	因子分析，相関分析，分散分析
大島 (2013)	若者とその両親	293組	横断研究	t検定，相関分析，パス解析
風間・平林・唐澤・Tardif・Olson (2013)	幼児とその母親	163組	横断研究	因子分析，分散分析，相関分析
キン・大野 (2013)	大学生とその母親	104組	横断研究	t検定，主成分分析，パス解析
中井 (2013)	中学生	563名	横断研究	因子分析，パス解析
外山・樋口・宮本(2014)	高校1年生とその母親	3085組	横断研究	因子分析，分散分析
島(2014)	大学生	191名	横断研究	パス解析
酒井・菅原・菅原・木島・眞榮城・詫間・天羽(2003)	小学4年生以上の双子(小中学生)	381組	横断研究 (縦断研究の中の1時点)	主成分分析，SEM(共分散構造分析)，t検定
小保方・無藤(2005)	中学生	1623名	横断研究	因子分析，SEM(共分散構造分析)，分散分析
荒牧・無藤(2008)	末就学児を持つ母親	733名	横断研究	SEM(確認的因子分析)，分散分析，重回帰分析
山内・伊藤(2008)	大学生	213名	横断研究	主成分分析，SEM(共分散構造分析)

（Table 1-3 の続き）

著者名(発表年)	調査対象	標本サイズ	研究デザイン	主な分析手法
春日・宇都宮 博・サトウ (2014)	大学生	367名	横断研究	因子分析，分散分析，クラスター分析，SEM(多集団同時分析)
伊藤・中島・望月・高柳・田中・松本・大嶽・原田・野田・辻井 (2014)	小学1年生～中学3年生	7208名	横断研究	SEM(確認的因子分析)，相関分析

次に，青年心理学研究を見ると（Table1-4），林・岡本（2003)や白石・岡本（2005)や池田（2009)，山田（2011)，森（2012）は，青年の親子（家族）関係とアイデンティティや適応との関係について検討している。森(2012)は，父親・母親への愛着・信頼などのポジティブな感情から相互独立－相互協調性，自我同一性に至るまでのプロセスについて共分散構造分析を用いて検討している。そして，その結果，母親へのポジティブな感情が相互協調性を高めることを通して自我同一性を低めているとしている。また，平井・岡本(2003)は，食事の時における会話の特徴と親子の心理的結合性との関連性を明らかにしている。また，藤原・伊藤（2007)は，青年期後期から成人期初期の母娘関係について検討し，年齢と共にその関係が変化することを報告している。池田（2010)は，青年期における親に対する感謝への抵抗感を規定する心理的要因を明らかにしている。これらの研究は，横断的研究であり，青年心理学研究での親子関係研究の縦断研究は少ないように思われる。一方，縦断研究は山岸（2005，2009，2013)のみであった。山岸（2005)は青年後期と成人初期という対人的状況が大きく異なる 2 つの時期の生育史の語りの違いを分析し，そのタイプと数量的にとらえられた対人的枠組みの変化のタイプとの関連を検討している。また山岸(2009)は 11 年間の縦断的データを用いて青年期から成人期への母親認知の変化を個別に分析している。さらに山岸(2013)は，20 年間の縦断データから，生育過程の良好さと成人期の良好さが必ずしも連続的でないとし，成人期のあり方は出会った他者との関係によって変化することを示している。山岸のように，長期にわたる縦断研究は，親子関係の影響を捉えるためには，非常に貴重な研究であると思われる。

Table1-4　青年心理学研究に掲載された親子関係に関する論文の一覧

著者名(発表年)	調査対象	標本サイズ	研究デザイン	主な分析手法
山岸(2005)	27―28歳女性	35名	縦断研究 (7年間)	カテゴリー分類, t検定
山岸(2009)	32―33歳の女性	20名	縦断研究 (11年間)	カテゴリー分類
山岸(2013)	成人	9名	縦断研究 (20年間)	カテゴリー分類
池田(2010)	中学生, 高校生, 大学生	191名	横断研究	カテゴリー分類
白石・岡本(2005)	男女の大学生	223名	横断研究	t検定, 重回帰分析, 相関分析
林・岡本(2003)	大学生	188名	横断研究	因子分析, t検定
平井・岡本(2003)	小学生(5, 6年)とその両親 高校生(1, 2年)とその両親	小学生 父126名, 母137名, 子ども138名 高校生 父192名, 母214名, 子ども209名.	横断研究	因子分析, χ2分析, t検定
藤原・伊藤(2007)	女子大学生	192名	横断研究	因子分析, 分散分析
池田(2009)	大学生	221名	横断研究	因子分析, 分散分析
山田(2011)	大学生	329名	横断研究	因子分析, 分散分析, 重回帰分析
森(2012)	大学生	725名	横断研究	因子分析, t検定, パス解析

最後に，2001 年から 2014 年の American Psychological Association (APA) が提供しているデータベース(PsycINFO)を利用して，「parent」と「adolescent」の両方に関係する査読のある学術誌の検索を行い，さらに得られた学術誌に対して，「structural equation modeling」を加えて検索し，親―青年関係に関する研究がどのようになされているかを検討してみると，Table1-5 のようになった。この表をみると，対象者を青年のみとする研究が多く，縦断研究は 3 割を下回る程度で，それほど多くはない。

Table1-5　PsycINFO のデータベース検索結果

年	全体の検索件数:キーワードを「parent」「adolescent」に設定した時の文献件数 a	キーワードを「parent」「adolescent」に設定し，さらに方法論を縦断研究に設定した時の文献件数 b	SEMの検索件数:キーワードを「parent」「adolescent」「structural equation modeling」に設定した時の文献件数 c	キーワードを「parent」「adolescent」「structural equation modeling」に設定し，方法論を縦断研究に設定した時の文献件数 e	縦断研究の占める割合:b/a (%)	SEMの占める割合:c/a (%)	SEMの中で縦断研究の占める割合:e/c (%)
2001	709	90	8	2	12.7%	1.1%	25.0%
2002	797	100	11	4	12.5%	1.4%	36.4%
2003	948	117	13	3	12.3%	1.4%	23.1%
2004	1152	154	18	4	13.4%	1.6%	22.2%
2005	1282	187	26	12	14.6%	2.0%	46.2%
2006	1378	174	36	9	12.6%	2.6%	25.0%
2007	1530	226	26	7	14.8%	1.7%	26.9%
2008	1577	241	36	11	15.3%	2.3%	30.6%
2009	1857	312	41	11	16.8%	2.2%	26.8%
2010	1699	294	40	14	17.3%	2.4%	35.0%
2011	1887	415	41	17	22.0%	2.2%	41.5%
2012	1980	388	58	20	19.6%	2.9%	34.5%
2013	2099	449	79	25	21.4%	3.8%	31.6%
2014	2212	394	58	17	17.8%	2.6%	29.3%
全体	21107	3541	491	156	16.8%	2.3%	31.8%

4. 本章のまとめ

本章においては，まず 1960 年代以降の親子関係研究に焦点を当て，「子どもに対する親の態度・行動（親→子）に関する視点」と「親に対する子どもの態度・行動（子→親）に関する視点」の二つの視点からこれまでの親子関係研究について概観した。そして，多くの研究で，親の子どもに対する態度・行動は，「受容の次元」と「統制の次元」の二つの次元に集約できると思われる。また親に対する子どもの態度・行動は，「親和（信頼）志向」と「独立（分離）志向」の二つの次元に集約できると思われる。次に方法論的な立場から青年期の親子関係研究について概観した。青年期の親子関係研究は，親の養育態度・行動の研究から親―青年関係の両者の相互作用についての研究に広がり，またその分析手法は因子分析法を用いた横断的方法を軸にしながら，SEM を用いた研究や縦断的研究へと広がってきたということを報告した。またミクロな視点からの縦断的研究方法について，動的因子分析を紹介し，この方法論の有効性を議論した。

最後に，我が国における 2001 年～2014 年の親子関係研究の動向について検討した。その結果，対象者を青年のみとする研究が多く，縦断研究は依然として多くはないことを報

告するとともに，親と青年の両者を対象にした研究の重要性，また縦断的研究の重要性を論じた。

注記

第 1 章は，小高（2012)に加筆・修正を行ったものである。

第 2 章　親子関係研究の概観 2

－親子関係と青年の心理的側面との関連－

親子関係は人間関係形成の基礎の部分でもあり，人と人との関わりの出発点とも考えられ，親との関係が個人に与える影響は大きい。例えば，Erikson (1959) は親の暖かい養育行動は基本的信頼感の獲得の重要な要因となるとしている。また Bowlby（1969, 1973, 1980）が提唱する愛着理論では，重要な他者との相互作用により情愛的な絆（affectional bonding ）が形成され, それが内的作業モデルと呼ばれる心的表象を形成するとしている。この内的作業モデルとは，個人の対人関係を判断する枠組みであり，あらゆる対人関係での出来事を解釈し処理し手助けするものであり（小野寺, 2014），子どもの被養育経験を通して内的作業モデル（internal working model of attachment）を形成し，内的作業モデルが働くことによって種々の社会的行動が惹起されると考えられている（島, 2014）。先述したように Symonds (1939) の研究からも親子関係がパーソナリティやアイデンティティ等と関係していることが指摘されており，親子関係は子どもの心理的な側面の発達に大きな影響を与えると考えられる。

本章においては，これまで研究されてきた親子関係とパーソナリティ，アイデンティティ等の青年の心理的側面との関連に関する研究について概観する。

1. 親子関係とアイデンティティ，自尊感情，自己受容との関連についての研究

小沢・湯沢（1989c）は，大学生を対象に加藤（1983)が作成した同一性地位判定尺度を用いて，同一性地位と心理的離乳との関連を検討し，次のような結果を報告している。男子では，A 地位（同一性達成地位）は親から自立した状態，M 地位（積極的モラトリアム地位）は親子の対立という危機の状態，AF 地位（同一性達成－権威受容中間地位）は親との心理的葛藤をもつ状態，D 地位（同一性拡散地位）は親から離反した状態にあるということ，また女性については，A 地位は親から自立した状態，M 地位は自立への試みと親との心理的葛藤と親への反発という自立への過渡期の状態，AF 地位は未だ自立していない状態，D 地位は未自立と親への現実的依存の状態にあるという。

井上（1995）は，親との依存－独立の葛藤と自我同一性との関連性について明らかにし

ている。彼は，大学生を対象に親との関係での依存欲求，独立欲求及び自律性を表す尺度を構成し，この尺度と同一性地位判別尺度を用いて，同一性地位によって親との依存－独立の葛藤の様相がどのように異なるのかということを検討している。その結果，同一性達成地位にある者は他の地位の者よりも親から自律的であるという結果を報告している。また同一性達成地位にある者は依存欲求と独立欲求のバランスがほどよく保たれており，同一性拡散地位にある者は独立欲求が強いことに特徴があることを報告している。

高木・藤田(1988)は大学生を対象に，親子関係と自己意識との関連性についての研究を行っている。彼らは，青年の親への意識の側面が同一性地位や自尊感情といかに関わっているのかということを検討している。その結果，同一性地位との関連について，D 地位の男子は，父親・母親からの「精神的支持」「人生観・考え方への影響」が他の男子よりも有意に低く，A 地位の男子は，DM 地位(同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位)よりも父親・母親からの「精神的独立性」が有意に高いということ，女子においては父親との関係において，D 地位と DM 地位の女子は，A 地位の女子よりも「人生観・考え方への影響」を受けておらず，「感謝・愛情」や「精神的独立性」も低いということを報告している。また，D 地位の女子は AF 地位の女子と比べ，父親を「生き方モデル」としていないこと，また DM 地位の女子は父親からの「心理的圧迫」をA地位の女子よりも有意に強く受けていると感じていること，さらに母親との関係において，D 地位と DM 地位の女子は A 地位の女子よりも有意に「人生観・考え方への影響」を受けていないことや，「感謝・愛情」「精神的独立性」「精神的支持」も弱いということを報告している。彼らは親子関係と自尊感情との関連についても検討しており，男子においては，母親からの「人生観・考え方への影響」が強く，「精神的支持」と「心理的圧迫」が少ないほど自尊感情が高くなること，また女子においては父親からの「精神的独立性」が高く，父母の「心理的圧迫」が少ないほど，自尊感情が高くなるという結果を得ている。

森下（1988）は，自己評価（self esteem）の発達と母子関係の関連性について，母親の受容的な養育行動や自律性を尊重した養育行動が子どもの自己評価を高めるということを報告している。彼はその中で，自己評価と親の養育行動の関連性については，性差があるということにも触れており（Kawash, Keer & Clewes, 1985），それによると，男子においては子どもが認知する母親の受容的な養育行動が，女子においては子どもが認知する母親の自律性を重んじた養育行動が，自己評価を高めるとしている。

また森下（1990）は，小学生，中学生，大学生を対象に，親子診断 EICA（辻岡・山本，1976）

を用いて親子関係と自己受容との関係について検討している。その結果，小学生女子は両親の情緒的支持の尺度は「自信」と正の相関を,「自己拒否」と負の相関を示しており，両親の統制的な養育態度は「自己拒否」と正の相関を,「自信」と負の相関を示していることを報告している。また，中学生の場合，両親の情緒支持的な養育態度は「自己承認」と正の相関を示し, 特に女子の場合, 母親の情緒的支持が強いほど,「自己理解」の得点が高く，両親の統制が強いほど「劣等感」が高い結果になっていたことを報告している。さらに大学生においては，父親の情緒支持的な養育態度は男子の「自己理解」と，女子の「自己理解」「自己評価」が正の相関を示しており，女子の「自己拒否」とは負の相関を示していたこと，そして，父親の統制的な養育態度と女子の「自己信頼」とは負の相関を示していたことを報告している。このように，親子関係が子どもの自己受容とも関係していることが明らかにされている。

2000 年に入ってからの研究では，高橋（2001）は青年期の自我同一性の発達と親子関係についての研究を発表している。彼女は自我同一性尺度と子どもの親に対する親和性に関する尺度を用いてその関連を検討している。その結果，自我同一性の発達の程度が高い子どもは，親に対する親和性も高いという結果を得ており，特に同性の親に対する同一視欲求を含んだ親和性との関連性があるということを報告している。

最近の研究では，水本・山根（2011）は，青年期の女性を対象に調査を行い，母との関係が，女性の自我同一性地位とも関係していることが報告しており，母娘関係が娘の発達や適応に影響を与えていることを報告している。この他にも，キン・大野（2013）は，大学生とその母親を対象に，漸成発達における主題の母子間の関連性と，母親の主題の獲得状況と青年の「アイデンティティ達成」への影響を検討している。その結果，母親と青年の漸成発達の各主題に互いに有意な関係があるということ,「基本的信頼感」と「自律性」において母子間に有意な正の相関があること，母親の「基本的信頼感」及び「自律性」の獲得と青年の「アイデンティティ達成」との間に有意な正の相関があること，そして青年期における「アイデンティティ達成」には，母親からの直接の影響よりも，母親の影響により獲得した青年自身の初期の人格発達の主題である「基本的信頼感」および「自律性」が影響していることを明らかにしている。

2. 親子関係とパーソナリティ特性，及び心理的適応との関連についての研究

小嶋（1967）は小学6年生を対象にSchaefer (1965a) のCR-PBI（Children's Reports of Parental Behavior Inventory）とYG性格検査を用いて，子どもの認知する親（母親）の養育態度と子どもの人格要因との研究を行っている。その結果，CR-PBIの「心理的統制」はYGの不満性（男子）または情緒不安定（女子）と関連し，「受容－拒否」はYGの活動性と関連する傾向があることを見いだしている。

三浦・森・島田(1971) は，山下らが開発した親子関係診断テストと学童用のYGを用い，その関連性について研究を行っている。それによると，寛容的態度，および，民主的態度の各尺度に高得点を示す場合は，情緒安定で社会的適応な傾向があり，過保護的態度，感情的態度の各尺度に高得点を示す場合は，性格は情緒不安定で，社会的不適応な傾向が大であると述べている。

山本（1977）は，親子関係診断尺度EICAとYG性格検査を用いて，親子関係と子どもの人格特性との関連について検討している。その結果，情緒的支持の尺度(ES) は子どものYGの外向性の尺度と正の相関を示し，同一化の尺度(ID) は攻撃性(Ag)，一般的活動性(G)，支配性(A) と正の，統制(CO) は情緒的不安定(D,C,I,N,O) と正の相関があることが示されている。そして，親子関係を類型化した時には，受容的統制型はYGの不安定積極型(B 類)，拒否的統制型は不安定消極型(E 類)，拒否的自律型は安定消極型(C 類)，受容的自律型は安定積極型(D 類)，平均型は平均型(A 類)の傾向にあると述べている。

森下（1979）は，親への親和性と親子間の価値観・性格の類似性についての研究を行っている。彼は，女子短期大学生を対象とその両親に対象に，子どもの親に対する「親和性」と，「理念主義」，「享楽主義」，「利己主義」，「宗教性」の 5 つの価値観尺度と「外向性」，「情緒安定性」，「強靭性」の 3 つの性格特性尺度との関連性を検討している。その結果，価値観に関しては，子どもは現実の親には類似していないが，認知された父母の価値観と，ほとんど全ての尺度において類似していたこと，また性格に関してもほとんどの尺度について認知された父母の性格とよく類似しており，かつ情緒安定性については，子どもは現実の母親にも類似していたことを報告している。また親和性が強ければ強いほど，子どもは父母像の「理念主義的」，「利己主義的」についての類似が高く，現実の父親との間で，理念主義，宗教性，外向性について，類似性が高いとしている。森下は，父母の情緒が安定していることが，父母に対する子どもの親和性を強め，父母が利己的であるということが，子どもの親和性を弱めるということ，また子どもの親和性が親の情緒安定性に影響を

与えるという側面があるのではないかと考察している。

小高（1994）は，高校生とその両親を対象に，親子関係診断尺度 EICA と親用の作成した親子関係尺度 PEICA，YG 性格検査を実施し，親子関係の認知空間を定義し，その空間への射影を求める延長因子分析により，親子関係の認知構造の斜交因子空間に，子，及び，父，母の YG 性格検査によって測定されるパーソナリティ特性がいかに関連するかということを検討している。そして，その結果，子どもの認知する親子の自律性を否定した養育態度は，親の社会的に適応した性格特性（父母の協調性，母の客観性）と関連しており，社会的に適応した親は，子どもに対して対社会的な行動を期待するために放任を否定した養育を行っていることを考察している。また父母の受容的な養育態度は父親の一般的活動性と関連していたが，母親の受容的な養育態度については母親の性格特性との関連は認められなかったことを報告しており，父親については，父親自身の性格特性が子どもへの受容的な態度と関連するのに対して，母親については自分の性格とは関係なく子どもに対して愛情を注いでいるという考察を加えている。さらに子どもに対する統制的な養育態度は，親のネガティブな性格特性と関連していた（父母の気分の変化大，父親の神経質，父母の非協調性，母の攻撃性）こと，情緒的に支持してくれていると認知する子どもは抑鬱的でなく，活動的であり，その母親もまた抑鬱的でないことを報告している(Figure 2-1)。

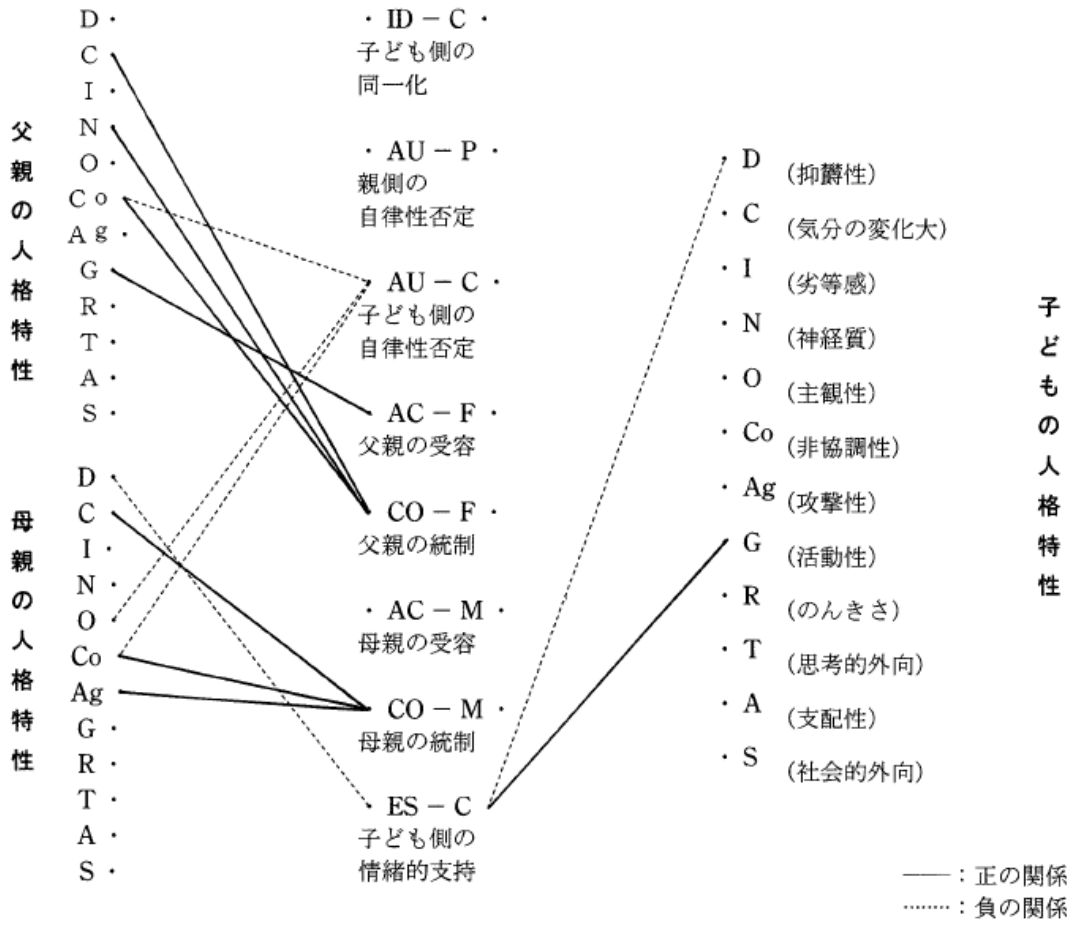


Figure 2-1　親子関係と人格要因との関連性(小高, 1994, P.54)

この他にも，川原・松尾（1998）は，両親の養育態度とアパシー傾向との関連性，また両親のイメージとアパシー傾向との関連性について検討している。その結果，受容性の低い統制性がアパシー傾向に影響を与えていることを報告しており,「子ども自身がどのように認めてもらえるかがアパシー傾向に大きな意味をもつ」と考察している。つまり子どもが両親から一人の大人として認めてもらえるかが重要であるというのである。また彼らは，高校生のアパシー傾向が最も高くなっていることから，高校段階における両親との認識のズレがアパシー傾向に影響すると考えている。さらにアパシー傾向には否定的な両親イメージが存在することが認められることも報告しており，両親に対するイメージはアパシー傾向により否定的に捉えられ，女子よりも男子のアパシー傾向がイメージに現れやすいということを論じている。

2000 年に入ってからの研究では，平石（2000a）は，結合性（他者の見解に応答し，他者の見解に対する感受性と敬意を示すこと）と独自性（自分自身の見解をはっきり伝え，自分と他者との違いを表明すること）に注目し，大学生にとっても結合性と独自性がバランスよく表明される親子間のコミュニケーション行動の有り方が青年の健全な人格発達を促すための社会的環境となりうるかどうか検討し，青年期後期においても親子関係の特徴が人格発達と関連することを示唆している。また，渡邉・平石（2010）は，中学生の母子を対象に，中学生から高校生の母親の養育スキルはどのように変化するのかを子どもとその母親を対象に 3 年 3 時点の縦断調査を行い，階層的重回帰分析により検討している。その結果，継続的に理解･関心スキルを用いた関わりをすることが，子どもの母子相互信頼感に影響を及ぼし，間接的に子どもの心理的適応に影響を及ぼしていることを報告している。

酒井・菅原・真栄城・菅原・北村（2002）は中学生の学校適応の諸側面について，親と親友との信頼関係との関係から検討している。その中で彼らは，子が親に抱く信頼感が子どもの学校適応に影響を与えていること，親子相互の信頼感が強いほど，子どもの学校適応が良好であるという結果を得ている。また親子が相互に信頼し合えている家庭の子どもは学校での適応が比較的良く，親子間での相互の信頼感が低い家庭の子どもは不適応な傾向にあると報告している。また，菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村（2002）は，夫婦間の愛情関係が家族機能と親の養育態度を媒介として子どもの抑うつ傾向と関連するかを検討している。その結果，両親間の愛情の強固さと家族機能の良さが，また家族機能の良好さと子どもの抑うつ傾向が関連することを明らかにしている。また配偶者間の愛情関係は，親自身の養育態度と関連し，相手への愛情の強さと子どもに対する態度の暖かさや過干渉的態度との間に有意な関係がみられたことも報告している。また子どもの抑うつの低さと関連が認められたのは，母親の養育の暖かさのみであり，父親の養育態度は子供の抑うつ傾向と関係していなかったことを報告している。

小野寺（2008）は，Block（1980）のエゴ・レジリエンス（自我を調整する力であり，過度のストレスにさらされたときに適切な適応状況に自我を導く力）の尺度を用いて，エゴ・レジリエンスの高低と母親の養育態度との関連について検討している。その結果，エゴ･レジリエンスの高い母親は自信をもって子育てを行っており，柔軟な養育態度を示し，鬱傾向も低く精神的に安定していることを明らかにしている。また小野寺（2009）は，青年の親との関係が，現在の無気力感に与える影響を検討している。また無気力感を抑制する要因としてエゴ・レジリエンスをとりあげ，これらの関連を検討している。父親・母親

に対する肯定感情と否定感情の男女差を検討し，その結果，女子は父母両者に対して肯定的感情を男子よりも強くいだいていた。一方，否定感情については男女差が認められなかったと報告している。そして大学生の生活への満足感と幸福感が親への感情とどのように関連しているかについては，女子の生活満足感は母親に対する否定感情とは負の関連が，父親に対する肯定的感情とは正の関連が認められたことを報告している。つまり，女性は日々の生活に満足感を感じ，幸せであると思えるには，父親との良好な関係を築くことが大切であるということである。さらに，彼女は，青年の無気力感が幼少期からの親のしつけの方略とエゴ･レジリエンスとどのように関係しているのかを検討している。その結果，幼少期からの母親のほめるしつけが子どものエゴ・レジリエンスを高め，そのエゴ・レジリエンスが無気感を軽減させる要因として機能している可能性があるということを報告している。

この他にも，青年期の親子関係については，「親」との関係が生徒の環境適応や非行傾向などに影響を及ぼすことが指摘されている(丹羽, 2005; 小保方・無藤, 2006)。また，中井(2013)は，中学生を対象に，親に対する信頼感と学校適応との関連について検討し，その結果，中学生の母親に対する信頼感と父親に対する信頼感が生徒の学校適応感に影響を及ぼしていることを明らかにしている。小林・宮原（2012）は，大学生を対象に児童期の愛着と現在の母子関係について尋ね，これと青年の充実感との関連性について検討し，両者の間に関連があることを報告している。その中で，児童期の愛着と現在の母子関係と間で関連性が認められたことを報告している。

3. 親子関係と子どもの社会化との関連についての研究

Baumrind（1971）は，向社会的行動の発達と関連しうる親の養育態度を「権威主義的親(authoritarian parent)」，「信頼的親(authoritative parent)」，「許容的親(permissive parent) 」の 3 つの型に分類している。「権威主義的親」は，非常に厳しい親であり，子どもが従順に従うことを期待し，自分の行動については説明を行わず，子どもを従わせるために罰やおどしといった独断的な方法を用いるタイプの親である。「信頼的親」は，成熟した行動を期待し，そのような行動についての明確な基準を設定しており，規則や規範を厳しく強制し，必要な時には罰を与え，子どもの独立を促し，親と子どもの両方の権利を認識させるようにする親である。そして「許容的親」は，比較的に優しく，子どもに命令や厳しい統制をめったに行わず，子どもに自分たちの感情や衝動を表現させる特徴がある。

そして，これらの養育態度の様式が向社会的行動の発達に及ぼす影響に関して，親の厳しい要求は男子の高い社会的責任性と関連しており，一方，物わかりの良さ(responsiveness)は男女ともに，高い社会的責任性と関連していたのである。また，権威主義的親の子どもは，道徳的な葛藤に関する状況について議論する場合に，はっきりとした「良心」を示さず，外的な道徳志向性を持つ傾向があること，そして許容的な養育は子どもの低い社会的責任性の水準と関連していることを報告している。

Miller, Bernzweig, Eisenberg, & Richard (1991) は子どもの社会化と親の養育態度との関連性を検討し，社会化に影響を及ぼすと考えられる「統制」と「支持」の 2 つの主たる次元を考え，厳しい親（restrictive parents）と許容的な親（permissive parents）と社会化との関係について次のように述べている。許容的な親は自分の要求通りに子どもを従わすことができないが，逆に統制が強すぎる場合，子どもは自分の行動が外部の刺激からきていると信じているために内面化の過程が傷つけられるというのである。社会化を考える時には，これらの 2 つの養育態度を別々に考えるのではなく，両方を考慮に入れるべきであるとしている。

最近の研究では，大鷹・菅原・熊谷（2009）は，中学生と大学生を対象に，母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因について検討し，子どもの損害回避の高さと母親の拒否的・厳格な態度と関連していること，また母親に拒否的に育てられた場合，母親に愛されていないと認知し，その結果ソーシャルスキルは低くなることを報告している。

4. 親子関係と職業意識，食行動との関連についての研究

鹿内 (2010, 2012) は，親子関係と職業意識の関連について検討している。鹿内 (2010) では，就職に対する親の態度と大学生の職業意識との関連を検討している。その結果，親からの圧力を強く認知すると職業未決定の状態が強くなること，そしてこの関連性は父親より母親からの圧力において強いという結果を得ている。さらに鹿内（2012）では，男女別に父親，母親との関係と就職に対する意識との関連について検討している。そしてその結果，男子においては，親の支持的態度や親をモデルとして認知していることが，職業未決定の低さや就職不安の低さと関連しているという結果を得ている。このように，大学生においても親との関係が職業未決定や就職活動不安に関係しており，大学生においても親との関係は影響していることが窺われる。

この他にも，伊東・竹内・鈴木 (2004)は，女子大学生を対象に食行動と親子関係に関す

る研究を行っており，親子関係が青年女子の食行動や食習慣と関係していることを示唆している。干渉傾向が強い父親は食事の献立の決定にも権限を有しており，家族の食事の有り方の方向性にも影響を与えている。家族の食事のありかたが父親の存在と関連していることを示唆している。子どもの親に対する同一化感情は親の温かで受容的な養育態度から醸成されるものであることが示されている。つまり家族で楽しんで食事をすることを通して，子どもが両親の温かで受容的であることを認識することができ，両親に親しみや憧れを感じ，自分についても肯定的に受け止める自尊感情が高められるということである。

5. 本章のまとめ

本章では，親子関係と関係する心理的側面との関係について概観した。これらの研究結果から，青年期においても，親子関係は，自尊心やアイデンティティ，青年の社会化等といった青年の心理的発達や適応と関係していることが窺われる。このように，親と子の関係は，青年の心理的発達や適応に重要な役割を担っていると思われる。親―青年関係を調べることは，青年の心理的な側面を探る上で有効な手掛かりになるとも考えられる。

第 3 章　本論文の目的と方法

第 1 章，第 2 章では，これまでなされてきた親子関係研究を概観した。ここでは，最初にこれらの研究を踏まえ，青年期における親子関係研究で残されている課題について検討を加える。次に，本論文の構成と目的について述べ，最後に，それぞれの研究の方法について述べることとする。

1.　親子関係研究についての課題

(1) 親―青年関係の相互作用を捉えることの意義

これまでの親子関係研究の多くは親の子への態度・行動の研究，あるいは子の親への態度・行動についての研究というようにいずれかの視点に立った研究が多くを占め，両者の相互作用を検討した研究は多くはない。親―青年関係を捉えるためには，親の青年の態度・行動（親→子への影響過程），青年の親への態度・行動（子→親の影響過程）の両者の関係を捉える必要があるのではないだろうか。

親―青年関係研究の研究デザインを，調査対象者の視点でみると，大きく分けると二つの捉え方ができる。一つは，集団を対象にした研究である。この場合，多くの人を対象とするため，集団に潜在する親―青年関係の共通する概念を探索し，全体の関係性を捉えることができる。この方法は，集団の法則定立的観点に重きが置かれており，個性記述的な観点には重きを置いていない。もう一つの捉え方に，一人の対象者に焦点を当て，その親子関係を捉えるという方法がある。この場合，一人の，あるいは一組の親―青年関係を対象とすることとなり，その個人の特徴を捉えることができる，個性記述的な観点に重きを置いた方法と言えよう。親子関係の研究を行う時，集団を対象とした研究，そして個人を対象とした研究の二つの視点から親―青年関係の相互作用を見る必要があるのではないだろうか。

(2) 親―青年関係の分析方法を検討することの意義

SEM を用いた研究の必要性

これまでの親―青年関係の構造に関する研究では，小高（2010），山本・岡本（2008）

のように，探索的因子分析法が適用されてきた。親―青年関係に潜在する因子を確認する方法は，探索的因子分析から Varimax 法，Promax 法，Rotoplot 法による回転によって確認したり（辻岡・山本, 1975a , 1975b）， Procrustes 法に回転によって確認したりする方法(辻岡・山本，1977)が，この分野の伝統的な方法として定着している。しかしながら，この方法は，モデルの適合度が示されないのが現状である。一方，SEM は伝統的な研究方法の全般にわたって新しい道を切り開いた（清水，2013)。SEM を適用することで，モデルの適合度や推定値の標準誤差や検定がなされるようになり，仮説として構築したモデルの比較やモデル修正が可能となる。親子関係研究を行う上で，その構造を詳細に検討するためには，自由にモデルを構築し，検証できる SEM を適用する分析が必要と考えている。

DFA を用いた研究の必要性

親子関係をより詳細に捉えるためには，ある時点の親子関係だけを取り上げるのでは不十分である。ある時点の親子関係について解析することだけでは，時間経過の中での両者の変数間の持続（先導と遅延）の関係性を解析に取り入れることができない（紺田・清水，2015)。より詳細に両者のやりとりを明らかにしていくためには，複数の時点での関係を見ていく必要があると考える。第 1 章で述べたように，親子関係の日々の影響過程をより詳細に検討する時に P 技法や DFA を用いることは有効な方法であり，ある親と子の関係を見る場合に，その家庭の親と子の独自の日々の変化や影響過程を写し出すことができる方法の一つと思われる。しかしながら，我が国においては，P 技法や DFA を用いた研究は数が少なく（紺田・清水, 2009, 2012, 2015；中野・山田・西嶋, 2003)，親子関係についての P 技法や DFA の適用はない。先述したように，青年期の親子関係は，再形成の時期でもある。親子間の相互作用を時間軸で捉えることや平石（2007）の研究のようにミクロの視点で捉えることは，親子関係の影響過程を知る上で非常に意義あるものと考える。

(3) 親―青年関係と青年の心理的側面との関係を捉えることの意義

先述したように，親子関係が青年の様々な心理的側面と関連していることはこれまで検討されており，親子関係の在り方が青年の心理的発達や適応と関連していることが明らかにされてきた。そして，これからも青年の心理的側面に親子関係がどのように関係しているかということを更に明らかにしていく必要があると考える。両者の関係を更に明らかにしていくことで研究は蓄積され，新しい知見が生まれると考える。

本論文では以上のような課題を踏まえ，第Ⅱ部と第Ⅲ部で親―青年関係の実証的研究を行うことを目的とする。そして，それらの結果に基づいて，親―青年関係の相互作用と親子関係が青年に及ぼす影響について考察したいと考える。本論文では，母と青年との関係に焦点を当てることとする。母と青年の関係に焦点を当てた理由として，母と青年との関係は，父親と比較し，情愛的な結びつきが強く，ポジティブな影響を受けているという結果が得られており（小高，2010）といわれており，より多くの相互作用を行っていると思われるためである。

2. 本論文の構成と目的

本論文においては，親―青年関係の中でも，母との関係に焦点を当て，母―青年関係のコミュニケーションがどのようになされているかを明らかにすること，また母―青年関係が心理社会的適応とどのように関係するのかを明らかにすることを主な目的とする。本論文は以下の 4 部から構成されている。

第Ⅰ部　親―青年関係研究についての研究展望
第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション
第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係
第Ⅳ部　総括的討論

(1) 第Ⅰ部　親―青年関係研究についての研究展望

第Ⅰ部は，序章，第 1 章～第 3 章から成っている。

序章では，親子関係研究の歴史について概観し，親子関係が，その時代のイデオロギーや社会的，経済的，文化的な状況によって変化する側面が大きいことについて論じた。

第 1 章では，まず 1960 年代以降の研究に焦点を当て，「子どもに対する親の態度・行動（親→子）に関する視点」と「親に対する子どもの態度・行動（親→子）に関する視点」の二つの視点から青年期の親子関係について概観した。次に，SEM や動的因子分析などを用いた最近の親子関係研究について概観した。

第 2 章では，親子関係とアイデンティティ，自尊心，パーソナリティ等との関係について概観し，親子関係が青年の心理的な側面と関係していることについて論じた。

第 3 章では，本論文の構成と目的と方法について論じている。

(2) 第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション

第Ⅱ部は，第 4 章～第 6 章から成っている。親―青年関係について検討する。

第 4 章　「青年の母に対する態度･行動についての構造分析」　では，大学生を対象に，青年の母に対する態度・行動についての構造を明らかにすることを目的する。これまで，小高（1998, 2010）は因子分析により，その構造を検討していたが，本章では，この分野での新しい試みとして，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により，大学生における青年の母に対する態度・行動の構造について検討する。

第 5 章　「青年の母―青年関係の相関分析的研究」では，大学生の母子関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」の構造分析を行う。また SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により，両者の関連を明らかにする。

第 6 章　「母娘関係の日々の相互作用の一分析 ―動的因子分析を適用して―」では，中学 1 年生の一組の母娘関係に焦点を当て，動的因子分析（DFA）により分析を行い，日々の影響過程を明らかにする。

(3) 第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係

第Ⅲ部は，第 7 章と第 8 章から成っている。第Ⅲ部においては，母―青年関係と心理的側面との関連性について明らかにすることを目的とする。

第 7 章　「母―青年関係と個人志向性・社会志向性の関連性について」では，大学生を対象に，青年の母への態度・行動が心理社会的適応への影響過程について明らかにする。

第 8 章　「母娘関係と情動性の関連性について」においては，中学生の母娘のペアを対象に，中学生の日々の心理的な変化から，変数に潜在する因子を探索し，母娘関係と母娘の情動性についての構造と関連性を明らかにする。

(4) 第Ⅳ部　総括的討論

最終章の第 9 章「全体考察」では，本論文における研究結果を総合的に考察する。

本論文の概念図は Figure 3-1 に示す通りである。

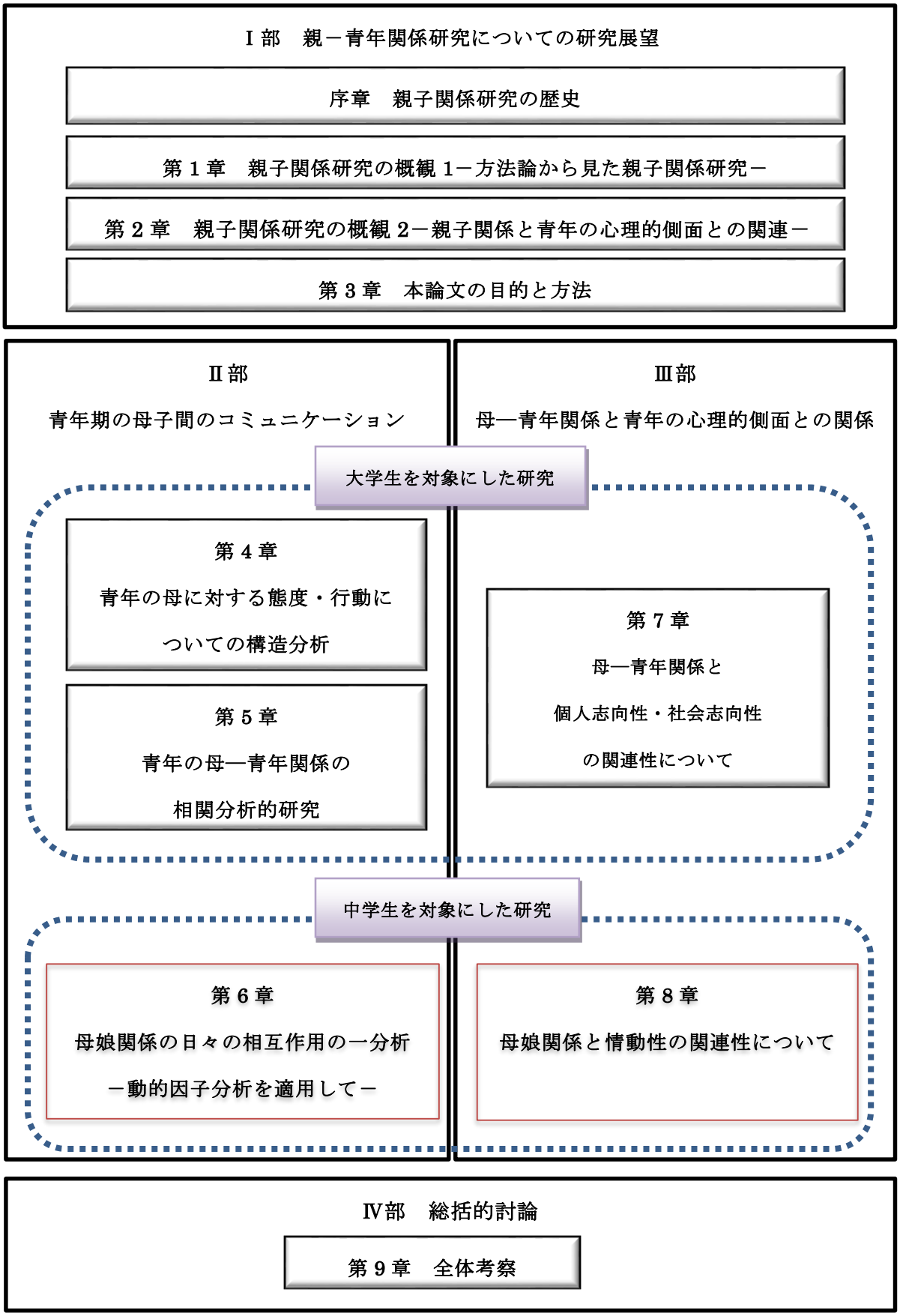


Figure 3-1　本論文の構成

3．調査方法

次に第Ⅱ部と第Ⅲ部における研究の具体的な方法の概略について説明する。詳細については，それぞれの章で述べる。

(1) 第Ⅱ部　青年期の母子間のコミュニケーション

第 4 章　青年の母に対する態度・行動についての構造分析

調査時期：2004 年 9 月～ 12 月

対象：大学生　809 名（男 378 名，女 431 名）

測定内容および方法：

小高（2000）が作成した親―青年関係尺度，5 尺度 25 項目を用いた。本分析においては母親に対する青年の態度・行動についてのデータを分析対象とした。

第 5 章　青年の母―青年関係の相関分析的研究

調査時期：2010 年 12 月

対象：大学生 308 名（男 123 名，女 185 名）

測定内容および方法：

辻岡・山本（1976），三砂・竹原・嶋根・野村（2006），遠山（2005）の項目を参考に作成した母の青年への態度・行動に関する項目 27 項目と，小高（2000）の青年の母親への態度・行動についての 25 項目を用いた。

第 6 章　母娘関係の日々の相互作用の一分析　－動的因子分析を適用して－

調査時期：　2010 年 10 月 20 日～2011 年 3 月 12 日の 144 日間

対象：　女子中学生 1 年生とその母親の 2 名

測定内容および方法：

① 娘の母への態度･行動についての項目 14 項目を用いた。小高（2000, 2010, 2011）の「親和志向」と「独立志向」の 2 因子を元にして，それぞれ 7 項目ずつ，合計 14 項目を娘用・母用を用意した。

② 母の娘への態度・行動についての項目 8 項目を用いた。辻岡・山本（1976）の作成した EICA の「受容」「統制」の 2 因子を元にして，それぞれ 4 項目ずつ，合計 8 項目を娘用・母用を用意した。

(2) 第Ⅲ部　母―青年関係と青年の心理的側面との関係

第 7 章　母―青年関係と個人志向性・社会志向性の関連性について

調査時期：2010 年 12 月

対象：大学生 308 名（男 123 名，女 185 名）

測定内容および方法：

① 第 5 章で得られた結果を元に，青年の母への態度・行動に関する 6 尺度（「母との情愛的絆（5 項目）」「母からのポジティブな影響（5 項目）」「母との対立（5 項目）」「母への服従（5 項目）」「母に対する客観視（3 項目）」「母とは別の独自の生き方（2 項目）」）25 項目を用いた。

② 伊藤（1993a，1993b）の個人志向性・社会志向性尺度を用いた。この尺度は，自己実現的特性を捉える個人志向性尺度 8 項目と社会適応的特性を捉える社会志向性尺度 9 項目からなる。

第 8 章　母娘関係と情動性の関連性について

調査時期：2010 年 10 月 7 日～2011 年 4 月 1 日（細かな調査期間はそれぞれの母娘のペアによって異なる。詳細は第 8 章で記述する。）

対象：3 組の女子中学生 1 年生とその母親

測定内容および方法：

第 6 章で用いた母娘関係に関する項目に加え，清水・山本（2008）の情動性に関する項目 5 項目を用いた。

第Ⅱ部 青年期の母子間のコミュニケーション

第 4 章 青年の母に対する態度・行動についての構造分析

1. 目　的

これまでの親―青年関係の構造に関する研究では，辻岡・山本（1975a, 1975b, 1977），小高（2010），山本・岡本（2008）のように，探索的因子分析法が適用されてきた(Table1-3, Table1-4)。親―青年関係に潜在する因子を確認する方法は，探索的因子分析から Rotoplot 法による回転によって確認したり（辻岡・山本, 1975a, 1975b），Procrustes 法に回転によって確認したりする方法(辻岡・山本, 1977)が，この分野の伝統的な方法として定着していた。しかしながら，探索的因子分析には，標本によって因子間共分散は異なることを考慮に入れていないこと，また独自因子間に共分散を置くことが困難であるという点で限界があると思われる。一般化可能な因子の構造を明らかにするためには，SEM を適用した複数標本の同時分析を行う必要がある（清水, 2003a）。

本章では，まず青年の親への態度・行動について探索的因子分析を行うことで，潜在する因子を確認する。次に，この分野での新しい試みとして，多集団において確認することができる SEM を適用する（狩野・三浦, 2002；清水・柴田, 2008；清水, 2003a, 2003b）。

本研究においては，青年と母親との関係に焦点を当て，小高（2000）の尺度を用いて，探索的因子分析を行う。そして，その結果を元にして，SEM により再分析し，大学生における青年の母への態度・行動のモデル化を試みたい。

2. 方　法

(1) 対象者：調査参加者は，大学生 809 名（男 378 名，女 431 名）であった。本研究においては，欠損値の無い 809 名を分析対象者数とした。対象者の平均年齢，19.6 歳（SD=1.22）であった。

(2) 調査時期：2004 年 9 月～ 12 月に調査を行った。調査は主に集団法で行った。調査にかかった時間は，約 20 分であった。

(3) 測定変数：小高（2000）が作成した親―青年関係尺度，5 尺度 25 項目を用いた（Table 4-1）。回答は，父・母に対して評定してもらったが，本分析においては母親を対象とした評定のデータを分析対象とした。評定は「全くあてはまらない（1 点）」～「非常

にあてはまる（5 点）」の 5 件法である。

Table 4-1　青年の親への態度・行動についての項目（小高，2000 より作成）

小高（1998）での因子名	項目記号	項目内容
親からのポジティブな影響の因子	MO01	母親によって自分の視野が広がった。
	MO11	母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。
	MO21	自分の価値観には，母親の価値観が反映している。
	MO31	私が何かを決める際，母親の意見は十分参考になると思う。
	MO41	母親によって自分の人生観が深められた。
親との対立の因子	MO02	私の意見や考え方が母親に伝わらず，イライラすることがある。
	MO12	母親の価値観に疑問を持っている。
	MO22	私と母親の言うことはいつも対立する。
	MO32	母親を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。
	MO42	自分の進路，生き方などのことで母親と対立することがある。
親への服従の因子	MO03	自分の意見と母親の意見が違う時，母親の意見に左右される。
	MO13	母親にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。
	MO23	母親の言うことには素直に従っている。
	MO33	母親の期待にそった生き方をしている。
	MO43	私は母親の言う通りに生きている。
親との情愛的絆の因子	MO04	母親をいたわってあげたい。
	MO14	母親に対して感謝の気持ちをもっている。
	MO24	母親に対してこれからは、親孝行をしたい。
	MO34	自分が今安心して生活できるのは，母親の存在があるからだ。
	MO44	最近，母親のありがたみを感じることがよくある。
一人の人間として親を認知する因子	MO05	母親も一人の人間だと思って接している。
	MO15	自分の生き方は母親の生き方とは別の独自のものだ。
	MO25	やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。
	MO35	母親と私の人生は違う。
	MO45	母親のことを一人の人間として客観的に見ている。

(4) 分析手続き：① 上記の項目の母親について 25 × 25 項目の相関行列を算出し，解釈のしやすさから因子数を 6 として，主因子法により因子分析を行い，その後，プロマックス回転を行った。② それぞれの尺度に含まれる項目の得点の合計点を算出し，これを尺度得点とし，得られた 6 つの尺度得点を用いて，男女の違いを見るために，*t* 検定を行った。③ 上記で得られた 6 つの因子を元にしてモデルを作成し，SEM により男女 2 集団の同時分析を行った。モデルの適合度については，Mulaik（2010）や Hu & Bentler(1999)，清水・三保・紺田・青木（2014）を参考にして，CFI（>.95）, RMSEA（<.05），SRMR(<.08)という適合度指標をモデル採択のための基準とした。なお，以上の分析は SPSS21 と AMOS21 を用いて行った。

3. 結　果

(1) 青年の母への態度・行動についての構造分析

青年の母への態度・行動について因子分析を行った結果，男女で類似した 6 つの因子が得られた。これらの因子を順次見ていくことにする(Table 4-2-1～Table 4-2-3 を参照)。因子の解釈は，男女を合わせたデータの因子分析の結果を元に解釈する。

①母との情愛的絆の因子

この因子には，「母親に対してこれからは，親孝行をしたい。(.964)」，「母親に対して感謝の気持ちをもっている。(.904)」，「母親をいたわってあげたい(.846)」，「最近，母親のありがたみを感じることがよくある。(.702)」，「自分が今安心して生活できるのは，母の存在があるからだ。(.668)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は親への感謝の気持ちを含んだ母との情愛を表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母との情愛的絆」の因子と命名した。

②母からのポジティブな影響の因子

この因子には，「母親によって自分の人生観が深められた。(.859)」，「母親によって自分の視野が広がった。(.782)」，「母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。(.761)」，「自分の価値観には，母親の価値観が反映している。(.657)」，「私が何かを決める際，母親の意見は十分参考になると思う(.611)」の項目が負荷を示していた。このこと

から，この因子は母からの影響を受けたことを表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母からのポジティブな影響」の因子と命名した。

③母との対立の因子

この因子には，「母親を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。(.881)」，「私と母親の言うことはいつも対立する。(.756)」，「自分の進路，生き方などのことで母と対立することがある。(.720)」，「私の意見や考え方が母に伝わらず，イライラすることがある。(.682)」，「母親の価値観に疑問を持っている。(.514)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は親への反抗や価値観の違いのため生じる母との対立を表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母との対立」の因子と命名した。

④母への服従の因子

この因子には，「私は母親の言う通りに生きている。(.748)」，「母親の言うことには素直に従っている。(.692)」，「母親にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。(.663)」，「自分の意見と母親の意見が違う時，母親の意見に左右される。(.496)」，「母親の期待にそった生き方をしている。(.482)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母に対する従順さや服従を表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母への服従」の因子と命名した。

⑤母に対する客観視の因子

この因子には，「母親も一人の人間だと思って接している。(.782)」，「やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。(.782)」，「母親のことを一人の人間として客観的に見ている。(.695)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母親を客観的にみている様子を表す因子であると思われる。ここでは「母に対する客観視」の因子と命名した。

⑥母とは別の独自の生き方の因子

この因子には，「母と私の人生は違う。(.872)」，「自分の生き方は母親の生き方とは別の独自のものだ。(.721)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母親とは別の存在であるという青年の態度を表す因子であると思われる。ここでは，「母とは別の独自の生き方」の因子と命名した。

Table 4-2-1 青年の母への態度・行動についての因子パターンと因子間相関（全体）

No	項目	情愛	影響	対立	服従	客観	独自	h^2	*Mean*	*SD*
MO24	母親に対してこれからは、親孝行をしたい。	**0.964**	−0.102	0.053	0.023	0.035	−0.039	0.826	4.46	0.77
MO14	母親に対して感謝の気持ちをもっている。	**0.904**	−0.046	0.014	−0.019	−0.026	0.024	0.739	4.54	0.72
MO04	母親をいたわってあげたい。	**0.846**	−0.036	0.033	0.049	0.032	−0.002	0.691	4.38	0.79
MO44	最近，母親のありがたみを感じることがよくある。	**0.702**	0.129	0.020	−0.051	0.009	0.011	0.606	4.37	0.85
MO34	自分が今安心して生活できるのは，母親の存在があるからだ。	**0.668**	0.109	−0.044	0.035	−0.044	0.054	0.540	4.42	0.82
MO41	母親によって自分の人生観が深められた。	−0.020	**0.859**	−0.003	−0.077	0.045	−0.021	0.712	3.58	1.06
MO01	母親によって自分の視野が広がった。	0.022	**0.782**	−0.001	−0.099	0.003	−0.003	0.591	3.71	1.03
MO11	母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。	−0.016	**0.761**	0.076	−0.032	0.109	0.023	0.584	3.66	1.16
MO21	自分の価値観には，母親の価値観が反映している。	−0.078	**0.657**	0.003	0.220	−0.041	0.008	0.508	3.38	1.10
MO31	私が何かを決める際，母親の意見は十分参考になると思う。	0.151	**0.611**	−0.102	0.113	−0.063	−0.003	0.594	3.75	1.04
MO32	母親を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。	0.088	0.060	**0.881**	−0.086	−0.012	−0.115	0.674	2.69	1.33
MO22	私と母親の言うことはいつも対立する。	−0.092	−0.007	**0.756**	−0.011	0.031	−0.035	0.618	2.46	1.13
MO42	自分の進路，生き方などのことで母親と対立することがある。	0.068	0.070	**0.720**	0.026	−0.011	0.033	0.484	2.68	1.31
MO02	私の意見や考え方が母親に伝わらず，イライラすることがある。	0.066	−0.036	**0.682**	0.000	−0.015	0.057	0.468	3.42	1.23
MO12	母親の価値観に疑問を持っている。	−0.143	−0.160	**0.514**	0.100	0.044	0.109	0.471	2.45	1.22
MO43	私は母親の言う通りに生きている。	−0.002	−0.105	0.017	**0.748**	0.071	−0.067	0.544	2.07	1.04
MO23	母親の言うことには素直に従っている。	0.064	−0.020	−0.188	**0.692**	0.035	0.049	0.493	2.77	1.06
MO13	母親にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。	−0.087	−0.006	0.182	**0.663**	0.006	0.041	0.491	1.99	1.12
MO03	自分の意見と母親の意見が違う時，母親の意見に左右される。	0.027	0.291	0.123	**0.496**	−0.134	0.023	0.420	2.74	1.21
MO33	母親の期待にそった生き方をしている。	0.061	−0.013	−0.107	**0.482**	0.044	−0.116	0.291	2.62	1.08
MO05	母親も一人の人間だと思って接している。	0.012	0.078	−0.070	0.019	**0.782**	0.009	0.688	4.18	0.88
MO25	やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。	0.092	0.036	0.022	−0.045	**0.782**	−0.017	0.698	4.15	0.89
MO45	母親のことを一人の人間として客観的に見ている。	−0.057	−0.024	0.051	0.079	**0.695**	0.030	0.465	3.79	1.06
MO35	母親と私の人生は違う。	0.052	−0.001	−0.012	−0.016	−0.032	**0.872**	0.745	4.38	0.83
MO15	自分の生き方は母親の生き方とは別の独自のものだ。	−0.023	0.005	0.004	−0.047	0.066	**0.721**	0.568	4.33	0.88
	影響	**0.592**								
	対立	**−0.365**	***−0.275***							
	服従	0.052	**0.354**	0.060						
	客観	**0.454**	**0.337**	−0.045	0.042					
	独自	−0.071	−0.191	***0.205***	***−0.228***	***0.266***				

Table 4-2-2 青年の母への態度・行動についての因子パターンと因子間相関（男子）

No	項目	情愛	影響	対立	服従	客観	独自	h^2	*Mean*	*SD*
MO24	母親に対してこれからは、親孝行をしたい。	**0.938**	−0.085	0.056	−0.024	0.034	−0.085	0.805	4.32	0.81
MO14	母親に対して感謝の気持ちをもっている。	**0.854**	−0.048	−0.003	−0.022	−0.004	0.040	0.692	4.43	0.75
MO04	母親をいたわってあげたい。	**0.822**	0.005	0.015	0.014	−0.045	0.018	0.639	4.19	0.84
MO44	最近，母親のありがたみを感じることがよくある。	**0.677**	0.105	−0.001	−0.110	0.044	−0.022	0.568	4.24	0.85
MO34	自分が今安心して生活できるのは，母親の存在があるからだ。	**0.639**	0.022	−0.027	0.107	0.025	0.080	0.473	4.25	0.88
MO32	母親を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。	0.063	0.035	**0.815**	−0.060	−0.029	−0.082	0.608	2.56	1.28
MO42	自分の進路，生き方などのことで母親と対立することがある。	0.090	0.060	**0.767**	0.047	0.096	0.000	0.560	2.65	1.31
MO22	私と母親の言うことはいつも対立する。	−0.087	0.013	**0.766**	−0.047	0.057	−0.080	0.611	2.46	1.15
MO02	私の意見や考え方が母親に伝わらず，イライラすることがある。	0.067	−0.068	**0.627**	0.041	−0.003	0.114	0.417	3.28	1.25
MO12	母親の価値観に疑問を持っている。	−0.166	−0.030	**0.554**	0.036	−0.019	0.061	0.432	2.49	1.23
MO11	母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。	−0.106	**0.864**	0.079	−0.121	0.091	−0.013	0.631	3.40	1.19
MO41	母親によって自分の人生観が深められた。	0.027	**0.824**	−0.032	−0.073	0.046	−0.006	0.696	3.45	1.06
MO01	母親によって自分の視野が広がった。	0.069	**0.670**	−0.009	−0.007	−0.032	0.020	0.480	3.57	1.03
MO21	自分の価値観には，母親の価値観が反映している。	−0.072	**0.653**	0.037	0.181	−0.090	−0.004	0.492	3.11	1.13
MO31	私が何かを決める際，母親の意見は十分参考になると思う。	0.178	**0.514**	−0.126	0.176	−0.041	−0.033	0.539	3.52	1.05
MO43	私は母親の言う通りに生きている。	−0.034	−0.100	−0.020	**0.680**	0.169	−0.167	0.507	1.97	0.99
MO13	母親にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。	−0.135	−0.015	0.114	**0.678**	−0.034	0.116	0.475	1.85	1.03
MO23	母親の言うことには素直に従っている。	0.033	−0.012	−0.180	**0.642**	0.066	0.009	0.421	2.63	1.06
MO03	自分の意見と母親の意見が違う時，母親の意見に左右される。	0.112	0.129	0.171	**0.589**	−0.208	0.061	0.480	2.44	1.16
MO33	母親の期待にそった生き方をしている。	0.010	0.018	−0.040	**0.344**	0.137	−0.245	0.246	2.49	1.10
MO25	やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。	0.126	−0.013	0.054	−0.004	**0.746**	0.015	0.652	4.01	0.93
MO45	母親のことを一人の人間として客観的に見ている。	−0.028	−0.066	0.106	0.063	**0.712**	0.023	0.477	3.68	1.10
MO05	母親も一人の人間だと思って接している。	−0.013	0.144	−0.087	0.036	**0.702**	0.088	0.623	4.06	0.92
MO35	母親と私の人生は違う。	0.071	−0.025	−0.005	0.001	0.010	**0.873**	0.778	4.37	0.85
MO15	自分の生き方は母親の生き方とは別の独自のものだ。	−0.070	0.010	−0.014	−0.070	0.137	**0.630**	0.486	4.33	0.89
	影響	**0.493**								
	対立	**−0.359**	−0.179							
	服従	0.046	**0.419**	0.110						
	客観	**0.480**	**0.315**	−0.086	−0.023					
	独自	0.005	−0.155	0.117	**−0.330**	***0.255***				

Table 4-2-3 青年の母への態度・行動についての因子パターンと因子間相関（女子）

No	項目	情愛	影響	対立	服従	客観	独自	h^2	*Mean*	*SD*
MO24	母親に対してこれからは、親孝行をしたい。	**0.961**	−0.074	0.052	0.029	0.044	−0.022	0.844	4.59	0.70
MO14	母親に対して感謝の気持ちをもっている。	**0.920**	−0.022	0.033	−0.019	−0.032	−0.007	0.780	4.64	0.67
MO04	母親をいたわってあげたい。	**0.881**	−0.091	0.019	0.061	0.092	−0.026	0.746	4.54	0.70
MO44	最近，母親のありがたみを感じることがよくある。	**0.694**	0.190	0.058	−0.015	−0.008	0.026	0.634	4.48	0.84
MO34	自分が今安心して生活できるのは，母親の存在があるからだ。	**0.692**	0.164	−0.088	−0.005	−0.137	0.067	0.625	4.57	0.73
MO41	母親によって自分の人生観が深められた。	−0.033	**0.891**	0.063	−0.047	0.053	−0.042	0.747	3.69	1.05
MO01	母親によって自分の視野が広がった。	0.026	**0.839**	0.023	−0.118	0.016	0.022	0.685	3.84	1.01
MO11	母親は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。	0.104	**0.658**	0.070	0.013	0.122	0.047	0.559	3.89	1.08
MO31	私が何かを決める際，母親の意見は十分参考になると思う。	0.120	**0.655**	−0.100	0.077	−0.059	0.017	0.610	3.95	0.99
MO21	自分の価値観には，母親の価値観が反映している。	−0.074	**0.616**	−0.051	0.239	0.010	−0.005	0.483	3.62	1.01
MO32	母親を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。	0.094	0.068	**0.923**	−0.082	−0.002	−0.123	0.715	2.81	1.37
MO22	私と母親の言うことはいつも対立する。	−0.088	0.000	**0.759**	0.007	0.012	0.002	0.636	2.46	1.10
MO02	私の意見や考え方が母親に伝わらず，イライラすることがある。	0.035	−0.041	**0.709**	−0.019	−0.025	0.018	0.517	3.55	1.20
MO42	自分の進路，生き方などのことで母親と対立することがある。	0.057	0.090	**0.703**	0.026	−0.097	0.066	0.456	2.71	1.31
MO12	母親の価値観に疑問を持っている。	−0.070	−0.283	**0.473**	0.128	0.097	0.151	0.542	2.42	1.22
MO43	私は母親の言う通りに生きている。	−0.004	−0.051	0.064	**0.747**	0.010	−0.040	0.558	2.16	1.07
MO23	母親の言うことには素直に従っている。	0.085	−0.033	−0.204	**0.714**	0.023	0.058	0.542	2.90	1.05
MO13	母親にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。	−0.057	−0.003	0.237	**0.675**	0.041	−0.022	0.531	2.11	1.18
MO33	母親の期待にそった生き方をしている。	0.092	−0.031	−0.167	**0.529**	−0.022	−0.064	0.332	2.74	1.05
MO03	自分の意見と母親の意見が違う時，母親の意見に左右される。	−0.069	0.376	0.071	**0.464**	−0.077	0.006	0.385	2.99	1.20
MO25	やっぱり母親も一人の人間だと思うようになった。	0.052	0.084	−0.015	−0.091	**0.807**	−0.018	0.731	4.27	0.84
MO05	母親も一人の人間だと思って接している。	0.073	0.007	−0.074	0.010	**0.805**	−0.014	0.714	4.30	0.84
MO45	母親のことを一人の人間として客観的に見ている。	−0.101	0.029	0.002	0.076	**0.698**	0.039	0.480	3.88	1.02
MO15	自分の生き方は母親の生き方とは別の独自のものだ。	0.020	0.012	0.007	−0.026	0.018	**0.842**	0.718	4.33	0.88
MO35	母親と私の人生は違う。	−0.005	0.006	−0.005	−0.026	−0.006	**0.783**	0.614	4.39	0.81
	影響	**0.627**								
	対立	**−0.398**	**−0.403**							
	服従	−0.003	***0.234***	0.003						
	客観	**0.390**	***0.296***	−0.021	0.071					
	独自	−0.148	***−0.240***	***0.272***	−0.139	***0.235***				

(2) 青年の母への態度・行動の性差について

青年の母への態度・行動についての性差を検討するために，6 尺度の尺度得点の男女別の平均値について，*t* 検定により分析を行った(Table 4-3 を参照)。その結果，母との情愛的絆の尺度，母への服従の尺度，母からのポジティブな影響の尺度，母に対する客観視の尺度で，女子の方が男子よりも得点が有意に高かった。

Table 4-3 男女別の青年の母への態度・行動についての尺度得点

	男子		女子		
尺度名	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*p*
情愛	21.43	3.45	22.81	3.17	***
服従	11.39	3.69	12.91	3.99	***
影響	17.05	4.30	18.99	4.19	***
対立	13.44	4.79	13.96	4.89	*n.s.*
客観	11.74	2.47	12.45	2.32	***
独自	8.70	1.57	8.72	1.54	*n.s.*

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, *n.s.*: $p>.1$

(3) SEM による母子関係モデルの構築

上記で得られた「青年の母に対する態度・行動」の因子分析の結果を元に母―青年関係モデルの構築を SEM により行った。

まず「青年の母に対する態度・行動」についても男女の因子の構造が類似していたので，男女を併せた因子分析を元にして，因子パターンの高い項目を選択した。第 1 因子～第 4 因子までは各 5 項目ずつ，第 5 因子については 3 項目，第 6 因子については 2 項目選択した。最後に「青年の母に対する態度・行動」は互いに関連していると思われるので，因子間の相関を想定し相互のパスを設けた。

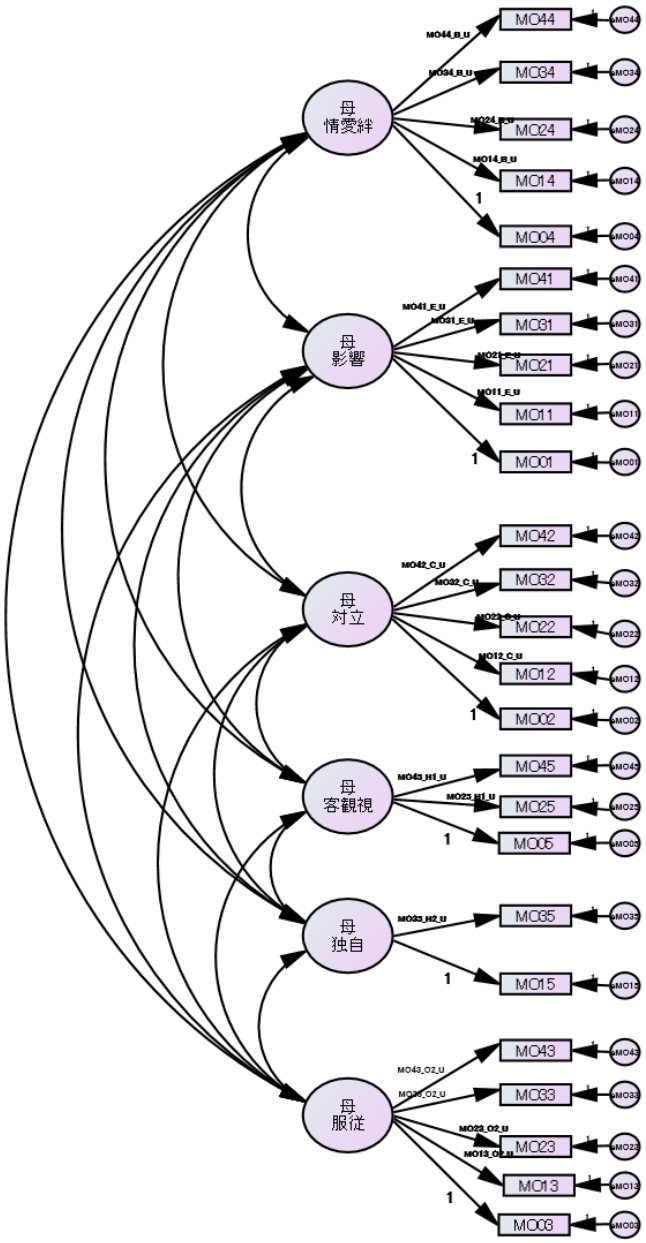


Figure 4-1　青年の親への態度・行動についての 6 因子出発モデル

清水（2003b）は，Meredith（1993）に従い，測定モデルについての因子的不変性について，①布置不変性，②因子パターン不変性，③強因子的不変性，④厳格な因子的不変性を定義している。因子的不変性を適用することは，パラメータ拘束を行うことであり，測定モデルの中で，異なった標本が質的に同じかどうかを検討することを意味する。清水（2003b）は，標本間にわたるパラメータ拘束を構造モデルについても置くことが可能であると述べている。本研究では，その試みとして，測定モデルと構造モデルについて，因子パターン不変性を適用し，SEM により分析を行った。具体的には，Figure 4-1 の青年の母への態度・行動モデルを作成し，これを出発モデルとし，因子パターン不変性を適用し，男女で対応するパス同士を等値制約して分析を行った。次に男女の最も大きい修正指数についてパスを増やした。その際，因子パターン不変性による拘束は行わなかった。一次因子から観測変数についての修正指数が 10 を超えるものがなくなるまで作業を繰り返した。さらに適合度をあげるために，独自性間共分散に関する修正指数については修正指数 10 を超えるものがなくなるまで作業を繰り返した。これらの独自性間共分散を置いた箇所は，母―青年関係の項目の意味内容として関連していると考えられ，解釈可能な関連が想定できる(清水・柴田, 2008)。その結果，Figure 4-2-1，Figure 4-2-2 のような適合度の高い結果を得ることができた($\chi^2(489)=796.955$，$p<.001$，RMSEA=.028，CFI=.968, AIC=1118.955, SRMR=.035)。Table 4-4 をみると，それぞれの因子に負荷を示していた項目は，それぞれに該当する一次因子からの因子パターンが 0.1%水準で有意であった。一次因子から観測変数へのパスの中で, 複数の因子から絶対値 0.30 以上のパスがひかれた観測変数は，男女の「母との対立」因子から「MO13　母親にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。」と女子の「母との対立」の因子から「MO43 私は母親の言う通りに生きている。」の 3 項目だけであった。

次に因子間相関を見ると，「母からのポジティブな影響の因子」,「母に対する客観視の因子」,「母との情愛的絆の因子」の間で,「母からのポジティブな影響の因子」と「母への服従の因子」,「母とは別の独自の生き方の因子」と「母に対する客観視の因子」の間で，男女共に有意な正の相関を示していた。一方,「母への服従の因子」と「母とは別の独自の生き方の因子」,「母との対立の因子」と「母に対する客観視の因子」,「母との対立の因子」と「母からのポジティブな影響の因子」,「母との対立の因子」と「母との情愛的絆の因子」,の間で有意な負の相関を示していた。

また，男女で異なる部分があり，女子においては,「母への服従の因子」と「母に対す

る客観視の因子」以外で有意な関連が認められたのに対して，男子においては，「母とは別の独自の生き方の因子」と「母との対立の因子」「母からのポジティブな影響の因子」「母との情愛的絆の因子」の間，「母への服従の因子」と「母に対する客観視の因子」「母との対立の因子」「母との情愛的絆の因子」において有意な相関が認められなかった。

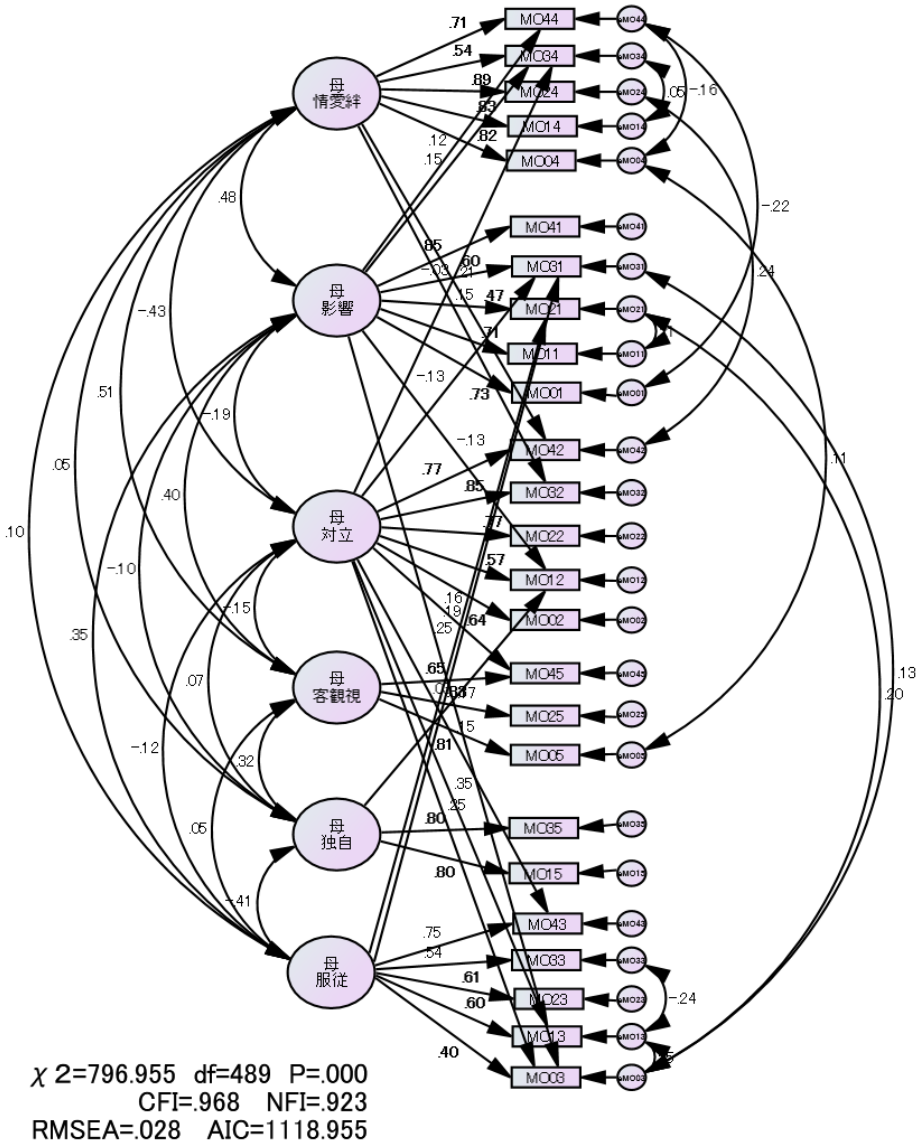


Figure 4-2-1　親―青年の 6 因子最終モデル（男子）

注）これらの値は推定値を標準化したものである。

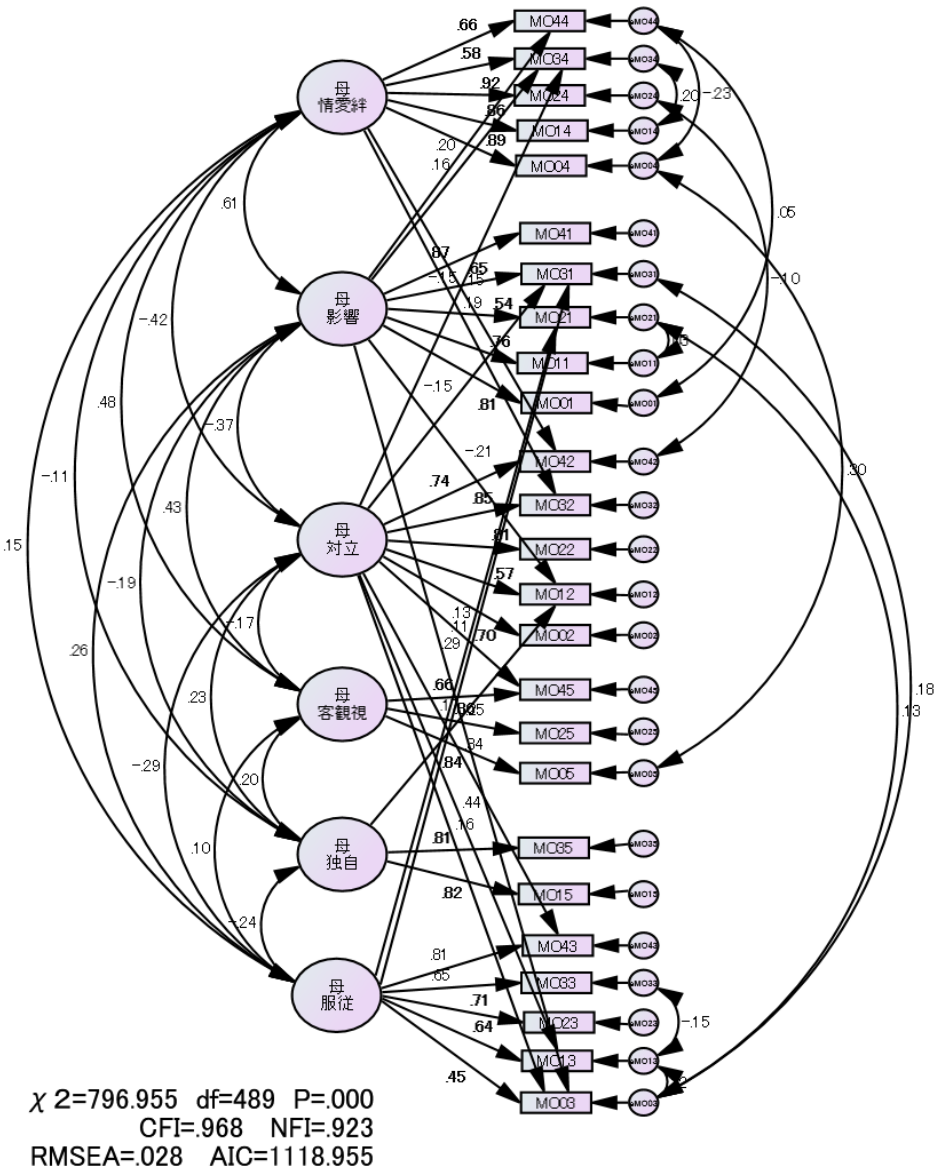


Figure 4-2-2 親―青年の 6 因子最終モデル（女子）

注） これらの値は推定値を標準化したものである。

Table 4-4 モデルの推定値

			男子				女子			
			非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準	非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	有意水準
測定モデル	MO01	<--- 母_影響	1.000		0.733		1.000		0.813	
	MO11	<--- 母_影響	1.050	0.049	0.712	***	1.050	0.049	0.762	***
	MO21	<--- 母_影響	0.680	0.047	0.474	***	0.680	0.047	0.535	***
	MO31	<--- 母_影響	0.807	0.045	0.602	***	0.807	0.045	0.652	***
	MO41	<--- 母_影響	1.147	0.046	0.850	***	1.147	0.046	0.868	***
	MO12	<--- 母_影響	-0.206	0.073	-0.135	**	-0.318	0.063	-0.206	***
	MO03	<--- 母_影響	0.246	0.072	0.169	***	0.385	0.070	0.255	***
	MO34	<--- 母_影響	0.169	0.053	0.152	**	0.144	0.039	0.156	***
	MO44	<--- 母_影響	0.137	0.048	0.125	**	0.207	0.041	0.200	***
	MO02	<--- 母_対立	1.000		0.640		1.000		0.699	
	MO12	<--- 母_対立	0.841	0.058	0.570	***	0.841	0.058	0.566	***
	MO22	<--- 母_対立	1.088	0.056	0.773	***	1.088	0.056	0.815	***
	MO32	<--- 母_対立	1.375	0.075	0.852	***	1.375	0.075	0.852	***
	MO42	<--- 母_対立	1.204	0.072	0.767	***	1.204	0.072	0.744	***
	MO13	<--- 母_対立	0.447	0.075	0.346	***	0.616	0.073	0.443	***
	MO43	<--- 母_対立	0.186	0.066	0.153	**	0.433	0.062	0.336	***
	MO03	<--- 母_対立	0.350	0.074	0.249	***	0.237	0.074	0.163	**
	MO34	<--- 母_対立	-0.035	0.050	-0.033	*n.s.*	-0.129	0.034	-0.146	***
	MO45	<--- 母_対立	0.219	0.063	0.162	***	0.158	0.052	0.129	**
	MO31	<--- 母_対立	-0.169	0.055	-0.130	**	-0.184	0.047	-0.154	***
	MO03	<--- 母_服従	1.000		0.405		1.000		0.449	
	MO13	<--- 母_服従	1.362	0.121	0.601	***	1.362	0.121	0.640	***
	MO23	<--- 母_服従	1.387	0.139	0.611	***	1.387	0.139	0.711	***
	MO33	<--- 母_服従	1.272	0.134	0.544	***	1.272	0.134	0.650	***
	MO43	<--- 母_服従	1.601	0.156	0.749	***	1.601	0.156	0.813	***
	MO21	<--- 母_服従	0.602	0.122	0.248	***	0.552	0.088	0.295	***
	MO31	<--- 母_服従	0.434	0.106	0.191	***	0.200	0.071	0.109	**
	MO04	<--- 母_情愛絆	1.000		0.820		1.000		0.885	
	MO14	<--- 母_情愛絆	0.911	0.030	0.828	***	0.911	0.030	0.857	***
	MO24	<--- 母_情愛絆	1.040	0.030	0.890	***	1.040	0.030	0.925	***
	MO34	<--- 母_情愛絆	0.678	0.045	0.539	***	0.678	0.045	0.576	***
	MO44	<--- 母_情愛絆	0.879	0.046	0.707	***	0.879	0.046	0.662	***
	MO42	<--- 母_情愛絆	0.381	0.091	0.206	***	0.319	0.096	0.148	***
	MO32	<--- 母_情愛絆	0.278	0.087	0.146	**	0.398	0.088	0.185	***
	MO05	<--- 母_客観視	1.000		0.806		1.000		0.842	
	MO25	<--- 母_客観視	1.037	0.045	0.829	***	1.037	0.045	0.863	***
	MO45	<--- 母_客観視	0.963	0.053	0.652	***	0.963	0.053	0.665	***
	MO15	<--- 母_独自	1.000		0.799		1.000		0.817	
	MO35	<--- 母_独自	0.934	0.072	0.798	***	0.934	0.072	0.814	***
	MO12	<--- 母_独自	0.043	0.081	0.026	*n.s.*	0.294	0.072	0.169	***

(Table 4-4 の続き)

因子間共分散	母_服従	<-->	母_独自	−0.135	0.026	−0.408	***	−0.092	0.025	−0.239	***
	母_服従	<-->	母_客観視	0.017	0.022	0.051	*n.s.*	0.036	0.022	0.096	*n.s.*
	母_対立	<-->	母_服従	−0.046	0.029	−0.123	*n.s.*	−0.130	0.033	−0.289	***
	母_影響	<-->	母_服従	0.126	0.027	0.349	***	0.114	0.028	0.264	***
	母_服従	<-->	母_情愛絆	0.031	0.021	0.097	*n.s.*	0.049	0.020	0.146	*
	母_独自	<-->	母_客観視	0.170	0.036	0.321	***	0.101	0.030	0.202	***
	母_対立	<-->	母_独自	0.041	0.037	0.070	*n.s.*	0.137	0.036	0.232	***
	母_影響	<-->	母_独自	−0.056	0.036	−0.100	*n.s.*	−0.108	0.033	−0.190	**
	母_独自	<-->	母_情愛絆	0.026	0.030	0.053	*n.s.*	−0.049	0.025	−0.112	*
	母_対立	<-->	母_客観視	−0.090	0.039	−0.150	*	−0.097	0.034	−0.166	**
	母_影響	<-->	母_客観視	0.233	0.039	0.402	***	0.241	0.034	0.429	***
	母_情愛絆	<-->	母_客観視	0.261	0.035	0.512	***	0.211	0.027	0.483	***
	母_影響	<-->	母_対立	−0.122	0.041	−0.193	**	−0.245	0.041	−0.370	***
	母_対立	<-->	母_情愛絆	−0.239	0.039	−0.428	***	−0.216	0.032	−0.417	***
	母_影響	<-->	母_情愛絆	0.260	0.036	0.482	***	0.304	0.032	0.609	***
独自性間共分散	eMO33	<-->	eMO13	−0.173	0.042	−0.241	***	−0.105	0.039	−0.151	**
	eMO03	<-->	eMO13	0.193	0.048	0.249	***	0.285	0.052	0.322	***
	eMO05	<-->	eMO04	0.028	0.018	0.106	*n.s.*	0.045	0.010	0.304	***
	eMO31	<-->	eMO03	0.092	0.038	0.131	*	0.118	0.033	0.181	***
	eMO44	<-->	eMO01	−0.088	0.025	−0.224	***	0.014	0.017	0.047	*n.s.*
	eMO03	<-->	eMO21	0.171	0.045	0.195	***	0.101	0.037	0.131	**
	eMO11	<-->	eMO21	0.153	0.043	0.211	***	0.015	0.030	0.027	*n.s.*
	eMO14	<-->	eMO34	0.015	0.017	0.054	*n.s.*	0.033	0.009	0.199	***
	eMO44	<-->	eMO04	−0.042	0.017	−0.160	*	−0.037	0.010	−0.230	***
	eMO42	<-->	eMO24	0.080	0.024	0.241	***	−0.026	0.017	−0.102	*n.s.*

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, *n.s.*: $p>.1$

注）因子間共分散の標準化推定値は相関係数を表す。

ここで，SEM で得られた因子間相関と，Table4-2-2 と Table4-2-3　で得られた因子間相関と比べると，それぞれの因子間相関の方向性は，ほぼ同じであった。しかしながら，異なる箇所もあり，例えば，「母との対立」の因子と「母に対する客観視」の因子の因子間相関は，因子分析の結果では，男女共にほぼ無相関であったが，SEM の結果では，男女共に有意な負の相関を示した。また「母との対立」の因子と「母への服従」の因子の因子間相関は，因子分析の結果では，男女共にほぼ無相関であったが，SEM の結果では，女子で，0.1%で有意な負の相関を示した。さらに「母との情愛的絆」の因子と「母への服従」の因子の因子間相関についても，因子分析の結果では，男女共にほぼ無相関であったが，SEM の結果では女子において 5%水準で，有意な正の相関を示した。これは，SEM の分析では，それぞれに因子に負荷する項目には，因子パターンを等値にして分析を行い，他の因子に負荷を示す項目の影響を最小限にしたため，このような結果になったと考えられる。

4. 考　察

本分析の結果，青年の親への態度・行動は①母との情愛的絆の因子，②母からのポジティブな影響の因子，③母との対立の因子，④母への服従の因子，⑤母に対する客観視の因子⑥母とは別の独自の生き方の因子の 6 因子が得られた。小高（1998）で得られた「一人の人間としての親」に関する項目は，「親に対する客観視」と「親とは別の独自の生き方」の二つの因子に分かれ，一人の人間として親を認知することは，自分の独自の生き方を確立させながら，親を一人の人間として見ることができるということを意味するものと思われる。

上記の因子分析の結果を元にして，SEM により，青年の親への態度・行動のモデルの構築を行い，その結果，当てはまりの良いモデルを得ることができた。因子分析で得られた一次因子に負荷を示した項目は，男子においても女子においても，一次因子に負荷を示す項目は，それぞれの一次因子に 0.5 以上の標準化推定値を示していることから，一次因子レベルにおいてはこの 6 因子捉えるのが妥当であるといえる。

SEM による分析の結果，因子間相関をみると，男女ともに共通して関係する箇所もあったが，男女で異なる箇所もあり，女子においては，「母への服従の因子」と「母に対する客観視の因子」以外で有意な関連が認められたのに対して，男子においては，女子よりも関連する相関の数は少ない結果となった。このことから，男子よりも女子の方が，より複雑に絡み合っている状態であるということが窺われる。

加えて，尺度得点の平均値の結果からもわかるように，男子よりも女子の方が，母親との情愛的な絆も強く，母親からのポジティブな影響も受け，より服従していることから，母と娘の関係は男子に比べ，より親密であると思われ，母娘関係は親密で，一つの関係が他の関係に影響を及ぼすと予想される。

5. 本章のまとめ

本章では，青年の母への態度・行動からの親―青年関係について検討した。小高（1998）は，「親からのポジティブな影響の因子」，「親との対立の因子」，「親への服従の因子」，「親との情愛的絆の因子」，「一人の人間として親を認知する因子」の 5 つの因子を見出しているが，本分析においては，「一人の人間として親を認知する」因子が「親に対する客観視」の因子と「親とは別の独自の生き方」の因子の 2 つに分かれる結果となり，合わせ 6 つの一次因子を得ることができた。さらに SEM を用いて分析し，そのモデルを構築し，適合

度の良いモデルを得ることができた。このことから青年の親への態度・行動の一次因子は 6 因子で捉えることができ，それらの因子は互いに関連していることがわかった。特に女子の方が男子に比べ，より複雑に絡み合っていた。さらに，平均値の結果から，男子よりも女子の方が，母親との関係はより親密であった。

注記

第 4 章は，小高　恵（2010），小高　恵（2011）に加筆・修正を行ったものである。

第 5 章　青年の母―青年関係の相関分析的研究

1. 目　的

青年期の親子関係は親離れ子離れの時期であり，変動の時期である。第 1 章で述べたように，親子関係を捉える時，その影響過程から，「親から子への影響」と「子から親への影響」の 2 つを挙げることができる。第 1 章で述べたように，これまで，多くの研究はどちらか一方の影響過程から親子関係を捉えることが多かったように思われる。しかしながら，親子関係は相互に影響を及ぼしあっており，子どもと親との影響過程を見る時，「親から子への影響」「子から親への影響」の両方を検討する必要がある。そして，これら二つの影響過程を同時にみることで，親離れ，子離れを知る手がかりになると思われる。

本研究においては，母と青年の関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」の構造を明らかにするとともに，両者の関連について，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により，両者の相関関係を明らかにすることを目的とする。

2. 方　法

(1) 調査対象者：調査参加者は，大学生　308 名（男 123 名，女 185 名）であった。対象者の中に母親がいない者(男子)が 1 人いたが，母親がわりの人について評定しており，本分析においては分析の対象としている。なお，欠損値が質問紙の 5%を超えるデータや性別・年齢が不明な者 11 名は省いている。対象者の平均年齢は 19.7 歳(SD=1.39)であった。

(2) 質問項目：**① 母の青年への態度・行動に関する項目**：辻岡・山本（1976），三砂・竹原・嶋根・野村（2006），遠山（2005）の項目を参考に 27 項目を用いた。**② 青年の母への態度・行動に関する項目**：小高（2000）の青年の母親への態度・行動についての 25 項目を用いた。評定は「当てはまらない（1 点）」～「当てはまる（4 点）」の 4 件法である。

(3) 調査時期：2010 年 12 月に集団法により行った。

(4) 分析手続き：①欠損値については SPSS の EM 法（岩崎, 2002）により推定した。②母の青年への態度・行動に関する 27 項目の 27 × 27 項目の相関行列を算出し，解釈のし

やすさから因子数を 2 として，主因子法により因子分析を行い，その後，プロマックス回転を行った。③ 青年の母に対する態度・行動に関する 25 項目の相関行列を算出し，スクリーグラフより，因子数を 6 として，主因子法により因子分析を行い，その後，プロマックス回転を行った。④ 上記で得られた母の青年に対する態度・行動の 2 因子と青年の母に対する態度・行動 6 因子を併せた親―青年関係モデルを作成し，SEM により男女 2 集団の同時分析を行った。なおモデルの適合度については，Mulaik（2010）や Hu & Bentler(1999), 清水ほか（2014）を参考にして, CFI (>.95) , RMSEA (<.05) , SRMR(<.08) という適合度指標をモデル採択のための基準とした。なお，以上の分析は SPSS21 と AMOS21 を用いて行った。

3. 結　果

（1）母の青年に対する態度・行動についての探索的因子分析

母の青年に対する態度・行動についての 27 項目について因子分析を行った結果，Table 5-1～Table 5-3 に示すように，男女で類似した以下の 2 つの因子が得られた。男女の因子の構造が類似していたので，全体の因子パターンを基準に解釈する。

①受容の因子

この因子には,「母はいつも私のことを見守っていてくれると思う。(.872)」,「母は私の悩みや心配事を理解してくれる。(.831)」,「母は私の性格や長所や短所をよくわかってくれている。(.807)」「母は私のことをきちんと理解しようと努力してくれている。(.782)」「どのようなことがあっても母は私の味方であると感じる。(.758)」「母は私が困ったり落ち込んだりすると，すぐに気づいてくれる。(.747)」等の受容に関する項目や,「母は何かを決めるときに私の意見を尊重してくれる。(.615)」「母は私が自分でやりたいと思ったことは最後までやり通させてくれる。(.523)」等の項目が負荷を示しており，青年の認知する母親の子への自律性を尊重した優しさや思いやりを表していると思われる。そこで，この因子を「受容」の因子と命名した。この因子は辻岡らや遠山が述べる「受容」の因子に相当すると思われる。

②統制の因子

この因子には,「母は私を縛っていると感じる。(.669)」,「母は私のわがままを許さない。(.622)」,「母は言うことをきかないと叱る。(.605)「母は私の行動を全部把握したいようだ。(.599)」「母は規則やルールを守ることに厳しい。(.593)」等の統制に関する項目と「母は私の将来の進路について口出しをする。(.560)」「母は私に意見や考え方を押しつけてくる。(.546)」「母は私の行きたい所ならどこへでも何も聞かずに行かせてくれる。(-.466)」等の自律性を否定した項目が負荷を示しており，青年の認知する母親の子への自律性を否定した統制的な態度・行動であると思われる。そこでこの因子を「統制」の因子と命名した。この因子は，辻岡の述べる二次の統制の因子，遠山の自律性と統制が合わさった因子であると思われる。

Table 5-1　母の青年に対する態度・行動についての因子パターン（ 全体 ）

No	元尺度	項目内容	全体				
			受容	統制	h^2	*Mean*	*SD*
Q1_16	**受容6**	母はいつも私のことを見守っていてくれると思う。	**0.872**	0.203	0.63	3.22	0.78
Q1_25	**受容9**	母は私の悩みや心配事を理解してくれる。	**0.831**	0.092	0.62	2.69	0.87
Q1_13	**受容5**	母は私の性格や長所や短所をよくわかってくれている。	**0.807**	0.190	0.54	3.16	0.82
Q1_01	**受容1**	母は私のことをきちんと理解しようと努力してくれている。	**0.782**	0.066	0.57	3.31	0.74
Q1_19	**受容7**	どのようなことがあっても母は私の味方であると感じる。	**0.758**	−0.009	0.58	3.19	0.90
Q1_10	受容4	母は私が困ったり落ち込んだりすると，すぐに気づいてくれる。	**0.747**	0.201	0.45	2.56	0.91
Q1_22	受容8	母は私が喜ぶと一緒に喜んでくれる。	**0.689**	0.034	0.45	3.18	0.77
Q1_07	受容3	母は私の意見をよく聞いてくれる。	**0.676**	−0.190	0.62	3.14	0.84
Q1_18	自律性6	母は何かを決めるときに私の意見を尊重してくれる。	**0.615**	−0.157	0.50	3.12	0.68
Q1_04	受容2	母は私に色々な話をしてくれる。	**0.557**	0.020	0.30	3.17	0.83
Q1_12	自律性4	母は私が自分でやりたいと思ったことは最後までやり通させてくれる。	**0.523**	−0.135	0.36	3.28	0.68
Q1_06	自律性2	母は私がやりたいと思ったことは何でもやらせてくれる。	*0.385*	−0.333	0.39	2.92	0.81
Q1_14	**統制5**	母は私を縛っていると感じる。	−0.151	**0.669**	0.57	1.91	0.94
Q1_08	**統制3**	母は私のわがままを許さない。	0.100	**0.622**	0.34	2.11	0.78
Q1_02	**統制1**	母は言うことをきかないと叱る。	0.222	**0.605**	0.28	2.83	0.87
Q1_20	**統制7**	母は私の行動を全部把握したいようだ。	0.132	**0.599**	0.30	2.20	0.98
Q1_11	**統制4**	母は規則やルールを守ることに厳しい。	0.267	**0.593**	0.27	2.85	0.84
Q1_23	統制8	母は私の友人関係についてあれこれと口を出す。	−0.034	**0.562**	0.34	1.87	0.86
Q1_24	自律性8	母は私の将来の進路について口出しをする。	−0.001	**0.560**	0.31	2.33	0.90
Q1_09	自律性3	母は私に意見や考え方を押しつけてくる。	−0.202	**0.546**	0.45	2.06	0.93
Q1_05	統制2	母は私が口答えをすると腹を立てる。	0.027	**0.540**	0.28	2.66	0.90
Q1_17	統制6	母は私を自分の思い通りにしようとする。	*−0.304*	**0.530**	0.53	1.69	0.81
Q1_26	統制9	母は私の性格を改めさせようとする。	0.041	**0.518**	0.25	2.02	0.90
Q1_27	自律性9	母は私の行きたい所ならどこへでも何も聞かずに行かせてくれる。	−0.037	**−0.466**	0.20	2.06	0.86
Q1_03	自律性1	母は私に自分が責任を取れる範囲内でなら好きなことをやらせてくれる。	*0.326*	**−0.421**	0.42	3.36	0.80
Q1_15	自律性5	母は私の将来の進路について，私の意見を聞かずに決めようとする。	−0.211	*0.373*	0.26	1.48	0.72
Q1_21	自律性7	母は私に自分のことは自分で決めることを求める。	0.224	−0.289	0.20	3.04	0.75
		因子間相関		−0.492			

Table 5-2　母の青年に対する態度・行動についての因子パターン（ 男子 ）

No	元尺度	項目内容	男性 受容	統制	h^2	*Mean*	*SD*
Q1_16	**受容6**	母はいつも私のことを見守っていてくれると思う。	**0.832**	0.215	0.59	3.08	0.78
Q1_25	**受容9**	母は私の悩みや心配事を理解してくれる。	**0.768**	0.073	0.55	2.57	0.84
Q1_13	**受容5**	母は私の性格や長所や短所をよくわかってくれている。	**0.757**	0.131	0.51	2.99	0.85
Q1_01	**受容1**	母は私のことをきちんと理解しようと努力してくれている。	**0.780**	0.097	0.56	3.31	0.76
Q1_19	**受容7**	どのようなことがあっても母は私の味方であると感じる。	**0.783**	0.079	0.57	3.06	0.94
Q1_10	受容4	母は私が困ったり落ち込んだりすると，すぐに気づいてくれる。	**0.653**	0.126	0.38	2.41	0.86
Q1_22	受容8	母は私が喜ぶと一緒に喜んでくれる。	**0.638**	0.019	0.40	3.05	0.73
Q1_07	受容3	母は私の意見をよく聞いてくれる。	**0.675**	−0.119	0.54	3.14	0.81
Q1_18	自律性6	母は何かを決めるときに私の意見を尊重してくれる。	**0.596**	−0.094	0.41	3.08	0.67
Q1_04	受容2	母は私に色々な話をしてくれる。	**0.518**	−0.052	0.29	3.09	0.84
Q1_12	自律性4	母は私が自分でやりたいと思ったことは最後までやり通させてくれる。	**0.548**	−0.143	0.39	3.24	0.74
Q1_06	自律性2	母は私がやりたいと思ったことは何でもやらせてくれる。	*0.392*	*−0.346*	0.38	2.91	0.83
Q1_14	**統制5**	母は私を縛っていると感じる。	−0.115	**0.690**	0.55	1.88	0.95
Q1_08	**統制3**	母は私のわがままを許さない。	0.100	**0.605**	0.33	1.99	0.75
Q1_02	**統制1**	母は言うことをきかないと叱る。	0.277	**0.617**	0.32	2.80	0.91
Q1_20	**統制7**	母は私の行動を全部把握したいようだ。	0.197	**0.648**	0.35	2.21	0.99
Q1_11	**統制4**	母は規則やルールを守ることに厳しい。	0.300	**0.556**	0.26	2.83	0.84
Q1_23	統制8	母は私の友人関係についてあれこれと口を出す。	−0.045	**0.513**	0.28	1.90	0.91
Q1_24	自律性8	母は私の将来の進路について口出しをする。	−0.055	**0.542**	0.32	2.35	0.89
Q1_09	自律性3	母は私に意見や考え方を押しつけてくる。	−0.225	**0.576**	0.49	1.94	0.90
Q1_05	統制2	母は私が口答えをすると腹を立てる。	0.021	**0.512**	0.25	2.52	0.88
Q1_17	統制6	母は私を自分の思い通りにしようとする。	−0.261	**0.513**	0.44	1.66	0.78
Q1_26	統制9	母は私の性格を改めさせようとする。	0.046	**0.503**	0.24	1.98	0.95
Q1_27	自律性9	母は私の行きたい所ならどこへでも何も聞かずに行かせてくれる。	0.006	*−0.370*	0.14	2.24	0.90
Q1_03	自律性1	母は私に自分が責任を取れる範囲内でなら好きなことをやらせてくれる。	**0.405**	**−0.423**	0.48	3.37	0.83
Q1_15	自律性5	母は私の将来の進路について，私の意見を聞かずに決めようとする。	−0.129	**0.557**	0.39	1.57	0.76
Q1_21	自律性7	母は私に自分のことは自分で決めることを求める。	0.244	*−0.335*	0.24	3.08	0.70
		因子間相関		−0.408			

Table 5-3　母の青年に対する態度・行動についての因子パターン（女子）

No	元尺度	項目内容	女性				
			受容	統制	h^2	*Mean*	*SD*
Q1_16	**受容6**	母はいつも私のことを見守っていてくれると思う。	**0.892**	0.188	0.65	3.32	0.77
Q1_25	**受容9**	母は私の悩みや心配事を理解してくれる。	**0.865**	0.103	0.66	2.76	0.89
Q1_13	**受容5**	母は私の性格や長所や短所をよくわかってくれている。	**0.820**	0.195	0.53	3.26	0.78
Q1_01	**受容1**	母は私のことをきちんと理解しようと努力してくれている。	**0.807**	0.069	0.59	3.32	0.73
Q1_19	**受容7**	どのようなことがあっても母は私の味方であると感じる。	**0.709**	−0.109	0.60	3.29	0.87
Q1_10	受容4	母は私が困ったり落ち込んだりすると，すぐに気づいてくれる。	**0.805**	0.247	0.49	2.66	0.93
Q1_22	受容8	母は私が喜ぶと一緒に喜んでくれる。	**0.706**	0.027	0.48	3.26	0.79
Q1_07	受容3	母は私の意見をよく聞いてくれる。	**0.685**	−0.221	0.69	3.14	0.86
Q1_18	自律性6	母は何かを決めるときに私の意見を尊重してくれる。	**0.619**	−0.199	0.56	3.14	0.68
Q1_04	受容2	母は私に色々な話をしてくれる。	**0.594**	0.079	0.31	3.23	0.82
Q1_12	自律性4	母は私が自分でやりたいと思ったことは最後までやり通させてくれる。	**0.491**	−0.154	0.35	3.32	0.64
Q1_06	自律性2	母は私がやりたいと思ったことは何でもやらせてくれる。	*0.393*	*−0.310*	0.39	2.93	0.79
Q1_14	**統制5**	母は私を縛っていると感じる。	−0.180	**0.647**	0.58	1.94	0.94
Q1_08	**統制3**	母は私のわがままを許さない。	0.065	**0.603**	0.32	2.18	0.79
Q1_02	**統制1**	母は言うことをきかないと叱る。	0.168	**0.580**	0.26	2.86	0.85
Q1_20	**統制7**	母は私の行動を全部把握したいようだ。	0.101	**0.575**	0.28	2.19	0.98
Q1_11	**統制4**	母は規則やルールを守ることに厳しい。	0.260	**0.622**	0.28	2.87	0.85
Q1_23	統制8	母は私の友人関係についてあれこれと口を出す。	0.009	**0.634**	0.40	1.85	0.82
Q1_24	自律性8	母は私の将来の進路について口出しをする。	0.065	**0.608**	0.33	2.32	0.91
Q1_09	自律性3	母は私に意見や考え方を押しつけてくる。	−0.226	**0.502**	0.43	2.14	0.95
Q1_05	統制2	母は私が口答えをすると腹を立てる。	−0.004	**0.531**	0.28	2.76	0.90
Q1_17	統制6	母は私を自分の思い通りにしようとする。	***−0.344***	**0.519**	0.59	1.72	0.83
Q1_26	統制9	母は私の性格を改めさせようとする。	0.044	**0.546**	0.27	2.04	0.87
Q1_27	自律性9	母は私の行きたい所ならどこへでも何も聞かずに行かせてくれる。	−0.027	**−0.508**	0.24	1.94	0.82
Q1_03	自律性1	母は私に自分が責任を取れる範囲内でなら好きなことをやらせてくれる。	0.275	**−0.423**	0.38	3.35	0.77
Q1_15	自律性5	母は私の将来の進路について，私の意見を聞かずに決めようとする。	−0.263	0.260	0.21	1.43	0.68
Q1_21	自律性7	母は私に自分のことは自分で決めることを求める。	0.232	−0.243	0.18	3.02	0.78
		因子間相関		−0.557			

(2) 青年の母に対する態度・行動についての探索的因子分析

青年の母への態度・行動について因子分析を行った結果，男女で類似した 6 つの因子が得られた。これらの因子を順次見ていくことにする(Table 5-4～Table 5-6 を参照)。

①母との情愛的絆の因子

この因子には，「最近，母のありがたみを感じることがよくある。(.844)」，「母に対してこれからは，親孝行をしたい。(.817)」「母に対して感謝の気持ちをもっている。(.781)」「自分が今安心して生活できるのは，母の存在があるからだ。(.691)」等の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は親への感謝の気持ちを含んだ母との情愛を表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母との情愛的絆」の因子と命名した。

②母からのポジティブな影響の因子

この因子には，「母によって自分の人生観が深められた。(918)」，「母によって自分の視野が広がった。(.773)」「母は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。(.638)」「自分の価値観には，母の価値観が反映している。(.486)」等の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母からの影響を受けたことを表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母からのポジティブな影響」の因子と命名した。

③母との対立の因子

この因子には，「母を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。(.823)」，「私の意見や考え方が母に伝わらず，イライラすることがある。(.731)」「私と母の言うことはいつも対立する。(.619)」「自分の進路，生き方などのことで母と対立することがある。(.453)」等の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は親への反抗や価値観の違いのため生じる母との対立を表す因子であると思われる。ここでは，従来の因子名を採用し，「母との対立」の因子と命名した。

④母への服従の因子

この因子には，「母にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。(.757)」，「私は母の言う通りに生きている。(.676)」「母の言うことには素直に従っている。(.567)」「自分の意見と母の意見が違う時，母の意見に左右される。(.564)」等の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母に対する従順さや服従を表す因子であると思われる。

ここでは，従来の因子名を採用し，「母への服従」の因子と命名した。

⑤母に対する客観視の因子

この因子には，「やっぱり母も一人の人間だと思うようになった。(759)」，「母も一人の人間だと思って接している。(738)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母親を客観的にみている様子を表す因子であると思われる。ここでは「母に対する客観視」の因子と命名した。

⑥母とは別の独自の生き方の因子

この因子には，「自分の生き方は母の生き方とは別の独自のものだ。(.746)」，「母と私の人生は違う。(.693)」の項目が負荷を示していた。このことから，この因子は母親とは別の存在であるという青年の態度を表す因子であると思われる。ここでは，「母とは別の独自の生き方」の因子と命名した。

Table 5-4　青年の母への態度・行動についての因子パターンと因子間相関（ 全 体 ）

No	元尺度	項目	全体								
			情愛	影響	対立	服従	客観	独自	h^2	*Mean*	*SD*
Q1_59	母情愛05	最近，母のありがたみを感じることがよくある。	**0.844**	−0.082	0.005	−0.011	0.046	0.044	0.62	3.45	0.71
Q1_45	母情愛03	母に対してこれからは、親孝行をしたい。	**0.817**	0.001	0.020	−0.063	−0.015	−0.006	0.65	3.57	0.64
Q1_37	母情愛02	母に対して感謝の気持ちをもっている。	**0.781**	−0.047	−0.015	−0.014	−0.034	0.036	0.56	3.59	0.61
Q1_52	母情愛04	自分が今安心して生活できるのは，母の存在があるからだ。	**0.691**	0.016	0.032	0.090	−0.002	0.103	0.48	3.49	0.69
Q1_28	母情愛01	母をいたわってあげたい。	**0.662**	0.110	0.077	0.014	0.032	−0.125	0.57	3.37	0.71
Q1_60	母影響05	母によって自分の人生観が深められた。	−0.123	**0.918**	0.014	−0.081	0.028	0.004	0.67	2.76	0.85
Q1_29	母影響01	母によって自分の視野が広がった。	−0.034	**0.773**	−0.035	−0.081	0.024	−0.059	0.58	2.69	0.89
Q1_38	母影響02	母は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。	0.106	**0.638**	−0.007	0.029	0.031	0.091	0.50	2.83	0.92
Q1_46	母影響03	自分の価値観には，母の価値観が反映している。	0.151	**0.486**	0.092	0.154	−0.099	−0.026	0.42	2.71	0.86
Q1_53	母影響04	私が何かを決める際，母の意見は十分参考になると思う。	0.304	**0.427**	0.006	0.190	0.022	0.067	0.52	3.04	0.82
Q1_54	母対立04	母を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。	0.223	0.000	**0.823**	−0.051	−0.074	−0.098	0.56	2.31	0.94
Q1_30	母対立01	私の意見や考え方が母に伝わらず，イライラすることがある。	0.125	−0.033	**0.731**	−0.078	0.104	0.005	0.50	2.94	0.87
Q1_47	母対立03	私と母の言うことはいつも対立する。	−0.228	0.117	**0.619**	−0.049	−0.035	0.005	0.48	2.03	0.76
Q1_61	母対立05	自分の進路，生き方などのことで母と対立することがある。	−0.162	0.028	**0.453**	0.135	0.011	0.065	0.32	2.25	0.91
Q1_39	母対立02	母の価値観に疑問を持っている。	−0.216	−0.219	**0.434**	0.139	0.074	0.085	0.52	2.17	0.90
Q1_41	母服従02	母にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。	−0.069	−0.061	0.022	**0.757**	−0.044	0.124	0.55	1.84	0.85
Q1_43	母服従05	私は母の言う通りに生きている。	−0.158	0.014	0.115	**0.676**	0.035	−0.086	0.52	1.70	0.72
Q1_49	母服従03	母の言うことには素直に従っている。	0.081	0.038	−0.201	**0.567**	0.034	−0.061	0.41	2.30	0.71
Q1_32	母服従01	自分の意見と母の意見が違う時，母の意見に左右される。	0.163	0.051	0.009	**0.564**	−0.049	0.009	0.40	2.36	0.85
Q1_34	母服従04	母の期待にそった生き方をしている。	0.094	−0.081	−0.057	**0.401**	0.047	−0.201	0.23	2.19	0.78
Q1_40	母一人03	やっぱり母も一人の人間だと思うようになった。	0.065	0.032	0.015	−0.016	**0.759**	−0.024	0.59	3.20	0.75
Q1_31	母一人01	母も一人の人間だと思って接している。	0.036	−0.005	−0.090	0.021	**0.738**	0.021	0.56	3.25	0.73
Q1_48	母一人05	母のことを一人の人間として客観的に見ている。	−0.096	0.017	0.125	−0.009	**0.536**	0.011	0.32	2.72	0.80
Q1_33	母一人02	自分の生き方は母の生き方とは別の独自のものだ。	−0.024	−0.005	−0.098	0.010	0.032	**0.746**	0.57	3.33	0.73
Q1_42	母一人04	母と私の人生は違う。	0.126	0.023	0.065	−0.102	−0.024	**0.693**	0.49	3.66	0.59
		影響	**0.665**								
		対立	**−0.404**	***−0.291***							
		服従	0.110	***0.267***	0.118						
		客観	0.094	0.046	0.056	−0.130					
		独立	−0.199	***−0.269***	0.132	***−0.224***	**0.330**				

Table 5-5　青年の母への態度・行動についての因子パターンと因子間相関（ 男子 ）

No	元尺度	項目	男性 情愛	影響	対立	服従	客観	独自	h^2	Mean	SD
Q1_59	母情愛05	最近，母のありがたみを感じることがよくある。	**0.646**	−0.091	−0.173	−0.061	0.035	0.033	0.50	3.36	0.73
Q1_45	母情愛03	母に対してこれからは、親孝行をしたい。	**0.878**	−0.038	0.045	0.075	−0.055	0.004	0.69	3.48	0.71
Q1_37	母情愛02	母に対して感謝の気持ちをもっている。	**0.812**	0.036	0.125	−0.091	−0.047	0.033	0.65	3.59	0.57
Q1_52	母情愛04	自分が今安心して生活できるのは，母の存在があるからだ。	**0.443**	0.133	−0.100	−0.011	0.009	0.176	0.38	3.39	0.70
Q1_28	母情愛01	母をいたわってあげたい。	**0.747**	0.089	0.073	0.146	0.070	−0.147	0.61	3.27	0.68
Q1_60	母影響05	母によって自分の人生観が深められた。	−0.012	**0.785**	0.014	−0.034	0.060	0.012	0.59	2.69	0.86
Q1_29	母影響01	母によって自分の視野が広がった。	0.031	**0.751**	0.035	−0.070	0.010	−0.104	0.57	2.65	0.88
Q1_38	母影響02	母は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。	−0.073	**0.824**	−0.009	−0.038	0.053	−0.034	0.61	2.72	0.89
Q1_46	母影響03	自分の価値観には，母の価値観が反映している。	0.045	**0.603**	0.022	0.173	−0.130	0.102	0.49	2.55	0.87
Q1_53	母影響04	私が何かを決める際，母の意見は十分参考になると思う。	0.114	**0.597**	−0.117	0.106	0.052	0.067	0.54	2.89	0.79
Q1_54	母対立04	母を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。	0.114	−0.059	**0.592**	−0.024	−0.050	−0.066	0.31	2.20	0.93
Q1_30	母対立01	私の意見や考え方が母に伝わらず，イライラすることがある。	0.142	0.075	**0.781**	−0.215	0.111	−0.118	0.53	2.84	0.89
Q1_47	母対立03	私と母の言うことはいつも対立する。	−0.178	0.136	**0.709**	0.019	−0.186	0.106	0.60	1.98	0.76
Q1_61	母対立05	自分の進路，生き方などのことで母と対立することがある。	−0.068	−0.056	**0.479**	0.062	0.084	0.070	0.33	2.33	0.91
Q1_39	母対立02	母の価値観に疑問を持っている。	−0.043	−0.165	**0.565**	0.110	0.096	0.046	0.49	2.18	0.94
Q1_41	母服従02	母にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。	0.064	−0.166	0.074	**0.790**	−0.006	0.100	0.59	1.67	0.76
Q1_43	母服従05	私は母の言う通りに生きている。	−0.116	0.054	0.079	**0.645**	0.079	−0.133	0.52	1.56	0.69
Q1_49	母服従03	母の言うことには素直に従っている。	0.040	0.118	−0.153	**0.530**	0.032	−0.107	0.37	2.20	0.70
Q1_32	母服従01	自分の意見と母の意見が違う時，母の意見に左右される。	0.021	0.127	−0.034	**0.501**	−0.135	0.089	0.32	2.07	0.81
Q1_34	母服従04	母の期待にそった生き方をしている。	0.051	−0.013	−0.116	0.310	0.020	−0.084	0.12	2.02	0.80
Q1_40	母一人03	やっぱり母も一人の人間だと思うようになった。	−0.009	0.060	0.035	−0.080	**0.666**	0.095	0.51	3.07	0.83
Q1_31	母一人01	母も一人の人間だと思って接している。	0.003	0.001	−0.152	−0.020	**0.790**	0.037	0.64	3.15	0.82
Q1_48	母一人05	母のことを一人の人間として客観的に見ている。	−0.014	0.024	0.254	0.129	**0.585**	0.027	0.45	2.61	0.84
Q1_33	母一人02	自分の生き方は母の生き方とは別の独自のものだ。	−0.071	−0.042	−0.065	0.033	0.179	**0.576**	0.39	3.34	0.79
Q1_42	母一人04	母と私の人生は違う。	0.104	0.029	0.040	−0.098	−0.011	**0.807**	0.73	3.71	0.58
		影響	**0.577**								
		対立	**−0.410**	**−0.315**							
		服従	−0.128	***0.214***	0.141						
		客観	0.084	−0.067	0.122	−0.190					
		独自	0.102	−0.070	0.146	***−0.207***	***0.227***				

Table 5-6　青年の母への態度・行動についての因子パターンと因子間相関（ 女 性 ）

No	元尺度	項目	女性 情愛	影響	対立	服従	客観	独自	h^2	Mean	SD
Q1_59	母情愛05	最近，母のありがたみを感じることがよくある。	**0.900**	−0.046	0.079	−0.006	0.055	0.076	0.69	3.52	0.69
Q1_45	母情愛03	母に対してこれからは、親孝行をしたい。	**0.874**	−0.063	0.002	−0.139	0.023	−0.055	0.71	3.63	0.59
Q1_37	母情愛02	母に対して感謝の気持ちをもっている。	**0.826**	−0.166	−0.081	0.053	0.008	−0.018	0.60	3.59	0.63
Q1_52	母情愛04	自分が今安心して生活できるのは，母の存在があるからだ。	**0.740**	0.010	0.082	0.099	−0.027	0.087	0.52	3.55	0.68
Q1_28	母情愛01	母をいたわってあげたい。	**0.689**	0.067	0.067	−0.039	0.005	−0.132	0.57	3.43	0.73
Q1_60	母影響05	母によって自分の人生観が深められた。	−0.107	**0.932**	0.009	−0.069	0.008	−0.021	0.74	2.81	0.84
Q1_29	母影響01	母によって自分の視野が広がった。	0.041	**0.696**	−0.066	−0.045	0.056	−0.060	0.58	2.71	0.90
Q1_38	母影響02	母は生き方の一つのモデルを私に示してくれたと思う。	0.298	**0.471**	0.012	0.040	0.034	0.172	0.47	2.90	0.93
Q1_46	母影響03	自分の価値観には，母の価値観が反映している。	0.229	**0.367**	0.090	0.128	−0.081	−0.097	0.38	2.81	0.84
Q1_53	母影響04	私が何かを決める際，母の意見は十分参考になると思う。	**0.426**	**0.313**	0.057	0.189	0.009	0.076	0.49	3.14	0.83
Q1_54	母対立04	母を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い。	0.246	0.058	**0.925**	−0.107	−0.124	−0.048	0.74	2.38	0.94
Q1_30	母対立01	私の意見や考え方が母に伝わらず，イライラすることがある。	0.105	−0.118	**0.706**	−0.015	0.094	0.039	0.50	3.01	0.84
Q1_47	母対立03	私と母の言うことはいつも対立する。	−0.249	0.044	**0.561**	−0.102	0.072	−0.076	0.45	2.06	0.76
Q1_61	母対立05	自分の進路，生き方などのことで母と対立することがある。	−0.164	0.062	**0.507**	0.246	−0.017	0.064	0.41	2.21	0.90
Q1_39	母対立02	母の価値観に疑問を持っている。	−0.360	−0.235	**0.349**	0.165	0.080	0.053	0.57	2.17	0.88
Q1_41	母服従02	母にさからえないで，言う通りになってしまいやすい。	−0.091	−0.031	0.003	**0.759**	−0.042	0.111	0.56	1.95	0.90
Q1_43	母服従05	私は母の言う通りに生きている。	−0.141	−0.007	0.142	**0.669**	0.030	−0.094	0.51	1.80	0.73
Q1_49	母服従03	母の言うことには素直に従っている。	0.178	−0.016	−0.204	**0.553**	0.041	−0.048	0.42	2.37	0.70
Q1_32	母服従01	自分の意見と母の意見が違う時，母の意見に左右される。	0.218	0.024	−0.001	**0.534**	−0.032	−0.026	0.40	2.55	0.82
Q1_34	母服従04	母の期待にそった生き方をしている。	0.053	−0.063	−0.078	**0.406**	0.006	−0.252	0.26	2.31	0.74
Q1_40	母一人03	やっぱり母も一人の人間だと思うようになった。	0.077	0.058	−0.004	0.013	**0.781**	−0.038	0.62	3.29	0.68
Q1_31	母一人01	母も一人の人間だと思って接している。	0.027	0.041	−0.052	0.054	**0.692**	0.053	0.51	3.32	0.66
Q1_48	母一人05	母のことを一人の人間として客観的に見ている。	−0.057	−0.054	0.082	−0.110	**0.499**	−0.013	0.29	2.80	0.76
Q1_33	母一人02	自分の生き方は母の生き方とは別の独自のものだ。	0.005	−0.021	−0.078	−0.032	−0.041	**0.841**	0.70	3.33	0.70
Q1_42	母一人04	母と私の人生は違う。	0.036	−0.010	0.066	−0.074	0.053	**0.595**	0.40	3.62	0.60
		影響	**0.663**								
		対立	**−0.384**	***−0.237***							
		服従	0.160	***0.214***	0.115						
		客観	0.070	0.091	−0.036	−0.179					
		独自	−0.268	***−0.281***	0.052	−0.186	**0.316**				

(3) SEM による母子関係モデルの構築

上記で得られた「母の青年に対する態度・行動」と「青年の母に対する態度・行動」の因子分析の結果を元に，母の青年に対する態度・行動の 2 因子と青年の母に対する態度・行動 6 因子を併せた親―青年関係モデルを作成し，SEM により男女 2 集団の同時分析を行った。

まず「母の青年に対する態度・行動」の因子分析の結果，男女の因子の構造が類似していたので，男女を併せた因子分析の結果を元にして因子パターンの高い項目を 5 項目ずつ選択した。次に「青年の母に対する態度・行動」についても男女の因子の構造が類似していたので，男女を併せた因子分析を元にして，因子パターンの高い項目を選択した。第 1 因子～第 4 因子までは各 5 項目ずつ，第 5 因子については 3 項目，第 6 因子については 2 項目選択した。最後に「母の青年に対する態度・行動」と「青年の母に対する態度・行動」は互いに関連していると思われるので，因子間の相関を想定し相互のパスを設け，Figure 5-1 の母―青年関係モデルを作成し，これを出発モデルとし，因子パターン不変性を適用し，男女で対応するパス同士を等値制約して分析を行った。

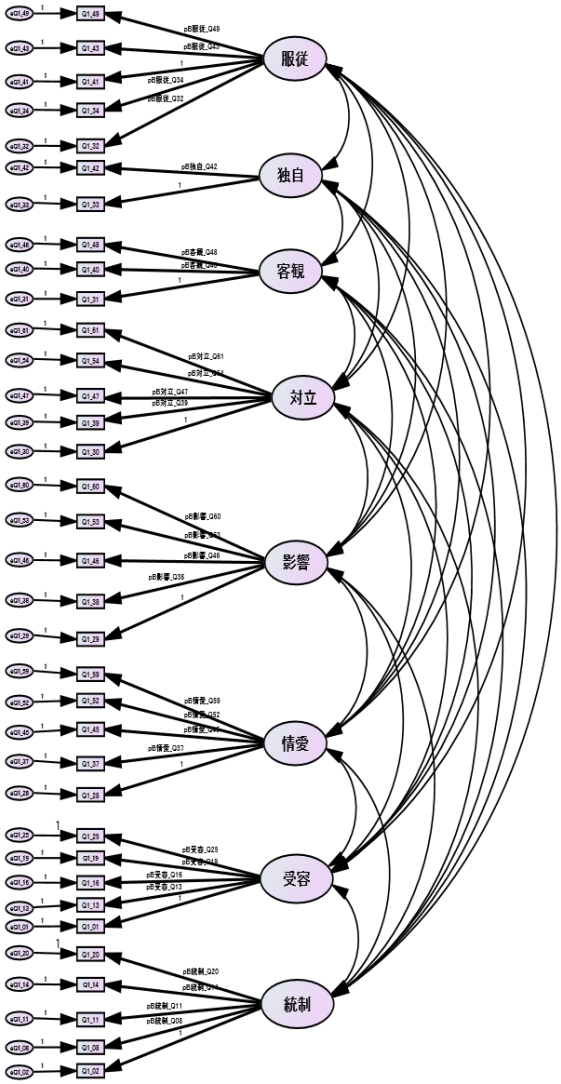


Figure 5-1　母子関係モデルの出発モデル

次に男女の最も大きい修正指数についてパスを増やした。その際，因子パターン不変性による拘束は行わなかった。一次因子から観測変数についての修正指数が 4 を超えるものがなくなるまで作業を繰り返した。さらに適合度をあげるために，独自性間共分散に関する修正指数については修正指数 7 を超えるものがなくなるまで作業を繰り返した。これらの独自性間共分散を置いた箇所は，小包の意味内容として関連していると考えられ，解釈可能な関連が想定できる(清水・柴田, 2008)。その結果，Figure 5-2，Figure 5-3 のような

適合度の高い結果が得られた(χ^2(1013)＝1198.970, p<.001, RMSEA=.024, CFI=.957, AIC=1692.970, SRMR=.059)。また Table 5-7 をみると，それぞれの因子に負荷を示していた項目は，それぞれに該当する一次因子からのパスが 5%水準で有意であった。また一次因子から観測変数へのパスの内, 複数の因子から標準化推定値の絶対値が 0.30 以上のであったパスを見ると，男子においては,「客観視」の因子から「Q1_47 私と母の言うことはいつも対立する(－.361)。」へのパス,「ポジティブな影響」の因子から「Q1_16 母はいつも私のことを見守っていてくれると思う(－.488)。」へのパス,「情愛的絆」の因子から「Q1_14 母は私を縛っていると感じる(－.352)。」へのパス,「統制」の因子から「Q1_48 母のことを一人の人間として客観的に見ている（.313)。」のパスの 4 本のパスであった。また女子においては,「ポジティブな影響」の因子から「Q1_39 母の価値観に疑問を持っている(－.459)。」へのパス,「情愛的絆」の因子から「Q1_14 母は私を縛っていると感じる。(－.378)」と「Q1_54 母を理解しようと思うのだが，つい反抗し，けんかになることが多い（.414)。」へのパス,「受容」の因子から「Q1_32 自分の意見と母の意見が違う時, 母の意見に左右される(.354)。」へのパスの 4 本のパスであった。

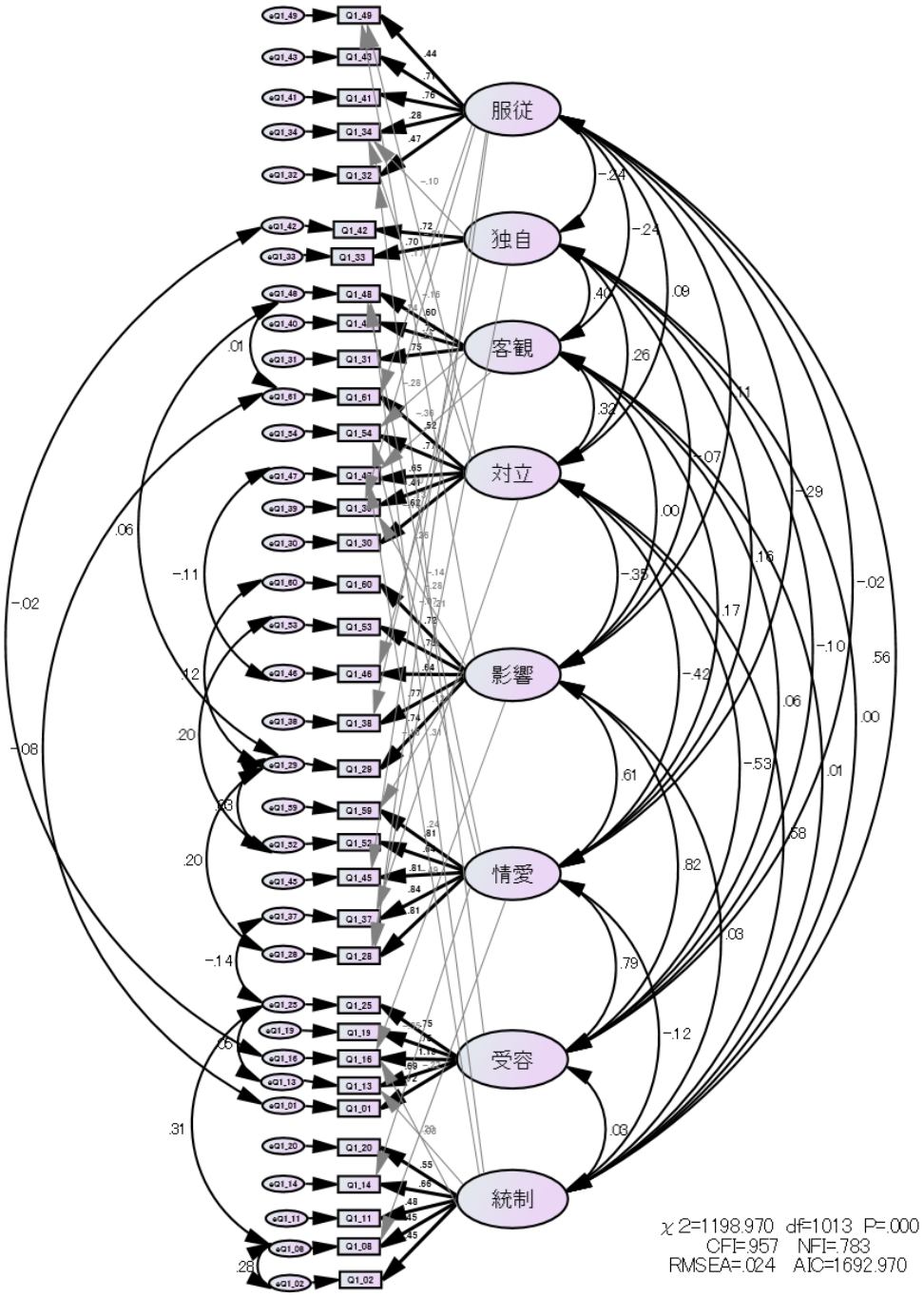


Figure 5-2 母―青年関係の最終モデル（ 男 子 ）

注） これらの値は推定値を標準化したものである。

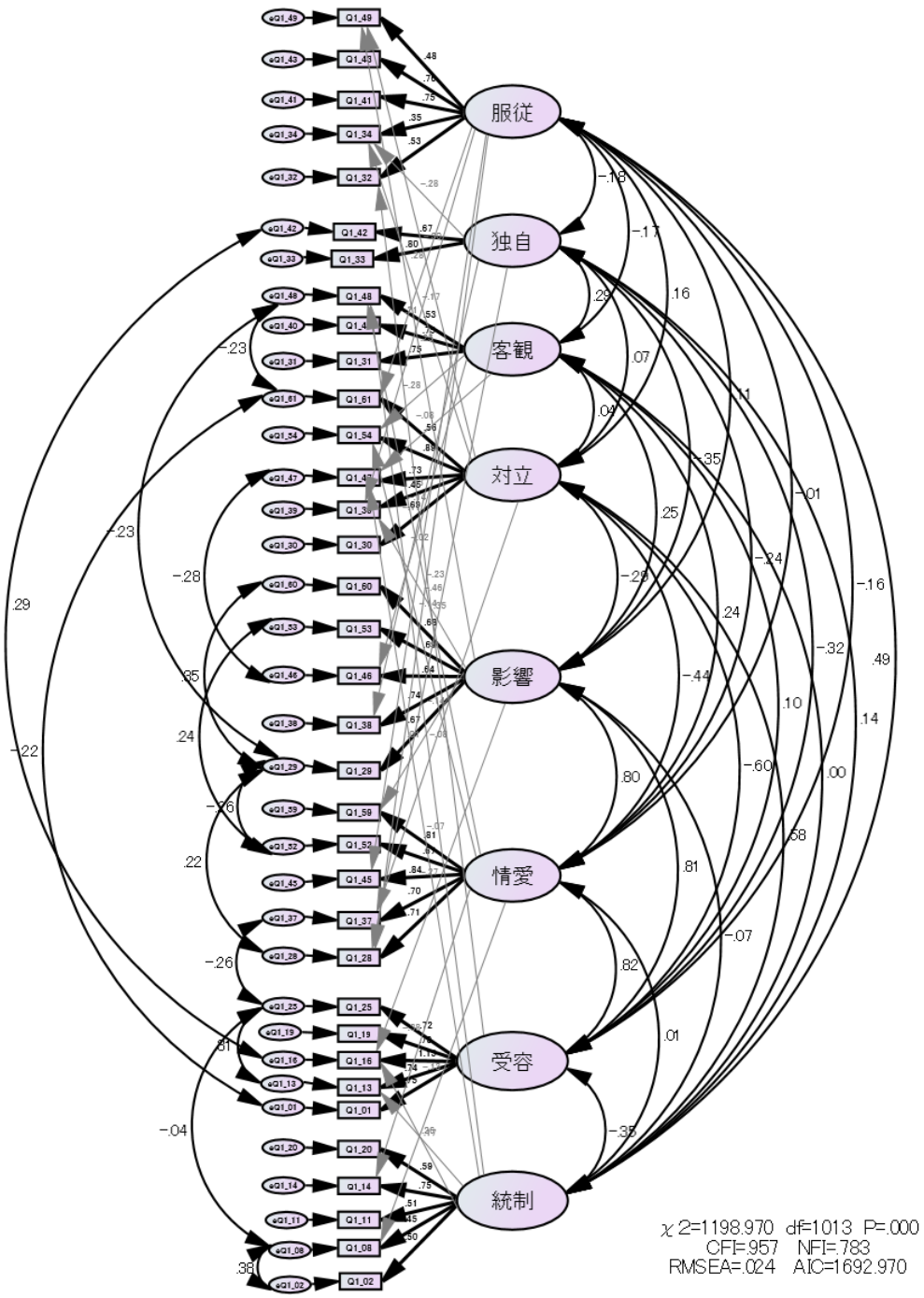


Figure 5-3 母―青年関係の最終モデル（ 女 子 ）

注） これらの値は推定値を標準化したものである。

Table 5-7 母―青年関係のパスの推定値

		男子				女子			
		非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*	非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*
測定モデル	Q1_32 <--- 服従	**0.648**	0.082	0.467	***	**0.648**	0.082	0.528	***
	Q1_34 <--- 服従	**0.388**	0.078	0.283	***	**0.388**	0.078	0.350	***
	Q1_41 <--- 服従	**1.000**		0.762		**1.000**		0.751	
	Q1_43 <--- 服従	**0.830**	0.076	0.708	***	**0.830**	0.076	0.756	***
	Q1_49 <--- 服従	**0.512**	0.070	0.436	***	**0.512**	0.070	0.481	***
	Q1_61 <--- 服従	0.264	0.145	0.172	†	0.391	0.095	0.285	***
	Q1_28 <--- 服従	0.305	0.098	0.263	**	−0.023	0.066	−0.021	*n.s.*
	Q1_45 <--- 服従	0.143	0.089	0.125	*n.s.*	−0.126	0.049	−0.140	*
	Q1_39 <--- 服従	0.373	0.139	0.242	**	0.285	0.085	0.213	***
	Q1_33 <--- 独自	**1.000**		0.704		**1.000**		0.799	
	Q1_42 <--- 独自	**0.739**	0.102	0.723	***	**0.739**	0.102	0.671	***
	Q1_34 <--- 独自	−0.140	0.160	−0.098	*n.s.*	−0.377	0.111	−0.281	***
	Q1_38 <--- 独自	−0.005	0.130	−0.003	*n.s.*	0.374	0.127	0.226	**
	Q1_28 <--- 独自	−0.088	0.100	−0.073	*n.s.*	−0.185	0.083	−0.140	*
	Q1_31 <--- 客観	**1.000**		0.747		**1.000**		0.750	
	Q1_40 <--- 客観	**1.016**	0.106	0.730	***	**1.016**	0.106	0.746	***
	Q1_48 <--- 客観	**0.829**	0.102	0.597	***	**0.829**	0.102	0.534	***
	Q1_54 <--- 客観	−0.460	0.183	−0.283	*	−0.514	0.152	−0.277	***
	Q1_47 <--- 客観	−0.464	0.124	−0.361	***	−0.118	0.114	−0.078	*n.s.*
	Q1_46 <--- 客観	−0.224	0.120	−0.157	†	−0.293	0.126	−0.174	*
	Q1_30 <--- 対立	**1.000**		0.621		**1.000**		0.688	
	Q1_39 <--- 対立	**0.684**	0.094	0.408	***	**0.684**	0.094	0.452	***
	Q1_47 <--- 対立	**0.934**	0.111	0.649	***	**0.934**	0.111	0.726	***
	Q1_54 <--- 対立	**1.391**	0.144	0.767	***	**1.391**	0.144	0.886	***
	Q1_61 <--- 対立	**0.868**	0.101	0.521	***	**0.868**	0.101	0.558	***
	Q1_49 <--- 対立	−0.264	0.125	−0.207	*	−0.361	0.093	−0.299	***
	Q1_34 <--- 対立	−0.232	0.152	−0.156	*n.s.*	−0.218	0.095	−0.173	*
	Q1_37 <--- 対立	0.131	0.081	0.125	*n.s.*	−0.150	0.064	−0.140	*
	Q1_29 <--- 影響	**1.000**		0.735		**1.000**		0.674	
	Q1_38 <--- 影響	**1.091**	0.096	0.769	***	**1.091**	0.096	0.744	***
	Q1_46 <--- 影響	**0.861**	0.085	0.645	***	**0.861**	0.085	0.639	***
	Q1_53 <--- 影響	**0.908**	0.080	0.734	***	**0.908**	0.080	0.694	***
	Q1_60 <--- 影響	**0.941**	0.071	0.725	***	**0.941**	0.071	0.682	***
	Q1_39 <--- 影響	−0.399	0.122	−0.285	**	−0.657	0.098	−0.459	***
	Q1_49 <--- 影響	0.231	0.102	0.217	*	0.284	0.085	0.249	***
	Q1_59 <--- 影響	−0.188	0.106	−0.163	†	0.009	0.094	0.008	*n.s.*
	Q1_16 <--- 影響	−0.578	0.163	−0.488	***	−0.338	0.148	−0.272	*
	Q1_28 <--- 情愛	**1.000**		0.812		**1.000**		0.706	
	Q1_37 <--- 情愛	**0.860**	0.071	0.836	***	**0.860**	0.071	0.699	***
	Q1_45 <--- 情愛	**0.990**	0.070	0.814	***	**0.990**	0.070	0.844	***
	Q1_52 <--- 情愛	**0.854**	0.075	0.641	***	**0.854**	0.075	0.666	***
	Q1_59 <--- 情愛	**1.087**	0.116	0.806	***	**1.087**	0.116	0.813	***
	Q1_14 <--- 情愛	−0.621	0.156	−0.352	***	−0.685	0.128	−0.378	***
	Q1_54 <--- 情愛	0.316	0.174	0.178	†	0.747	0.149	0.414	***
	Q1_48 <--- 情愛	−0.211	0.131	−0.139	*n.s.*	−0.348	0.108	−0.230	**
	Q1_08 <--- 情愛	−0.303	0.114	−0.223	**	−0.202	0.104	−0.129	†

（Table 5-7 の続き）

測定モデル	Q1_01	<--- 受容	1.000		0.715		1.000		0.748	
	Q1_13	<--- 受容	1.064	0.089	0.692	***	1.064	0.089	0.738	***
	Q1_16	<--- 受容	1.653	0.189	1.191	***	1.653	0.189	1.151	***
	Q1_19	<--- 受容	1.266	0.093	0.753	***	1.266	0.093	0.786	***
	Q1_25	<--- 受容	1.165	0.091	0.755	***	1.165	0.091	0.718	***
	Q1_32	<--- 受容	0.309	0.128	0.209	*	0.536	0.106	0.354	***
	Q1_02	<--- 統制	1.000		0.448		1.000		0.496	
	Q1_08	<--- 統制	0.845	0.117	0.446	***	0.845	0.117	0.448	***
	Q1_11	<--- 統制	1.006	0.165	0.477	***	1.006	0.165	0.506	***
	Q1_14	<--- 統制	1.624	0.217	0.661	***	1.624	0.217	0.748	***
	Q1_20	<--- 統制	1.354	0.205	0.552	***	1.354	0.205	0.585	***
	Q1_48	<--- 統制	0.661	0.197	0.313	***	−0.151	0.133	−0.083	*n.s.*
	Q1_47	<--- 統制	0.475	0.184	0.242	*	−0.118	0.149	−0.067	*n.s.*
	Q1_13	<--- 統制	0.070	0.169	0.033	*n.s.*	0.306	0.121	0.168	*
	Q1_16	<--- 統制	0.380	0.169	0.197	*	0.464	0.147	0.256	**
因子間共分散	服従	<--> 独自	−0.077	0.043	−0.236	†	−0.066	0.036	−0.181	†
	服従	<--> 客観	−0.084	0.043	−0.240	†	−0.055	0.032	−0.167	†
	服従	<--> 対立	0.029	0.041	0.093	*n.s.*	0.062	0.039	0.159	*n.s.*
	服従	<--> 影響	0.040	0.043	0.107	*n.s.*	0.044	0.040	0.105	*n.s.*
	情愛	<--> 服従	−0.095	0.040	−0.295	*	−0.002	0.032	−0.006	*n.s.*
	客観	<--> 独自	0.135	0.046	0.400	**	0.080	0.028	0.293	**
	対立	<--> 独自	0.079	0.040	0.262	†	0.023	0.031	0.071	*n.s.*
	影響	<--> 独自	−0.026	0.044	−0.072	*n.s.*	−0.119	0.036	−0.349	***
	情愛	<--> 独自	0.049	0.038	0.158	*n.s.*	−0.067	0.027	−0.238	*
	対立	<--> 客観	0.103	0.047	0.320	*	0.010	0.031	0.035	*n.s.*
	影響	<--> 客観	0.001	0.044	0.002	*n.s.*	0.077	0.031	0.247	*
	情愛	<--> 客観	0.057	0.038	0.171	*n.s.*	0.060	0.024	0.236	*
	影響	<--> 対立	−0.119	0.043	−0.345	**	−0.106	0.037	−0.291	**
	情愛	<--> 対立	−0.125	0.039	−0.424	**	−0.131	0.031	−0.437	***
	情愛	<--> 影響	0.216	0.046	0.612	***	0.253	0.040	0.796	***
	服従	<--> 受容	−0.007	0.037	−0.021	*n.s.*	−0.056	0.033	−0.157	†
	服従	<--> 統制	0.130	0.035	0.564	***	0.139	0.034	0.488	***
	独自	<--> 受容	−0.031	0.036	−0.100	*n.s.*	−0.094	0.029	−0.316	**
	独自	<--> 統制	0.001	0.029	0.003	*n.s.*	0.033	0.024	0.142	*n.s.*
	客観	<--> 受容	0.020	0.037	0.062	*n.s.*	0.028	0.025	0.104	*n.s.*
	客観	<--> 統制	0.002	0.030	0.006	*n.s.*	0.000	0.021	0.001	*n.s.*
	対立	<--> 受容	−0.157	0.040	−0.533	***	−0.191	0.036	−0.604	***
	対立	<--> 統制	0.123	0.034	0.581	***	0.144	0.033	0.575	***
	影響	<--> 受容	0.290	0.051	0.824	***	0.272	0.041	0.811	***
	影響	<--> 統制	0.008	0.032	0.032	*n.s.*	−0.018	0.028	−0.068	*n.s.*
	情愛	<--> 受容	0.238	0.042	0.791	***	0.226	0.033	0.820	***
	情愛	<--> 統制	−0.025	0.030	−0.117	*n.s.*	0.001	0.023	0.006	*n.s.*
	受容	<--> 統制	0.007	0.029	0.031	*n.s.*	−0.081	0.027	−0.350	**
独自性間共分散	eQ1_08	<--> eQ1_02	0.143	0.049	0.283	**	0.203	0.045	0.384	***
	eQ1_29	<--> eQ1_60	0.040	0.038	0.119	*n.s.*	0.150	0.037	0.352	***
	eQ1_52	<--> eQ1_29	0.010	0.032	0.030	*n.s.*	−0.088	0.024	−0.264	***
	eQ1_13	<--> eQ1_25	0.016	0.033	0.047	*n.s.*	0.106	0.029	0.313	***
	eQ1_37	<--> eQ1_25	−0.027	0.020	−0.139	*n.s.*	−0.063	0.019	−0.259	***
	eQ1_46	<--> eQ1_47	−0.033	0.034	−0.113	*n.s.*	−0.099	0.031	−0.277	**
	eQ1_25	<--> eQ1_08	0.109	0.034	0.308	**	−0.018	0.028	−0.043	*n.s.*
	eQ1_28	<--> eQ1_29	0.051	0.027	0.200	†	0.071	0.024	0.218	**
	eQ1_52	<--> eQ1_53	0.062	0.032	0.203	†	0.068	0.023	0.238	**
	eQ1_61	<--> eQ1_01	−0.032	0.039	−0.080	*n.s.*	−0.070	0.027	−0.216	**
	eQ1_42	<--> eQ1_16	−0.003	0.023	−0.021	*n.s.*	0.049	0.018	0.289	**
	eQ1_29	<--> eQ1_48	0.023	0.038	0.062	*n.s.*	−0.100	0.031	−0.226	**
	eQ1_61	<--> eQ1_48	0.006	0.048	0.014	*n.s.*	−0.101	0.035	−0.227	**

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, †: $p<.01$, *n.s.*: $p>.1$

次に両者の因子間相関をみると，男女において，「受容」の因子は「情愛的絆」の因子，「ポジティブな影響」の因子と正の相関を，「対立」の因子と負の相関を示していた。また「統制」の因子は，「対立」の因子と「服従」の因子と有意な正の相関が認められた。そして「客観視」の因子と「独自の生き方」の因子をみると，男女とも両者の間で有意な相関が認められた。さらに詳細にそれぞれの因子をみると，男子では「客観視」の因子は「対立」の因子と有意な正の相関が認められたのに対し，女子では，「客観視」の因子は「情愛的絆」の因子，「ポジティブな影響」の因子の間で有意な相関が認められた。また「独自の生き方」の因子は女子において，「受容」の因子，「情愛的絆」の因子，「ポジティブな影響」の因子との間で有意な負の相関が認められた。

4. 考 察

本研究においては，母―青年関係に焦点を当て，青年の認知する「母の青年に対する態度・行動」と「青年の母に対する態度・行動」の構造分析と，SEMにより両者の関連について検討した。まず母と青年の関係の構造分析について考察すると，母の青年に対する態度・行動は，男女で類似した「受容」と「統制」の2因子が得られた。これらの因子は，辻岡・山本（1975a, 1978）で得られた因子と類似していると思われ，大学生においてもこの2因子で捉えることができると思われる。また青年の母に対する態度・行動については，男女で類似した「母との情愛的絆」の因子，「母からのポジティブな影響」の因子，「母との対立」の因子，「母への服従」の因子，「母に対する客観視」の因子，「母とは別の独自の生き方」の因子の6因子が得られた。この中でも，「母に対する客観視」の因子と「母とは別の独自の生き方」の因子は，小高（1998）で得られた「一人の人間としての親」に関する因子であり，本分析では2つの因子に分かれる結果となったが，この点については，小高(2010)とほぼ同じ結果である。つまり，これら 2 つの因子は，元々同じ因子であり，両者の相関からもわかるように互いに関連していると思われる。このことから，親―青年関係をより詳細に見るためには 6 つの因子で捉えることが良いのではないかと考える。

次に上記で得られた因子間相関をみると，男女ともに，「統制」の因子は「服従」の因子，「対立」の因子との間で正の関連が認められた。つまり母が統制的であると認知するほど，青年は母に服従するが，その一方で反発を感じていると考えられる。また「受容」の

因子は「ポジティブな影響」の因子と「情愛的絆」の因子との間で正の関連が認められ，「対立」の因子との間で負の関連が認められた。母が受容的であると認知するほど，青年は母からポジティブな影響を受け，情愛的絆が強いと感じ，対立的でないと認知していると考えられる。一方，男女で異なるところもある。「客観視」の因子についてみると，男子については「対立」の因子と正の相関を示していたが（.320），女子においては「親からのポジティブな影響」の因子と「情愛的絆」の因子と正の相関を示していた。また「独自の生き方」の因子についてみると，女子において「受容」,「ポジティブな影響」,「情愛的絆」のそれぞれの因子と負の相関を示していた。すなわち，男子の場合，母を客観的に見ることは，母との対立と関連しているが，女子の場合は母と親和的な関係と関連していると思われる。このことから，男子は母と距離を取りながら，母を客観的に見ることができるようになるが，女子においては母と親和的な関係を築きながら客観的に見ることができるようになると考えられる。さらに女子において，母とは別の独自の生き方をすることとは，親和的でない，距離を置いた関係として捉えられていると予想される。

Figure 5-4，Figure5-5 は得られた因子間相関を元にして，母の青年への態度・行動と青年の母への態度・行動の間の関係について男女ごとに描いた関連図である。実線は正の関係を表し，点線は負の関係を表す。

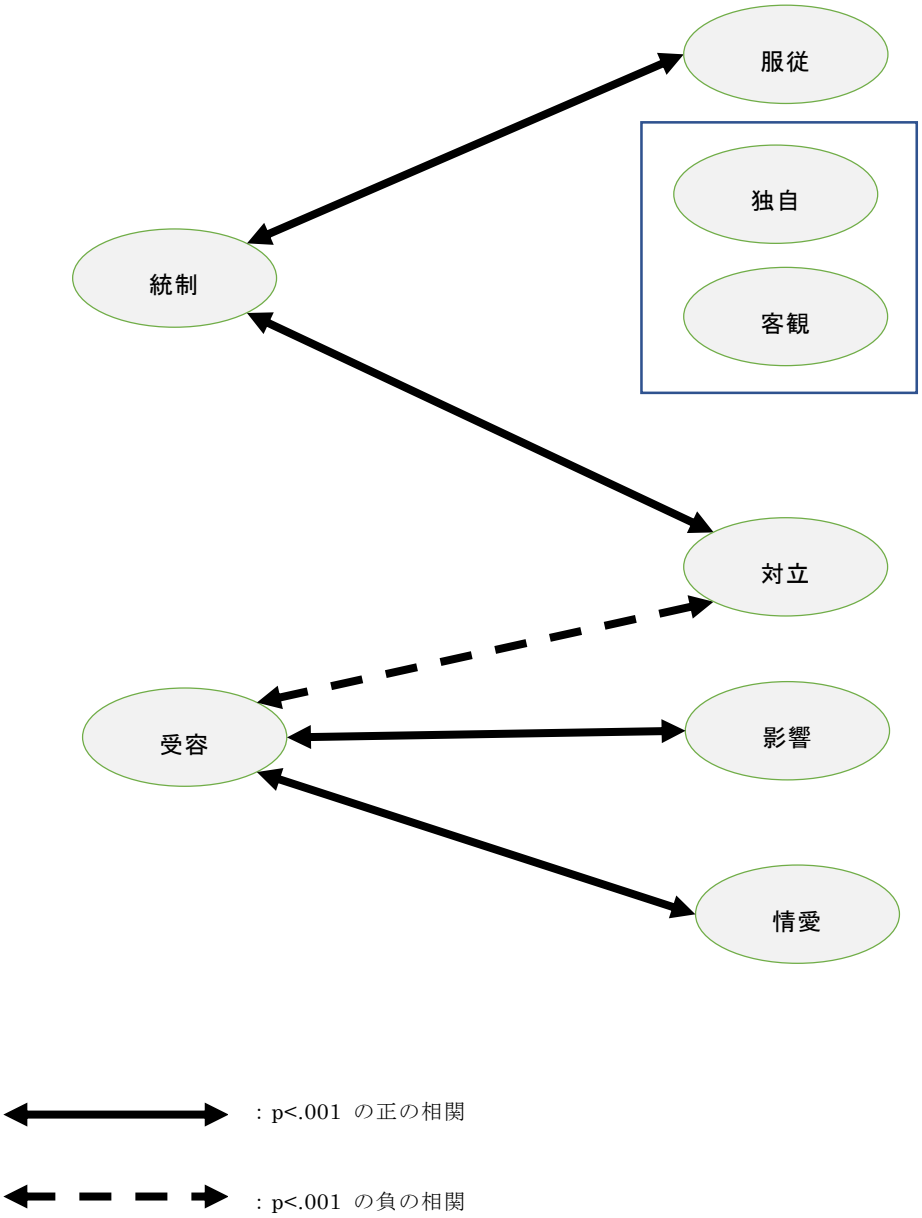


Figure 5-4 母―青年関係の関連図（男子）

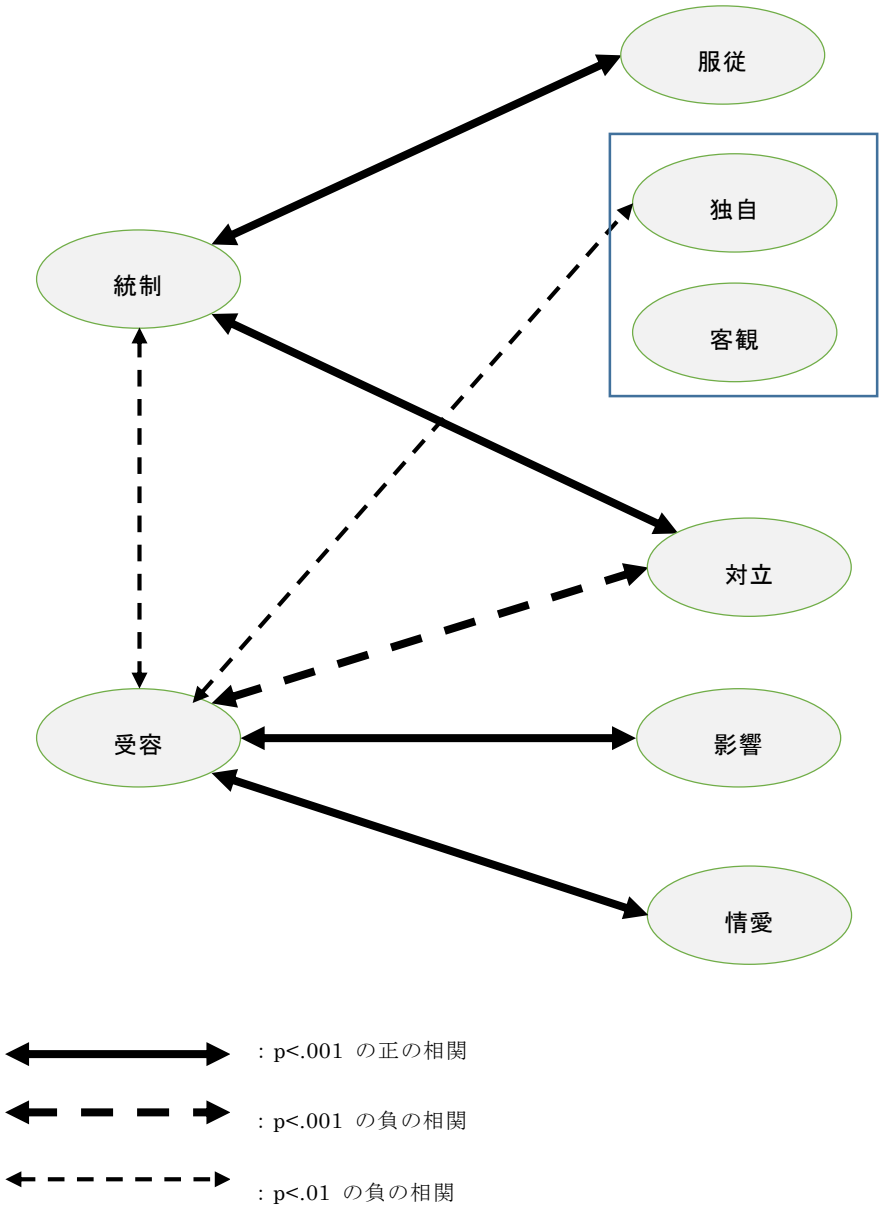


Figure 5-5 母―青年関係の関連図（女子）

上記で述べたように，本分析においては，小高(1998)で得られた「一人の人間として親を認知する」因子は,「独自の生き方」の因子と「客観視」の因子の二つに分かれる結果となったが,「一人の人間として親を認知する」因子には，二つの意味が含まれている可能性がある。特に女子の場合，母親と親和的な関係を含んだ部分と，母親と親和的でない関係を含んだ部分の二つのものが含まれているように思われる。すなわち，娘の場合，一人の人間として母を認知するということには，母と親和的になる側面とそうでない側面の両面を含むと思われ，接近(親和)，回避（不和）を繰り返しながら，母親を一人の人間として認知していく可能性があると思われる。

5. 本章のまとめ

本研究においては，母と青年との関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」の構造分析を行った。その結果,「母の子に対する態度・行動」においては,「受容」と「統制」の 2 因子が得られ,「子から母に対する態度・行動」については,「母との情愛的絆」,「母からのポジティブな影響」,「母との対立」,「母への服従」,「母に対する客観視」,「母とは別の独自の生き方」の 6 つの因子が得られた。また両者の関連を明らかにするために SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により検討した。その結果,「受容」の因子は「情愛的絆」の因子,「ポジティブな影響」の因子と正の関係が,「対立」の因子と負の関係が認められた。また「統制」の因子は,「対立」の因子と「服従」の因子と正の関連が認められた。

注記

第 5 章は，小高(2014a)に加筆・修正を行ったものである。

第 6 章 母娘関係の日々の相互作用の一分析

－動的因子分析を適用して－

1. 目　的

発達心理学的な観点からみると，青年期の親子関係は転換の時期，また再形成の時期を迎える(Grotevant & Cooper, 1986; Laursen, Coy, & Collins, 1998)。この時期は子どもから大人になる移行期であり，心理的離乳という言葉で表わされるように親離れしていく時期である。親子間の相互作用に加えて，時間軸でその変化を捉えることは，親子関係の影響過程を知る上で非常に意義のあるものと思われる。本章では，新しい手法である動的因子分析を母娘関係のデータに適用し，母と娘の日々の影響の過程を明らかにすることを目的とする。

2. 方　法

(1) **調査参加者と測定期間：**女子中学生 1 年生(調査開始時 12 才)とその母親(調査開始時 43 才)の 2 名であり，測定期間は 2010 年 10 月 20 日～2011 年 3 月 12 日の 144 日間であった。青年期の娘を持つ母親とその娘に調査を依頼し，個人情報は関連法規を遵守すること，長期にわたる研究への参加は自由意志であること，調査の中断あるいは中止に関しては対象者の子どもと親の双方の自由意思で判断できること等の説明を行い，了解を得た本ペアを対象とした。調査にあたり，調査参加への承諾をとり，記入した調査用紙は相互に閲覧しないことを要請した。調査では，毎日同じ時間くらい（寝る前）に，今日一日を振り返りそれぞれの項目にどのくらいあてはまるか評定してもらった。質問紙は，項目の順序をランダムに再配置したもの 16 種類用意し，これを 1 ヵ月分まとめた冊子を参加者に手渡し，終了前に新しい冊子を手渡すことを繰り返した。回答を行った後は， その質問紙を封筒に入れて，前日の回答とは比較しないように指示をした。なお,本研究においては，情動性に関する項目 5 項目についても回答してもらっているが，今回は，母娘関係のみに焦点を当てるため，本分析においては，情動性の項目は分析からはずしている。調査の内容と実施に関しては，関西の K 大学大学院 S 研究科研究・教育倫理委員会の審査を受け，その承認を得ている。

(2) 質問項目

① 娘の母への態度・行動についての尺度：小高（2000, 2010, 2011)は,「親和志向」と「独立志向」の 2 つの二次因子を抽出しているが，この二つの因子を元にして，それぞれ 7 項目ずつ，合計 14 項目を子ども用・親用で項目内容が同じになるように作成した。

②母の娘への態度・行動についての尺度：辻岡・山本（1976）の作成した EICA の「受容」「統制」の二次元を元にして，それぞれ 4 項目ずつ，合計 8 項目を子ども用・親用で項目内容が同じになるように作成した。

調査では，娘と母がそれぞれの質問紙に回答した。項目反応カテゴリーは「1：全く当てはまらない」「2：ほとんど当てはまらない」「3：どちらかといえば当てはまらない」「4：どちらかといえば当てはまる」「5：ほぼ当てはまる」「6：非常によく当てはまる」の 6 件法である。

(3) 分析方法

DFA の分析では，時間経過の関連性を表現する BT 行列を構成し（紺田, 2010b），一般的な SEM のソフトウェアで推定を行う方法（紺田・清水, 2015；豊田, 2000）を採用した。ここでは，横断的なデータの SEM による分析と同様，まず，測定モデル（因子と観測変数の関係性）の構成に当たった。具体的には，DFA の測定モデルの下位尺度（小包）を構成するために P 技法因子分析（探索的因子分析）を行った。そして当日の母の娘への態度・行動の因子と娘の母への態度・行動の因子の下位尺度の構成を確認するために母と娘のそれぞれについてラグ 0 の DFA を行った。次に母と娘のラグ 0 モデルを合わせたラグ 0 の母娘相互作用モデルを作成し，構造モデル（母娘の因子間のモデル化）の構成に当たった。最後に，この母と娘を合わせた相互作用モデルを前日及び前々日の時間経過を含んだ DFA を行った。モデルの適合度については，Mulaik（2010）や Hu & Bentler(1999)，清水ほか（2014）を参考にして，CFI（>.95）, RMSEA（<.05），SRMR(<.08)という適合度指標をモデル採択のための基準とした。なお，以上の分析は SPSS19.0 と AMOS19.0 を用いて行った。なお，調査参加者の回答ですべての項目に無回答であった日は無かったが，娘 24 個，母 4 個の合計 28 個の項目への反応では欠損があった。これらの欠損は連続したものではなかったので，ここではこれらの欠損値には，紺田・清水(2015)に従い，前後日の平均（周囲平均値）を代入することにした。

3. 結　果

(1) 母娘関係の４尺度ごとのＰ技法因子分析と下位尺度(小包)の構成

項目をまとめて下位尺度を構成する方法は，小包化（parceling）と呼ばれる（Cattell, 1956)。SEM による分析において潜在因子を含むモデルを構成する際に，項目そのものを観測変数とするよりも，小包化した下位尺度を用いた方が，信頼性が向上し，より適切な解を推定できる可能性が高まる（狩野, 2002a, 2002b；紺田・清水, 2015)。DFA においても, 適用する日数が少なくても, 小包化することでより適切な解が推定されるとされる（紺田, 2011; Ferrer & Nesselroade, 2003)。

上記で述べた小包化を尺度ごとに行うために, DFA による分析を行う前に, 次の方法で, 母娘関係の「受容」,「統制」,「親和志向」,「独立志向」の４尺度における因子構造を探索し，母娘関係に関する下位尺度（小包）を構成した。まず，娘・母別々に尺度ごとでＰ技法因子分析（探索的因子分析）を行った。因子数については，スクリー基準により判断した。主因子法による因子解の推定を行い，複数の因子数の場合はプロマックス法による回転を行った。因子分析を行った結果，Table 6-1-1～Table 6-1-4 のような結果となった。娘の「統制」に関する尺度のみ２因子で構成されていたが，この因子をみると，第１因子が統制に関する因子であり，第２因子が自律性尊重の因子であり，因子間相関は負の値を示していた（r=－.199)。それ以外の尺度については，全て１因子で構成されていた。

次に，それぞれの尺度ごとに 2～3 つの小包を構成した（Table 6-1-1～Table 6-1-4 の小包の欄を参照)。ここでは，Ｐ技法因子分析で得られた因子パターンの小さい項目と大きい項目という組み合わせになるように, 因子パターン値のバランスをとるように構成した（清水・山本, 2007)。小包は同じ構成概念を表現するため，娘か母のどちらかでも因子パターンの絶対値が 0.3 以上の値を示した場合は，構成概念を表現するのに貢献している項目と考え，小包に採用することとした。ただし，「Q03 お母さんに感謝の言葉を言った（私に感謝の言葉を口にしてくれた）」は娘と母で共に 0.3 を超えなかったが，どちらも 0.2 を超えて同じ方向を向いていること，先行の横断的研究の親和志向の因子を構成する情愛的絆の尺度に含まれる項目と同じ内容であることから, この項目も小包に含めることとした。また娘の統制の因子は母と娘で構造が異なり,「Q21　お母さんは，私の自主性を尊重してくれた」の項目は，第１因子に負荷していなかったが，母親の「子どもの自主性を尊重した」は 0.3 以上を示しており，内容的には統制の方向と逆の関係にあると考え，母の第 1

因子を採用し小包化を行った。

Table 6-1-1　親の子への態度・行動(受容)：因子パターン

小包[注]		親の子への態度・行動(受容) (娘評定)	パターン値	*Mean*	*SD*	親の子への態度・行動(受容) (母評定)	パターン値	*Mean*	*SD*
受容1	Q15	お母さんは、私の言うことに耳を傾けてくれた	0.428	4.41	1.29	子どもの言うことに耳を傾けた	0.284	4.34	0.83
受容1	Q18	お母さんは、私の喜びそうなことをしてくれた	0.445	2.64	1.58	子どもの喜びそうなことをした	0.737	2.71	1.10
受容2	Q16	お母さんは、私を励ましてくれた	0.672	2.55	1.50	子どもを励ました	0.402	3.38	1.07
受容2	Q17	お母さんは、私に色々気をつかってくれた	0.818	2.22	1.27	子どもに色々気を使った	0.486	2.67	0.88

注）　表中の同じ番号は同じ小包に含まれることを示す

Table 6-1-2 親の子への態度・行動(統制)：因子パターン

小包[注]		親の子への態度・行動(統制) (娘評定)	1	2	*Mean*	*SD*	親の子への態度・行動(統制) (母評定)	パターン値	*Mean*	*SD*
統制1	Q20	お母さんは、私に決まりを守るように言った	0.799	0.113	3.34	1.55	子どもに決まりを守るように言った	0.447	3.88	1.19
統制1	Q21	お母さんは、私の自主性を尊重してくれた	0.077	0.369	2.40	1.31	子どもの自主性を尊重した	-0.329	3.91	0.75
統制2	Q19	お母さんは、私に色々指図した	0.597	0.087	3.92	1.48	子どもに色々指図した	0.983	3.78	1.09
統制2	Q22	お母さんから勉強についてとやかく言われた	0.481	-0.299	3.14	1.58	子どもに勉強についてとやかく言った	0.254	1.84	1.34

注）　表中の同じ番号は同じ小包に含まれることを示す

Table 6-1-3 子から親への態度・行動(親和―不和)：因子パターン

小包[注]		子の親への態度・行動(親和)(娘評定)	パターン値	*Mean*	*SD*	子の親への態度・行動(親和)(母評定)	パターン値	*Mean*	*SD*
親和1	Q02	お母さんの言うことはその通りだと思った	0.646	3.85	1.25	私の言動に共感してくれた	0.799	3.92	0.84
親和1	Q07	一日の出来事をお母さんに話した	0.171	3.94	1.28	一日の出来事を私に話してくれた	0.488	3.89	1.25
親和2	Q03	お母さんに感謝の言葉を言った	0.205	2.52	1.16	私に感謝の言葉を口にしてくれた	0.245	2.52	0.96
親和2	Q05	今日のお母さんは頑張っていたと思う	0.463	4.92	1.18	私のことを理解してくれた	0.683	4.02	0.52
親和3	Q01	お母さんに色々と相談した	0.420	2.96	1.33	子どもから相談があった	0.351	2.69	1.21
親和3	Q04	お母さんをいたわってあげた	0.449	3.38	1.36	私をいたわってくれた	0.403	3.45	1.15
親和3	Q06	お母さんの言うことに耳を傾けた	0.236	5.12	0.88	私の考えに耳を傾けてくれた	0.689	4.15	0.76

注）　表中の同じ番号は同じ小包に含まれることを示す

Table 6-1-4 子から親への態度・行動(独立―服従)：因子パターン

小包[注]		子の親への態度・行動(独立)(娘評定)	パターン値	*Mean*	*SD*	子の親への態度・行動(独立)(母評定)	パターン値	*Mean*	*SD*
独立1	Q08	お母さんと言い合いになった	0.877	2.57	1.39	ささいなことから言い合いが始まった	0.754	1.74	1.44
独立1	Q14	お母さんに対して素直であったと思う	-0.198	4.77	1.01	私に対して素直であった	-0.694	4.06	0.99
独立2	Q11	お母さんの言う通りに従った	-0.228	4.44	0.97	私の言う通りに従ってくれた	-0.529	3.91	0.78
独立2	Q13	お母さんに口答えした	0.814	2.78	1.30	私に口答えした	0.760	3.22	1.35
独立3	Q09	お母さんの言動で納得できないことがあった	0.623	2.69	1.40	私に対して、批判的な言動があった	0.732	3.16	1.16
独立3	Q10	お母さんは口うるさいと感じた	0.759	2.61	1.29	私から干渉されるのを嫌がった	0.625	2.55	1.15
独立3	Q12	お母さんの期待に答えたと思う	-0.471	3.59	1.29	私の期待に答えてくれた	-0.581	4.56	0.70

注）　表中の同じ番号は同じ小包に含まれることを示す

(2) 時間経過を入れないラグ 0 モデルの分析結果

はじめに，時間経過を入れないラグ 0 の DFA により，それぞれの因子と上記で作成した小包が関係するかを確認するために，上記で得られた小包を観測変数として用いて，母と娘別々の 4 因子での測定モデルを作成した。その際，AMOS の修正指数の中で最も大きい箇所にパスを増やすことを繰り返すことによりモデルの修正を行った。因子から小包にパスを置き，その後関連する独自性間共分散にパスを置いた。これらの独自性間共分散を置くことによって，小包に内在する特殊な共分散を捉えることができるため，適合度を向上させることができると考えられる。独自性間共分散を置いた箇所は，小包の意味内容として関連していると考えられ，解釈可能な関連が想定できる(清水・柴田, 2008)。また該当する因子から小包へのパスは，他の因子から負荷するものもあったが，5%水準で全て有意であった。ラグ 0 の DFA による母と娘のそれぞれの分析の結果, Figure 6-1, Figure 6-2 に示されるような適合度の良い測定モデルを推定することができた（娘: $\chi^2(21)=9.013$, $p=.989$, GFI=.988, AGFI=.968, CFI=1.000, RMSEA=.000, AIC=77.013, SRMR=.021, 母: $\chi^2(21)=14.621$, $p=.841$, GFI=.980, AGFI=.948, CFI=1.000, RMSEA=.000, AIC=82.621, SRMR=.028）。

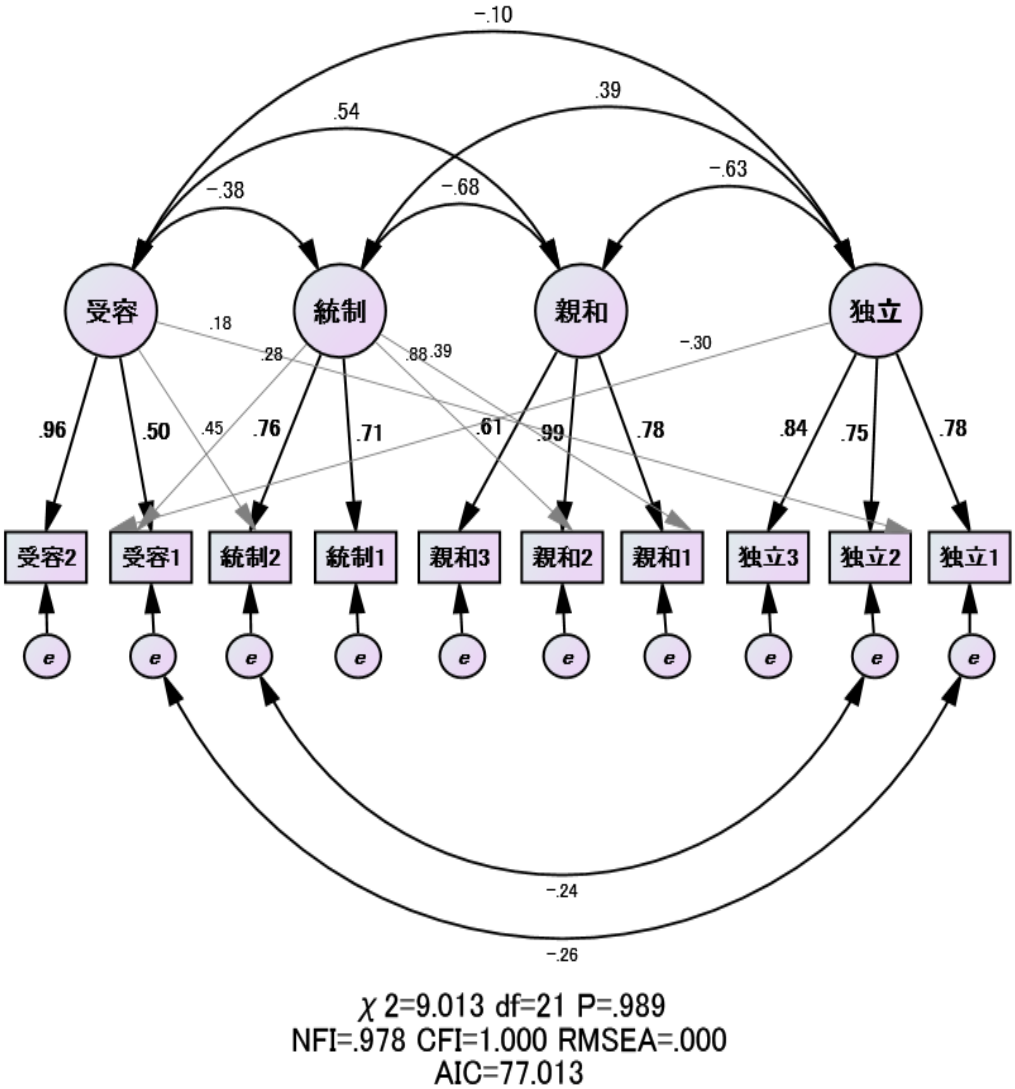


Figure 6-1 娘についての DFA（ラグ 0）のパス図

注） これらの値は推定値を標準化したものである。

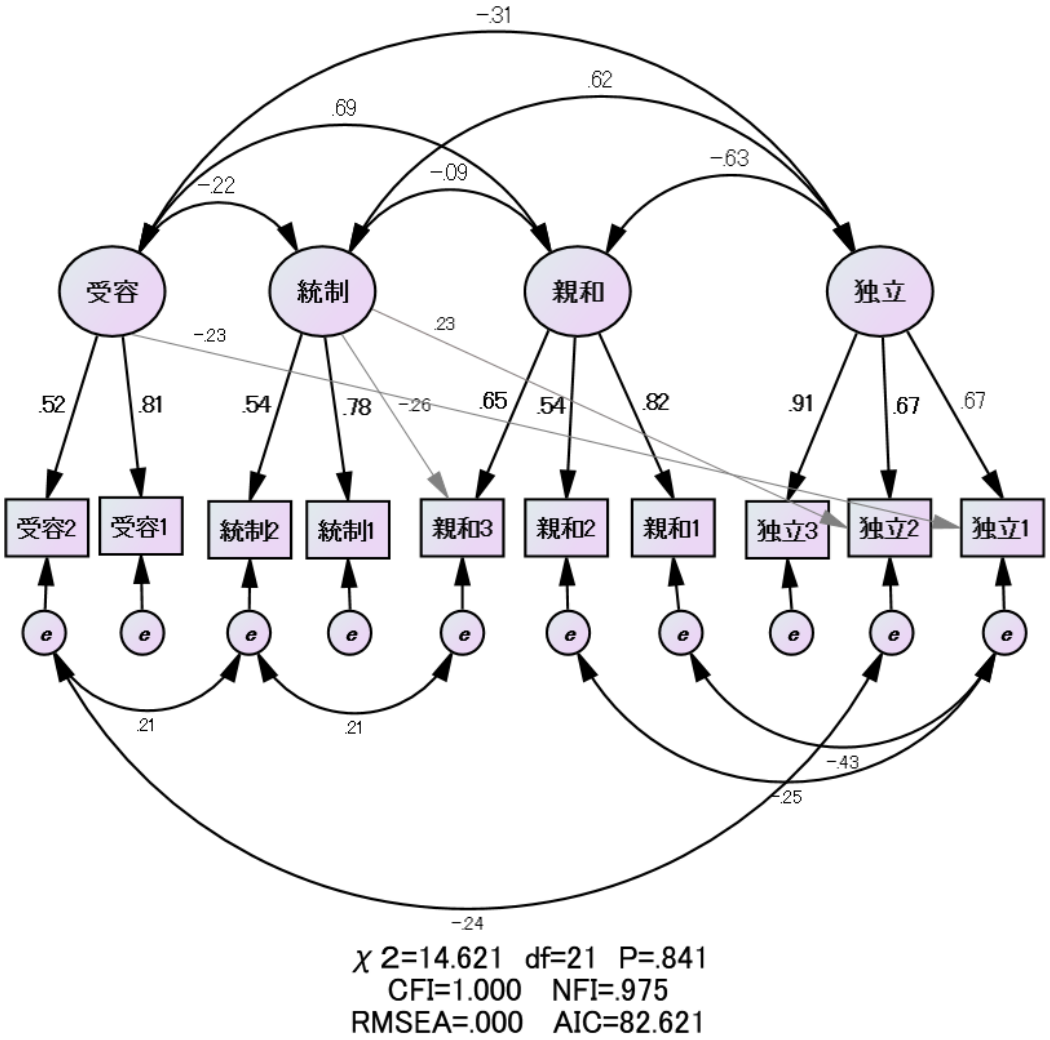


Figure 6-2 母についての DFA（ラグ 0）のパス図

注） これらの値は推定値を標準化したものである。

次に上記で得られた娘と母のそれぞれのラグ 0 モデルを合わせたモデルを作成し，これを出発モデルとした(Figure 6-3)。

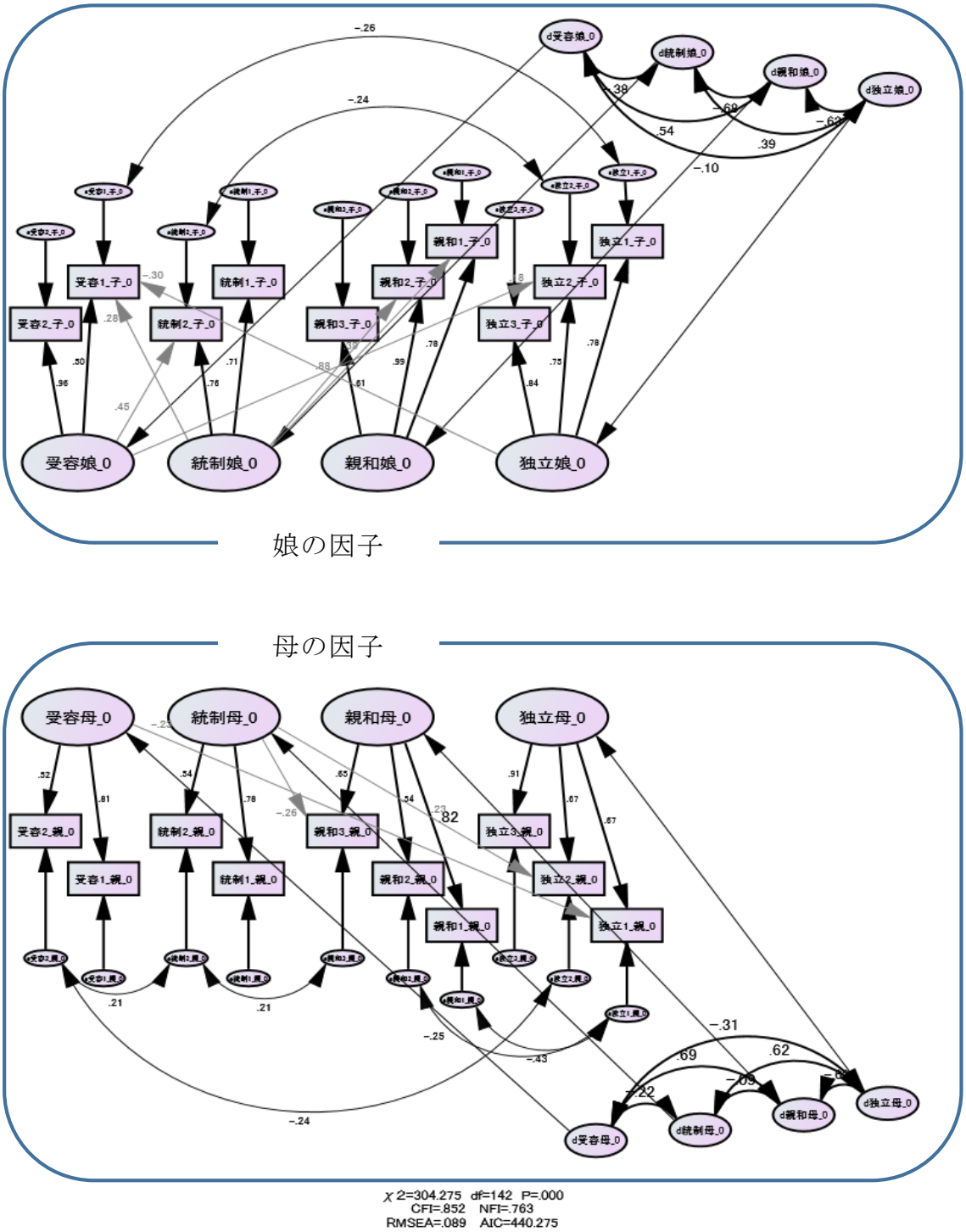


Figure 6-3 母娘の相互作用モデル DFA（ラグ 0）の出発モデル

当日の母娘関係は互いに影響を及ぼし合っていると考え，修正指数を参考に，娘と母との間の独自性間共分散と因子間の双方向のパスを増やす作業を行った。一方向のパスではなく，双方向のパスを採用したのは，1時点だけの研究で見出された要因間の関連性が因果関係として誤って解釈されることのないように留意する必要があると考えるからである（菅原, 2004）。例えば，娘の母への「独立志向」に関する態度・行動についてみると，これらに含まれる項目は，「お母さんに口答えした」「お母さんに対して素直であった（逆転項目）」というように母への不従順さが含まれている。娘が従順でなければ，母は娘が従順でないと感じ，そのことが娘との間で葛藤を生じさせることとなり，娘も素直になれない可能性があると考えることができる。つまり，母娘関係は一方向に影響を与えるのではなく，相互に影響しあっていると思われる。本研究のラグ0の母娘関係については時系列的には同じ時点であり，そこに因果のパスを引くよりは，双方向のパスを引くことが妥当であると考えた。そして，ラグ0の娘と母の合わせたモデルを作成し，先ほどと同様に修正指数を参考に共分散のパスを引くことにより，母娘の相互作用モデルの分析を行った。その結果，Table 6-2 に示すような適合度の良い測定モデルを推定することができた（χ^2(129)=129.059, p=.482, GFI=.921, AGFI=.871, CFI=1.000, RMSEA=0.002, AIC=291.059, SRMR=.056）。Figure 6-4 は母娘の因子の関連について示した図である。

Table 6-2 母娘の相互影響過程のラグ 0 モデルの推定値

					推定値	標準誤差	標準化係数	*p*
測定モデル	娘	受容1_子_0	<---	受容子_0	1		0.544	
		受容2_子_0	<---	受容子_0	1.804	0.438	0.903	***
		統制2_子_0	<---	受容子_0	0.937	0.220	0.475	***
		独立2_子_0	<---	受容子_0	0.269	0.110	0.186	*
		統制1_子_0	<---	統制子_0	1		0.720	
		統制2_子_0	<---	統制子_0	1.302	0.210	0.762	***
		受容1_子_0	<---	統制子_0	0.513	0.172	0.322	**
		親和1_子_0	<---	統制子_0	0.517	0.210	0.410	*
		親和2_子_0	<---	統制子_0	0.940	0.235	0.808	***
		親和1_子_0	<---	親和子_0	1		0.779	
		親和2_子_0	<---	親和子_0	1.073	0.203	0.906	***
		親和3_子_0	<---	親和子_0	0.722	0.159	0.631	***
		独立1_子_0	<---	独立子_0	1		0.769	
		独立2_子_0	<---	独立子_0	0.927	0.105	0.739	***
		独立3_子_0	<---	独立子_0	1.170	0.119	0.841	***
		受容1_子_0	<---	独立子_0	-0.533	0.142	-0.335	***
	母	受容1_親_0	<---	受容親_0	1		0.833	
		受容2_親_0	<---	受容親_0	0.614	0.128	0.516	***
		独立1_親_0	<---	受容親_0	-0.418	0.134	-0.241	**
		統制1_親_0	<---	統制親_0	1		0.737	
		統制2_親_0	<---	統制親_0	0.946	0.168	0.527	***
		親和3_親_0	<---	統制親_0	-0.331	0.101	-0.257	**
		独立2_親_0	<---	統制親_0	0.530	0.150	0.313	***
		親和1_親_0	<---	親和親_0	1		0.821	
		親和2_親_0	<---	親和親_0	0.459	0.072	0.561	***
		親和3_親_0	<---	親和親_0	0.635	0.085	0.634	***
		独立1_親_0	<---	独立親_0	1		0.686	
		独立2_親_0	<---	独立親_0	0.731	0.115	0.606	***
		独立3_親_0	<---	独立親_0	0.928	0.096	0.902	***

（Table 6-2 の続き）

独自性間共分散	娘	e受容1_子_0	<-->	e独立1_子_0	-0.137	0.058	-0.242	*
		e統制2_子_0	<-->	e独立2_子_0	-0.079	0.050	-0.162	*ns*
	母	e受容2_親_0	<-->	e統制2_親_0	0.112	0.043	0.215	*
		e受容2_親_0	<-->	e独立2_親_0	-0.065	0.031	-0.209	*
		e統制2_親_0	<-->	e親和3_親_0	0.104	0.034	0.265	**
		e親和1_親_0	<-->	e独立1_親_0	-0.117	0.040	-0.364	**
		e親和2_親_0	<-->	e独立1_親_0	-0.073	0.029	-0.234	*
	娘⇔母	e統制2_子_0	<-->	e統制2_親_0	0.239	0.075	0.346	**
		e親和3_子_0	<-->	e親和3_親_0	0.096	0.030	0.320	**
		e親和3_子_0	<-->	e受容1_親_0	0.103	0.035	0.398	**
因子間共分散	娘	受容子_0	<-->	統制子_0	-0.177	0.068	-0.405	**
		受容子_0	<-->	親和子_0	0.233	0.086	0.543	**
		受容子_0	<-->	独立子_0	0.013	0.035	0.029	*ns*
		統制子_0	<-->	親和子_0	-0.325	0.112	-0.655	**
		統制子_0	<-->	独立子_0	0.170	0.054	0.336	**
		親和子_0	<-->	独立子_0	-0.282	0.073	-0.567	***
	母	受容親_0	<-->	統制親_0	-0.064	0.037	-0.190	†
		受容親_0	<-->	親和親_0	0.288	0.054	0.669	***
		受容親_0	<-->	独立親_0	-0.126	0.048	-0.268	**
		統制親_0	<-->	親和親_0	-0.041	0.035	-0.113	*ns*
		統制親_0	<-->	独立親_0	0.256	0.053	0.643	***
		親和親_0	<-->	独立親_0	-0.328	0.070	-0.638	***
	娘⇔母	統制子_0	<-->	受容親_0	-0.062	0.036	-0.140	†
		独立子_0	<-->	受容親_0	-0.131	0.044	-0.294	**
		統制子_0	<-->	統制親_0	0.292	0.058	0.769	***
		親和子_0	<-->	統制親_0	-0.146	0.062	-0.393	*
		独立子_0	<-->	統制親_0	0.168	0.046	0.444	***
		親和子_0	<-->	親和親_0	0.134	0.042	0.279	**
		独立子_0	<-->	親和親_0	-0.274	0.057	-0.562	***
		統制子_0	<-->	独立親_0	0.182	0.051	0.342	***
		親和子_0	<-->	独立親_0	-0.204	0.064	-0.391	**
		独立子_0	<-->	独立親_0	0.387	0.072	0.728	***

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, †: p<.1

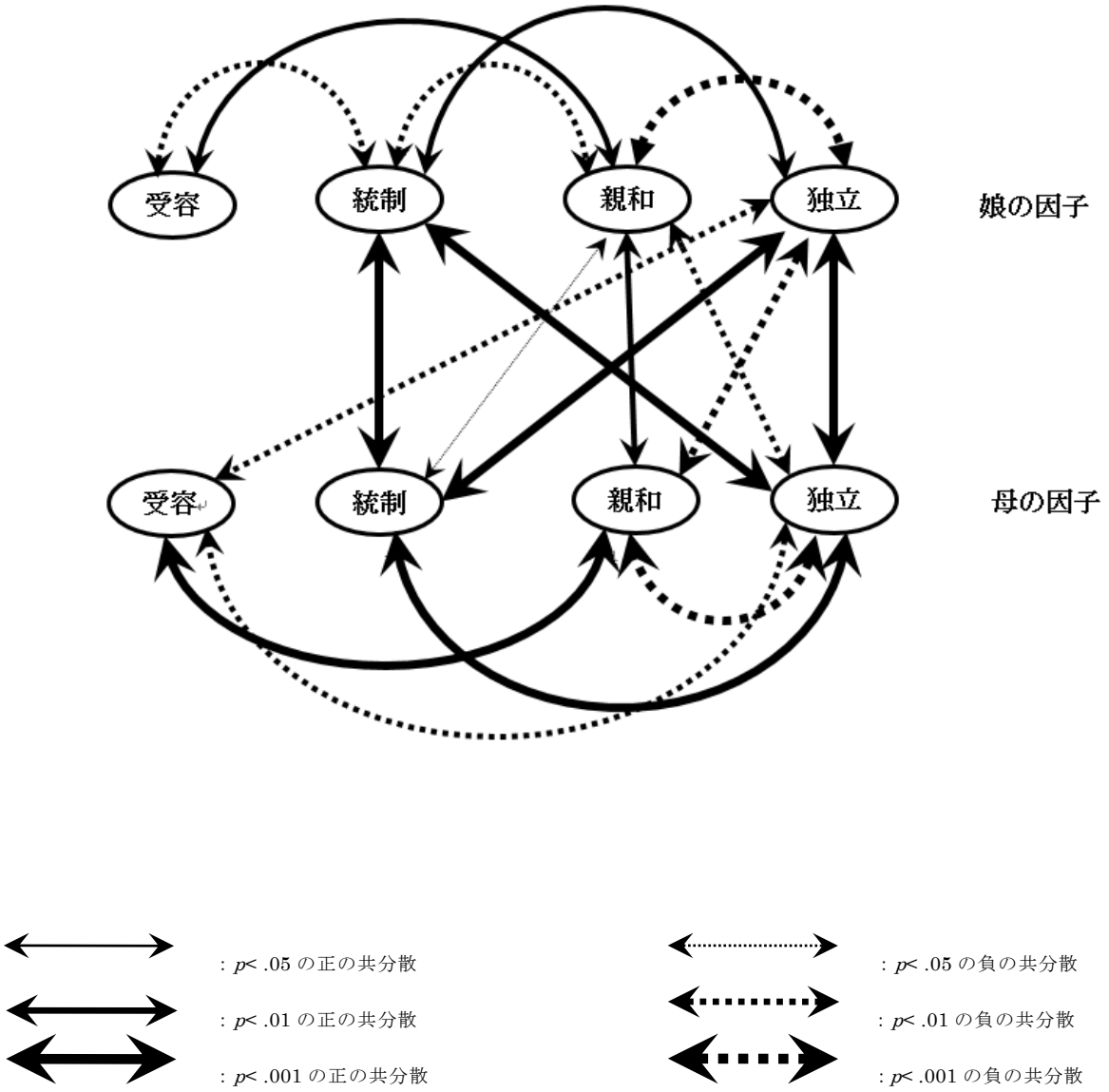


Figure 6-4 母娘の相互作用モデル DFA（ラグ 0）のパス図

これらのパスの中で，まず娘と母の間の同じ因子をみると，「統制の因子」「独立志向の因子」が 0.1%水準で，「親和志向の因子」が 1%水準で有意であった。すなわち，統制的な態度・行動や親和的，独立的な態度・行動は，母と娘で同じように認知し，互いに影響しあっていると思われる。しかしながら「受容の因子」については，母娘間で直接のパスを引くことができず，母娘間で直接的な関連は認められなかった。次にそれ以外の母娘間のパスをみると，「娘の独立志向の因子」は「母の受容の因子」「母の親和志向の因子」との間で，「娘の親和志向の因子」は「母の独立志向の因子」「母の統制の因子」との間で負の関係が認められた。また「独立志向の因子」と「統制の因子」は母娘の互いに正の関係が認められた。

(3) 時間経過を入れたラグ 2 モデルの分析結果

上記でラグ 0 のモデルを作成したが，これを元にして，娘と母の相互作用の時系列のモデル化を行った。ラグ数の決定については，自己相関係数，偏自己相関係数の有意性を検討することで，考慮すべき時間的ラグの数が決定できると考え(中野，2002；中野ほか，2003)，各変数における自己相関，偏自己相関を算出し，その有意性を検討した。ここで，n 次の自己相関とは元のデータと元のデータを n 期ずらしたものとの同一変数内における相関係数のことで，一方 n 次の偏自己相関とは途中の 1 期から n-1 期までの影響を取り除いた後での相関係数のことである(中野，2002；中野他，2003)。Table 6-3 に各変数の自己相関および偏自己相関係数を示した。ラグ 1 の自己相関係数は 20 変数中 13 変数で有意な自己相関係数が得られ，ラグ 2 では 10 変数，ラグ 3 では 7 変数で有意な自己相関係数が得られた。また偏自己相関係数ではラグ 2 では 8 変数が有意であったが，ラグ 3 では有意な変数は認められなかった。このことは，観測間隔が離れるにつれて系列依存性の強さが減衰していき，ラグ 3 では 0 に近いことを意味する。そのため，本研究ではラグ数を 2 と定め，動的因子分析を行うことにした。

Table 6-3　自己相関係数・偏自己相関係数

		自己相関			偏自己相関		
	小包	ラグ1	ラグ2	ラグ3	ラグ1	ラグ2	ラグ3
娘	親和1	.136	.275 *	.063	.136	.261 *	−.001
	親和2	.233 *	.007	.067	.233 *	−.050	.081
	親和3	.321 *	.245 *	.259 *	.321 *	.158	.162
	独立1	.108	.140	−.093	.108	.130	−.123
	独立2	.210 *	.114	−.087	.210 *	.073	−.131
	独立3	.117	−.044	−.060	.117	−.059	−.048
	受容1	.423 *	.340 *	.176 *	.423 *	.196 *	−.028
	受容2	.631 *	.514 *	.448 *	.631 *	.193 *	.112
	統制1	.299 *	.256 *	.066	.299 *	.183 *	−.058
	統制2	.465 *	.389 *	.329 *	.465 *	.221 *	.115
母	親和1	.071	.135	.004	.071	.131	−.014
	親和2	.084	.185 *	.170 *	.084	.180 *	.148
	親和3	.214 *	.055	.075	.214 *	.009	.065
	独立1	.216 *	.066	−.042	.216 *	.020	−.064
	独立2	.230 *	.060	.091	.230 *	.007	.080
	独立3	.173 *	.112	.000	.173 *	.085	−.034
	受容1	.042	.095	.104	.042	.093	.097
	受容2	.144	.221 *	.076	.144	.205 *	.023
	統制1	.320 *	.237 *	.247 *	.320 *	.150	.154
	統制2	.461 *	.341 *	.318 *	.461 *	.163 *	.145

*: $p<.05$

本研究での動的因子分析の模式図は，母娘の 2 者関係を対象とするため，模式図は，Figure 6-5 のように拡げられる。

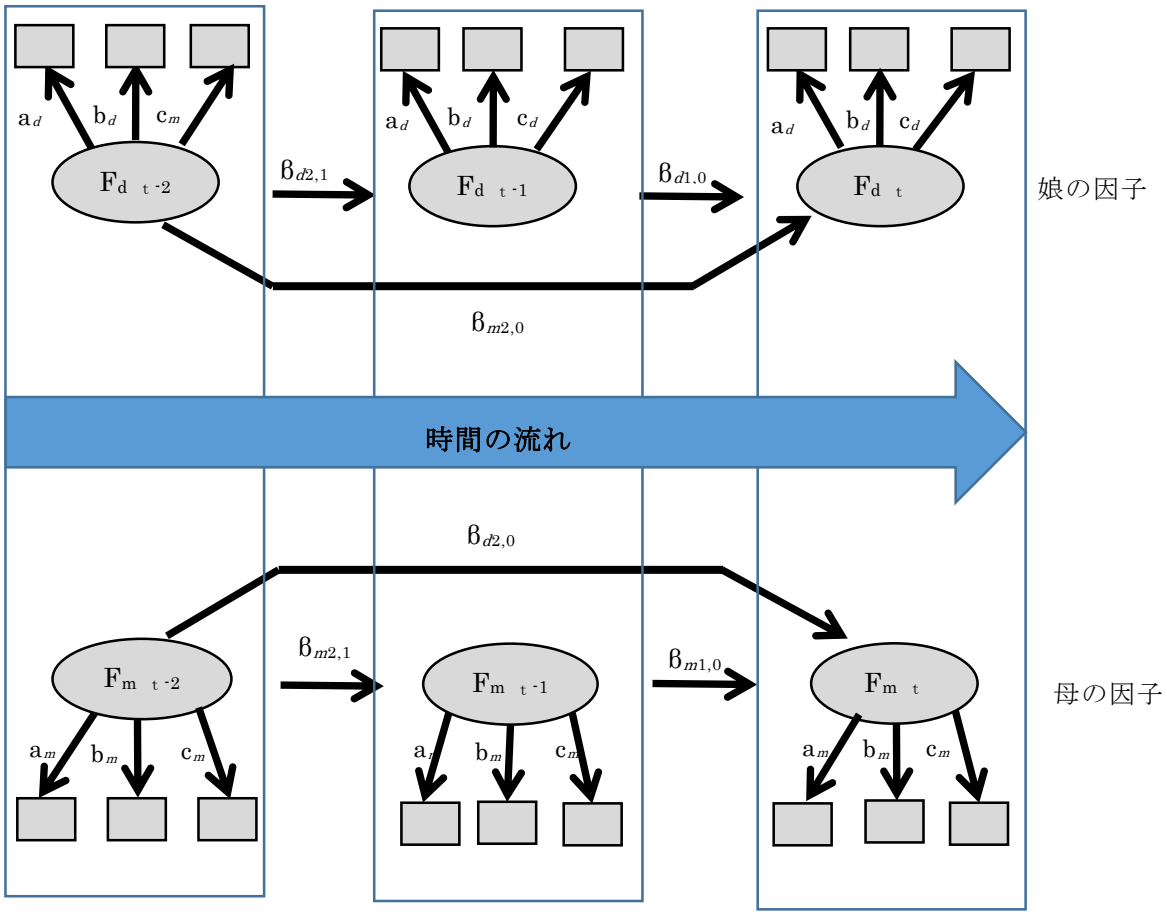


Figure 6-5 本研究の DFA の模式図

DFA の模式図（Figure 6-5）のように，まず当日の因子（t 因子），前日の因子（t-1 因子）を作成した(ラグ 1 モデルと呼ぶ)。その際，Meredith(1993)の因子的不変性の原理に基づいて，ラグ 0 で引かれた因子と観測変数の因子パターン，独自性の分散，独自性間共分散，因子の分散・共分散を同値として拘束した(清水, 2003b)。次に，同じ因子間に時系列パスを引いた。すなわち，「前日から当日へのパス（$\beta_{1,0}$）」の時系列パスである。そして修正指数を検討しながらラグのある因子にパスを引く作業を行い，モデルの修正を行った結果, 適合度の良いモデルが得られた（χ^2(720)=827.316, p=.003 GFI=.799, AGFI=.771, CFI=.958, RMSEA=.032, AIC=1027.316，SRMR= .072)。得られたラグ 1 モデルを前々日の因子（t-2 因子）に拡げた(ラグ 2 モデルと呼ぶ)。同じ因子間に「前日から当日へのパス（$\beta_{1,0}$）」,「前々日から当日へのパス（$\beta_{2,0}$）」,「前々日から前日へのパス（$\beta_{2,1}$）」の 3 種類の時系列パスを引いた。この際，ともに 1 日の遅れである**ラグ 1 の**$\beta_{1,0}$と$\beta_{2,1}$は同値拘束した。修正指数を検討しながら「前々日から当日へのパス（$\beta_{2,0}$）」のパスを引く作業を行い，モデルを修正した結果，最終的に次のようなモデルを推定することができた(χ^2(1716)=2016.598, p=.000, GFI=.715, AGFI=.696, CFI=.927, RMSEA=.035, AIC=2244.598，SRMR=.0793)。これらの指標をみると CFI については基準を満たしていなかった。これについては，測定日数が 144 日と短かったことが原因の 1 つとして考えられる(Hu & Bentler, 1999)。CFI は 0.95 に至らなかったが，RMSEA と SRMR の 2 つの指標の基準を満たしており，モデルはほぼ適合していると考えられる。ラグ 2 の構造モデルの結果を Table 6-4 に示した。また Figure 6-6 には，母娘間のラグのある箇所の内，5%水準で有意であったパスとそれに関連するパスを図示した。まず母，娘のそれぞれの因子の影響過程をみるとラグ 1 （「前々日から前日」と「前日から当日」）の同じ因子での影響は有意であり，その日の母娘関係が次の日の母娘関係へ影響を及ぼしていると思われる。またラグ 2（「前々日からの当日」）の影響については，娘と母で違いがあり，娘については，どの因子についても 5%水準で有意でなかったのに対し，母については,「統制の因子」「親和志向の因子」が前々日から当日への影響が有意となり，母と娘で影響過程が異なる結果となった。またラグ 1 の「娘の独立志向の因子」から「娘の親和志向の因子」へ有意な正のパスが引かれ，娘の独立志向的な態度・行動は次の日の娘の親和志向的な態度・行動に影響している結果となった。

Table 6-4　ラグ２モデルのラグ因子間のパス係数

				推定値	標準誤差	標準化係数	確率
ラグ1（娘）	受容_1	<---	受容_2	0.721	0.085	0.585	***
	統制_1	<---	統制_2	0.545	0.072	0.479	***
	親和_1	<---	親和_2	0.661	0.089	0.579	***
	独立_1	<---	独立_2	0.231	0.059	0.225	***
	親和_1	<---	独立_2	0.387	0.080	0.421	***
	受容_0	<---	受容_1	0.721	0.085	0.654	***
	統制_0	<---	統制_1	0.545	0.072	0.503	***
	親和_0	<---	親和_1	0.661	0.089	0.626	***
	独立_0	<---	独立_1	0.231	0.059	0.227	***
	親和_0	<---	独立_1	0.387	0.080	0.41	***
ラグ2（娘）	受容_0	<---	受容_2	0.050	0.126	0.037	*ns*
	統制_0	<---	統制_2	0.175	0.110	0.142	*ns*
	親和_0	<---	親和_2	-0.030	0.112	-0.025	*ns*
	独立_0	<---	独立_2	0.135	0.089	0.129	*ns*
	独立_0	<---	統制_2	-0.174	0.097	-0.148	†
ラグ1（娘→母）	受容（母）_1	<---	親和（娘）_2	-0.222	0.071	-0.197	**
	受容（母）_0	<---	親和（娘）_1	-0.222	0.071	-0.220	**
ラグ2（娘→母）	親和（母）_t	<---	統制（娘）_t-2	0.159	0.084	0.137	†
ラグ1（母）	受容_1	<---	受容_2	0.120	0.068	0.116	†
	統制_1	<---	統制_2	0.373	0.069	0.350	***
	親和_1	<---	親和_2	0.216	0.058	0.211	***
	独立_1	<---	独立_2	0.226	0.053	0.221	***
	受容_0	<---	受容_1	0.120	0.068	0.117	†
	統制_0	<---	統制_1	0.373	0.069	0.355	***
	親和_0	<---	親和_1	0.216	0.058	0.207	***
	独立_0	<---	独立_1	0.226	0.053	0.224	***
ラグ2（母）	受容親_0	<---	受容親_2	0.113	0.098	0.108	*ns*
	統制親_0	<---	統制親_2	0.213	0.105	0.190	*
	親和親_0	<---	親和親_2	0.215	0.083	0.202	**
	独立親_0	<---	独立親_2	0.086	0.077	0.083	*ns*
ラグ1（母→娘）	親和（娘）_1	<---	統制（母）_2	-0.295	0.084	-0.230	***
	親和（娘）_0	<---	統制（母）_1	-0.295	0.084	-0.232	***

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, †: $p<.01$, *ns*: $p>.1$

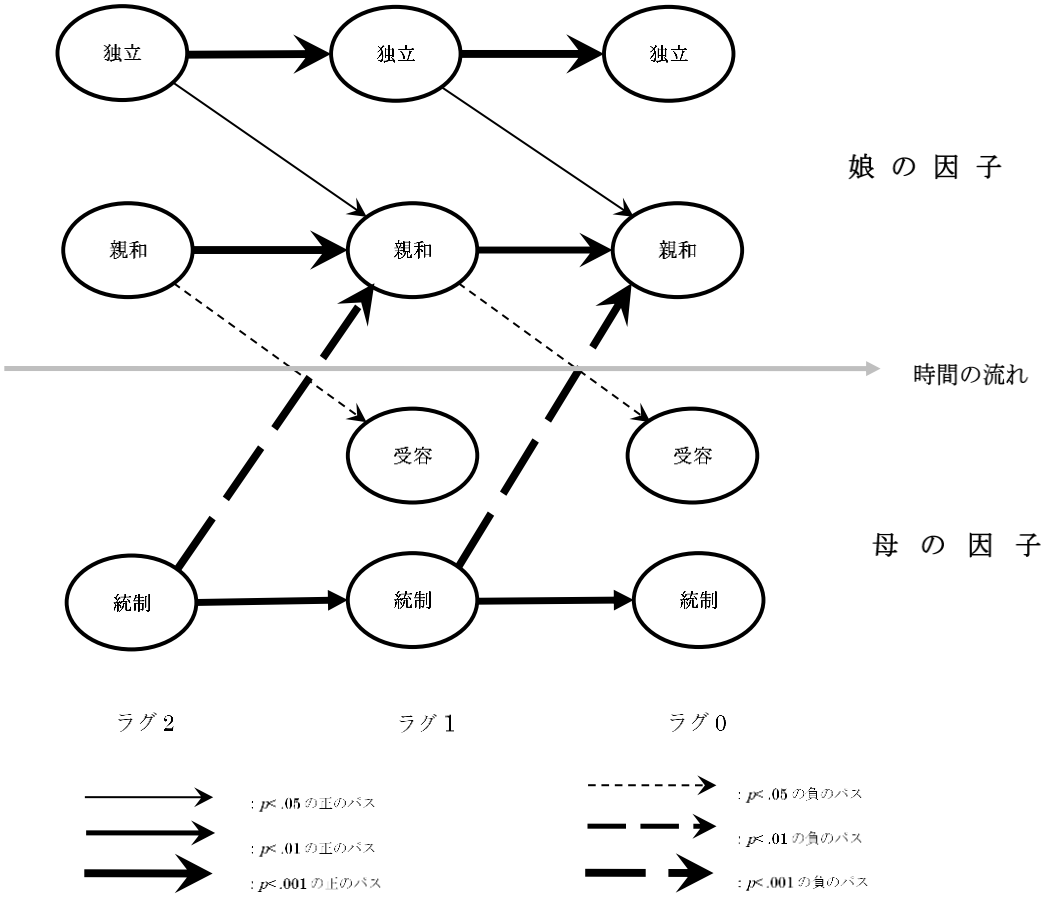


Figure 6-6　母娘間のラグ２モデル

次に母と娘の間の影響過程についてみると，ラグ１の「母の統制の因子」から「娘の親和志向の因子」へ有意な負のパスが引かれ，母の娘への統制的な態度・行動が，次の日の娘の母への親和志向的な態度・行動に影響している結果となった。またラグ１の「娘の親和志向の因子」から「母の受容の因子」へ有意な負のパスが引かれ,「娘の母への親和志向的な態度・行動」が次の日の「母の娘への受容的な態度・行動」に影響を及ぼしている結果となった。

4. 考　察

本研究は娘と母に焦点を当て，日々の母娘関係から，娘と母が認知する母娘関係の日々の影響過程に違いがあるのか，また母と娘の間での日々のインタラクションについて検討した。最初に母娘関係の構造について P 技法因子分析により，娘の母への態度・行動は「親和志向」と「独立志向」の 2 因子で捉えることが確認できた。また母の娘への態度・行動については，「受容」と「統制」の 2 因子で捉えることが確認できた。それぞれの因子を元にして，小包にした尺度得点を用いて，母娘間の影響過程について SEM による動的因子分析を用いて分析した結果，適合度の良いモデルが得られた。

まず，母娘関係の影響過程の影響過程の違いについて考察すると，ラグ 2（「前々日からの当日」）では，娘と母で違いがあり，娘については，どの因子についても 5%水準で有意でなかったのに対し，母については，「統制の因子」「親和志向の因子」が前々日から当日への影響が有意となっていた。このことから，娘よりも母の方が，その影響はより長く続く可能性があると思われる。

次に母娘関係のインタラクションについて考察すると，ラグ 0 の因子の間での母娘それぞれの因子間相関についてみると，「母の統制の因子」と「母の親和志向の因子」，「娘の独立志向の因子」と「娘の受容の因子」以外で有意な相関がみられ，互いに関連しあっていることが窺われる。また母娘間の因子の関係についてみると，「母の受容の因子」と「娘の受容の因子」の間では有意なパスが引かれなかった。しかしながら，その他の因子では，母と娘の間での有意なパスが引くことができた。すなわち，母が娘に対して統制的であると母が認知すると娘も母を統制的であると認知するということである。同様に娘が親和的，独立的であると娘が認知すれば，母も同じように，娘を親和的，独立的と認知するということである。以上のように，本分析のラグ 0 における母娘関係は相互に影響しあっていることが窺われる。続いてラグ 1 についてみると，娘，母両方において，同じ因子において前の日からの影響を受けており，日々の母娘関係が独立したものでないことがわかる。また娘の認知においては，「独立志向の因子」から「親和志向の因子」へのラグ 1 のパスは正の値を示しており，娘が独立志向的であると認知すると，次の日の娘は母に対して親和志向的であると認知すると思われる。しかしながら，母親の認知においては，「独立志向の因子」から「親和志向の因子」へのラグ 1 のパスは有意でなく，ここにおいて，母娘の認識のズレが存在すると思われる。さらに母娘間の関係についてみると，ラグ 1 の「母の統制

の因子」から「娘の親和志向の因子」へ有意な負のパスが引かれ，母の統制的な態度・行動は，次の日の娘の親和的な態度・行動に影響すると思われる。すなわち，前日に母が娘に対して統制的であると母が認知すれば，当日の娘は母に対して親和的でないと認知するということである。そして前日の娘の母への親和的な態度・行動が，当日の母の受容的な態度・行動に負の影響を及ぼしていた。すなわち前日に娘が母に対して親和的でないと娘が認知すると，母は当日，娘の反応に敏感に応答するかのように受容的になるということがいえる。このように本研究での母娘関係は，いくつかの道筋を通りながら，前々日，前日，当日へと影響しあっていることがいえる。

独自性と結合性の観点からの考察

ここで，本研究の結果を，親子関係の独自性と結合性という観点から考察したい。平石（2007）によると，Grotevant & Cooper (1985，1986)は親―両親間の言語的コミュニケーションの中で分離的側面と結合的側面を包括するモデルを提案しており，青年―両親間の分離的側面と結合的側面が同時に生起しているという立場をとっている。彼らは,「個性化（individuation process）モデル」を提唱しており，そこにおいては，青年―両親間の分離的側面と結合的側面は両者の言語的コミュニケーションの中で同時に生起しているとし，両者の視点を統合する立場をとっている。彼らによれば，個性化は次に述べる「独自性」と「結合性」の相互作用として扱われる。「独自性」の下位概念には，「自己主張（self-assertion)」と「分離(separateness)」があるとし，「自己主張」は，自分自身の視点をもち,それをはっきりと伝えることの責任を自覚していることを意味している。「分離」は自分と他の家族成員との間の見解の違いを述べる能力である。他者と自分とを区別する能力は情緒的成熟の指標とされる。また「結合性」の下位概念には「相互性（mutuality)」と「滲透性（permeability)」があるとし，「相互性」は，他者の信念や感情に対する感受性を示し，それを尊重することである。「滲透性」は他者の考えに対する応答性あるいは開放性であり，他者の考えを発展させるために承認や励ましを与えることである。

本研究での「統制的な態度・行動」や「独立志向的な態度・行動」は子どもに色々指図するといった親の主張を表す項目や親との見解の違いをはっきり述べる様子を表す項目が含まれており，これらの態度・行動は Grotevant らが述べる「独自性」の概念と類似しているように思われる。また「受容的な態度・行動」や「親和志向的な態度・行動」は子どもの意見に耳を傾けたり励ましたりするなどの子どもの感情に敏感に反応することを表す

項目や親への思いやりを表す項目が含まれており，これらの態度・行動は Grotevant らが述べる「結合性」と類似していると思われる。また平石（2007）は，「独自性」と「結合性」から成る親子間のコミュニケーション尺度を作成しているが，これらの項目をみると「統制的な態度・行動」や「独立志向的な態度・行動」は「独自性」の尺度項目と，「受容的な態度・行動」や「親和志向的な態度・行動」は「結合性」尺度項目と類似している。そして，それらを包括する本研究の母娘相互作用モデルをみると，上述したように娘と母は互いに影響し合っていることがわかる。例えば，Figure 6-4 からわかるように，娘の独立志向が強ければ，その日の娘の親和志向は低くなる。すなわち，娘が自分の意見を主張するとき，その日の母への親和志向が低くなるという関係になっている。しかしながら，Figure 6-6 からわかるように，娘の独立志向から次の日の娘の親和志向に正のパスが引かれており，娘の母への親和志向を高めているのがわかる。すなわち，娘が独立的な主張をした次の日はそれを補うかのように母と親和的になろうとする様子が窺われ，娘の独自性は次の日の結合性に影響すると考えられる。また，母の統制から次の日の娘の親和志向に負のパスが引かれており，母の統制が強い時は，次の日の娘の親和性を低くなると思われる。さらに，娘の親和志向から次の日の母の受容に負のパスが引かれており，娘の親和性が低い時，次の日の母の受容を高めると思われる。すなわち，母の娘への独自性は次の日の娘の母への結合性に影響し，さらにその次の日に母の娘の結合性に影響していると考えられる。以上のことから，今回の研究から，母娘関係は，直接的に，また間接的に両者の結合性と独自性が影響しあっていることがわかり，母と娘の間の分離的側面と結合的側面が 2 日という短い時間の中で，影響し合っていることが明らかとなった。平石（2007）の研究は一日に限定した研究なので，本研究と一概に比較することはできないが，本研究においては，二日という短い時間の中で，母の統制が娘の次の日の親和性に影響し，それがその次の日の母の受容に影響するということや，娘の独立志向が次の日の娘の親和志向に影響を与えるということから，母と娘の分離的側面と結合的側面が短い時間の流れの中で生起しており，平石（2007）の考える分離的側面と結合的側面が同時に生起しているという立場を支持できるのではないかと考える。

5. 本 章 の ま と め

本章では，母と娘の日々の影響過程を検討することを目的として，中学 1 年生の一組の母娘関係に焦点を当て，動的因子分析(DFA : dynamic factor analysis)により分析を行っ

た。まず時間経過を入れない方法で，各尺度についての下位尺度（小包）を因子分析法により構成し，因子と小包化した下位尺度の関係が成立することを母と娘別々の SEM により確認した。次に得られたそれぞれのモデルを合わせ，母娘関係の相互作用モデルの分析を行い，最後に，前々日から前日と当日の影響過程を検討するために，得られた母娘関係の相互作用モデルに時間的な遅れ(ラグ)を入れた動的因子分析を行った。その結果，その日の母娘関係が次の日の母娘関係に影響することが認められた。両者の影響過程については，その日の「母の統制の因子」から次の日の「娘の親和志向の因子」へ，またその日の「娘の親和志向の因子」から次の日の「母の受容の因子」へと影響を及ぼしており，このことから，娘と母の関係は独立した関係ではなく，日々互いに影響を及ぼしてあっていることが明らかとなった。

注記

第 6 章は，小高・紺田（2015）に加筆・修正を行ったものである。

第Ⅲ部

母―青年関係と青年の心理的側面との関係

第 7 章　母―青年関係と個人志向性・社会志向性の関連性について

1. 目　的

児童期から成人期への移行期である青年期の発達の主題は，アイデンティティの確立であり（大野, 2010），親から心理的に自立する時期でもある。この時期は親子関係の転換の時期と考えられ(Grotevant & Cooper, 1986; Laursen, Coy, & Collins, 1998)，心理的離乳という言葉で表わされるように青年が親離れしていく時期でもある(西平，1990)。

自立という概念を青年期の親子関係の視点から捉えると，これまで多くの見方がなされている。古くは，Hollingworth が，心理的離乳という言葉を用いて心理的自立を説明している（平石, 2006, 2007)。また Ausubel は脱衛星化という言葉を用いて，青年期の自立を捉えている（西平, 1990)。さらに Blos (1967) は青年期を第二の個性化という言葉を用いて自立を捉えている。これらの自立の捉え方は，親から分離することに主眼が置かれていたように思われる。しかし，1980 年代に入り，自立を親からの分離の側面だけから捉えるのではなく，親との良好な関係を維持しながら個性化する方向へと進んでいくものとして捉える研究が現れてきた。第 1 章で述べたように, Grotevant & Cooper （1985, 1986）は，「個性化（individuation process）モデル」を提唱しており，そこにおいては，青年―両親間の分離的側面と結合的側面は親子の言語的コミュニケーションの中で同時に生起しているとし，分離的な側面と結合的な側面の二つの視点を統合する立場をとっている。

これとは別に，Hoffman (1984) は，心理的分離尺度（Psychological Separation Inventory：PSI）により，心理的自立を「機能的自立」,「態度的自立」,「感情的自立」,「葛藤的自立」の 4 つの側面から捉えている。機能的自立（functional independence）とは親の助けなしに現実的な個人の問題を管理する能力であり，態度的自立（attitudinal independence）とは青年と親とは独自であり，自分自身の信念，価値や態度を持っていることを意味し，感情的自立（emotional independence）とは親との関係において，是認，親密さ，連帯，感情的なサポートの欲求に過度にとらわれていないことであり，葛藤的自立 (conflictual independence) とは親との関係の中で過度の罪悪感，不安，不信，責任感，抑制，憤慨，怒りにとらわれていないことであるとしている。そして，葛藤的自立はより高い人格適応と関係し，感情的自立は学業的適応と関係すると報告している。

これらの研究から，親からの心理的自立は単に親から分離するだけではなく，「親や周

囲との関係をうまく保ちながら，認知・情緒・行動というさまざまな領域で，親とは別の個人として自信を持って考え，行動し，その責任をとれるようになること（山田・宮下，2007)」を意味すると考えられる。言い換えるならば，親からの心理的自立は，親からの「分離・独立」の側面と親との「調和・関係性」の側面の二つから捉える必要がある。小高（1998)の研究で得られた「親への親和志向」と「親からの客観的独立志向」と対応させるならば，親との関係をうまく保つということは親と親和的になることである。そして親とは別の個人として自信をもつことは，親とは別の独自の生き方を志向するものである。すなわち，青年の親からの心理的自立とは，これらの二つが共に高い時に達成すると予想される。そして，親―青年関係は，青年のアイデンティティや心理的発達や適応といった，青年の心理的側面に影響すると予想される。

本章においては，青年と母親との関係に焦点を当て，まず青年の母への態度・行動の上位概念を検討し，次に青年の母親への態度・行動が，青年の心理的側面に与える影響について， SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により検討することを目的とする。性ごとに分析する理由としては，これまでの研究をみると親子関係の性差が報告されているため （内海, 2013)，その影響過程に違いがある可能性があるためである。

本研究においては，青年の心理的側面については，青年の心理社会的適応に焦点を当て，親―青年関係と心理社会的適応との関係についてみていくことにする。ところで適応には，内的適応と外的適応があるとされ，前者は心理的適応とも言われ，幸福感・満足感を経験し，心的状態が安定していることを意味する。後者は，社会的・文化的適応と言われ，個人が生きている社会的環境，あるいは文化的適応と言われる(伊藤, 1993a)。ここでは，これら 2 つの適応を心理社会的適応とし，心理社会的適応の指標として伊藤（1993a）の個人志向性・社会志向性尺度を用いて，青年の母親への態度・行動との関連性について検討する。

ここで個人志向性と社会志向性について説明すると，個人志向性とは，“他者とは異なるものとしての自己”に対する意識であり，自他の差異性を強調する方向に働き，個性や独自性を尊重しながら，自分の信念に従って我が道をいく態度を意味し，自己自身の内的基準への志向性であり，自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で自己実現に近い特性である。一方，社会志向性とは“他者との関係性における自己”に対する意識であり，他者あるいは社会の規範への志向であり，社会の中でうまく適応してく在り方を意味する（伊藤, 1993a, 1993b)。本研究で心理社会的適応の指標として個人志向性・社会志向性尺度を

用いたのは，健康な発達過程には社会志向性と個人志向性の二つの志向性がバランスよく共存的に高まっていくことやこの尺度が人間の発達と適応を測定する指標となり得ることが明らかにされており（伊藤, 1993b），この尺度が発達的観点から青年期における母―青年関係と青年の心理社会的適応との関連を検討する上で，有効な指標と考えられるからである。

先ほど述べた青年の自立の観点から心理社会的適応を考えるならば，親とは別の独自の生き方を志向することは，自己の内的基準を志向することであり，自分自身の独自の個性的で主体的な態度に繋がると予想される。一方，親と親和的になることは，親の考えを受け入れるということでもあり，他者と調和する態度に繋がると予想される。つまり親―青年関係の在り方によって，心理社会的適応も異なってくると予想され，母への親和志向的な態度と母からの客観的独立志向的な態度が高い青年はより適応的な状態にあると予想される。本研究においては，このような視点から，母―青年関係と青年の心理社会的適応との関係について検討したいと考える。

2. 方　法

(1) 調査対象者：調査参加者は，大学生 308 名（男 123 名，女 185 名）であった。対象者の中に母親がいない者（男子）が 1 人いたが，母親がわりの人について評定しており，本分析においては分析の対象としている。なお，欠損値が質問紙の 5%を超えるデータや性別・年齢が不明な者 11 名は省いている。対象者の年齢は 19.7 歳(SD=1.39)であった。

(2) 倫理的配慮：調査を始める前に，調査への協力は本人の自由意志であること，協力しない場合でも不利益が生じないこと，個人情報についてはプライバシーを尊重し，関連法規を遵守することを説明した。調査参加者は承諾を得た者だけである。

(3) 調査時期：2010 年 12 月に集団法で行った。

(4) 質問項目：①小高（2014a）で得られた因子を元にした青年の母への態度・行動に関する 6 尺度（「母との情愛的絆（5 項目）」「母からのポジティブな影響（5 項目）」「母との対立（5 項目）」「母への服従（5 項目）」「母に対する客観視（3 項目）」「母とは別の独自の生き方（2 項目）」）25 項目を用いた。②伊藤（1993a, 1993b）の個人志向性・社会志向性尺度を用いた。この尺度は，自己実現的特性を捉える個人志向性尺度 8 項目と社会適応的

特性を捉える社会志向性尺度 9 項目から成る（Table 7-3 を参照）。なお評定は「当てはまらない（1 点）」～「当てはまる（4 点）」の 4 件法である。

(5) 分析手続き：①欠損値については EM 法により推定した。② 青年の母への態度・行動についての各尺度に含まれる項目得点の合計点を算出した。③ 上記で得られた 6 尺度得点について，男女別に，スクリーグラフにより因子数を 2 つ定め，主因子法により分析を行い，その後プロマックス法による回転を行った。④ 個人志向性・社会志向性尺度ごとに，因子数を 1 つとし，主因子法により因子分析を行った。⑤ 上記で得られたそれぞれの尺度得点について，性差を検討するために t 検定を行った。⑥ 上記で得られた母―青年関係と個人志向性・社会志向性のそれぞれの因子パターン値に基づいて，青年の母親への態度・行動が心理社会的適応への影響過程についてのモデルを作成し，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析を行った。

なおモデルの適合度については，Mulaik (2010)や Hu & Bentler (1999)，清水ほか (2014) を参考にして，を参考にして，CFI (>.95), RMSEA (<.05)，SRMR (<.08)という適合度指標を用いた。以上の分析は SPSS21 と AMOS21 を用いて行った。

3. 結　果

(1)　母への態度・行動についての因子分析の結果

青年の母への態度・行動の 6 つの尺度について，男女別に因子数を 2 つと定め，主因子法による因子解の推定を行い，プロマックス法による回転を行った。その結果，男女に類似した 2 つの因子が得られた（Table 7-1 を参照）。

① 第 1 因子：母への親和志向の因子

この因子には，男女に共通して，「母からのポジティブな影響」「母との情愛的な絆」が正の負荷を示しており，「母との対立」は負の負荷を示していた。このことから，この因子は，母への親和的な青年の態度・行動を表す因子であると思われる。この因子を「母への親和志向」の因子と命名した。

② 第 2 因子：母からの客観的独立志向の因子

この因子には，男女に共通して，「母に対する客観視」「母とは別の独自の生き方」が正の負荷を示し，「母への服従」が負の負荷を示していた。この因子は，親を客観的に捉え，親とは別の生き方をしようとしている青年の態度・行動を表す因子であると思われる。こ

の因子を「母からの客観的独立志向」の因子と命名した。

これら 2 因子の因子間相関をみると，男女で違いがあり，男子はこの 2 因子は，ほぼ独立であったのに対し，女子では両者は負の相関を示していた。

Table 7-1 母―青年関係の因子パターン値

	男性		女性	
	親和	独立	親和	独立
情愛	**0.835**	0.179	**0.871**	0.008
影響	**0.673**	-0.156	**0.743**	-0.091
対立	**-0.427**	0.154	**-0.461**	-0.130
独自	-0.008	**0.608**	-0.054	**0.543**
客観	-0.037	**0.473**	0.243	**0.452**
服従	0.105	**-0.356**	0.073	**-0.467**
因子間相関	0.030		-0.333	

(2) 母―青年関係の性差について

青年の母への態度・行動についての性差を検討するために，6 尺度の尺度得点の男女別の平均値について，t 検定により分析を行った(Table 7-2 を参照)。その結果，母との情愛的絆の尺度，母への服従の尺度，母からのポジティブな影響の尺度，母に対する客観視の尺度で，女子の方が男子よりも得点が有意に高かった（$t(306)>2.04$, $p<.05$）。

Table 7-2 男女別の母―青年関係の尺度得点

	男性		女性		
尺度名	*M*	*SD*	*M*	*SD*	*p*
情愛	17.08	2.63	17.72	2.72	*
服従	9.53	2.49	10.97	2.70	***
影響	13.51	3.39	14.38	3.28	*
対立	11.51	3.17	11.83	3.15	*n.s.*
客観	8.83	1.99	9.42	1.65	**
独自	7.05	1.19	6.95	1.13	*n.s*

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, *n.s.*: $p>.1$

(3) 個人志向性・社会志向性尺度の妥当性の検討

個人志向性・社会志向性尺度の各尺度について主因子法による因子解の推定を行った。その結果，Table 7-3 の結果となった。負荷量が低い値を示す項目もあったが，男女いずれかで 0.25 以上を示しており，伊藤の元尺度は因子的に妥当であると思われ，それぞれの尺度に含まれる項目を用いて分析を進めることにした。次に個人志向性・社会志向性の尺度得点の平均値を男女別に算出し， *t* 検定を行ったところ，個人志向性については男子の方が女子よりも有意に高い値となった（$t(306)=2.78$, $p<.01$）。

Table 7-3 個人志向性・社会志向性の因子パターン値

		全体			男性			女性		
		因子パターン	*M*	*SD*	因子パターン	*M*	*SD*	因子パターン	*M*	*SD*
個人志向性	22 自分の信念に基づいて生きている。	(1) 0.648	3.01	0.75	0.665	3.17	0.72	0.627	2.90	0.75
	14 自分の生きるべき道が見つからない。	(2) -0.573	2.54	0.99	-0.473	2.55	1.05	-0.657	2.52	0.96
	29 自分が本当に何をやりたいのかわからない。	(3) -0.557	2.94	1.05	-0.471	2.89	1.09	-0.599	2.98	1.02
	6 自分の心に正直に生きている。	(4) 0.553	2.93	0.82	0.574	2.91	0.87	0.573	2.94	0.78
	26 周りと反対でも，自分が正しいと思うことは主張できる。	(4) 0.470	2.89	0.84	0.413	3.07	0.87	0.498	2.77	0.80
	10 小さなことも自分ひとりでは決められない。	(3) -0.411	1.98	0.95	-0.511	1.77	0.84	-0.335	2.12	1.00
	2 自分の個性を活かそうと努めている。	(2) 0.351	3.16	0.75	0.266	3.23	0.79	0.409	3.11	0.73
	18 自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない。	(1) 0.278	2.24	0.92	0.251	2.37	0.97	0.270	2.15	0.87
社会志向性	25 社会(周りの人)のために役に立つ人間になりたい。	(1) 0.645	3.32	0.79	0.603	3.26	0.88	0.658	3.37	0.72
	5 ほかの人から尊敬される人間になりたい。	(2) 0.620	3.40	0.80	0.670	3.34	0.87	0.582	3.44	0.74
	28 人とのつながりを大切にしている。	(3) 0.535	3.42	0.73	0.437	3.43	0.70	0.624	3.41	0.75
	30 社会(周りの人)の中で自分が果たすべき役割がある。	(4) 0.451	2.63	0.87	0.458	2.76	0.91	0.478	2.54	0.83
	17 周りとの調和を重んじている。	(4) 0.446	3.30	0.67	0.543	3.34	0.65	0.388	3.27	0.69
	1 人に対しては，誠実であるよう心がけている。	(4) 0.389	3.38	0.61	0.500	3.38	0.68	0.299	3.38	0.56
	9 ほかの人の気持ちになることができる。	(3) 0.380	3.01	0.73	0.479	2.89	0.82	0.306	3.09	0.65
	21 社会のルールに従って生きていると思う。	(2) 0.350	3.10	0.71	0.338	2.97	0.83	0.341	3.19	0.60
	13 他人に恥ずかしくないように生きている。	(1) 0.230	2.89	0.79	0.143	2.85	0.89	0.287	2.92	0.73

注）各項目の右欄の括弧付数字はそれぞれの尺度の小包を表す

(4) 母―青年関係と個人志向性・社会志向性との関連について

先述したように，親からの客観的独立志向性は自分自身の内的基準を志向する個人志向性と，親への親和志向性は他者や社会の調和を志向する社会志向性と関連すると予想される。また上記の男女の平均値の結果から青年の母への態度・行動や個人志向性に男女差が認められた。そこで青年の母親への態度・行動が心理社会的適応への影響過程について，Figure 7-1 のようなモデルを出発モデルとして，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により検討した。なお，母―青年関係については，因子分析の結果を元にして測定モデ

ルを構成した。一方，個人志向性・社会志向性については，上記で得られた因子パターン値を元にして，全体の因子パターンの小さい項目と大きい項目という組み合わせになるように，因子パターン値のバランスをとるように下位尺度（小包）を構成した。下位尺度を構成する理由として，SEM による分析において潜在因子を含むモデルを構成する際に，項目そのものを観測変数とするよりも，小包化した下位尺度を用いた方が，信頼性が向上し，より適切な解を推定できる可能性が高まる（狩野，2002a，2002b）ためである。なお項目をまとめて下位尺度を構成する方法は，小包化（parceling）と呼ばれる（Cattell, 1956）。

次に，男女の母―青年関係の因子構造，個人志向性・社会志向性の因子構造が類似していたので，男女の因子パターン不変性の拘束を行って，モデルの推定を行った。その結果，モデルの適合度は十分な値ではなかった（χ^2=272.442，*df*=155，P=.000，RMSEA=.050，CFI=.863, AIC=382.442, SRMR=.088）。

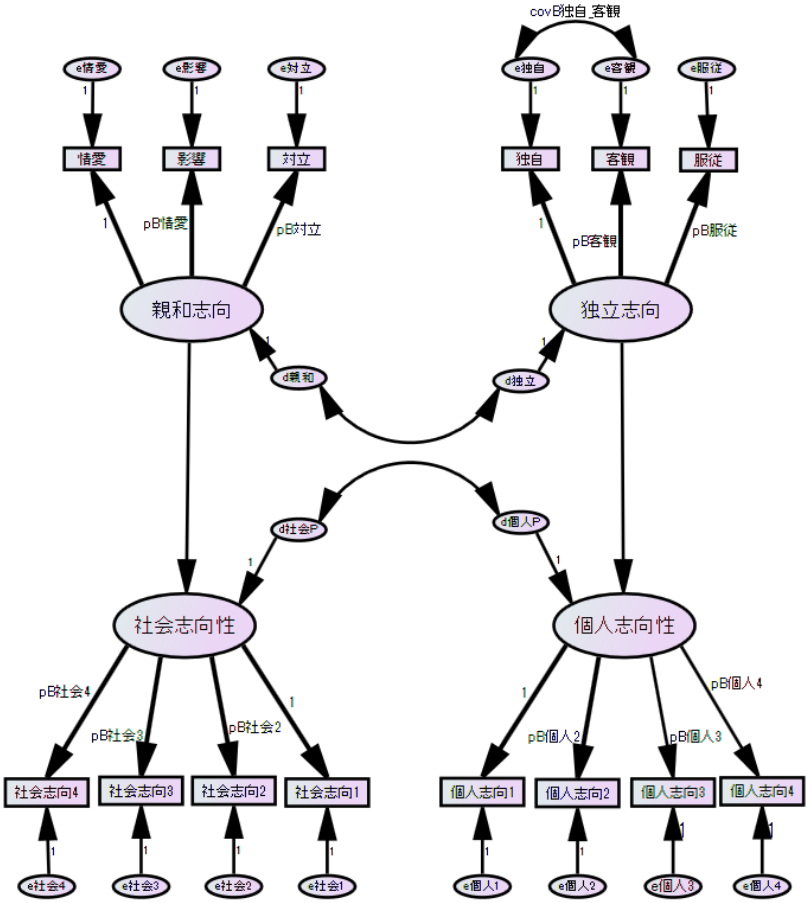


Figure 7-1　母―青年関係と心理社会的適応についての出発モデル

さらに十分なレベルの適合度を追求するために，男女の修正指数の中で最も大きいものについてのパスを順次増やした。その際,因子パターン不変性による拘束は行わなかった。その結果，Figure 7-2，Figure 7-3 のような結果となり（χ^2=172.938，df=141，p=.035, RMSEA=.027, CFI=.963, AIC=310.938, SRMR=.069），適合度の良いモデルを推定することができた。独自性間共分散に関しても解釈可能な関連が想定できた(清水・柴田, 2008)。

まず，母―青年関係についてみると，男子においても女子においても，母―青年関係の因子に負荷を示していた尺度は，それぞれに該当する因子からのパスが 5%水準で有意であった(Table 7-4 を参照)。詳細にみると，女子においては，「母への親和志向」の因子から「母に対する客観視」の尺度に有意な正のパスが引かれ，男女で違いが認められた。次に，社会志向性，個人志向性のそれぞれの小包は，それぞれに該当する因子からのパスが 5%水準で有意であった。また個人志向性から社会志向性の一つの小包に負のパスが引かれ，社会志向性から個人志向性の一つの小包に正のパスが引かれた。最後に母―青年関係から個人志向性，社会志向性へのパスをみると，「母からの客観的独立志向」から「個人志向性」へのパス，「母への親和志向」から「社会志向性」へのパスは，どちらも有意な正の値であった。

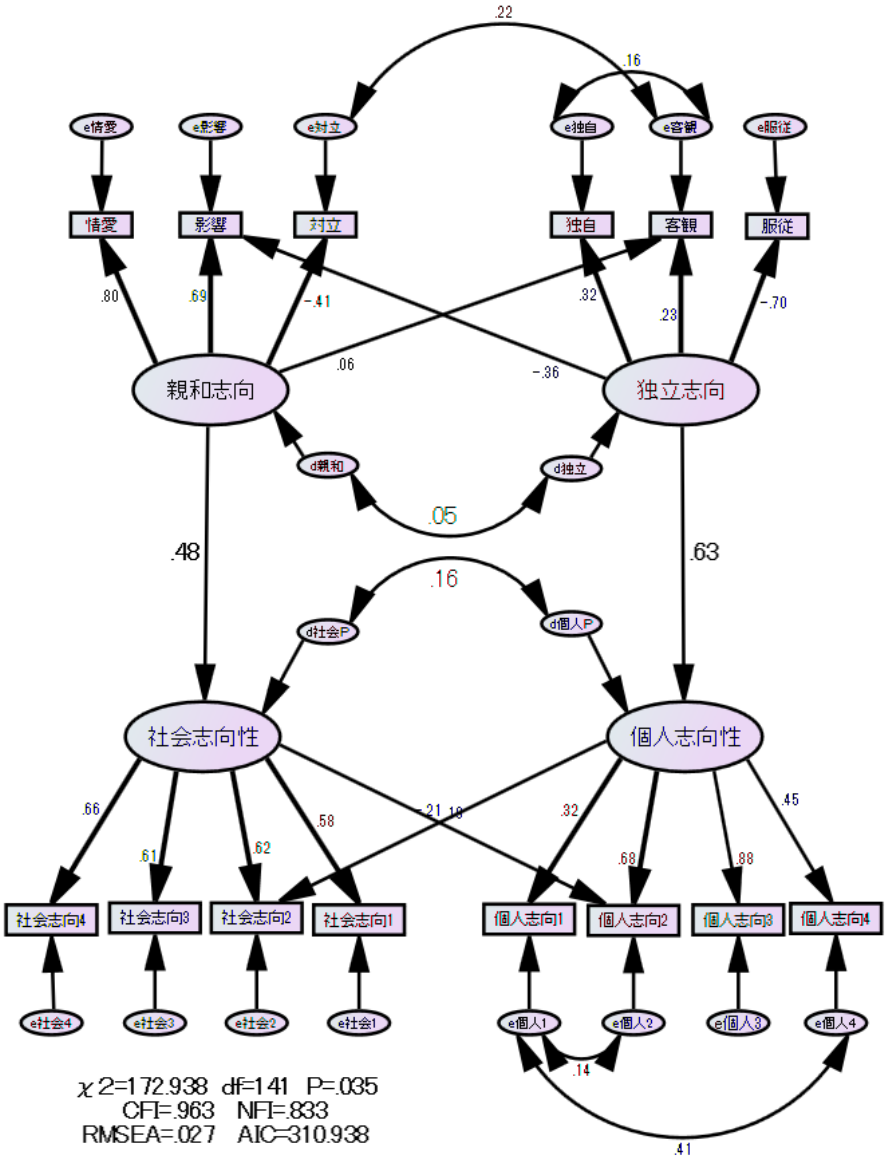


Figure 7-2　母―青年関係と心理社会的適応についての最終モデル(男子)

注）これらの値は推定値を標準化したものである。

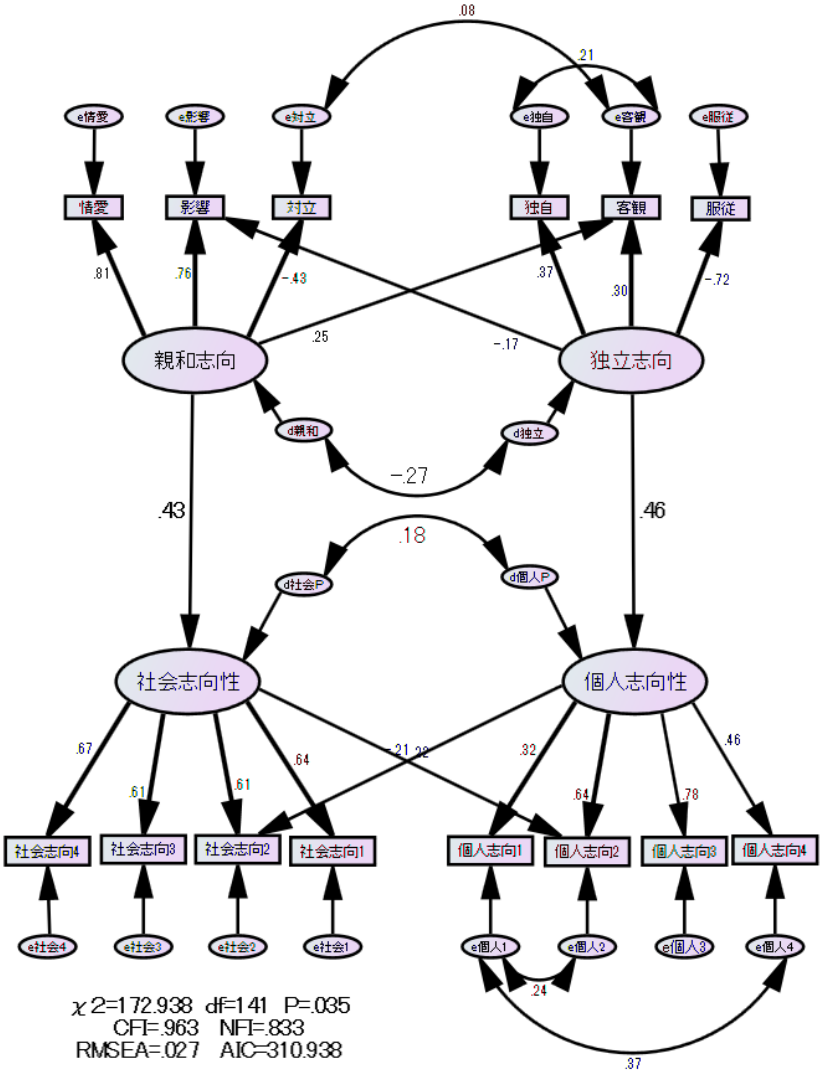


Figure 7-3　母―青年関係と心理社会的適応についての最終モデル(女子

注）これらの値は推定値を標準化したものである。

Table 7-4 最終モデルのパスの推定値

				男性				女性			
				非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*	推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*
構造モデル	社会志向性	←	親和志向	0.179	0.048	0.476	***	0.133	0.031	0.433	***
	個人志向性	←	独立志向	0.697	0.266	0.633	**	0.440	0.163	0.464	**
測定モデル	情愛	←	親和志向	1		0.800		1		0.810	
	影響	←	親和志向	1.130	0.132	0.694	***	1.130	0.132	0.765	***
	対立	←	親和志向	-0.616	0.097	-0.409	***	-0.616	0.097	-0.430	***
	客観	←	親和志向	0.057	0.095	0.061	*n.s.*	0.185	0.065	0.245	**
	独自	←	独立志向	1		0.322		1		0.373	
	客観	←	独立志向	1.203	0.368	0.233	**	1.203	0.368	0.304	**
	服従	←	独立志向	-4.583	1.193	-0.703	***	-4.583	1.193	-0.717	***
	影響	←	独立志向	-3.175	1.177	-0.355	**	-1.322	0.662	-0.171	*
	Pc社会P1	←	社会志向性	1		0.575		1		0.641	
	Pc社会P2	←	社会志向性	1.005	0.132	0.620	***	1.005	0.132	0.614	***
	Pc社会P3	←	社会志向性	0.948	0.123	0.608	***	0.948	0.123	0.615	***
	Pc社会P4	←	社会志向性	1.311	0.163	0.664	***	1.311	0.163	0.669	***
	Pc個人P2	←	社会志向性	0.323	0.139	0.195	*	0.435	0.144	0.222	**
	Pc個人P1	←	個人志向性	1		0.323		1		0.325	
	Pc個人P2	←	個人志向性	2.111	0.418	0.678	***	2.111	0.418	0.637	***
	Pc個人P3	←	個人志向性	3.076	0.662	0.882	***	3.076	0.662	0.783	***
	Pc個人P4	←	個人志向性	1.485	0.284	0.451	***	1.485	0.284	0.459	***
	Pc社会P2	←	個人志向性	-0.637	0.300	-0.209	*	-0.583	0.243	-0.210	*
因子間共分散	d親和	⇔	d独立	0.040	0.111	0.050	*n.s.*	-0.246	0.121	-0.265	*
	d社会P	⇔	d個人P	0.035	0.036	0.156	*n.s.*	0.040	0.028	0.184	*n.s.*
独自性間共分散	e個人1	⇔	e個人4	0.620	0.151	0.411	***	0.497	0.109	0.373	***
	e個人2	⇔	e個人1	0.156	0.104	0.142	*n.s.*	0.267	0.094	0.241	**
	e対立	⇔	e客観	1.181	0.518	0.216	*	0.363	0.340	0.081	*n.s.*
	e独自	⇔	e客観	0.342	0.117	0.160	**	0.342	0.117	0.208	**

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, *n.s.*: $p>.1$

4. 考　察

(1) 母―青年関係の因子構造と性差について

本研究では，まず母―青年関係の構造分析を行った。その結果，「母への親和志向」と「母からの客観的独立志向」の二軸で捉えることが確認された。このことは，小高（1998, 2010）の結果と一致する。また水本・山根（2011）においても類似した二つの軸（「信頼関係」と「心理的分離」）を確認しており，母―青年関係を捉える時，これら二つの軸で捉えることは妥当であると思われる。これらの二つの軸は，平石が述べる「独自性の側面」と「結合性の側面」とも合致すると思われる。「独自性」の下位概念には，「自己主張（self-assertion）」と「分離(separateness)」があり，「自己主張」は，自分自身の視点をもち，それをはっきりと伝えることの責任を自覚していることを意味し，「分離」は自分と他の家族成員との間の見解の違いを述べる能力である。他者と自分とを区別する能力は情緒的成熟の指標とされる。また「結合性」の下位概念には「相互性（mutuality）」と「滲透性（permeability）」があるとし，「相互性」は，他者の信念や感情に対する感受性を示し，それを尊重することである。「滲透性」は他者の考えに対する応答性あるいは開放性であり，他者の考えを発展させるために承認や励ましを与えることである。つまり，母からの客観的独立志向は「独自性の側面」と類似しており，母への親和志向は「結合性の側面」と類似していると思われる。

次に男子と女子の間で母―青年関係の尺度の平均値に違いがあるかどうかについて検討した。その結果，「母との情愛的絆」「母からのポジティブな影響」といった母への親和志向に関する尺度で，女子の方が男子よりも有意に高い結果となっていた。また「母に対する客観視」については男子よりも女子の方が有意に高い結果となっていた。「母に対する客観視」の尺度は，女子においては親和志向の因子に弱い正の負荷を示すことから，母を客観的に捉えることは親和志向の側面と考えられる。このことから母親と娘は，息子と比較し，情緒的な結びつきが強いと考えられる。さらに「母への服従」についても男子よりも女子の方が有意に高い結果となっており，ここにおいても母と娘の距離の近さが現れていると思われる。このことは，これまでの母娘関係は情緒的な絆が強いという結果と一致しており（小高, 2000, 2010; 渡邊, 1997, 2003; 佐藤, 1993），青年期の母―娘関係は母―息子関係より親密であると思われる。

信田（1997）は仲の良い母娘関係を一卵性母娘という言葉で表現しているが，本研究で

得られた母娘の親和的で距離の近い親密な関係はこの側面として捉えることができよう。ここで母娘関係が親密な理由について考えると，母の娘への期待が息子に対する期待と異なることが考えられる。話を聞いてほしい，自分の理解者でいてほしいといった「精神的な役割」について，息子よりも娘へ期待していることがこのような結果になったと思われる（高木・柏木，2000)。つまり娘は母親にとって特別な存在であるため，息子よりも娘とのコミュニケーション頻度が高くなり，その結果，母娘の間での情緒的な絆が強まり，親密になると推測される。

(2) 母―青年関係と心理社会的適応との関連について

母への親和志向と母からの客観的独立志向が，青年の心理社会的適応へどのように影響するのかということについて SEM を用いて検討した結果，適合度の良いモデルが得られた。男女共に，母への親和志向的な態度は社会志向性と関係しており，母への客観的独立志向的な態度は個人志向性と関係していた。すなわち母への親和志向的な関係は，他者との調和的共存や社会適応と，また母からの客観的独立志向的な関係は，自他の差異性を強調する個性や独自性を尊重することと関係しているのがわかる。

ところで，第 1 章で述べたように小高（1998）は，親―青年関係から心理的離乳モデルを提案し，4 つの型を提案している。その中で，「対等な関係」を最も高次な関係としている。今回得られた結果からもわかるように，母に対して親和的であるという関係性の良さを保ちながら，母から客観的に独立している時に，青年の心理社会的適応は最も高くなると予想され，この型は，より高次な関係であると考えられる。水本・山根（2010)においても，密着型の娘と自立型の娘に抑うつ度が低い結果が得られている。このことから，この時期の母―青年関係は青年の心理社会的適応にとって非常に重要な役割があると思われる。

また Allen, Hauser, Bell, &O'Connor (1994) は，親との良好な関係を維持しながら自立を達成する過程が，青年期の重要な発達課題であるとしている。本研究においても，母から親和的になりながら，母を客観的に捉える時に，青年の心理社会的適応が最も高くなると考えられ，母との親和的な関係を維持しながら母から独立していくことが青年の心理社会的適応にとって重要であるということが窺われる。しかしながら，男子と女子では，その構造が若干異なる。詳細にみると，男子では「母への親和志向」と「母からの客観的独立志向」の因子間相関がほぼゼロであったのに対し，女子では，負の因子間相関を示していた。このことは，女子の母への親和志向が高ければ高いほど，母からの客観的独立志向

的な態度を低くすることを意味する。そしてそのことが，女子青年の個人志向性を低くすると考えられる。このような親からの精神的な自立のプロセスの性差については，次のような理由が考えられる。女子の自己感覚は，結びつきや関係を作り，維持することで形成される（Miller, 1976　河野訳　1989)。このことは他者の要求を優先することに繋がり，自己主張や主体性を抑制することに繋がると予想される。母親との関係においても，母との間で親密さが維持され，母との関係性の中で自己を築いていると考えられ，女子の個人志向性は抑制される可能性があると考えられる。

これとは別に Campbell, Adams, & Dobson (1984) は，親―青年関係とアイデンティティ・ステイタスとの関連について検討している。その結果，アイデンティティ達成地位とモラトリアム地位にある青年は，親との情緒的結びつきと親からの独立が高く，アイデンティティ拡散地位は情緒的結びつきも親からの独立も低く，フォークロージャー地位は，親からの独立を伴わない，情緒的結びつきが高い結果となっていた。Campbell らの研究からもわかるように，青年のアイデンティティ形成のためには，親との関係をうまく保ちながら，親とは別の個人として捉えることが大事であることが窺われ，本研究とも一致すると考える。

ところで，伊藤（1997）は，個人志向性と社会志向性の中に，適応的なポジティブな側面と不適応的なネガティブな側面が存在することを述べている。個人志向性は，自他の差異性を強調する方向に働き，個性や独自性を尊重しながら，自分の信念に従って我が道をいく態度として顕現する。しかし，これは場合によっては，エゴイズムや自己顕示，強度のナルシズムという否定的な態度にもつながるということである。一方，社会志向性は，自と他の共存への志向を意味し，他者との調和的共存や社会適応・社会貢献としてあらわれる。しかしその反面で，他者への追従や関係の中への埋没という現象をもたらすネガティブな側面を持つということである。伊藤はこのように，個人志向性と社会志向性の中の，適応的なポジティブな側面と不適応的なネガティブな側面が存在するとし，個人志向性と社会志向性のポジティブな側面とネガティブな側面を捉える PN 尺度を作成している。本研究においては，適応的なポジティブな側面に焦点を当てたものであるが，小高（2014b）は個人志向性・社会志向性のネガティブな側面と親―青年関係との関係について相関係数により検討している。そしてその結果，青年の母への親和志向的な態度・行動は，個人志向性のネガティブな側面と社会志向性のネガティブな側面とは関係しなかったが，青年の母への客観的独立志向的な態度・行動と個人志向性のネガティブな側面との間で弱い正の

関係が認められたことを報告している。すなわち，親からの客観的独立志向的な態度・行動は，青年を利己的にする可能性があると思われる。親から客観的独立志向的な態度・行動は，個人志向性のポジティブな態度を形成する働きがあるが，それと同時にネガティブな態度も生じさせる可能性があると予想される。すなわち，親―青年関係の中での独立志向的な態度・行動は必ずしも青年期後期の青年の心理的適応にとって肯定的な意味だけを持つのではなく，ネガティブな側面を内包する可能性があると思われる。

5. 本章のまとめ

本章おいては，はじめに，青年と母との関係に焦点を当て，青年の母への態度・行動の構造分析，及び男女の尺度得点の性差を検討した。その結果，青年期においては，男子に比べて，女子の方が母との関係がより親密であることが認められた。次に青年の母への態度・行動が心理社会的適応へどのように影響するかを検討するために，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析を行った。その結果，母―青年関係と青年の心理社会的適応との間で有意な関連が認められた。

注記

第 7 章は，小高　恵（2014b)に加筆・修正を行ったものである。

第 8 章　母娘関係と情動性の関連性について

第 1 章で述べたように，これまでの親子関係研究をみれば，集団を対象とした横断研究が多い。その一方で，縦断的な研究の数はそれほど多くはなく，特に，個別の親子関係に焦点を当て，時間経過の中で起きていることを追求した研究は少ない（小高, 2012）。例えば，荘島（2010）のインタビュー形式の研究や坂上（2002）の 1 組の母子関係を捉えた観察法による研究，小松（2006）の女児とその母親の153日分の会話記録による研究などだけである。これらの個性記述的研究の多くは，時間経過の中で起きることを質的に分析したところに特徴がある。

本研究においては，まず，3組の母と娘の関係について個別に焦点を当て，日々の心理的な変化から，変数に潜在する因子を探索する方法（Cattellの古典的なP技法因子分析で，DFAのラグ0の分析に相当）を適用して，母と娘の日々の母娘関係の構造を明らかにすると共に母娘の情動性との関連について検討する。次に，3 組の母娘に共通する関係と個別性の強い関係とを特定するために，SEMによりDFAのラグ0の3組の母娘の 2 者関係の同時分析を行う。その際，3 組を独立に行った探索的因子分析の結果の中で，3組に共通すると判断できる因子と変数を取り上げることにする。これは因子間の関係を，3組に共通する測定モデルの上で検討するためであり，ここでは，3組において不変な因子を追求してみるために，紺田・清水(2015)のように多集団を対象として同時分析の手法をDFAに応用してみることにする。

1. 母娘関係の個別記述的な分析（分析 1）

1-1.　目　的

分析 1 では，3 組の母と娘の関係に焦点を当て，日々の心理的な変化から，それぞれの母娘ペアに潜在する母娘関係の因子と母娘の情動性の因子を Cattell の古典的な P 技法因子分析により明らかにする。そして，得られた因子を元にして，それぞれの母娘関係と母と娘の情動性との関連を明らかにする。

1-2. 方　法

(1) 対象者と測定期間：中学 1 年生の女子 3 名とその母親 3 名であった。それぞれの年齢（調査開始時の年齢）と期間は Table 8-1 の通りである。

(2) 質問項目：

① 娘の母への態度・行動についての尺度：小高（2000, 2010, 2011)は,「親和志向」と「独立志向」の 2 つの二次因子を抽出しているが，この二つの因子を元にして，それぞれ 7 項目ずつ，合計 14 項目を子ども用・親用で項目内容が同じになるように作成した。

②母の娘への態度・行動についての尺度：辻岡・山本（1976）の作成した EICA の「受容」「統制」の二次元を元にして，それぞれ 4 項目ずつ，合計 8 項目を子ども用・親用で項目内容が同じになるように作成した。調査では，娘と母がそれぞれの質問紙に回答した。項目反応カテゴリーは「1：全く当てはまらない」「2：ほとんど当てはまらない」「3：どちらかといえば当てはまらない」「4：どちらかといえば当てはまる」「5：ほぼ当てはまる」「6：非常によく当てはまる」の 6 件法である。

③情動性の尺度：清水・山本（2008）を参考にして作成した情動性に関する項目 5 項目を用いた。

回答は，娘・母それぞれに対して行ってもらった。測定は，毎日同じ時間くらい（寝る前）に，今日一日を振り返りどのくらいあてはまるか，と教示した。質問紙は，1 日分ごとに項目の順序をランダムに再配置したもの 16 パターン用意し，これを使用した。

(3) 分析手続き：①上記の項目の娘(27 項目)・母(27 項目)について，複数の因子の数で解釈可能性という観点から個別に分析を行い，その結果を踏まえて因子数を 7 個と定め，主因子法により共通性を推定し，その後，プロマックス回転を行った。ここでは，3 組を統一的にみるために，固有値や解釈から，因子数を同じとした。なお，欠損値にはその前後日の値から計算した平均を代入することにした。

Table 8-1　本研究の対象者と測定期間

対象ペア	ID1001		ID1002		ID1004	
	娘	母	娘	母	娘	母
年齢	12	45	13	43	12	43
調査期間　始	2010/10/7	2010/10/7	2010/10/14 ～ 2011/1/23	2010/10/14 ～ 2011/1/22	2010/10/20	2010/10/20
	～	～	2011/2/7 ～	2011/2/7 ～	～	～
終	2011/2/28	2011/2/28	2011/4/1	2011/4/1	2011/3/12	2011/3/12
日数	145	145	156	155	144	144
分析対象日数	**145**		**155**		**144**	

注）本分析は中学１年生のみのものであり，他の学年は省いている。

1-3.　結　果

(1)　母娘関係の項目と情動性の項目についての因子分析－1－

対象者ID1001の母娘関係と母娘の情動性について，因子分析を行った結果，次の7つの因子が得られた(Table8-2を参照)。

① ID1001の７つの因子について

第1因子　娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子

この因子には，娘の「お母さんは，私を励ましてくれた(.844)」，「お母さんは，私の自主性を尊重してくれた(.828)」，「お母さんは，私に色々気をつかってくれた(.819)」，「お母さんは，私の言うことに耳を傾けてくれた(.811)」，「お母さんの言うことはその通りだと思った(.809)」，「一日の出来事をお母さんに話した(.777)」等の項目が負荷し

ていた。つまり母の自律性を重んじた受容した態度・行動に関する項目と，娘と母の親和的な態度・行動が多く含まれており，この因子を「娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子」と命名した。さらに詳細にみると，娘の「一日楽しかった」が正の負荷を示しており(.442)，娘が母との間で親和的なコミュニケーション行われている時は，娘は楽しい日であったと認知していると思われる。また母の「私のことを理解してくれた」が正の負荷を示しており（.331），娘が母と親和的であると認知している時，母は娘が自分のことを理解してくれていると認知しているようである。

第2因子　母の情動性因子

この因子には，母の「イライラすることがあった(.901)」，「不安なことがあった(.842)」「お母さんは，私に決まりを守るように言った(.819)」，「傷つくことがあった(.813)」の情動性に関する項目が負荷していた。ここでは，この因子を「母の情動性因子」と命名した。詳細にみると，母の「私に感謝の言葉を口にしてくれた(-.427)」や「子どもの喜びそうなことをした(-.344)」の項目に負の負荷を示しており，母親の情動性が高い時は，娘は自分に感謝の言葉を口にしてくれないと感じておらず，娘の喜びそうなことをしない傾向にあると思われる。

第3因子　娘側・娘の母への反抗因子

この因子には，「お母さんと言い合いになった(.849)」，「お母さんに口答えした(.846)」「お母さんは口うるさいと感じた(.742)」，「お母さんの言動で納得できないことがあった(.599)」等の項目が負荷を示していた。そこで，この因子を「娘側・娘の母への反抗因子」と命名した。詳細にみると，母の「子どもに勉強についてとやかく言った(.431)」が負荷を示していた。その一方で，娘の「お母さんをいたわってあげた(.530)」が正の負荷を示しており，母が娘に勉強についてとやかく言った時に，娘の母への反抗が強いと言える。一方，娘は母へ反抗しても，母を労わるという行動も行っていることが窺われ，娘の母への反抗は，母を労わるというようにバランスを取りながら行っていると思われる。

第4因子　母側・娘の母への従順因子

この因子には，母の「私の言う通りに従ってくれた(.705)」，「私に対して素直であった(.685)」，「私の期待に答えてくれた(.538)」等の項目が負荷を示しており，母親が認知するする，娘の母への従順さを表す因子であると思われる。この因子を「母側・娘の母への従順因子」と命名した。詳細にみると，母親の「子どもに色々指図した（.335）」が正の負荷を示している一方で，娘の「お母さんは，私に色々指図した(-.325)」が負の負荷

を示しており，母娘の認知の違いが認められた。

第5因子　娘の情動性因子

この因子には，娘の「色々と悩むことがあった(.802)」，「イライラすることがあった(.719)」，「傷つくことがあった(.661)」，「不安なことがあった(.561)」の情動性に関する項目が負荷を示しており，この因子を「娘の情動性因子」と命名した。

第6因子　母側・母の娘への励まし因子

この因子には，母の「子どもの言うことに耳を傾けた(.711)」，「一日の出来事を私に話してくれた(.627)」，「子どもを励ました(.541)」等の項目が負荷を示しており，この因子を「母側・励ましの因子」と命名した。さらに詳細にみると，母の「子どもに勉強についてとやかく言った(.418)」と娘の「お母さんから勉強についてとやかく言われた(.313)」が同時に負荷を示しており，この母は，励ましながら，勉強について意見し，子どももそのように認知していると予想される。

第7因子　母側・母の娘への気遣い因子

この因子には，「子どもに色々気を使った（.772）」，「子どもの喜びそうなことをした（.534）」等の項目が負荷を示しており，この因子は，母親が娘に気遣っている様子を表す因子であると思われる。ここでは，「母側・母の娘への気遣い因子」と命名した。

② ID1001の因子間相関について

次に因子間相関をみると，第 1 因子（娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）は，第 3 因子（娘側・娘の母への反抗因子）と弱い負の相関を示していた。また，第 1 因子（娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）は，第 4 因子（母側・娘の母への従順因子）と弱い正の相関を示しており，娘が母と親和的コミュニケーションをしていると認知しているほど，娘の母への反抗が少なく，母は娘が母に対して従順であると認知している結果となった。また第 3 因子（娘側・娘の母への反抗因子）は，第 4 因子（母側・娘の母への従順因子），第 6 因子（母側・母の娘への励まし因子）と弱い負の相関を示しており，娘が母への反抗が強いと認知している時は，母も娘は従順でないと捉えており，娘の励ましは少ないと認知している結果となった。さらに，第 5 因子（娘の情動性因子）をみると，第 6 因子（母側・母の娘への励まし因子）と弱い正の相関を示しており(.232)，娘の情動性が高い時には，母親は娘を励ましていると認知している結果となった。

Table 8-2　ID1001 の母娘関係についての因子分析（因子パタン値と因子間相関）

			娘 親和	母 情動性	娘 反抗	母 従順	娘 情動性	母 励まし	母 気遣い	MEAN	SD
娘の回答	親和／不和	お母さんに色々と相談した	**0.757**	-0.094	-0.097	-0.054	0.070	0.096	-0.023	4.59	0.80
		お母さんの言うことはその通りだと思った	**0.809**	0.013	0.061	0.143	0.070	-0.098	0.008	4.51	0.87
		お母さんに感謝の言葉を言った	**0.754**	-0.104	0.207	0.086	0.092	-0.053	-0.159	4.59	0.72
		お母さんをいたわってあげた	**0.458**	0.009	**0.530**	0.037	0.025	0.020	0.139	3.67	1.10
		今日のお母さんは頑張っていたと思う	**0.704**	-0.009	0.224	0.253	-0.004	-0.114	0.007	4.30	0.83
		お母さんの言うことに耳を傾けた	**0.738**	-0.101	-0.138	-0.214	0.105	0.032	-0.145	4.91	0.72
		一日の出来事をお母さんに話した	**0.777**	0.098	-0.083	-0.086	0.025	0.085	0.005	4.65	0.71
	独立／服従	お母さんと言い合いになった	0.002	0.009	**0.849**	-0.017	0.020	0.102	-0.083	3.60	1.21
		お母さんの言動で納得できないことがあった	-0.163	-0.063	**0.599**	-0.197	0.057	-0.017	-0.105	4.37	1.19
		お母さんは口うるさいと感じた	-0.110	0.000	**0.742**	-0.101	0.105	-0.049	-0.059	3.80	1.34
		お母さんの言う通りに従った	**0.710**	-0.127	-0.016	0.032	-0.090	0.097	-0.106	4.76	0.71
		お母さんの期待に答えたと思う	**0.612**	0.028	-0.167	-0.038	-0.102	0.002	-0.048	4.60	0.93
		お母さんに口答えした	0.013	0.089	**0.846**	-0.071	0.047	0.113	-0.029	3.70	1.27
		お母さんに対して素直であったと思う	**0.770**	0.003	0.080	0.064	0.005	0.023	0.029	4.40	0.94
	受容	お母さんは、私の言うことに耳を傾けてくれた	**0.811**	0.002	-0.147	-0.173	-0.038	0.062	0.070	4.84	0.78
		お母さんは、私を励ましてくれた	**0.844**	0.097	0.065	0.163	-0.048	-0.082	0.140	4.44	1.02
		お母さんは、私に色々気をつかってくれた	**0.819**	-0.032	0.038	-0.058	-0.103	0.092	0.148	4.48	0.87
		お母さんは、私の喜びそうなことをしてくれた	**0.711**	-0.017	-0.006	0.141	-0.073	-0.027	0.105	4.90	0.77
	統制	お母さんは、私に色々指図した	**0.569**	-0.133	-0.080	**-0.325**	-0.004	0.002	-0.057	4.80	0.76
		お母さんは、私に決まりを守るように言った	**0.775**	0.113	0.171	0.048	-0.004	-0.115	0.056	4.16	0.98
		お母さんは、私の自主性を尊重してくれた	**0.828**	0.091	-0.194	-0.155	-0.058	-0.083	-0.053	4.59	0.82
		お母さんから勉強についてとやかく言われた	0.189	0.042	0.245	-0.179	0.044	**0.313**	0.064	5.91	0.37
	情動性	色々と悩むことがあった	-0.020	-0.006	0.038	0.034	**0.802**	-0.096	0.105	5.99	0.08
		不安なことがあった	-0.040	-0.132	-0.023	-0.048	**0.561**	0.061	-0.081	5.97	0.20
		傷つくことがあった	-0.046	0.058	0.066	0.014	**0.661**	0.031	0.066	5.85	0.67
		一日楽しかった	**0.442**	0.028	0.025	0.031	0.046	-0.120	0.092	5.59	1.13
		イライラすることがあった	-0.009	0.067	0.082	0.020	**0.719**	-0.024	0.128	5.99	0.12
母の回答	親和／不和	子どもから相談があった	0.142	0.178	0.090	0.218	-0.140	-0.026	0.186	3.71	0.74
		私の言動に共感してくれた	0.053	-0.262	0.001	0.279	-0.030	0.244	-0.047	3.70	0.45
		私に感謝の言葉を口にしてくれた	-0.099	**-0.427**	-0.071	0.168	0.168	0.146	0.078	3.84	0.60
		私をいたわってくれた	0.020	-0.050	0.158	**0.361**	0.068	0.040	-0.216	3.40	0.52
		私のことを理解してくれた	**0.331**	-0.077	0.032	0.198	-0.003	0.228	**-0.383**	3.93	0.26
		私の考えに耳を傾けてくれた	0.013	-0.148	0.202	0.284	-0.037	0.147	-0.173	3.94	0.33
		一日の出来事を私に話してくれた	0.010	0.187	0.067	0.039	0.079	**0.627**	0.035	4.23	0.97
	独立／服従	ささいなことから言い合いが始まった	-0.028	0.008	0.178	**-0.478**	-0.070	0.043	-0.113	2.34	0.71
		私に対して、批判的な言動があった	-0.068	-0.063	0.047	-0.157	-0.104	-0.151	0.034	3.42	0.66
		私から干渉されるのを嫌がった	-0.137	-0.125	0.293	-0.260	-0.092	-0.174	0.040	3.00	0.60
		私の言う通りに従ってくれた	-0.034	0.040	-0.035	**0.705**	-0.008	-0.051	-0.020	4.12	0.36
		私の期待に答えてくれた	-0.064	0.003	-0.148	**0.538**	-0.071	0.153	-0.129	4.00	0.44
		私に口答えした	-0.093	-0.068	0.273	-0.383	-0.172	-0.121	-0.008	2.71	0.72
		私に対して素直であった	-0.035	-0.121	-0.139	**0.685**	-0.017	0.035	-0.059	4.09	0.44
	受容	子どもの言うことに耳を傾けた	-0.079	0.061	-0.035	0.138	0.002	**0.711**	0.175	4.61	0.61
		子どもを励ました	-0.119	0.016	0.074	0.108	-0.126	**0.541**	0.202	4.00	0.62
		子どもに色々気を使った	0.060	-0.118	0.008	-0.134	0.051	0.207	**0.772**	4.19	0.44
		子どもの喜びそうなことをした	-0.046	**-0.344**	-0.047	-0.032	0.040	0.235	**0.534**	4.31	0.65
	統制	子どもに色々指図した	-0.188	-0.162	0.276	**0.335**	-0.105	-0.103	-0.088	4.12	0.50
		子どもに決まりを守るように言った	-0.080	0.060	0.141	0.036	-0.167	-0.050	**-0.360**	3.68	0.56
		子どもの自主性を尊重した	-0.022	-0.010	-0.135	0.268	-0.028	-0.274	0.154	4.02	0.26
		子どもに勉強についてとやかく言った	-0.094	-0.019	**0.431**	-0.142	-0.161	**0.418**	0.172	4.15	1.09
	情動性	色々と悩むことがあった	-0.051	**0.819**	0.036	0.013	0.011	0.218	-0.021	4.06	1.22
		不安なことがあった	-0.077	**0.842**	-0.079	0.043	-0.040	0.182	-0.052	3.94	1.26
		傷つくことがあった	-0.029	**0.813**	0.011	-0.065	0.014	0.020	-0.138	3.27	1.20
		一日楽しかった	-0.034	**-0.837**	-0.010	-0.029	-0.026	0.059	0.048	4.75	0.80
		イライラすることがあった	0.005	**0.901**	0.014	-0.051	0.050	0.077	-0.070	3.87	1.42
		母の情動性	-0.191								
		娘側・娘の母への反抗	**-0.332**	-0.106							
		母側・娘の母への従順	**0.274**	-0.073	**-0.213**						
		娘の情動性	-0.068	0.082	-0.150	0.042					
		母側・母の娘への励まし	0.133	0.095	**-0.230**	0.118	**0.232**				
		母側・母の娘への気遣い	-0.175	0.078	0.068	0.088	-0.108	**-0.232**			

(2)　母娘関係の項目と情動性の項目についての因子分析－2－

対象者ID1002の母娘関係と母娘の情動性について，因子分析を行った結果，次の7つの因子が得られた(Table8-3を参照)。

① ID1002の７つの因子について

第１因子　母側・娘と母の親和的コミュニケーションの因子

この因子には，母親の「私に感謝の言葉を口にしてくれた(.689)」,「私の言動に共感してくれた(.677)」,「私の考えに耳を傾けてくれた(.672)」,「私をいたわってくれた(.594)」「私の期待に答えてくれた(.574)」,「子どもの言うことに耳を傾けた(.563)」等の項目が負荷しており，この因子は，母が認知する母と娘の親和的なコミュニケーションを表す因子であると思われる。ここでは，この因子を「母側・娘と母の親和的コミュニケーションの因子」と命名した。

第２因子　母側・娘の母への反抗の因子

この因子には，母親の「ささいなことから言い合いが始まった(.893)」,「私に対して，批判的な言動があった(.770)」,「私に口答えした(.709)」等の項目が負荷を示しており，母親の認知する娘の母へ反発する態度・行動と思われる。ここでは「母側・娘の母への反抗因子」と命名した。さらに詳細にみると，母親の「子どもに色々指図した(.645)」や「子どもに勉強についてとやかく言った(.536)」も負荷を示しており，母が統制的であるとき，娘の反抗が強くなると母は認知している。

第３因子　娘側・娘の母への反抗因子

この因子には，娘の「お母さんは口うるさいと感じた(.774)」,「お母さんと言い合いになった(.714)」,「お母さんに口答えした(.705)」等の項目が負荷を示しており，娘が認知する娘の母への反抗的な態度・行動を表す因子であると思われる。ここでは,「娘側・娘の母への反抗の因子」と命名した。さらに詳細にみると，娘の「お母さんから勉強についてとやかく言われた(.466)」,「お母さんは，私に色々指図した(.426)」の統制に関する項目も負荷しており，母親の統制が強いときに，娘の反抗は強くなると思われる。

第４因子　娘側・母の娘への受容因子

この因子には，娘の「お母さんは，私に色々気をつかってくれた（.637)」,「お母さんの言うことはその通りだと思った(.628)」,「お母さんは，私の言うことに耳を傾けてくれた(.529)」等の項目が正の負荷を示しており，この因子は娘の認知する母の娘を受容する態

度・行動を表すと思われる。ここでは,「娘側・母の娘への受容因子」と命名した。詳細にみると,「お母さんから勉強についてとやかく言われた(-.447)」,「お母さんは，私に色々指図した(-.428)」が負の負荷を示しており，娘の認知する母親の統制が強くなる時に，娘の母への反抗は強くなると予想される。

第 5 因子　母の情動性因子

この因子には,「不安なことがあった(.742)」,「色々と悩むことがあった(.657)」,「イライラすることがあった(.637)」,「一日楽しかった(.593)」の母親の情動性に関する項目が負荷を示していた。ここでは,「母の情動性の因子」と命名した。

第 6 因子　娘側・娘の母への優しさの因子

この因子には，娘の「お母さんに対して素直であったと思う(.702)」,「お母さんの期待に答えたと思う(.549)」,「お母さんをいたわってあげた(.501)」等の項目が負荷を示しており，この因子は，娘の母への思いやりを表す因子であると思われる。ここでは,「娘側・娘の母への優しさの因子」と命名した。詳細に検討すると, 母親の「子どもを励ました(.323)」が正の負荷を示しており，母の娘への励ましが，娘の母への優しさと関係している。

第 7 因子　娘の情動性因子

この因子には, 娘の「不安なことがあった (.736)」,「イライラすることがあった(.574)」,「色々と悩むことがあった(.550)」の娘の情動性に関する項目が負荷を示しており，この因子を「娘の情動性因子」と命名した。詳細にみると，娘の「お母さんは，私に決まりを守るように言った(.336)」,「お母さんに感謝の言葉を言った（-.330)」の項目も負荷を示しており，母の統制が強いと娘が認知するほど，娘の情動性は強くなり，娘の母への感謝の言葉は少なくなると思われる。

② ID1002の因子間相関について

次に因子間相関をみると，第1因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）は，第2因子（母側・娘の母への反抗因子）と，そして第5因子（母の情動性因子）と負の相関を示しており，母が娘と親和的コミュニケーションをとっていると認知するほど，娘は反抗的ではないと母は認知し，母の情動性は低くなるという結果となった。第1因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）は，第4因子（娘側・母の受容因子）と，そして第6因子（娘側・娘の母への優しさ因子）と弱い正の因子間相関を示しており，母が親和的コミュニケーションをとっていると認知するほど，娘は母を受容的であると認知

し，娘も母に対して優しくなっていると認知する結果となった。

また，第2因子（母側・娘の母への反抗因子）は第5因子（母の情動性因子）と正の因子間相関を示し，第3因子（娘側・娘の母への反抗因子）は第5因子（母の情動性因子）と弱い正の因子間相関を示しており，娘が反抗的であると母が認知するほど，また娘が母へ反抗的であると認知するほど，母の情動性は高くなる結果となった。

さらに，第7因子（娘の情動性因子）は，第4因子（娘側・母の受容因子）と第6因子（娘側・娘の母への優しさ因子）と弱い負の因子間相関を示しており，娘の情動性が高い時は，娘は母を受容的でないと認知し，母に対しての優しさが低いと認知する結果となった。

Table 8-3　ID1002 の母娘関係についての因子分析（因子パタン値と因子間相関）

			母 親和	母 反抗	娘 反抗	娘 受容	母 情動性	娘 優しさ	娘 情動性	MEAN	SD
娘の回答	親和/不和	お母さんに色々と相談した	0.027	0.117	0.210	0.179	-0.099	**0.394**	-0.128	4.00	1.42
		お母さんの言うことはその通りだと思った	-0.098	0.026	-0.271	**0.628**	0.147	0.149	0.183	4.75	1.12
		お母さんに感謝の言葉を言った	0.091	0.069	-0.093	-0.076	0.018	0.225	**-0.330**	5.33	1.28
		お母さんをいたわってあげた	0.030	-0.024	-0.005	0.072	-0.077	**0.501**	0.117	4.60	1.12
		今日のお母さんは頑張っていたと思う	-0.019	0.027	0.080	0.273	-0.088	-0.085	-0.193	5.77	0.61
		お母さんの言うことに耳を傾けた	0.015	-0.103	0.071	-0.014	0.010	**0.461**	-0.164	4.45	1.27
		一日の出来事をお母さんに話した	0.134	0.161	0.058	0.128	0.121	**0.382**	-0.152	3.98	1.57
	独立/服従	お母さんと言い合いになった	0.100	0.156	**0.714**	-0.024	-0.049	-0.295	0.073	1.72	1.49
		お母さんの言動で納得できないことがあった	0.104	0.005	0.248	**-0.444**	0.076	0.010	0.251	2.70	1.56
		お母さんは口うるさいと感じた	-0.040	0.089	**0.774**	0.043	-0.038	0.080	-0.036	2.02	1.50
		お母さんの言う通りに従った	-0.059	0.031	-0.160	0.093	-0.018	**0.471**	0.066	3.71	1.36
		お母さんの期待に答えたと思う	0.006	-0.032	-0.089	-0.033	-0.130	**0.549**	-0.074	4.02	1.42
		お母さんに口答えした	-0.078	0.072	**0.705**	0.112	-0.019	-0.205	0.045	1.93	1.60
		お母さんに対して素直であったと思う	-0.061	-0.057	-0.151	-0.095	0.030	**0.702**	-0.062	4.00	1.30
	受容	お母さんは、私の言うことに耳を傾けてくれた	0.125	0.060	-0.019	**0.529**	0.143	0.001	0.085	4.70	1.23
		お母さんは、私を励ましてくれた	-0.054	-0.098	0.050	0.275	0.084	**0.310**	0.166	4.21	1.34
		お母さんは、私に色々気をつかってくれた	-0.005	0.125	0.131	**0.637**	-0.055	0.087	0.091	5.07	1.38
		お母さんは、私の喜びそうなことをしてくれた	-0.039	-0.083	0.106	**0.350**	-0.040	0.014	-0.129	5.23	1.01
	統制	お母さんは、私に色々指図した	-0.084	-0.137	**0.426**	**-0.428**	0.118	0.096	0.046	2.68	1.53
		お母さんは、私に決まりを守るように言った	-0.045	0.015	0.189	-0.131	0.020	**0.348**	**0.336**	1.80	1.35
		お母さんは、私の自主性を尊重してくれた	-0.217	-0.055	0.006	0.271	**-0.398**	0.229	0.166	4.62	1.62
		お母さんから勉強についてとやかく言われた	-0.109	-0.080	**0.466**	**-0.447**	-0.041	0.109	-0.059	2.79	1.65
	情動性	色々と悩むことがあった	0.025	0.117	-0.093	0.091	-0.232	-0.050	**0.550**	3.26	1.90
		不安なことがあった	0.008	-0.007	-0.107	0.120	0.124	-0.019	**0.736**	2.10	1.60
		傷つくことがあった	0.127	0.212	0.011	-0.224	0.015	-0.021	**0.501**	2.04	1.45
		一日楽しかった	0.040	0.251	-0.102	0.099	-0.004	0.208	-0.185	5.10	1.16
		イライラすることがあった	0.018	-0.143	0.293	-0.070	0.024	-0.058	**0.574**	2.19	1.54
母の回答	親和/不和	子どもから相談があった	**0.363**	**0.382**	-0.004	-0.104	0.213	0.149	0.003	2.84	0.56
		私の言動に共感してくれた	**0.677**	-0.101	-0.023	-0.076	0.195	-0.007	0.019	3.95	0.38
		私に感謝の言葉を口にしてくれた	**0.689**	0.029	-0.065	-0.006	-0.037	-0.029	0.032	3.96	0.36
		私をいたわってくれた	**0.594**	-0.069	-0.069	-0.025	-0.069	-0.168	0.153	3.97	0.34
		私のことを理解してくれた	**0.419**	-0.132	0.087	0.024	-0.159	0.076	0.137	4.06	0.31
		私の考えに耳を傾けてくれた	**0.672**	0.094	-0.087	-0.049	-0.131	-0.024	-0.044	3.97	0.40
		一日の出来事を私に話してくれた	**0.562**	0.278	0.010	0.000	0.028	0.004	-0.118	3.46	0.78
	独立/服従	ささいなことから言い合いが始まった	0.024	**0.893**	0.111	0.103	-0.109	-0.035	-0.009	2.10	0.93
		私に対して、批判的な言動があった	-0.063	**0.770**	0.112	0.032	0.019	-0.040	0.129	1.99	0.83
		私から干渉されるのを嫌がった	-0.001	**0.476**	0.179	0.185	-0.062	0.056	-0.079	2.88	0.62
		私の言う通りに従ってくれた	**0.433**	-0.169	-0.162	0.110	-0.148	0.027	0.160	3.80	0.46
		私の期待に答えてくれた	**0.574**	-0.132	0.131	0.051	-0.034	0.032	0.053	3.95	0.38
		私に口答えした	-0.135	**0.709**	0.074	0.150	0.058	-0.033	0.045	2.10	0.85
		私に対して素直であった	**0.492**	-0.235	-0.002	0.182	-0.079	-0.068	-0.087	4.00	0.50
	受容	子どもの言うことに耳を傾けた	**0.563**	0.041	0.011	0.017	0.113	0.114	-0.061	4.07	0.31
		子どもを励ました	**0.206**	-0.008	0.126	-0.047	**-0.466**	**0.323**	0.081	4.10	0.36
		子どもに色々気を使った	-0.015	-0.176	0.035	-0.192	-0.226	-0.061	0.057	4.09	0.31
		子どもの喜びそうなことをした	**0.297**	-0.053	-0.053	-0.068	-0.092	0.027	-0.116	4.06	0.51
	統制	子どもに色々指図した	-0.048	**0.645**	-0.125	-0.227	-0.004	-0.067	0.007	2.61	0.73
		子どもに決まりを守るように言った	-0.084	0.209	-0.257	-0.323	-0.003	0.095	0.235	2.24	0.77
		子どもの自主性を尊重した	0.069	**-0.374**	0.081	0.297	-0.198	-0.086	-0.033	4.69	0.49
		子どもに勉強についてとやかく言った	-0.251	**0.536**	-0.062	-0.242	-0.284	-0.029	-0.022	2.47	0.83
	情動性	色々と悩むことがあった	-0.096	-0.075	0.053	0.048	**0.657**	-0.003	0.081	3.70	0.57
		不安なことがあった	-0.009	-0.222	-0.058	-0.128	**0.742**	0.082	-0.046	3.35	0.63
		傷つくことがあった	-0.007	0.171	**0.479**	0.214	**0.263**	0.101	-0.092	2.20	0.70
		一日楽しかった	0.206	0.015	0.004	-0.109	**-0.593**	0.084	-0.044	4.02	0.52
		イライラすることがあった	0.064	0.176	0.046	0.124	**0.637**	-0.019	0.071	3.00	0.73

母側・娘の母への反抗	**-0.472**					
娘側・娘の母への反抗	0.000	0.075				
娘側・母の娘への受容	**0.223**	-0.182	0.096			
母の情動性	**-0.255**	**0.310**	**0.256**	0.004		
娘側・娘の母への優しさ	**0.233**	-0.095	-0.025	0.149	0.150	
娘の情動性	-0.171	0.067	0.159	**-0.247**	0.027	**-0.247**

(3)　母娘関係の項目と情動性の項目についての因子分析－3－

対象者ID1004の母娘関係と母娘の情動性について，因子分析を行った結果，次の7つの因子が得られた(Table8-4を参照)。

① ID1004の７つの因子について

第1因子　母側・娘と母の親和的コミュニケーション因子

この因子には，母の「子どもの言うことに耳を傾けた(.755)」，「私に対して素直であった（.740）」,「私の考えに耳を傾けてくれた(.689)」,「私の言動に共感してくれた(.665)」「私のことを理解してくれた(.641)」等の項目が負荷しており，この因子は，母と娘の親和的なコミュニケーションを表していると思われる。このことから，この因子を「母側・娘と母の親和的コミュニケーション因子」と命名した。

第２因子　娘側・娘の母への反抗因子

この因子には，娘の「お母さんに口答えした(.859)」,「お母さんの言動で納得できないことがあった(.793)」,「お母さんは口うるさいと感じた(.783)」などの項目が負荷を示しており，娘の認知する娘の母への反抗を表す因子であると思われる。ここでは,「娘側・娘の母への反抗因子」と命名した。さらに詳細にみると母の「私に対して，批判的な言動があった(.462)」,「私に口答えした(.355)」も同時に正の負荷を示しており，娘が反発を感じている時，母もそのように認知している。

第３因子　母娘・母の娘への統制因子

この因子には，母の「お母さんから勉強についてとやかく言われた(.759)」，娘の「子どもに勉強についてとやかく言った(.759)」,「お母さんの期待に答えたと思う(-.713)」,「お母さんをいたわってあげた(-.684)」，母の「私をいたわってくれた（-.587）」等の項目が負荷を示しており，ここでは「母娘・母の娘への統制因子」と命名した。この因子は，娘と母の両方に同時に負荷を示し，母が統制的である時，娘も母は統制的であると認知していることが窺われる。

第４因子　娘の情動性因子

この因子には,娘の「色々と悩むことがあった(.695)」,娘の「不安なことがあった(.673)」,「傷つくことがあった(.447)」，「一日楽しかった(-.433)」の娘の情動性に関する項目と，娘の「お母さんは，私を励ましてくれた（.825）」,「お母さんは，私の自主性を尊重してくれた(.720)」,「お母さんは，私に色々気をつかってくれた（.648）」,「お母さんに色々と相

談した(.495)」といった娘の認知する母の娘への励ましの項目が負荷を示していた。すなわち，娘の情動性が高い時，母の娘への励ましは強くなると娘が認知していることが窺われる。ここでは，娘の情動性が多く負荷を示していることから，「娘の情動性因子」と命名した。

第 5 因子　母の情動性因子

この因子には，母の「色々と悩むことがあった(.980)」，「不安なことがあった(.858)」，「イライラすることがあった(.748)」，「一日楽しかった(-.743)」等の項目が負荷を示しており，この因子を「母の情動性因子」と命名した。さらに詳細にみると，娘の「今日のお母さんは頑張っていたと思う(.611)」が負荷を示しており，母の情動性が高い時，娘は母親の頑張りを評価していると思われる。

第 6 因子　母側・母の娘への毅然さ因子

この因子には，「子どもに色々気を使った（-.640)」，「子どもの喜びそうなことをした(-.549)」に高い負の負荷を示していた。さらに詳細にみると，娘の「お母さんは，私の言うことに耳を傾けてくれた(.483)」「お母さんの言うことはその通りだと思った(.374)」「お母さんの言う通りに従った(.365)」等の項目が負荷を示していた。すなわち，娘の母が娘に対して気遣いしない因子であると思われる。一方，娘は，お母さんは耳を傾けてくれていると認知していることから，母親の娘への毅然とした態度・行動を表すのではないかと考える。ここでは「母側・母の娘への毅然さ因子」と命名した。

第 7 因子　娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子

この因子には，娘の「お母さんは，私の喜びそうなことをしてくれた(.588)」，「お母さんは，私に色々気をつかってくれた(.385)」，「お母さんの言うことはその通りだと思った(.363)」，「お母さんに感謝の言葉を言った(.354)」等の項目が負荷を示しており，この因子を「娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子」と命名した。詳細にみると，母の「子どもに決まりを守るように言った(.325)」「イライラすることがあった(-.304)」の項目が負の負荷を示しており，娘が母に親和的であると娘が認知している時，母はイライラしておらず，娘に決まりを守るように言っていることが窺われる。

② ID1004の因子間相関について

次に因子間相関を見ると，第1因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーション）は第2因子（娘側・娘の母への反抗），第3因子（母娘・母の娘への統制），第5因子（母の情動

性）と負の因子間相関を示し，母が娘と親和的であると認知しているときは，娘の母への反抗は低いと娘は認知し，母の娘への統制も低く，母の情動性も低いと認知する結果となった。一方，第1因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーション）は，第4因子（娘の情動性）とは弱い正の相関を示し，娘の情動性が高い時は，母は娘に親和的コミュニケーションが高くなる結果となった。また，第2因子（娘側・娘の母への反抗）は第3因子（母娘・統制）と，そして第5因子（母の情動性）と正の因子間相関を示していた。さらに第3因子（母娘・母の娘への統制）は第5因子（母の情動性）と正の因子間相関を示し，母の情動性が高い時は，母の統制が強く，娘の母への反抗は強いと認知していた。

第4因子（娘の情動性）は，第1因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーション）と第6因子（母側・母の娘への毅然さ）と正の因子間相関を示していた。すなわち，娘の情動性が高くなると，母は，娘が母に親和的であると認知し，娘の意見や考えに傾聴していた。それと同時に，娘に対して毅然とした態度・行動が強くなると認知していた。このことから，娘の情動性が高くなる時，母は娘に親和的になる場合と，毅然とした態度をとる場合があると思われる。最後に第5因子（母の情動性因子）は，第7因子（娘側・娘と母の親和的コミュニケーションの因子）と正の相関を示していた(.292)。このことは，母の情動性が高い時，娘は母に親和的なコミュニケーションを取ろうとしている様子が窺われる。

Table 8-4　ID1004 の母娘関係についての因子分析（因子パタン値と因子間相関）

			母 親和	娘 反抗	母娘 統制	娘 情動性	母 情動性	母 毅然さ	娘 親和	MEAN	SD
娘の回答	親和／不和	お母さんに色々と相談した	-0.033	-0.094	-0.037	**0.495**	0.157	-0.106	0.237	2.96	1.33
		お母さんの言うことはその通りだと思った	-0.006	**-0.363**	-0.159	0.091	0.132	**0.374**	**0.363**	3.85	1.25
		お母さんに感謝の言葉を言った	-0.098	**-0.329**	0.285	0.129	-0.147	0.140	**0.354**	2.52	1.16
		お母さんをいたわってあげた	-0.067	-0.177	**-0.684**	0.081	0.213	0.021	0.077	3.38	1.36
		今日のお母さんは頑張っていたと思う	-0.038	**-0.350**	-0.138	0.010	**0.611**	0.042	0.094	4.92	1.18
		お母さんの言うことに耳を傾けた	0.071	-0.110	-0.171	0.163	0.060	0.061	0.044	5.12	0.88
		一日の出来事をお母さんに話した	0.174	0.026	0.004	0.166	0.100	-0.226	0.128	3.94	1.28
	独立／服従	お母さんと言い合いになった	-0.070	**0.766**	0.159	0.069	-0.018	0.010	-0.153	2.57	1.39
		お母さんの言動で納得できないことがあった	-0.032	**0.793**	-0.153	-0.028	-0.202	-0.066	-0.092	2.69	1.40
		お母さんは口うるさいと感じた	-0.046	**0.783**	-0.047	0.075	-0.050	0.095	-0.068	2.61	1.29
		お母さんの言う通りに従った	0.074	-0.073	-0.120	-0.119	-0.056	**0.365**	-0.036	4.44	0.97
		お母さんの期待に答えたと思う	0.016	-0.160	**-0.713**	-0.050	0.044	-0.037	0.201	3.59	1.29
		お母さんに口答えした	-0.039	**0.859**	0.022	0.202	-0.146	0.014	-0.020	2.78	1.30
		お母さんに対して素直であったと思う	-0.064	-0.113	-0.103	0.039	-0.036	0.266	0.265	4.77	1.01
	受容	お母さんは、私の言うことに耳を傾けてくれた	0.188	0.003	0.025	0.153	0.052	**0.483**	0.280	4.41	1.29
		お母さんは、私を励ましてくれた	-0.030	0.054	0.005	**0.825**	-0.099	-0.046	0.277	2.55	1.50
		お母さんは、私に色々気をつかってくれた	-0.085	0.021	-0.023	**0.648**	-0.079	-0.107	**0.385**	2.22	1.27
		お母さんは、私の喜びそうなことをしてくれた	-0.045	-0.046	-0.050	0.155	-0.285	-0.010	**0.588**	2.64	1.58
	統制	お母さんは、私に色々指図した	0.208	0.215	**0.229**	0.032	0.131	0.252	0.062	3.92	1.48
		お母さんは、私に決まりを守るように言った	0.153	0.143	**0.401**	0.147	0.117	0.180	0.124	3.34	1.55
		お母さんは、私の自主性を尊重してくれた	0.085	0.267	**-0.304**	**0.720**	-0.122	-0.067	0.223	2.40	1.31
		お母さんから勉強についてとやかく言われた	0.025	-0.127	**0.759**	0.079	-0.206	-0.028	0.109	3.14	1.58
	情動性	色々と悩むことがあった	-0.055	-0.040	0.110	**0.695**	0.190	-0.058	-0.163	2.88	1.69
		不安なことがあった	0.040	0.058	0.069	**0.673**	0.113	0.064	-0.136	2.89	1.61
		傷つくことがあった	0.019	0.186	0.171	**0.447**	0.160	0.057	-0.172	1.83	1.24
		一日楽しかった	0.179	0.063	-0.281	**-0.433**	-0.068	-0.194	-0.065	5.34	1.02
		イライラすることがあった	-0.180	**0.369**	0.068	**0.252**	0.043	0.108	-0.057	2.10	1.36
母の回答	親和／不和	子どもから相談があった	**0.399**	-0.151	0.198	0.074	0.178	-0.150	-0.018	2.69	1.21
		私の言動に共感してくれた	**0.665**	-0.158	0.130	-0.065	-0.177	0.131	-0.073	3.92	0.84
		私に感謝の言葉を口にしてくれた	**0.305**	-0.100	0.191	-0.113	-0.039	-0.155	0.149	2.52	0.96
		私をいたわってくれた	**0.423**	0.124	**-0.587**	-0.011	0.148	0.144	-0.195	3.45	1.15
		私のことを理解してくれた	**0.641**	-0.077	-0.024	-0.123	0.005	0.071	-0.041	4.02	0.52
		私の考えに耳を傾けてくれた	**0.689**	-0.033	0.129	-0.084	0.008	0.033	-0.106	4.15	0.76
		一日の出来事を私に話してくれた	**0.592**	-0.076	-0.013	0.045	0.223	-0.174	0.192	3.89	1.25
	独立／服従	ささいなことから言い合いが始まった	**-0.341**	**0.346**	0.041	-0.098	0.257	0.052	-0.090	1.74	1.44
		私に対して、批判的な言動があった	-0.150	**0.462**	0.015	-0.196	0.113	-0.076	0.148	3.16	1.16
		私から干渉されるのを嫌がった	**-0.307**	0.188	0.200	-0.022	0.050	-0.200	0.120	2.55	1.15
		私の言う通りに従ってくれた	0.295	-0.141	-0.152	0.046	-0.100	-0.007	-0.250	3.91	0.78
		私の期待に答えてくれた	**0.456**	0.041	-0.226	0.077	-0.169	0.084	0.062	4.56	0.70
		私に口答えした	-0.132	**0.355**	0.250	-0.154	0.106	0.010	0.267	3.22	1.35
		私に対して素直であった	**0.740**	-0.060	-0.006	0.009	-0.091	0.052	-0.083	4.06	0.99
	受容	子どもの言うことに耳を傾けた	**0.755**	0.104	0.011	0.017	0.131	-0.044	0.146	4.34	0.83
		子どもを励ました	**0.477**	-0.140	0.269	0.149	0.127	**-0.361**	-0.085	3.38	1.07
		子どもに色々気を使った	0.057	-0.099	0.044	0.073	-0.043	**-0.640**	-0.025	2.67	0.88
		子どもの喜びそうなことをした	0.295	0.040	-0.131	-0.003	-0.114	**-0.549**	0.085	2.71	1.10
	統制	子どもに色々指図した	-0.035	-0.059	**0.426**	-0.169	0.260	0.055	0.061	3.78	1.09
		子どもに決まりを守るように言った	**0.367**	0.192	**0.343**	-0.205	0.185	0.060	**0.325**	3.88	1.19
		子どもの自主性を尊重した	**0.604**	0.149	**-0.353**	-0.050	0.008	-0.176	-0.006	3.91	0.75
		子どもに勉強についてとやかく言った	0.191	-0.163	**0.759**	0.150	-0.066	-0.163	-0.247	1.84	1.34
	情動性	色々と悩むことがあった	0.123	-0.035	-0.081	0.121	**0.980**	0.074	-0.175	4.13	1.43
		不安なことがあった	0.211	0.009	-0.064	0.110	**0.858**	0.082	-0.068	4.35	1.43
		傷つくことがあった	-0.242	-0.091	-0.233	0.089	**0.264**	-0.212	-0.016	1.30	0.62
		一日楽しかった	0.195	0.023	0.135	-0.057	**-0.743**	0.175	**0.254**	4.19	0.79
		イライラすることがあった	-0.153	0.014	-0.059	-0.063	**0.748**	0.012	**-0.304**	3.85	1.38
		娘側・娘の母への反抗	**-0.528**								
		母娘・母の娘への統制	**-0.258**	**0.456**							
		娘の情動性	**0.294**	-0.138	-0.059						
		母の情動性	**-0.254**	**0.412**	**0.452**	0.021					
		母側・母の娘への毅然さ	0.184	-0.114	0.070	**0.286**	-0.009				
		娘側・娘と母の親和的コミュニケーション	0.085	0.111	**0.256**	-0.006	**0.292**	0.073			

1-4. 考　察

本研究は，日々の母娘関係から，娘と母が認知する母娘関係と情動性との関係を明らかにするために，対象者ごとに因子分析を行い，その関係を検討した。その結果，3 組の母娘ペアにおいて，5 つの母娘関係の因子と，母と娘の情動性に関する因子が得られた。以下，得られた 5 つの母娘関係因子の中で，3 組の母娘ペアに共通する因子があるのか，母娘関係と母と娘の情動性の因子間相関から，母娘関係と母と娘の情動性との関連性について考察する。

母娘関係の探索的因子分析による構造と因子間相関について

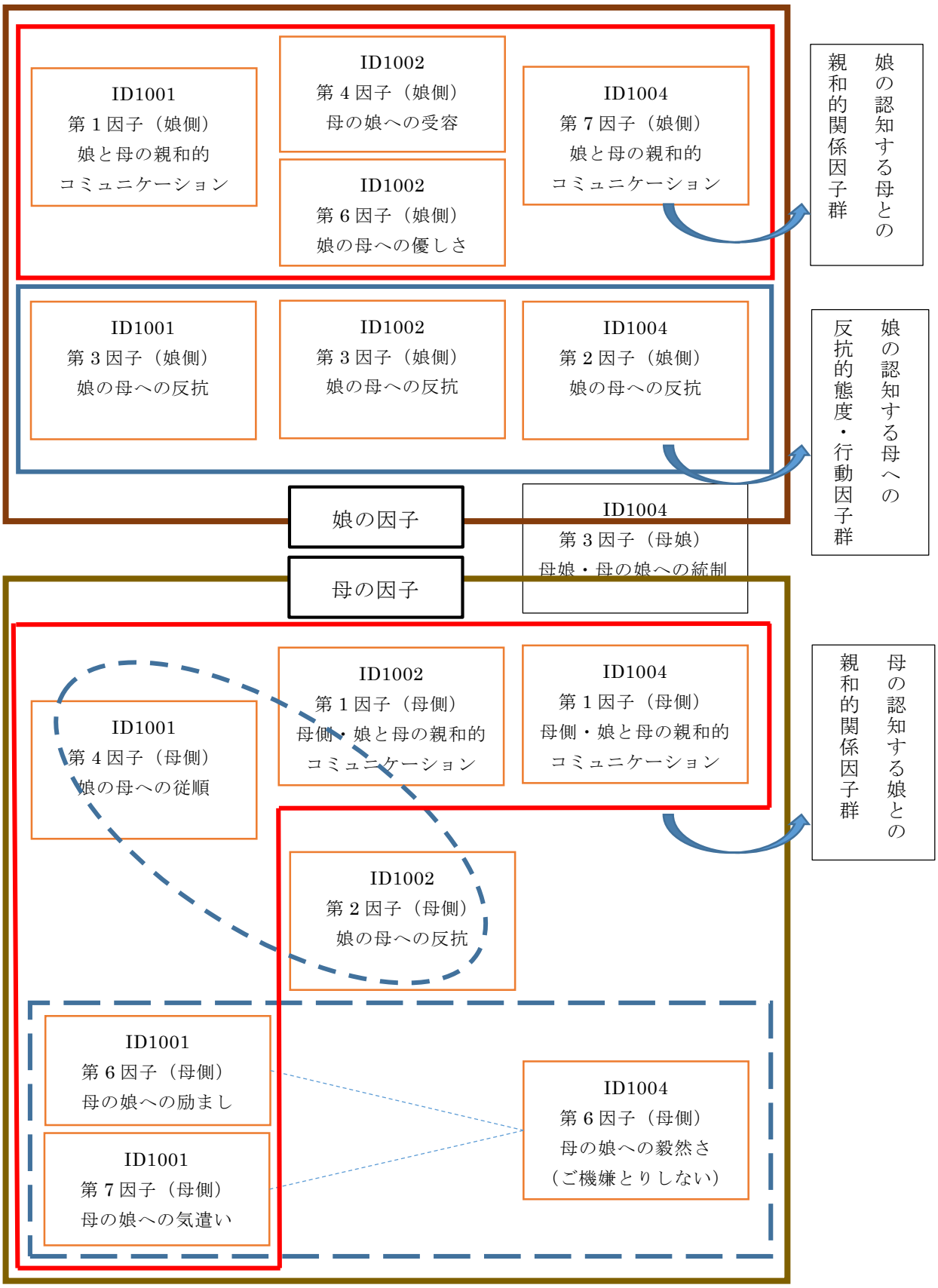
因子分析の結果, 全ての母娘の組み合わせにおいて, 5 つの母娘関係の因子が得られた。それらの因子は，母娘の組み合わせによって類似した因子とそうでない因子が認められ，それぞれの母娘関係の独自の関係が存在する結果となった。

まず，娘の因子についてみると，ID1001 の第 1 因子（娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）と ID1002 の第 4 因子（娘側・母の娘への受容因子），第 6 因子（娘側・娘の母への優しさの因子），ID1004 の第 7 因子（娘側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）は，娘の認知する母娘の親和的コミュニケーションを表しており，これらの因子は,「娘の認知する母との親和的関係因子群」と考えられる。

次に，ID1001 の第 3 因子（娘側・娘の母への反抗因子）と ID1002 の第 3 因子（娘側・娘の母への反抗因子），ID1004 の第 2 因子（娘側・娘の母への反抗因子）は，娘の認知する母への反抗的な態度・行動を表しており，これらの因子は,「娘の認知する母への反抗的態度・行動因子群」と考えられる。

一方，母の因子についてみると，ID1001 の第 4 因子（母側・娘の母への従順因子），第 6 因子（母側・母の娘への励まし因子），第 7 因子（母側・母の娘への気遣い因子）と ID1002 の第 1 因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーションの因子），ID1004 の第 1 因子（母側・娘と母の親和的コミュニケーション因子）は，母の認知する母娘の親和的コミュニケーションを表しており，これらの因子は,「母の認知する娘との親和的関係因子群」と考えられる。

Figure 8-1 は，3 組で得られたそれぞれの母娘関係に関する 5 つの因子の中で，対象間で類似した因子を図示したものである。この図からわかるように，5 つの因子は，一対一で対応していないが，複数の因子にまたがって類似する因子が存在することが窺われる。



注）　　は，因子の方向が逆方向である。

Figure 8-1　母娘関係に関する 5 つの因子

次に因子間相関について，Figure8-2～Figure8-5 に母娘関係と情動性との関連を図示した。

まず，ID1001 についてみると，娘側・親和的コミュニケーション因子（第 1 因子）は，娘側・娘の母への反抗因子（第 3 因子）とマイナスの関連があり，母側・娘の母への従順因子（第 4 因子）とプラスの関連があることから，娘が母と親和的コミュニケーションをとる時は,娘の母への反抗が少なく,母は娘が母に対して従順であると感じると思われる。また娘側・娘の母への反抗因子（第 3 因子）は，母側・娘の母への従順因子（第 4 因子），母側・母の娘への励まし因子（第 6 因子）とマイナスの関連があり，娘の母への反抗が強いと，母も娘は従順でないと感じ，母から娘の励ましは少なくなると予想される。

娘の情動性についてみると，母側の母の娘への励まし（第 6 因子）とプラスに関連しており，娘の情動性が高い時は，母はそれに呼応するかのように，娘を励まし，娘の情動性を鎮めようとしている様子が窺われる。一方，母の情動性は母娘関係の因子とは関係しておらず，母の情動性は母娘関係とは別の事柄の影響を受けて，高くなったり低くなったりしている可能性があると思われる。

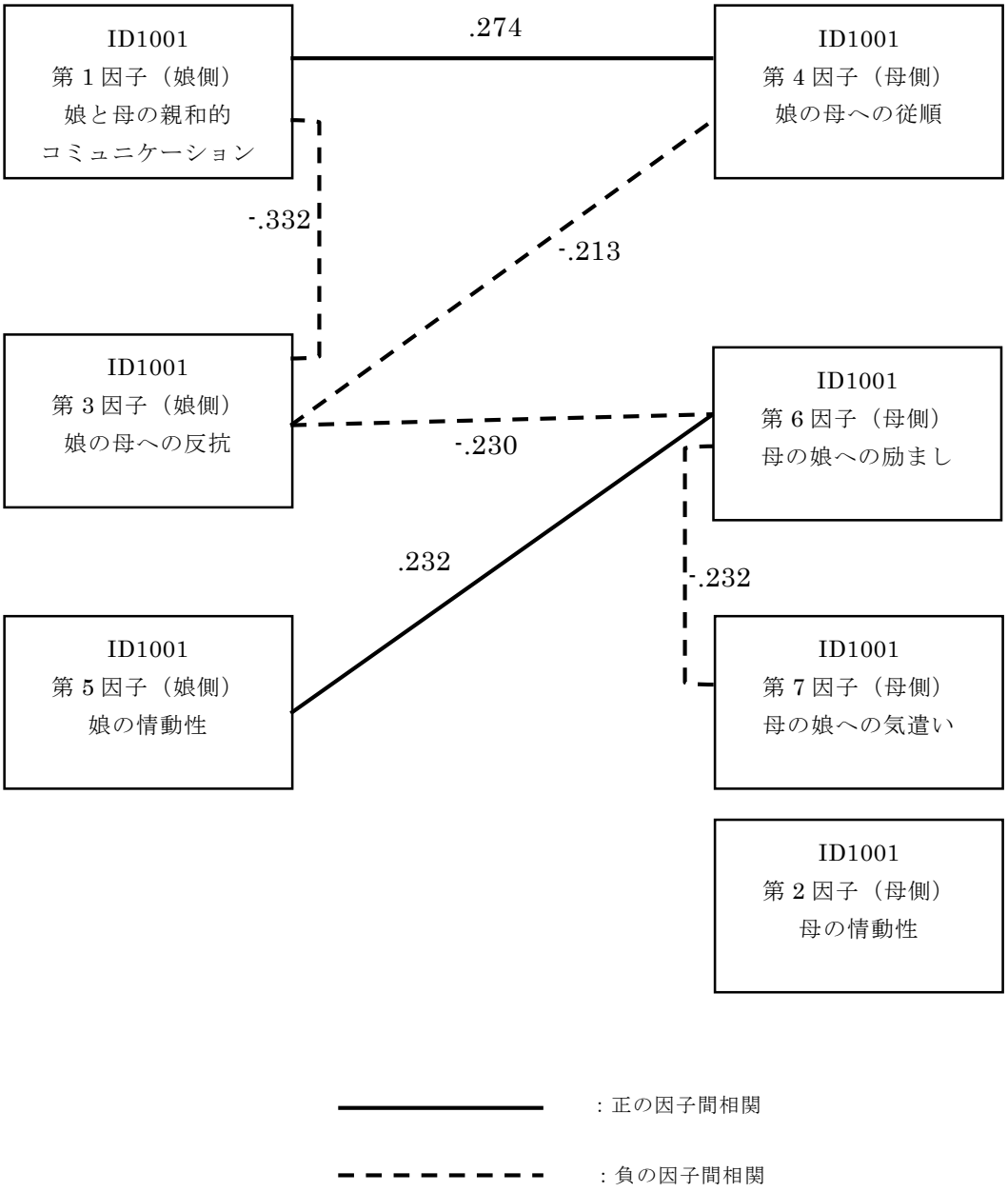


Figure 8-2　ID1001 の母娘関係と情動性の関連図（因子間相関）

次にID1002を見ると，母側・娘と母の親和的コミュニケーション因子（第1因子）は，母側・娘の母への反抗因子（第2因子）と母の情動性因子（第5因子）とマイナスの関連があり，娘が反抗的な時，母は娘と親和的コミュニケーションをとることができなくなり，母の情動性も高まると予想される。また，母側・娘の母への反抗因子（第2因子）は母の情動性因子（第5因子）とプラスの関連があり，娘側・娘の母への反抗因子（第3因子）は母の情動性因子（第5因子）とプラスの関連があり，娘が反抗的であると，母のイライラや不安といった情動性が高くなると予想される。さらに，娘の情動性因子（第7因子）は，娘側・母の受容因子（第4因子）と娘側・娘の母への優しさ因子（第6因子）とマイナスの関連があり，母が娘に対して優しくない時，娘はイライラしたり，不安になったり情動性が高くなり，娘の母に対する優しさが低くなると予想される。

一方，母の情動性は，母側・娘と母の親和的コミュニケーション（第１因子）とマイナスの関連があり，母側・娘と母の親和的コミュニケーション（第１因子）は，娘側・娘の母への優しさ（第６因子）とプラスの関連がある。そして，娘側・娘の母への優しさ（第６因子）は，娘の情動性とマイナスの関連があることから，娘の情動性は，母娘関係を介して母の情動性とプラスに関連すると思われる。

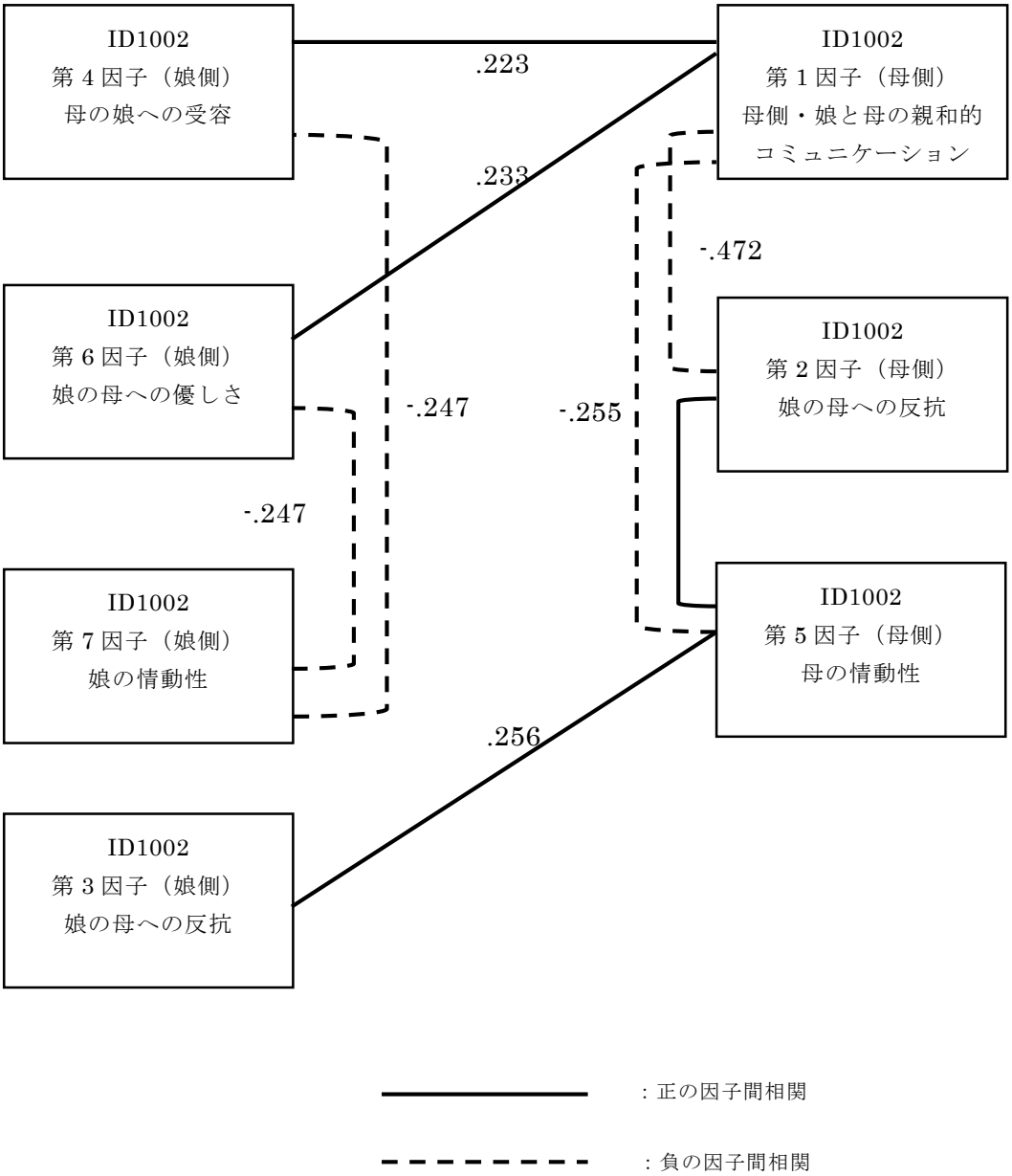


Figure 8-3　ID1002 の母娘関係と情動性の関連図（因子間相関）

最後に，ID1004をみると，母側・娘と母の親和的コミュニケーション（第1因子）は，娘側・娘の母への反抗（第2因子），母娘・母の娘への統制（第3因子），母の情動性（第5因子）とマイナスに関連し，母が娘と親和的である時，母は娘に統制的でなく，娘の母への反抗は低く，情動性も低くなると考えられる。また母側・娘と母の親和的コミュニケーション（第1因子）は，娘の情動性（第4因子）とはプラスの関連を示し，娘の不安や悩みがある時は，それに応答するかのように，母は娘と親和的コミュニケーションをとろうとする様子が窺われる。また，娘側・娘の母への反抗（第2因子）は母娘・統制（第3因子）と母の情動性（第5因子）とプラスの関連があり，母娘・母の娘への統制（第3因子）は母の情動性（第5因子）とプラスの関連があり，母の娘への統制が強い時，娘の母への反抗は強くなり，その結果，母の情動性が高くなると考えられる。

さらに，娘の情動性（第4因子）は母側・娘と母の親和的コミュニケーション（第1因子）と母側・母の娘への毅然さ（第6因子）とプラスの関連があり，娘の情動性が高くなる時，母は娘に親和的になろうとする場合と，毅然とした態度で接する場合の二つを用いていると思われる。一方，母の情動性（第5因子）は娘側・娘と母の親和的コミュニケーション（第7因子）とプラスの関連があり，このペアにおいては，母の情動性が高い時，娘もまた，母のイライラや不安に呼応するかのように，親和的なコミュニケーションを取ろうとしている様子が窺われる。

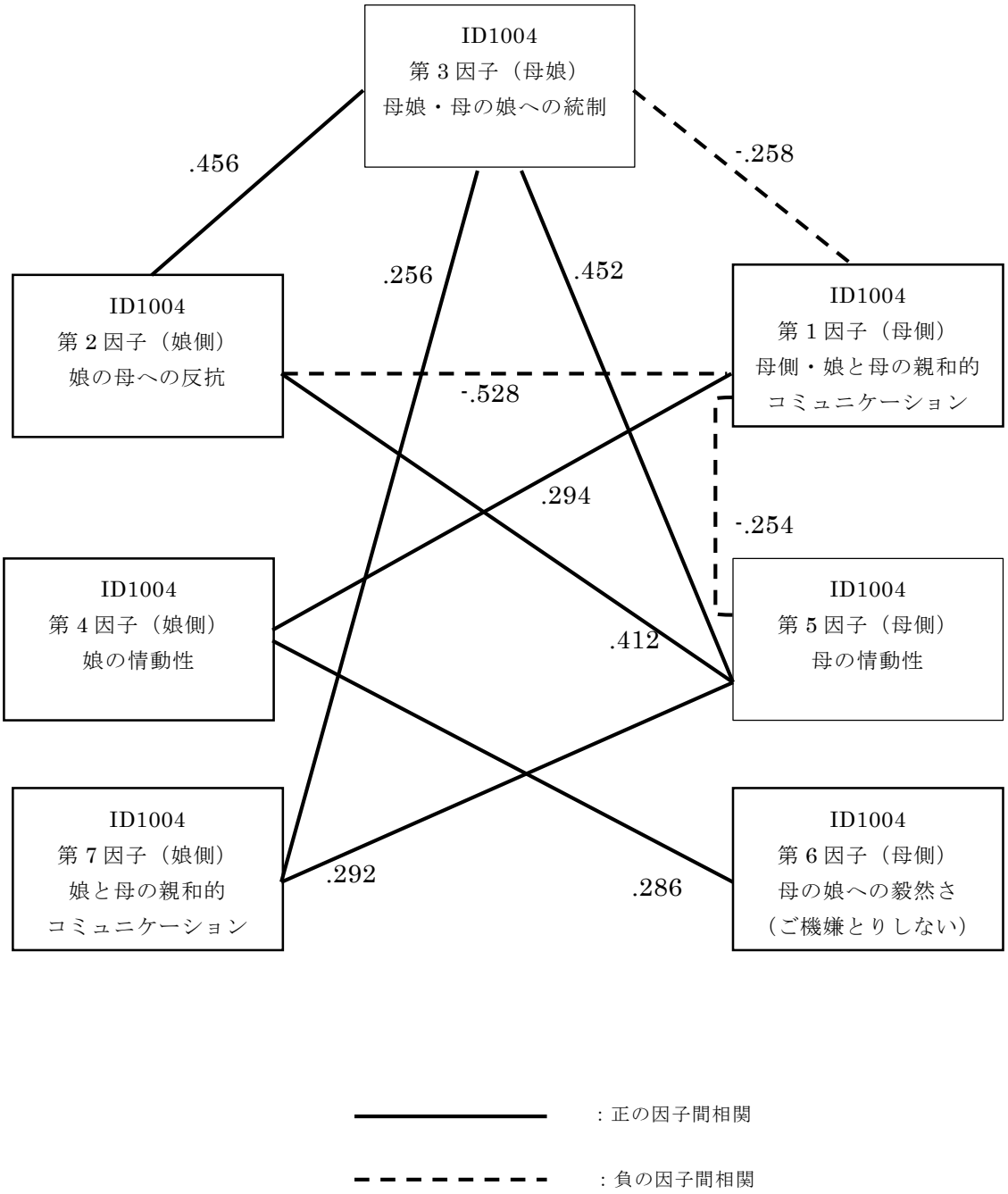


Figure 8-4　ID1004 の母娘関係と情動性の関連図（因子間相関）

これらの関連図をみると，それぞれの母娘関係で，複雑に絡み合っている母娘関係もあれば，そうでない関係もある。例えば，ID1001 の母娘関係では，関連する箇所は 6 箇所であり，ID1002 の母娘関係では 8 箇所であり，ID1004 では 10 箇所と，違いが認められる。ID1004 は，ID1001 や ID1002 と比較して，母娘の間の関連が多くあり，相互により多く影響しあっていると推測される。このように，それぞれの組み合わせごとによって，因子間の関連が異なっており，これらは個別の特徴であると思われる。

以上，3 組の母娘関係の特徴を P 技法の因子分析により，個々の母娘関係に潜在する因子と，母娘の情動性の関係を詳細に捉えることができた。また 3 組に共通する「娘の認知する母との親和的関係因子群」,「娘の認知する母への反抗的態度・行動因子群」,「母の認知する娘との親和的関係因子群」の 3 つの母娘関係に関する因子群を見い出せたことで，潜在する普遍的な母娘関係の因子と母と娘の関連を捉えることができると考える。

2. 母娘関係の普遍性と個別性の分析－3 組の母娘の 2 者関係の同時分析から－(分析 2)

2-1. 目　的

分析 2 では，分析 1 の母娘関係の探索的因子分析から得られた因子の中で，3 組に共通する因子群，すなわちに「娘の認知する母との親和的関係因子群」,「娘の認知する母への反抗的態度・行動因子群」,「母の認知する娘との親和的関係因子群」に着目し，これらの因子に 3 組の母娘ペアが共通して負荷を示す項目を選択し，これらの項目を用いて，母と娘の情動性との関連についての DFA のラグ 0 モデルを作成し，SEM による 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を用いて明らかにする。

2-2. 方　法

(1) 対象者と測定期間：分析 1 と同様である。

(2) 質問項目：①分析 1 で得られた 3 組の母娘関係に共通する 3 つの因子群（「娘の認知する母との親和的関係因子群」「娘の認知する母への反抗的態度・行動因子群」「母の認知する娘との親和的関係因子群」）について，0.3 以上の負荷を示す項目を選択した。②分析 1 で得られた母と娘の情動性に関する項目の因子分析の結果を元にして，3 組に共通して因子パターン値が 0.3 以上の項目を選択し，これを用いた（Table 8-5 を参照）。

(3) 分析手続き：上記で選択された項目を用いて，DFA のラグ 0 における母娘関係と母と娘の情動性との関連についての出発モデルを作成し（Figure 8-5），SEM による，3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行った。なおモデルの適合度については，Mulaik (2010) や Hu & Bentler (1999)，清水ほか (2014) を参考にして，CFI (>.95), RMSEA (<.05), SRMR (<.08)という適合度指標を用いた。以上の分析は SPSS21 と AMOS21 を用いて行った。

2-3. 結　果

情動性と母娘関係との関連について，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行った。ここでは，それぞれの因子は互いに関係していると考え，因子間共分散を設定し，Figure 8-5 を出発モデルとし，因子から該当する項目への因子パターンについては，因子パターン不変性を適用し，3 組の母娘関係で対応するパスについては等値制約して分析を行った。その際，因子パターン不変性を設定してエラーが出た因子があ

った（娘の情動性の因子）が，その場合は，因子パターンの値を自由推定とした（$\chi^2(397)$＝756.792, p<.000, RMSEA=.045, CFI=.869, AIC=988.792, SRMR=.068)。

次に，3 組の中で大きい修正指数についてパスを増やした。その際，因子パターン不変性による拘束は行わなかった。さらに適合度をあげるために，独自性間共分散に関する修正指数については修正指数 4 を超えるものがなくなるまで作業を繰り返した。その結果，Table 8-6～Table 8-8 の結果が得られ，適合度の高い結果を得ることができた($\chi^2(319)$＝386.390, p<.006, RMSEA=.022, CFI=.975, AIC=774.390, SRMR=.059)。

Table 8-5　選択された項目一覧

回答者	カテゴリー	項目記号	項目
娘の回答	母との親和的関係 因子群	QDA01	お母さんに色々と相談した
		QDA02	お母さんの言うことはその通りだと思った
		QDA17	お母さんは、私に色々気をつかってくれた
		QDA18	お母さんは、私の喜びそうなことをしてくれた
	反抗的態度・行動 因子群	QDA08	お母さんと言い合いになった
		QDA10	お母さんは口うるさいと感じた
		QDA13	お母さんに口答えした
	情動性	QDA23	色々と悩むことがあった
		QDA24	不安なことがあった
		QDA25	傷つくことがあった
母の回答	娘との親和的関係 因子群	QMO04	私をいたわってくれた
		QMO12	私の期待に答えてくれた
		QMO14	私に対して素直であった
		QMO15	子どもの言うことに耳を傾けた
	情動性	QMO23	色々と悩むことがあった
		QMO24	不安なことがあった
		QMO26	一日楽しかった
		QMO27	イライラすることがあった

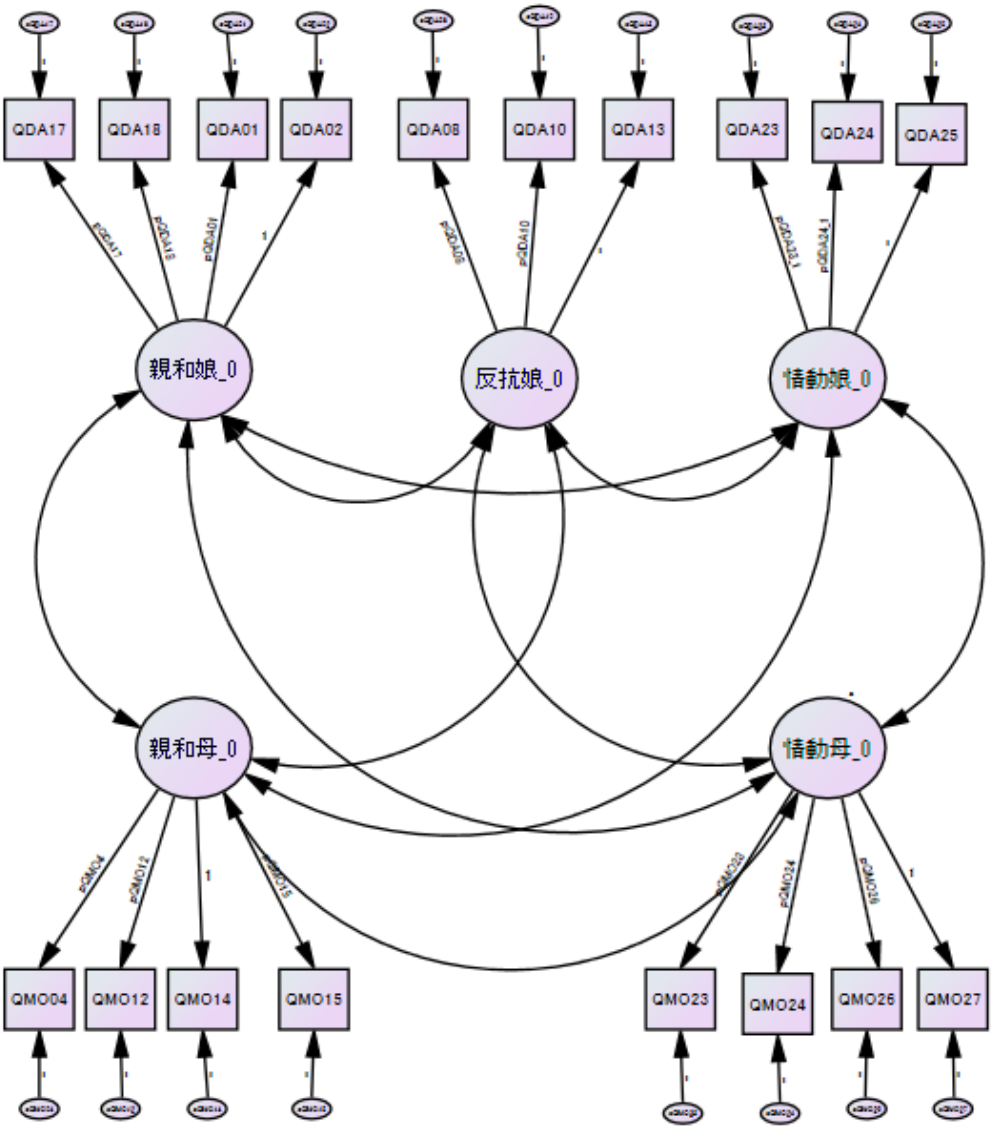


Figure 8-5 母娘関係と情動性の関連についての出発モデル

Table 8-6 母娘関係と情動性との関連（それぞれの組の推定値）

			ID1001				ID1002				ID1004			
			非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*	非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*	非標準化推定値	標準誤差	標準化推定値	*p*
測定モデル	QDA02	<--- 親和娘	1.000		0.819		1.000		0.433		1.000		0.547	
	QDA01	<--- 親和娘	0.899	0.105	0.764	***	0.899	0.105	0.310	***	0.899	0.105	0.482	***
	QDA17	<--- 親和娘	0.888	0.129	0.704	***	0.888	0.129	0.313	***	0.888	0.129	0.499	***
	QDA18	<--- 親和娘	0.802	0.096	0.731	***	0.802	0.096	0.390	***	0.802	0.096	0.351	***
	QDA13	<--- 反抗娘	1.000		0.889		1.000		0.829		1.000		0.844	
	QDA10	<--- 反抗娘	0.764	0.053	0.635	***	0.764	0.053	0.657	***	0.764	0.053	0.709	***
	QDA08	<--- 反抗娘	1.025	0.063	0.922	***	1.025	0.063	0.911	***	1.025	0.063	0.862	***
	QDA25	<--- 情動娘	1.000		0.747		1.000		0.810		1.000		0.420	
	QDA24	<--- 情動娘	0.235	0.047	0.582	***	0.671	0.160	0.501	***	2.654	0.552	0.849	***
	QDA23	<--- 情動娘	0.108	0.021	0.652	***	0.773	0.186	0.482	***	2.849	0.593	0.878	***
	QDA08	<--- 親和娘	0.156	0.118	0.089	*n.s.*	-1.082	0.334	-0.358	**	-0.409	0.170	-0.208	*
	QDA10	<--- 親和娘	-0.369	0.147	-0.194	*	0.587	0.363	0.188	*n.s.*	-0.287	0.185	-0.161	*n.s.*
	QDA02	<--- 反抗娘	0.067	0.058	0.087	*n.s.*	-0.295	0.080	-0.344	***	-0.423	0.103	-0.382	***
	QMO14	<--- 親和母	1.000		0.852		1.000		0.834		1.000		0.832	
	QMO15	<--- 親和母	0.402	0.057	0.249	***	0.402	0.057	0.529	***	0.402	0.057	0.416	***
	QMO04	<--- 親和母	0.391	0.066	0.276	***	0.391	0.066	0.462	***	0.391	0.066	0.292	***
	QMO12	<--- 親和母	0.512	0.063	0.452	***	0.512	0.063	0.551	***	0.512	0.063	0.593	***
	QMO27	<--- 情動母	1.000		0.775		1.000		0.561		1.000		0.735	
	QMO26	<--- 情動母	-0.489	0.031	-0.646	***	-0.489	0.031	-0.403	***	-0.489	0.031	-0.679	***
	QMO24	<--- 情動母	1.045	0.060	0.857	***	1.045	0.060	0.654	***	1.045	0.060	0.866	***
	QMO23	<--- 情動母	1.207	0.068	0.962	***	1.207	0.068	0.837	***	1.207	0.068	0.999	***
因子間共分散	反抗娘	<--> 情動娘	-0.006	0.057	-0.01	*n.s.*	0.080	0.169	0.052	*n.s.*	0.126	0.066	0.212	†
	親和娘	<--> 反抗娘	-0.314	0.094	-0.408	***	0.267	0.114	0.416	*	0.060	0.127	0.075	*n.s.*
	親和娘	<--> 情動娘	-0.048	0.038	-0.137	*n.s.*	-0.322	0.096	-0.556	***	0.165	0.057	0.459	**
	情動娘	<--> 情動母	0.072	0.051	0.146	*n.s.*	0.017	0.050	0.035	*n.s.*	0.188	0.068	0.307	**
	親和娘	<--> 親和母	0.107	0.030	0.406	***	0.038	0.027	0.188	*n.s.*	0.123	0.076	0.217	*n.s.*
	親和母	<--> 情動母	-0.039	0.037	-0.104	*n.s.*	-0.048	0.017	-0.292	**	-0.131	0.093	-0.137	*n.s.*
	反抗娘	<--> 親和母	-0.134	0.044	-0.324	**	-0.034	0.053	-0.062	*n.s.*	-0.508	0.108	-0.545	***
	反抗娘	<--> 情動母	-0.032	0.100	-0.029	*n.s.*	0.111	0.053	0.210	*	0.289	0.127	0.214	*
	親和娘	<--> 情動母	-0.163	0.068	-0.234	*	0.043	0.027	0.220	*n.s.*	0.171	0.094	0.209	†
	情動娘	<--> 親和母	0.006	0.021	0.031	*n.s.*	-0.089	0.052	-0.184	†	0.048	0.045	0.114	*n.s.*

（Table 8-6 の続き）

独自性間共分散	eQMO26	<-->	eQMO27	-0.176	0.040	-0.378	***	-0.090	0.024	-0.342	***	-0.221	0.063	-0.327	***
	eQMO15	<-->	eQMO27	0.054	0.041	0.113	n.s.	0.062	0.014	0.396	***	-0.143	0.066	-0.185	*
	eQMO26	<-->	eQMO24	-0.123	0.031	-0.342	***	-0.002	0.018	-0.010	n.s.	0.030	0.037	0.069	n.s.
	eQMO12	<-->	eQMO04	0.042	0.017	0.218	*	0.025	0.009	0.251	**	0.199	0.056	0.337	***
	eQMO12	<-->	eQMO24	0.069	0.021	0.291	***	-0.022	0.014	-0.144	n.s.	-0.037	0.033	-0.093	n.s.
	eQDA02	<-->	eQDA24	-0.001	0.009	-0.015	n.s.	0.286	0.118	0.204	*	-0.053	0.101	-0.064	n.s.
	eQDA17	<-->	eQDA18	0.069	0.047	0.21	n.s.	0.352	0.099	0.289	***	0.413	0.161	0.260	*
	eQDA02	<-->	eQDA17	0.042	0.055	0.129	n.s.	0.409	0.110	0.305	***	-0.045	0.116	-0.043	n.s.
	eQDA01	<-->	eQDA17	0.061	0.051	0.183	n.s.	0.422	0.136	0.238	**	0.087	0.131	0.071	n.s.
	eQDA01	<-->	eQDA24	0.023	0.009	0.262	*	-0.343	0.155	-0.186	*	-0.211	0.112	-0.216	†
	eQDA10	<-->	eQDA25	0.019	0.042	0.049	n.s.	0.387	0.129	0.451	**	0.062	0.086	0.064	n.s.
	eQDA02	<-->	eQDA10	0.092	0.050	0.194	†	-0.062	0.100	-0.060	n.s.	0.273	0.093	0.326	**
	eQDA01	<-->	eQDA13	0.038	0.035	0.126	n.s.	-0.238	0.119	-0.199	*	-0.072	0.096	-0.087	n.s.
	eQMO14	<-->	eQMO26	-0.007	0.015	-0.051	n.s.	0.036	0.014	0.299	**	0.090	0.038	0.268	*
	eQMO15	<-->	eQMO24	-0.004	0.031	-0.012	n.s.	0.021	0.011	0.168	†	0.096	0.043	0.188	*
	eQMO15	<-->	eQMO26	0.021	0.028	0.062	n.s.	0.013	0.010	0.112	n.s.	0.087	0.037	0.196	*
	eQDA10	<-->	eQMO12	-0.055	0.031	-0.161	†	0.095	0.030	0.299	**	-0.068	0.043	-0.140	n.s.
	eQDA02	<-->	eQMO26	-0.057	0.025	-0.190	*	-0.035	0.033	-0.077	n.s.	0.149	0.053	0.246	**
	eQDA23	<-->	eQMO15	-0.001	0.003	-0.020	n.s.	-0.090	0.036	-0.205	*	-0.060	0.064	-0.103	n.s.
	eQDA24	<-->	eQMO26	0.018	0.007	0.196	*	-0.015	0.045	-0.024	n.s.	0.052	0.051	0.098	n.s.
	eQDA01	<-->	eQMO15	0.070	0.028	0.224	*	0.033	0.026	0.094	n.s.	0.153	0.072	0.189	*
	eQDA10	<-->	eQMO24	-0.129	0.051	-0.230	*	-0.030	0.048	-0.062	n.s.	-0.014	0.053	-0.023	n.s.
	eQDA18	<-->	eQMO12	-0.003	0.017	-0.014	†	-0.030	0.023	-0.103	n.s.	0.160	0.068	0.191	*

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, †: $p<.01$, *n.s.*: $p>.1$

注）因子間共分散の標準化推定値は相関係数を表す。

どの組み合わせにおいても，それぞれの因子に負荷を示していた項目は，それぞれに該当する因子からの因子パターンが 0.1%水準で有意であった。このことから，これらの因子は，どの組み合せにおいても，同じ項目から構成される概念であり，共通した因子として存在すると考えられる。しかしながら，それぞれの因子に負荷する項目が組み合わせによって異なる場合もある。ID1002 と ID1004 において,「娘の認知する母への反抗的態度・行動」の因子から「QDA02 お母さんの言うことはその通りだと思った」へのパスと,「娘の認知する母との親和的関係」の因子から「QDA08 お母さんと言い合いになった」へのパスは，有意な負の値を示しており，これらの項目は，親和的関係や反抗的関係を表す項目と捉えられていたが，ID1001 では有意な値を示しておらず，捉え方が異なっていることが窺われる。

次に因子間共分散を見ると，娘の情動性は，母の情動性と直接的に関連するペアもあれば，間接的に関連するペアもあり，いくつかのパターンが認められた。ID1001 の母娘においては，母の情動性は，娘の認知する親和的関係因子と有意な関係は認められたが，娘の情動性は，母娘関係と有意な関連が認められなかった。ID1002，ID1004 では，母親の情動性は娘の認知する母への反抗的態度・行動因子と有意な正の相関を示していた。また娘の情動性は, ID1002 では, 娘の認知する親和的関係と有意な負の関連が認められたが, ID1004 では，娘の認知する母との親和的関係の因子と有意な正の関連が認められた。このように, 因子間の関連については組み合わせごとによって様相が異なることが窺われる。

2-4. 考　察

母娘関係と情動性との関連について

探索的因子分析の結果から，3 組の母娘関係の中で類似した 3 つの因子群（「娘の認知する親和的関係因子群」,「娘の認知する反抗的関係因子群」,「母の認知する親和的関係因子群」）に着目し，それぞれの因子に共通して負荷を示す項目を選択し，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行った。Figure8-6～Figure8-8 は SEM の結果を元にして描いた母娘関係と情動性との関連図である。ここでは，母娘関係と母娘の情動性との関連についてみていくこととする。

まず， ID1001 の母娘では，娘の情動性は，共通して得られた母娘関係の因子と有意な関連が認められていないのがわかる。すなわち，娘の情動性は，娘の反抗的な関係や親和的関係とは関係していないということである。しかしながら，娘の情動性が，母娘関係と

全く関係しないのかというとそうではなく，探索的因子分析で得られた因子間相関の結果からわかるように，娘の情動性は母側の母の娘への励まし（第 6 因子）と正の関連があり，娘の情動性が高い時は，母は娘を励ましており，母は娘の情動に応答している様子が窺われる。すなわち，娘の情動性は，共通して得られた 3 つの因子群とは関連していないが，ID1001 の独自に現れた「母側の母の娘への励まし」と関連しているということである。一方，母親の情動性は娘の認知する親和的関係の因子とマイナスに関連していることから，母の情動性は，娘が親和的な時に情動性は低くなると思われる。このことは，因子分析の結果にも表れており，母の情動性の因子に，「私に感謝の言葉を口にしてくれた」「子どもが喜びそうなことをした」が負の負荷を示しており，母の情動性は，娘との親和的な関係に影響する可能性があると思われる。

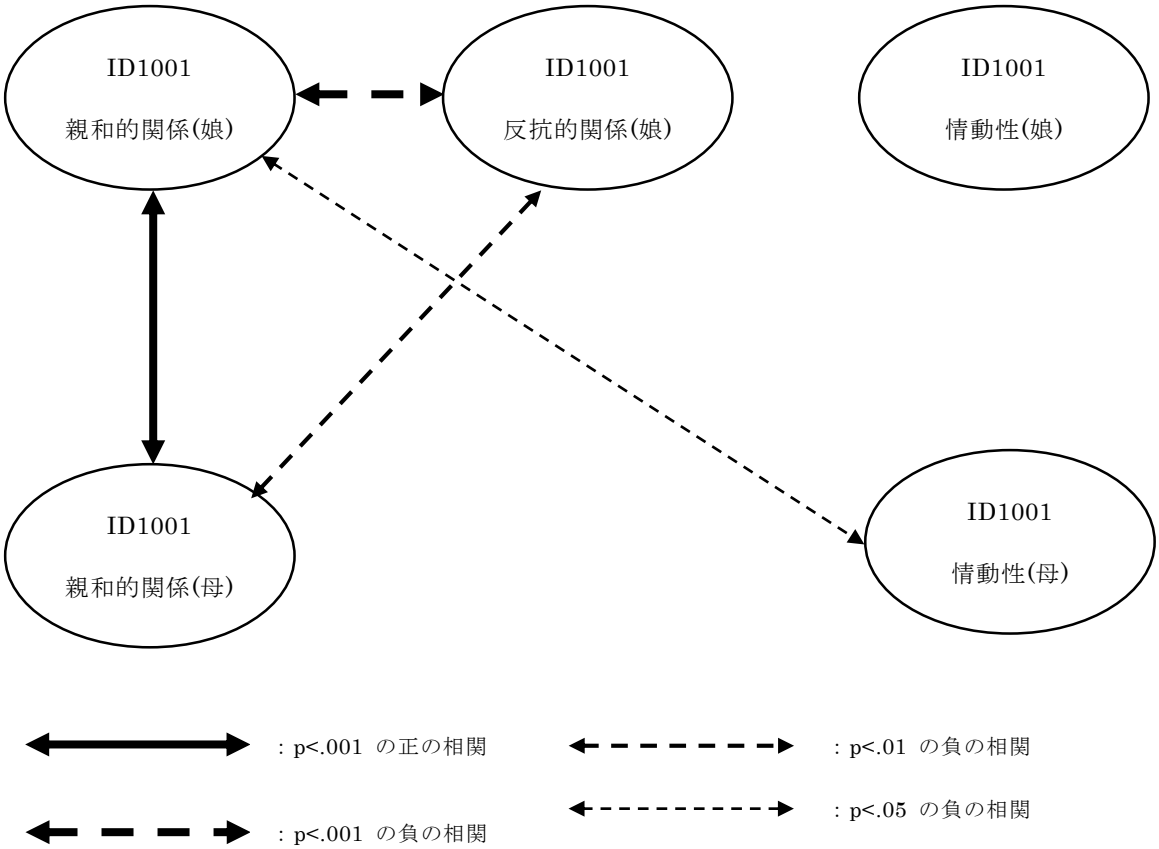


Figure 8-6　ID1001 の母娘関係と情動性の関連図

次に ID1002 を見ると，母親の情動性は娘の反抗的な関係とプラスの関連があり，母親の情動性は母親の認知する娘との親和的関係とマイナスの関連がある。すなわち，娘の母への反抗的な態度・行動が増えると母親のイライラや不安といった感情が高くなり，母親は娘と親和的な関係を築きにくくなるということが推測できる。また娘の情動性は，娘の認知する親和的関係とマイナスに関連し，娘の情動性が高い時は，娘は，母との関係が親和的でないと認知するということが窺われる。一方で，娘の認知する母との親和的関係と反抗的関係はプラスの関連があり，娘が母に対して反抗的な時，同時に，娘は母親と親和的な関係を築こうとしている様子が窺える。娘の情動性が高いと親和的にはなれないが，娘の母への反抗的な態度・行動も抑制され，母の情動も低くなるという道筋も存在することがわかる。ID1002 においても娘の情動性と母の情動性とは直接には関連していなかったが，母娘関係を介して母と娘の情動性は高くなったり低くなったりすると予想される。

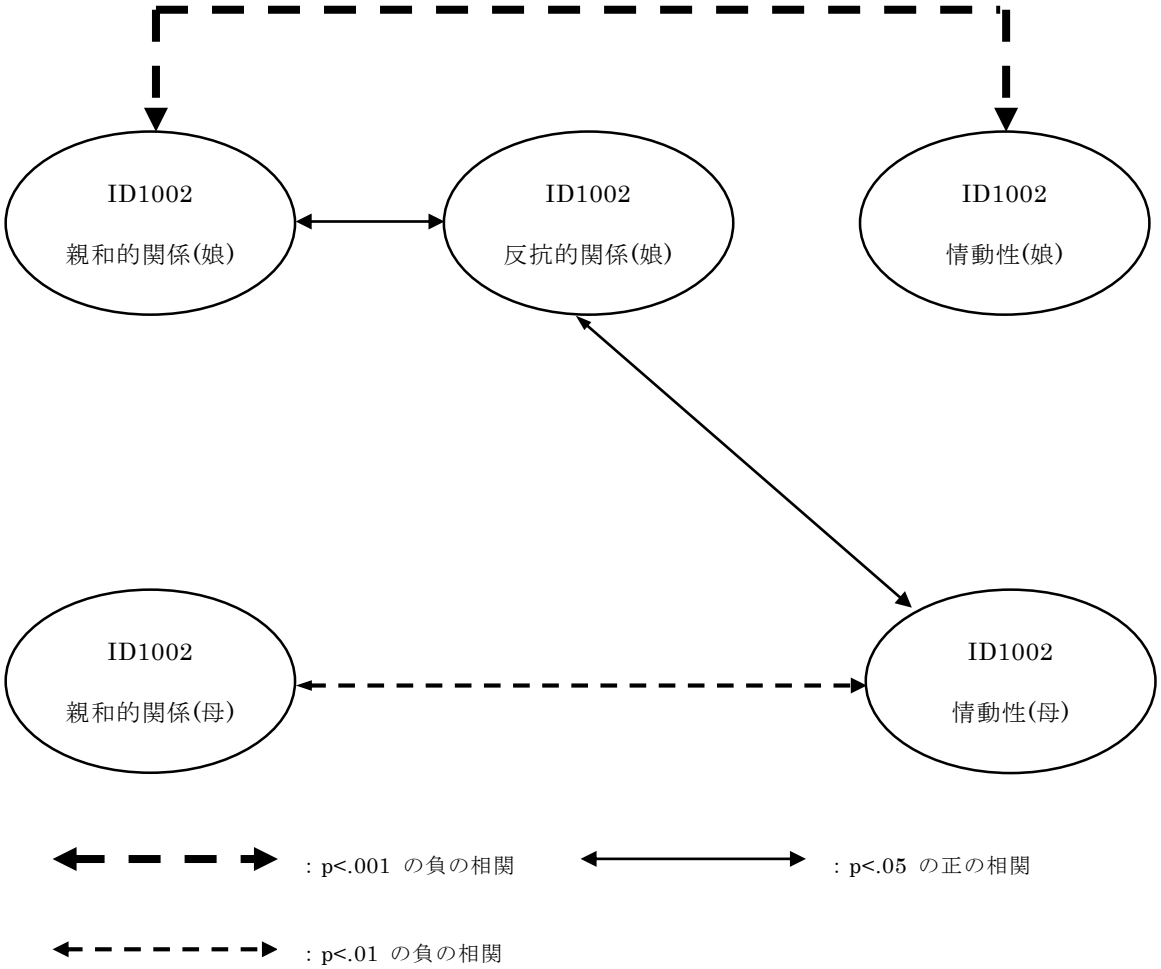


Figure 8-7　ID1002 の母娘関係と情動性の関連図

最後に，ID1004 をみると，IID1002 と同様，母親の情動性は娘の反抗的関係と正の関連があり，娘の母への反抗的な態度・行動が増えると母親のイライラや不安といった感情が高くなることがわかる。また娘の反抗的な関係は，母の認知する親和的関係と負の相関を示しており，娘が反抗的な時，母は，娘との関係が親和的でないと認知しているのがわかる。

一方，娘の情動性は，母の情動性と娘の認知する母との親和的関係とプラスの関連を示しており，娘の情動性が高い時，母の情動性も高くなるが，娘は母との関係を親和的な関係にしようとしている様子が窺える。

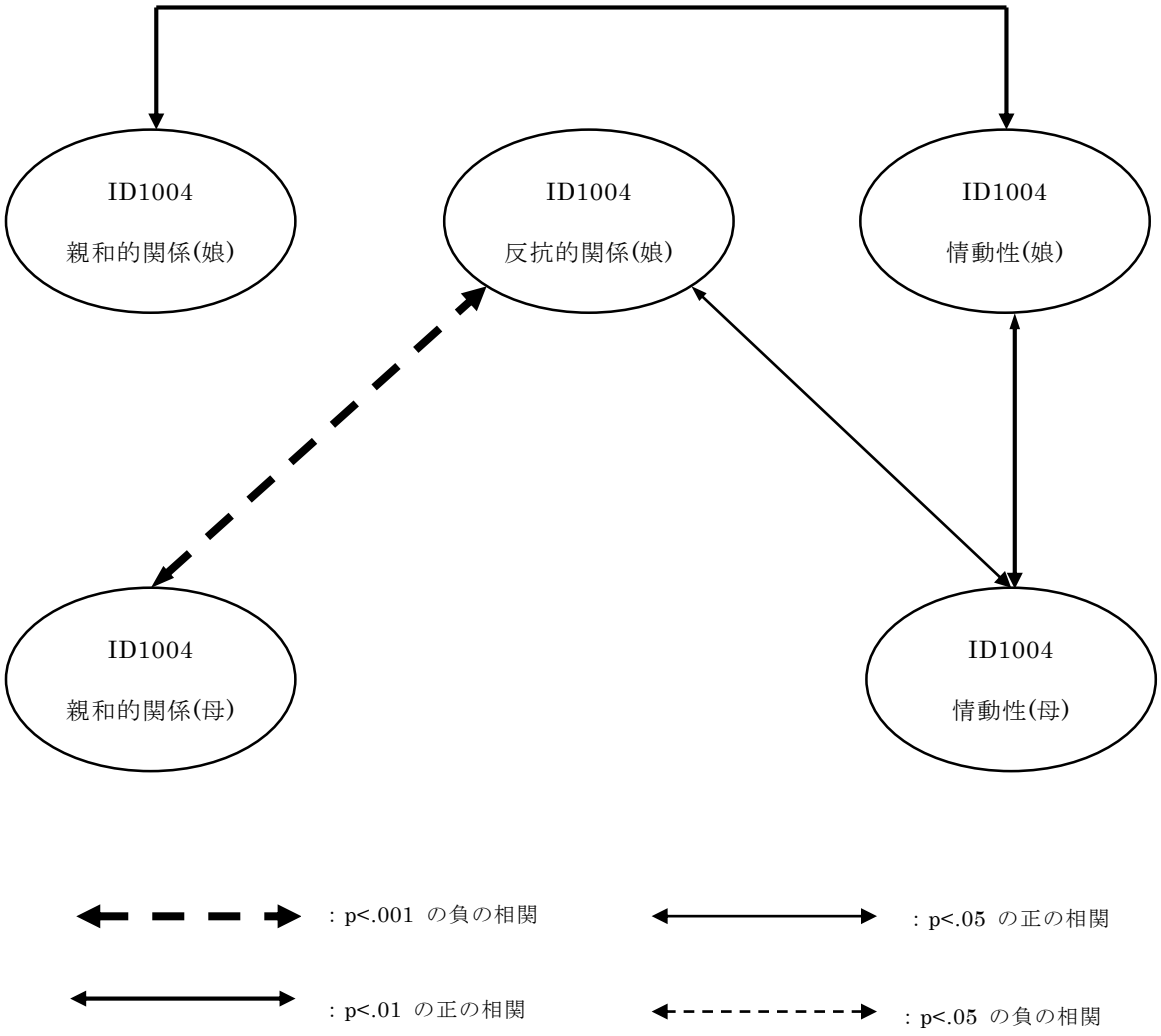


Figure 8-8　ID1004 の母娘関係と情動性の関連図

以上, 3 組の母娘関係の特徴を P 技法の因子分析と SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析により，個々の母娘関係の特徴を詳細に捉えることができた。これらの結果をみると，母娘の情動性が母娘関係とほとんど関係しないペア，母娘の情動性が母娘関係を介して影響しあっているペア，母娘の情動性が直接に関係しているペアが存在した。また母娘の情動性が母娘関係と関連している場合でも，その関連は母娘の組み合わせごとによって異なっている結果となった。

3. 全体考察

本分析では, P 技法と SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行ったが，両者の分析方法は，それぞれ一長一短がある。P 技法因子分析では，それぞれの母娘ペアの独自の様子を明らかにすることができたが，共通のモデルの中での母娘関係を比較することができない。一方，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行うことで，母娘のペアごとの比較が同じモデルの中で可能となるが，3 組に共通する項目だけを選択するため，その組み合わせ独自の様子を詳細に知ることができなくなると思われる。

P 技法，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析の両方を用いて検討し，比較することで，母娘関係の共通する部分と独自の部分をより詳細に捉えることができると考える。

本章では，第 6 章のように，時間経過を入れた分析までみることができなかった。本分析の母娘関係の探索的因子分析からわかるように，3 組の母娘関係で得られた因子は個別の因子が多く, 母娘関係の個別性という部分が大きな比重を占めていた。時間経過（ラグ）を入れた分析を行うには，測定で使用した変数の「普遍性と個別性」についての全容を把握する必要がある。今回の研究は，そのための準備であり，今後の展開へ検討すべき課題などを追求できたと考える。

4. 本章のまとめ

本章では，中学 1 年生の 3 組の母と娘の関係に焦点を当て，日々の母娘関係と情動性の変化から，変数に潜在する因子を探索的因子分析（P 技法因子分析）より検討し，母娘関係と母娘の情動性との関連性を明らかにした。

それぞれの組み合わせで，5 つの母娘関係の因子と 2 つの母と娘の情動性に関する因子

が抽出された。母娘関係に関する 5 因子については，対象者によって類似した因子とそうでない因子が認められる結果となった。それぞれの 5 つの因子は，全く同一ではないが，共通する因子群が存在することが確認できた。それらは,「娘の認知する母との親和的関係」に関する因子群と「娘の認知する母への反抗的態度・行動」に関する因子群,「母の認知する娘との親和的関係」に関する因子群であった。

次に，3 組に共通して得られた母娘関係の因子と母娘の情動性との関係を明らかするために，共通に負荷を示す項目を選択し，これらの項目を用いて，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行ったところ，適合度の高いモデルを得ることができたが，母娘関係と情動性との関連は，それぞれの母娘の組み合わせで違いが認められた。娘の情動性と母の情動性が母娘関係を介して間接的に関連する場合や，娘の情動性と母の情動性が母娘関係とは関連するが娘の情動性と母の情動性が間接的にも関連しない場合や，娘の情動性と母の情動性が直接的に関連する場合などのパターンが存在することが明らかとなった。これらの結果は，娘の情動性と母の情動性の関連は，いくつかの道筋が存在することを示唆するものであり，その道筋はそのペア独自によって異なるということを考察した。

注記

第 8 章は，小高恵・紺田広明・清水和秋（2011)に加筆・修正を行ったものである。

第Ⅳ部　総括的討論

第９章　全体考察

1. 本研究結果の総括

本論文は親―青年関係の中でも，母との関係に焦点を当て，母―青年間のコミュニケーションがどのようになされているかを明らかにした。また母―青年関係が心理的特性とどのように関係するのかということを明らかにした。

序章においては，親子関係研究の歴史について概観し，親子関係が，その時代のイデオロギーや社会的，経済的，文化的な状況によって変化する側面が大きいことを述べ，親子関係研究の意義を述べた。

第 1 章では，1960 年代以降の親子関係研究に焦点を当て，「子どもに対する親の態度・行動（親→子）に関する視点」と「親に対する子どもの態度・行動（子→親）に関する視点」の二つの視点から，これまでの親子関係研究について概観した。次に方法論的な立場から親子関係研究について概観した。青年期の親子関係研究は，親の養育態度・行動の研究から親―青年関係の両者の相互作用についての研究に広がり，またその分析手法は因子分析法を用いた横断的方法を軸にしながら， SEM や動的因子分析などを用いたを用いた縦断的研究へと広がってきたということを報告した。最後に，我が国における最近の親子関係研究の動向について，対象者を青年のみとする研究が多く，縦断研究は依然として多くはないことを報告するとともに，縦断研究の重要性を述べた。

第 2 章では，親子関係とアイデンティティ，自尊心，パーソナリティ等の心理的側面との関係について，これまでなされてきた親子関係研究を概観した。親子関係は，自尊心やアイデンティティ，社会化などの青年の心理的発達や適応と関係しており，青年期においても親と子の関係は，青年の心理的発達や適応に重要な役割を担っており，親―青年関係を調べることは，青年の心理的な側面を探る上で重要な手掛かりとなるということを述べた。

第 3 章では, 親―青年関係研究で残されている課題について述べ, 本論文の構成と目的, 方法を述べた。

第 4 章では，2004 年に大学生を対象に行った，青年の母に対する態度・行動についての構造を明らかにすることを目的とした。これまで，小高（1998, 2010）は因子分析により，その構造を検討していたが，ここでは，探索的因子分析に加え，この分野での新しい

試みとして，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により，大学生における青年の母に対する態度・行動の構造について検討した。その結果，青年の母への態度・行動の構造が男女で類似した「母との情愛的絆の因子」,「母からのポジティブな影響の因子」,「母との対立の因子」,「母への服従の因子」,「母に対する客観視の因子」,「母とは別の独自の生き方の因子」の 6 因子を得た。の 6 つの因子で構成されることを明らかにした。

第 5 章では，大学生の母子関係に焦点を当て，青年の認知する「母の子に対する態度・行動」と「子の母に対する態度・行動」の関連を明らかにするために，SEM を適用し，男女の 2 集団の同時分析により両者の相関分析を行った。まず「母の子に対する態度・行動」の構造分析を行っており，その結果,「受容」と「統制」の 2 因子を得た。次に「子の母に対する態度・行動」の構造分析を行い，その結果,「母との情愛的絆の因子」,「母からのポジティブな影響の因子」,「母との対立の因子」,「母への服従の因子」,「母に対する客観視の因子」,「母とは別の独自の生き方の因子」の 6 因子を得た。最後に両者の関連性を SEM により検討した結果, 母が統制的であると認知するほど, 青年は母に服従するが, その一方で反発を感じていること，また母が受容的であると認知するほど，青年は母からポジティブな影響を受け，情愛的絆が強いと感じ，対立的でないと認知していることが明らかとなった。

第 6 章では，中学 1 年生の一組の母娘関係に焦点を当て，動的因子分析（DFA）により分析を行い，母と娘の日々の影響過程を検討することを目的とし，日々の影響過程を検討した。母と娘それぞれが毎日，一日を振り返り，母娘関係の質問紙に，それぞれに回答するという内容の調査を 144 日間実施し，時間経過を入れない方法で，各尺度についての下位尺度（小包）を因子分析法により構成し，因子と小包化した下位尺度の関係が成立することを母と娘別々の SEM により確認した。次に母娘関係の相互作用についての分析を行い，最後に，前々日から前日と当日の影響過程を検討するために，得られた母娘関係の相互作用に時間的な遅れ（ラグ）を入れた DFA を行った。その結果，その日の母娘関係が次の日の母娘関係に影響することが確認され，また両者の影響過程については，その日の「母の統制の因子」から次の日の「娘の親和志向の因子」へ，またその日の「娘の親和志向の因子」から次の日の「母の受容の因子」へというように，娘と母の関係は独立した関係ではなく，日々互いに影響を及ぼしあうという考察を行った。

第 7 章では，大学生を対象に，青年の母への態度・行動と個人志向性・社会志向性との関連を明らかにするために，青年の母への態度・行動の青年の心理社会的適応への影響を

SEM による男女の 2 集団の同時分析を行った。その結果，母―青年関係と個人志向性・社会志向性との間で関連が認められたことを報告し，大学生においても，母子関係が青年の心理社会的適応に重要な役割を果たしていることを考察した。

第 8 章においては，中学 1 年生の 3 組の母娘関係に焦点を当て，日々の母娘関係と情動性の変化から，変数に潜在する因子を探索的因子分析（P 技法因子分析）より分析し，母娘関係と母娘の情動性との関連性を明らかにした。それぞれの母娘のペアにおいて，5 つの母娘関係の因子と 2 つの母と娘の情動性に関する因子が抽出された。母娘関係に関する 5 因子については，対象者によって類似した因子とそうでない因子が認められる結果となった。それぞれの 5 つの因子は，全く同一ではないが，共通する因子群が存在することが確認できた。それらは,「娘の認知する母との親和的関係」に関する因子群と「娘の認知する母への反抗的態度・行動」に関する因子群,「母の認知する娘との親和的関係」に関する因子群であった。

次に，3 組に共通して得られた母娘関係の因子と母娘の情動性との関係を明らかするために，共通因子群を元に選択した項目を用いて，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行ったところ，それぞれの因子の関連は，母娘の組み合わせによって違いが認められたが，適合度の高いモデルを得ることができた。娘の情動性と母の情動性が母娘関係を介して間接的に関連する場合や，娘の情動性と母の情動性が母娘関係とは関連するが娘の情動性と母の情動性が間接的に関連しない場合などのパターンが存在することが明らかとなった。これらの結果は，娘の情動性と母の情動性の関連は，いくつかの道筋が存在することを示唆するものであり，その道筋はそのペア独自に存在するということを考察した。

2. 本研究の成果

(1) 母―青年関係の統合的な枠組みの提供と方法論的試み

本研究の成果の一つ目は，親―青年関係を捉えるためには，親の青年の態度・行動（親→子への影響過程）と青年の親への態度・行動（子→親の影響過程）の両者の関係を統合的に捉えたという点が挙げられる。

①母―青年関係の統合的な枠組みと SEM の適用

まず青年の母への態度・行動についてみると，第 4 章，第 5 章，第 7 章の結果からわかるように，青年の母への態度・行動は 6 つの一次因子で構成されていることが明らかとな

った。また高次の次元には,「母への親和志向」と「母からの客観的独立志向」の二つの次元が得られ，これら上位 2 因子は，小高（1998, 2010, 2015）で得られた 2 つの因子と類似しており，これら二つの枠組みで青年の親への態度・行動を捉えることは妥当であると思われる。

次に母の青年の態度･行動についてであるが, 第 1 章で述べたように, 辻岡･山本（1975a, 1976, 1978）の一連の研究からもわかるように，親の青年に対する態度・行動の大きな概念として「受容」と「統制」の 2 つの因子が得られている。本論文の第 5 章でも，同様の結果が得られており，母の青年への態度・行動は「受容」と「統制」の二つの因子で捉えることができた。そして，母の青年への態度・行動と青年の母への態度・行動の関係を検討した結果，両者は独立したものではなく，互いに関係していることが SEM の男女の 2 集団同時分析を行うことで明らかとなり，SEM を用いた分析方法は意義あるものと考えられる。

②日々の母娘関係への DFA の適用

第 6 章においては，一組の中学生の母―娘関係に焦点を当て，両者の日々の母娘のやり取りから母娘関係の時間軸を入れた影響過程を P 技法因子分析と DFA を用いて検討し，母娘関係は，互い影響しあっていること，また母と娘の間の分離的側面と結合的側面が 2 日という短い時間の中で，影響し合っていることを明らかにした。我が国の親子関係研究で DFA を適用した研究は無く，この試みは本研究が初めての試みである。今回，DFA を用いることで，母と娘の影響過程が認められ，その道筋は一つではなく，いくつかの道筋を通りながら，前々日，前日，当日へと影響しあっていることを明らかにした。このことは本研究の成果であると考える。

(2) 母―青年関係と青年の心理的側面との関係

本研究の成果の二つ目の成果は，集団を対象にした研究と個を対象にした研究からアプローチすることで，親―青年関係と青年の心理的側面との関係についての研究結果を蓄積できたことである。

① 母―青年関係の統合的な枠組みと心理社会的適応との関係（集団を対象にした研究）

大学生の集団を対象にした研究で，母―青年関係が「受容」「統制」「親和志向」「客観的独立志向」の 4 つの枠組みで捉えることができることを明らかにしたことは既に述べたが，第 7 章ではこれらの次元を用いて，母―青年関係と青年の心理社会的適応との関係を

検討した。その結果，男女共に，母への親和志向的な態度・行動は社会志向性と関係し，母からの客観的独立志向的な態度・行動は個人志向性と関係している結果となり，青年の母への親和志向的な態度・行動は他者との調和的共存や社会適応と，青年の母からの客観的独立志向的態度・行動は，自他の差異性を強調する個性や独自性を尊重することと関係していた。また第 5 章の結果から，青年の母への親和志向的な態度・行動は，母親の受容的な態度・行動と関係しており，青年の母からの客観的独立志向的な態度・行動は母親の統制的な態度・行動と関係していることが明らかとなった。すなわち，母の青年への受容的な態度・行動は，青年の母への親和志向的な態度・行動を高め，青年の社会志向性を間接的に促すと可能性があると予想される。一方，母の青年への統制的な態度・行動は，青年の母への服従的な態度・行動を高め，青年の個人志向性を間接的に抑制すると予想される。このことは，藤田・岡本（2009）の研究とも合致する。藤田らは，青年期の母娘関係に「共依存」因子を見出しているが，「共依存」的な母娘関係とは，母が娘に支配的・過保護的に関わることと，娘が母親の存在を気にしながら行動を決めてしまうという服従的な行動を含んでいる。そして，この「共依存」的な母娘関係が，青年のアイデンティティの確立を阻害するということを報告している。今回得られた因子と対応させるならば，母の青年への統制した態度・行動が青年の母への服従的な行動に繋がり，母からの客観的独立志向が低い青年の態度・行動と関係するということにに相当すると思われる。そして，このような母との未分化な密着した関係は，青年の個を確立する上で阻害要因になる可能性があると考えられる。このことは，青年期後期においても母―青年関係の在り方が青年の心理的側面の予測因になりうることを示唆するものであり，この時期の親―青年関係も心理社会的適応の発達にとって重要な役割があると思われる。

しかしながら，ここで注意すべき点が二つある。一つ目の注意すべき点は，本研究結果が因果関係を検証したものではないということである。本研究の結果は一つの可能性であって，因果関係を確かめたわけではない。本研究の親―青年関係と心理社会的適応との関係の検討では，子どもは親とのコミュニケーションを通して様々なスキルを身につけていくだろうという立場から検討した。そのため親―青年関係を予測因と捉え，青年の心理社会的適応を予測した。現実には，親―青年関係が青年の心理社会的適応に影響しているところもあれば，逆に青年の心理社会的適応が青年の親への態度・行動に影響を与えるところもあると思われる。これについては，縦断研究を行うなど更なる検討が必要となると思われる。二つ目の注意すべき点は，母からの客観的独立志向的な態度・行動が必ずしも，

青年の心理的適応にとって肯定的な意味だけを持つということではないことである。第 6 章で述べたように，小高（2014b)では，母からの独立志向的な態度・行動はエゴイズムや自己顕示やナルシズムという否定的な態度と，ポジティブな関連があることを報告している。すなわち，親からの客観的独立志向的な態度・行動は，青年を利己的にする可能性を内包していると思われる。親から独立しようとする態度は，個人志向性のポジティブな態度を形成する働きがあるが，それと同時にネガティブな態度も生じさせる可能性があるということである。一方，母への親和志向的な態度・行動についてみると，第 5 章で述べたように，母親の受容的な態度・行動が，青年の母への親和志向的な態度・行動と関係していた。そして青年の母への親和志向的な態度・行動は社会志向性のポジティブな側面と関係していたが，個人志向性や社会志向性のネガティブな側面と関係していないことから，青年を受容する態度・行動は社会的適応のポジティブな側面を引き出す可能性があると考えられ，母と青年の親和的な関係は心理社会的適応にとって最も重要なファクターであると考える。

本研究が，集団を対象とした親―青年関係と青年の心理的側面との関係の研究を一つ積み重ねたことは一つの成果であると考える。

②母娘関係と母娘の情動性との関係（個を対象にした研究）

第 8 章では，3 組の中学生の日々の母娘関係と情動性についての関連を探索的因子分析（P 技法因子分析）により検討した。その結果，母娘関係に関する 5 つの因子が得られた。これらの因子は，全く同一の因子ではないが，3 組の母娘ペアに共通する 3 つの因子群，すなわち，「娘の認知する母との親和的関係」に関する因子群と「娘の認知する母への反抗的態度・行動」に関する因子群，「母の認知する娘との親和的関係」に関する因子群の 3 つの因子群が存在することが明らかとなった。

次に，これら 3 組に共通して得られた 3 つの母娘関係の因子群と母娘の情動性との関係を同じモデルの中で明らかするために，共通に負荷を示す項目を選択し，これらの項目を用いて，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行ったところ，適合度の高いモデルを得ることができた。母娘関係と情動性との関連は，それぞれの母娘の組み合わせで，共通する点，異なる点が認められた。娘の情動性と母の情動性が母娘関係を介して間接的に関連する場合や，娘の情動性と母の情動性が母娘関係とは関連するが娘の情動性と母の情動性が間接的に関連しない場合や，娘の情動性と母の情動性が直接的

に関連する場合などのパターンが存在することが明らかとなり，いくつかの道筋が存在すると予想される。このように，第 8 章では，探索的因子分析（P 技法因子分析）と SEM を用いて母娘関係と母と娘の情動性の関連を明らかにしたが，それぞれの分析手法には一長一短があると考える。P 技法因子分析では，それぞれの母娘ペアの独自の様子を詳細に明らかにすることができるが，共通のモデルの中での母娘関係を比較することができない。一方，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析を行うことで，母娘のペアごとの比較が同じモデルの中で可能となるが，3 組に共通する項目だけを選択するため，その組み合わせ独自の様子を詳細に知ることができなくなると思われる。

P 技法，SEM による DFA のラグ 0 の 3 組の母娘の 2 者関係の同時分析の両方を用いて検討し，比較することで，母娘関係の共通する部分と独自の部分をより詳細に捉えることができると考える。

今回は，探索的因子分析（P 技法因子分析）の結果からわかるように，3 組の母娘関係で得られた因子は個別の因子が多く，母娘関係の個別性という部分が大きな比重を占めていた。そのため，時間経過を入れた分析まで行うことができなかった。第 8 章で述べたように，時間経過（ラグ）を入れた分析を行うには，測定で使用した変数の「普遍性と個別性」についての全容を把握する必要がある。今回の研究は，そのための準備であり，今後，普遍性の高い研究へと展開できる礎になっていくと考える。そういったことから，本研究は，個を対象とした研究の積み重ねを行ったという点で一つの成果があったと考える。

(3) 母―青年関係の性差について

本研究の三つ目の成果は，母―青年関係の性差を明らかにすることができたことである。これまでの研究においては，母親と娘の親密な関係が指摘されてきたが，本研究からこのことは支持される結果となった。

大学生の母への態度・行動についての平均値についての男女差があるかどうかについて検討したところ，母への親和志向的な態度・行動に関する尺度で男女差が認められ，母娘関係が親密であることが明らかとなった。このことは，小高（2000，2010）とも一致しており，先行研究を支持する結果となり，母親と娘の関係は，親密であることが確認された。母―娘関係が親密であるという研究結果は，これまでも報告されており，高橋（1970）においても，女子にとって，母親は依存を向けることのできる重要な対象であるということを報告している。また岡本・上地（1999）の研究においても，母娘関係の密着性が高いこ

とを指摘している。母娘の密着性が高いということについて，河合（1999）は，子どもは母親から産まれてくるため,子どもと母が結びつくというのは自然なことであり,「母と娘」関係は最も一体感のある関係であると考えている。今回の結果からも母―娘関係は他の組合せに比べて親密な関係であると思われる。

先述した親―青年関係と心理社会的適応との関係から男女の特徴を捉えると，女子については，娘の母への親和志向因子は，娘の母への客観的独立志向と負の相関を示していたことから（第 7 章），娘と母の親密さは，母からの独立を阻み，個の確立を困難にさせる可能性があると思われる。第 7 章では,個人志向性については男女差が認められているが，このことは母との関係が影響しているのではないかと推測する。

以上，本研究の成果について述べた。次に親―青年関係研究の今後の課題と可能性について述べる。

3. 親―青年関係研究の今後の課題と可能性

(1) 親―青年関係研究の今後の課題

親―青年関係研究の今後の課題としての一つめの課題は，調査対象者の課題である。第 4 章，第 5 章，第 7 章の研究は，親の青年の態度と青年の親への態度についての研究を行ったが，大学生のみを対象にした研究で，青年の認知する母―青年関係であり，母の認知する母―青年関係ではない。水本・山根（2010）や池田・大竹・落合（2006）が指摘するように親子関係の認知にはズレがあることが指摘されていることから，今後は母と青年の両方を対象にした更なる研究を行っていく必要があると考える。また，第 4 章，第 5 章，第 7 章の研究は，青年期後期にあたる大学生を対象としたものである。心理的離乳モデルを検証していくためには，中学生，高校生との比較を行い，発達的変化を捉える必要がある。今後は対象者を拡げ，検討していく必要があると考える。そして，今回は母親に焦点を当てたが，これまでの研究では，父―青年関係の重要性が指摘されている（春日, 2000；諸井, 2006; 小野寺, 1984)。今後は父親との関係についても検討していきたいと考える。家族を一つの有機的なまとまりとして捉えるためには，父―青年関係を検討し，それを統合していくことは重要な課題である。

二つ目の課題は日々の親―青年関係の個別データの蓄積の課題である。本研究では，3 組の母娘のみを対象とした分析しかできなかったため，得られた結果が，それぞれの母娘関係の特殊性を示している可能性があり，本研究で得られた知見を無条件にあらゆる母娘

関係に適用可能ということはできない。今後は，日々の親子関係のデータの蓄積を行って行くことは重要であると考える。

三つ目の課題は，長期の縦断的研究の課題である。青年期は心理的離乳の時期であり，親子関係が変化する時期でもある（山岸, 2000）。山岸の研究(山岸, 2000, 2009)からもわかるように，過去の親と子の関係は変化しうる。今後は，長期の縦断的な研究を行うことで，親と子の発達過程を明らかにできると考える。

(2) 親―青年関係研究の可能性

個性記述的研究と法則定立的研究の提案

第 6 章，第 8 章では，P 技法因子分析及び DFA を用いて，一組の母娘関係の特徴を検討し，日々の相互のやり取りの過程を捉えることを試みた。このように一組の母娘関係の特徴を詳細に捉えることは，親―青年関係研究の知見を積み重ねていく上で非常に大切なプロセスであると思われる（西條, 2007）。すなわち，個性記述的なデータの積み重ねが大事であるということである。本研究で用いた P 技法因子分析や DFA は特定の個人を対象にした分析手法であるという点で，個性記述的色彩が強いと言える。一方で，我々はそのデータを積み重ねて, 一般化できる法則性を見出すことも大事である(Ferrer & Widaman, 2008)。複数の個人の測定を行い，それらを比較検討する法則定立的アプローチが必要となる(紺田・清水，2015). 今後は，紺田・清水（2015）が試みたように，複数を対象にした同時分析，すなわち多個人動的因子分析(Multi-Individual Dynamic Factor Analysis：MDFA）行い，法則定立的な見地から再度，個性記述的な見方をすることで，親子関係の影響過程をより一層明らかにできると考える。そして，このことは，今後の臨床場面への応用につながることが期待される。

引用文献

Abelman, R. (1985). Styles of parental disciplinary practices as a mediator of children's learning from prosocial television portrayals. *Child Study Journal,* **15**, 131-146.

Ainsworth, M. S. D., Bell, S. M. V., & Stayton, D. J. (1971). Individual differnces in strange situation behavior of one-year-olds. In H. R. Schaffer (Ed.), *The origins of human social relations* (pp. 17-52). New York: Academic.

Allen, J. P., Hauser, S.T., Bell, K.L., & O'Connor, T.G. (1994). Longitudinal assessment of autonomy and relatedness in adolescent-family interactions as predictors of adolescent ego development and self-esteem. *Child Development.* **65**, 179-194.

Amato, P. R., & Booth, A. (1997). A generation at risk: *Growing up in an era of family upheaval.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

安藤智子・無藤隆 (2008). 妊娠期から産後 1 年までの抑うつとその変化 ： 縦断研究による関連要因の検討　発達心理学研究, **19**, 283-293.

青木聡子 (2009). 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因 ： 育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して　発達心理学研究, **20**, 382-392.

荒牧美佐子・無藤隆 (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い ： 未就学児を持つ母親を対象に　発達心理学研究, **19**, 87-97.

Arrindell, W. A., Gerlsma, C., Vandereycken, W., Hageman, W. J., & Daeseleire, T. (1998). Convergent validity of dimensions underlying the parental bonding instrument (PBI) and the EMBU. *Personality and Individual Differences,* **24**, 341–350.

Badinter, E. (1980). *L'amour en plus, Histoire de l'amour maternel (XVIIe－XXe siècle)*: Paris, Flammarion.(バダンテール, E. 鈴木晶訳(1998). 母性という神話　ちくま学芸文庫)

Baldwin, A. L., Kalhorn, J., & Breese, F. H. (1945). Patterns of parent behavior: Its description and measurement. *Psychological Monographs,* **58** (3, Whole No. 268), 1–75.

Baldwin, A. L., Kalhorn, J., & Breese, F. H. (1949). The appraisal of parent behavior. *Psychological Monographs,* **63**(4), 1-85.

Barber, B. K., & Thomas, D. L. (1986). Dimensions of fathers' and mothers' supportive behavior: The case for physical affection. *Journal of Marriage and the Family,* **48**, 783–794.

Baumrind, D. (1966). Effects of authoritative parental control on child behavior. *Child Development,* **37,** 887–907.

Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monographs*, **4**, 1-103.

Baumrind, D. (1989). Rearing competent children. In W. Damon (Ed.), *Child development today and tomorrow* (pp.349–378). San Francisco: Jossey-Bass.

Baumrind, D. (1991). Parenting styles and adolescent development. In J. Brook-Gunn, R. Lerner, & A. C. Peterson (Eds.), *Encyclopedia of adolescence* (pp. 746–758). New York: Garland.

Block, J., & Block, J.（1980）The role of ego-control and ego-resiliency in the organization of behavior. In Collins, W.A.(Ed). The Minnesota Symposia on Child Psychology, **13**, 39-101.

Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The psychoanalytic study of the child,* **22**, 162-186.

朴信永・杉村伸一郎（2009). 幼児を育てている親の子育てに関する省察の 3 層モデルの検討 発達心理学研究, **20**, 99-111.

Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, vol.1*, *Attachment*. London：The Hogarth Press.

(ボウルビィ, J. 黒田実郎・大羽　蓁・岡田洋子（訳）(1976).　母子関係の理論Ⅰ：愛着行動　岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, vol.2, Separation:* Anxiety and anger. London：The Hogarth Press.

(ボウルビィ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）(1977).　母子関係の理論Ⅱ：分離不安　岩崎学術出版社)

Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss, vol.3, Loss:* Sadness and depression. London：The Hogarth Press.

(ボウルビィ, J. 黒田実郎・吉田恒子・横山恵三子（訳）(1981).　母子関係の理論Ⅲ：愛着

喪失　岩崎学術出版社）

Brody, S. (1956). Patterns mothering: *Maternal influence during infancy.* New York: International Universities.

Campbell, E., Adams G.R., Dobson W.R. (1984). Familial correlates of identity formation in late adolescence: A study of the predictive utility of connectedness and individuality in family relations. *Journal Youth and Adolescence,* 13, 509-525.

Cattell, R. B. (1946). *Description and measurement of personality*. World Book Company.

Cattell, R. B. (1956). Validation and intensification of the sixteen personality factor Questionnaire. *Journal of Clinical Psychology*, 12, 205-214.

Champney, H. (1941). The measurement of parent behavior. *Child Development,* 12, 131–166.

Chen, X., Dong, Q., & Zhou, H. (1997). Authoritative and authoritarian parenting practices and social and school adjustment. *International Journal of Behavioral Development,* 20, 855–873.

Chen, X., Hastings, P. D., Rubin, K. H., Chen, H., Cen, G., & Stuart, S. L. (1998). Child-rearing attitudes and behavioral inhibition in Chinese and Canadian toddlers: A cross-cultural study. *Developmental Psychology,* 34, 677– 686.

Chen, X., Liu, M., & Li, D. (2000). Parental warmth, control, and indulgence and their relations to adjustment in Chinese children: A longitudinal study. *Journal of Family Psychology,* 14, 401–420.

Chen, X., Wu, H., Chen, H., Wang, L., & Cen, G. (2001). Parenting practices and aggressive behavior in Chinese children. *Parenting: Science and Practice,* 1, 159–184.

Cole, D. E. (1933). Treatment of child guidance clinic cases characterized by parental attitudes of moderate rejection marked ambivalence. *Smith College Studies in Social Work,* 4, 158–159.

Crandall, V, J., & Preston, A. (1955). Patterns and levels of maternal behavior. *Child Development,* 26, 267-277.

De Goede,I.H.A., Branje, S. J. T., Delsing,M.J. M. H., & Meeus, W. H. J. (2009).

Linkages over time between adolescents' relationships with parents and friends. *Journal of Youth Adolescence,* 38, 1304–1315.

Downey, G., & Feldman, S. I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology,* 70, 1327–1343.

Downey, G., Khouri, H., & Feldman, S. I. (1997). Early interpersonal trauma and later adjustment: The mediational role of rejection sensitivity. In D. Cicchetti & S. Toth (Eds.), Rochester Symposium on Developmental Psychopathology: Vol. 8. Developmental perspectives on trauma: Theory, research, and intervention (pp. 85–114). Rochester, NY: University of Rochester Press.

江上園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 発達心理学研究, 16, 122-134.

Emmelkamp, P. M. G., & Heeres, H. (1988). Drug addiction and parental rearing style: A controlled study. *The International Journal of the Addictions, 23*, 207–216.

Engle, R. F., & Watson, M. W. (1981). A one-factor multivariate time series model of metropolitan wage rates. *American Statistical Association*, 76, 774-781.

Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle.* New York: International University Press.

(エリクソン, E. H.　小此木啓吾（訳）(1973). 自我同一性ーアイデンティティとライフサイクルー　誠信書房)

Feldman, S. I., & Downey, G. (1994). Rejection sensitivity as a mediator of the impact of childhood exposure to family violence on adult attachment behavior. *Development and Psychopathology,* 6, 231–247.

Ferrer, E., & Nesselroade, J. R. (2003). Modeling affective processes in dyadic relations via dynamic factor analysis. *Emotion* , 3, 344-360.

Ferrer, E., & Widaman, K. F. (2008). Dynamic factor analysis of dyadic affective processes with inter-group differences. In N.A. Card, J.P. Selig., & T.D. Little (Eds.), Modeling dyadic and interdependent data in the developmental and behavioral sciences (pp. 107-137). Hillsdale, NJ: Psychology Press.

Foley, P. (1932). Early responsibility and affect hunger as selective criteria in maternal overprotection. *Smith College Studies in Social Work,* 3*,* 209–223.

藤永保・品川玲子・渡邊千歳・荻原美文・佐々木丈夫・堀 敦 (2005). ダウン症児の早期療育と母親の養育態度 発達心理学研究, **16**, 81-91.

藤田ミナ・岡本祐子 (2009). 青年期における母娘関係とアイデンティティとの関連　広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 121-132.

藤原あやの・伊藤裕子 (2007). 青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係 青年心理学研究, **19**, 69-82.

深瀬裕子・岡本祐子 (2012). 高齢者の語りに基づく母親的人物との相互性の変容　発達心理学研究,　**23**, 55-65.

福田佳織 (2003). 夕食場面における母親・父親の幼児への摂食促し行動と幼児の情動状態との関連 ：家族システム論的視点から 発達心理学研究, **14**, 161-171.

古川綾子 (1972). 親の自己認知と子どもの認知による子どもに対する両親のリーダーシップ行動測定について　実験社会心理学研究, **12**, 41-52.

Geweke, J. (1977). The dynamic factor analysis of economic time-series models. In D. J. Aigner, & A. S. Goldberger (Eds.) *Latent variable in socio-economic models* (pp.365-383). Amsterdom: North-Holland.

Goldin, P. C. (1969). A review of children's reports of parent behaviors. *Psychological Bulletin,* **71**, 222-236.

Gonzalez, R. & Griffin, D. (2012). Dyadic data analysis. Handbook of Research Methods in Psychology: Vol 3. Data Analysis and Research Publication, H. Cooper, Editor-in-Chief, New York: American Psychological Association, 439-450.

Gray, M. R., & Steinberg, L. (1999). Unpacking authoritative parenting: Reassessing a multidimensional construct. *Journal of Marriage and the Family,* **61**, 574–587.

Grotevant, H. D., & Cooper, C. R. (1985). Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescent. *Child Development*, **56**, 415-428.

Grotevant, H. D., & Cooper, C. R.(1986). Individuation in family relationships: A perspective on individual differences in the development of identity and role-taking skill in adolescence. *Human Development*, **29**, 82-100.

Hattick, B. W., & Stowell, M. (1936). The relation of parental overattentiveness to children's work habits and social adjustments in kinder garden and the first six

grade of school. *Journal of Educational Research*, **30**, 169-176.

林 奈那・岡本祐子 (2003). 青年の家族行事体験が家族アイデンティティ形成に及ぼす影響 青年心理学研究 , **15**, 17-31.

Hershberger, S. L., Corneal, S. E., & Molenaar, P. C. M. (1995). Dynamic factor analysis: An application to emotional response patterns underlying daughter/father and stepdaughter/stepfather relationships. *Structural equation modeling*, **2**, 31-52.

平井滋野・岡本祐子 (2003). 食事場面の会話と親子の心理的結合性の関連 青年心理学研究, **15**, 33-49.

平石賢二(2000a). 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識, アイデンティティとの関連　家族心理学研究, 14, 41-59.

平石賢二 (2000b). 青年期後期の親子間コミュニケーションの類型に関する事例研究　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, **47**,281-299.

平石賢二 (2006). 「青年期の親子関係の特徴」 よくわかる青年心理学(白井利明編) ミネルヴァ書房 P76-77.

平石賢二 (2007). 青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版

平山聡子 (2001). 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連 ： 父母評定の一致度からの検討 発達心理学研究, **12**, 99-109.

Hoffman, J. A. (1984). Psychological separation of late adolescents from their parents. *Journal of Counseling Psychology*, **31**, 170-178.

Holden G.W., & Miller P.C. (1999). Enduring and different: a meta-analysis of the similarity in parents' child rearing. *Psychological Bulletin*, **125**, 223-254.

Hooker, K., Nesselroade, D. W., Nesselroade, J. R., & Lerner, R. M. (1987). The structure of intraindividual temperament in the context of mother-child dyads: P-technique factor analyses of short-term change. *Developmental Psychology*, **23**, 332-346.

Hu, L., & Bentler, P.M. (1999). Cutoff criteria for fit indexes in covariance structure analysis: Conventional criteria versus new alternatives. *Structural Equation Modeling*, **6**, 1-55.

飯塚有紀 (2009). 低出生体重児における母子再統合場面での「抱き」の変化と母子相互作用 発達心理学研究, **20**, 278-288.

飯塚有紀(2013). NICU への入院を経験した低出生体重児の母親にとっての母子分離と母子再統合という体験　発達心理学研究, **24**, 263-272.

池田幸恭 (2009). 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究, **21**, 1-16.

池田幸恭 (2010). 青年期における親に対する感謝への抵抗感を規定する心理的要因の検討 青年心理学研究, **22**, 57-67.

池田幸恭・大竹裕子・落合良行 (2006).「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説　筑波大学心理学研究, **31**, 45–57.

井上健治 (1975). 独立への欲求とおとなに対する抵抗　井上健治・柏木恵子・古沢頼雄(編) 青年心理学　有斐閣大学双書　Pp.235-250.

井上忠典 (1995). 大学生における親との依存一独立の葛藤と自我同一性 の関連 について 筑波大学心理学研究, **17**, 163-173.

石島このみ・根ヶ山光一 (2013).　乳児と母親のくすぐり遊びにおける相互作用:文脈の共有を通じた意図の読みとり　発達心理学研究, **24**, 326-336.

伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり・大嶽さと子・原田　新・野田　航・辻井正次 (2014). 肯定的･否定的養育行動尺度の開発 ： 因子構造および構成概念妥当性の検証　　発達心理学研究, **25**, 221-231.

伊藤美奈子 (1993a). 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　心理学研究, **64**, 115-122.

伊藤美奈子 (1993b).　個人志向性・社会志向性に関する発達的研究　教育心理学研究, **41**, 293-301.

伊藤美奈子 (1997). 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究　京都・北大路書房.

伊東暁子･竹内美香･鈴木晶夫 (2004). 青年期の食行動と親子関係に関する試行的研究, ヒューマンサイエンス　リサーチ, 13, 167-184.

岩崎 学 (2002). 不完全データの統計解析　エコノミスト社

岩田美保 (2009). ある 5 歳男児の就学期にかけての家族間コミュニケーション ： 母・兄姉間会話への参入過程に着目した夕食時の会話の縦断的検討 発達心理学研究, **20**, 264-277.

蒲谷　槙介 (2013).　前言語期乳児のネガティブ情動表出に対する母親の調律的応答：母

親の内的作業モデルおよび乳児の気質との関連　発達心理学研究, **24**, 507-517.

神谷哲司（2002). 幼児の泣き声に対する父親の認知 発達心理学研究, **13**, 284-294.

金丸智美・無藤隆（2004). 母子相互作用場面における 2 歳児の情動調整プロセスの個人差 発達心理学研究, 15, 183-194.

狩野 裕（2002a). 構造方程式モデリングは，因子分析，分散分析，パス解析のすべてにとって代わるか？ 行動計量学, **29**, 138⍰159.

狩野 裕（2002b). 再討論：誤差共分散の利用と特殊因子の役割 行動計量学, **29**, 182-197.

狩野 裕・三浦 麻子（2002)：グラフィカル多変量解析―AMOS，EQS，CALIS による目で見る共分散構造分析　現代数学社

春日秀朗・宇都宮 博・サトウ タツヤ（2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響 ： 期待に対する反応様式に注目して　発達心理学研究, **25**, 121-132.

春日由美(2000). 日本における父娘関係研究の展望 ―娘にとっての父親― 九州大学心理学研究, **1**, 157-171.

加藤　厚（1983). 大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究，**31**, 292-302.

加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子（2002). 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が 3 歳児の社会性に及ぼす影響 ： 社会的背景の異なる 2 つのコホート比較から 発達心理学研究, **13**, 30-41.

加藤邦子・近藤清美（2007). 3 歳児における父子と母子の遊びタイプの比較 発達心理学研究, **18**, 35-44.

加藤孝士（2007).　養育者への重要な他者からのサポートと内的作業モデルの関連 発達心理学研究, **18**, 185-195.

川島亜紀子（2005). 家族成員による夫婦間葛藤の認知と子どもの家族機能評価との関連 ： 中学生とその家族を対象に 発達心理学研究, **16**, 225-236.

川田 学・塚田みちる・川田暁子（2005). 乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変容 ： 食事場面における生後 5 ヶ月から 15 ヶ月までの縦断研究 発達心理学研究 **16**, 46-58.

川原　悟・松尾祐作（1998). 青年期におけるアパシー傾向と両親の養育態度・イメージに関する研究　福岡教育大学紀要, **47**, 215-224

河合隼雄（1999）．今，日本人にとって家族とは　甲南大学学生相談室紀要, **6**, 2-16.

Kawash, G. F., Keer, E. N., & Clewes, J. L. (1985). Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. *Journal of Psychology*, **119**, 235-242.

風間みどり・平林秀美・唐澤真弓・Tardif, Twila・Olson, Sheryl (2013). 日本の母親のあいまいな養育態度と 4 歳の子どもの他者理解 ： 日米比較からの検討　発達心理学研究, **24**,　126-138.

Khaleque, A., & Rohner, R. P. (2002). Perceived parental acceptance–rejection and psychological adjustment: A meta-analysis of cross-cultural and intracultural studies. *Journal of Marriage and the Family,* **64**, 54–64.

菊池知美・松本聡子・菅原ますみ（2011）. 幼稚園・保育所に対する両親の期待 ： 年中時から年長時への縦断的変化　発達心理学研究, **22**, 55-62.

金敬愛・仲真紀子（2002）. 中国人親子による出来事の対話 ： 母親と父親は幼児の出来事の語りをどのように引き出すか 発達心理学研究, **13**, 274-283.

北村琴美・無藤隆（2001）. 成人の娘の心理的適応と母娘関係 ： 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, **12**, 46-57.

キン イクン・大野 久（2013）. 母子間の漸成発達主題獲得の関連性が青年のアイデンティティ達成に及ぼす影響 発達心理学研究，**24**, 337-349.

小林　真・宮原千佳（2012）．大学生活における充実感と母子関係の関連性　とやま発達福祉学年報, **3**, 55-59.

小林佐知子（2009）. 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連 発達心理学研究, **20**, 189-197.

小林佐知子・北川朋子（2009）. 母親の抑うつ状態に対するマスタリーの効果 ： ストレスへの対処とマスタリーとの関連性に着目して 発達心理学研究, **20**, 373-381.

Koch, D. A., Chandler, M. J., Harder, D. W., & Paget, K. F. (1982). Parental defense style and child competence: A match-mismatch hypothesis. Journal of Applied Developmental Psychology, **3**, 11-21.

児玉省・宮本美沙子・北村紀久子（1965）. 日本のしつけの研究（1）－類型の因子分析―日本心理学会第 29 回大会論文集, 309.

小泉智恵・菅原ますみ・前川暁子・北村俊則（2003）. 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響 発達心理学研究, **14**, 272-283.

小嶋秀夫（1967）. 子どもによる親の態度・行動の報告：セマンティック・ディファレンシャル，質問紙と人格要因　金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学・教育科学編), **16**, 47-61.

小嶋秀夫（1968）. 親子関係検査のバッテリー間因子分析：質問紙とセマンティック・ディファレンシャル　金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学・教育科学編), **17**, 29-43.

小嶋秀夫（1969）. 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学・教育科学編), 18, 55-70.

小嶋秀夫（1970）. 親の行動インヴェントリーの(PBI)検討 － Balanced Scales －金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学・教育科学編), **18**, 129-144.

Kojima H. (1975). Inter - battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, **17**, 33-48.

小松孝至（2003）. 幼稚園での経験,友だち,保育者に関する母子の会話 ： 話題と子どもの語り方についての母親の報告から 発達心理学研究, **14**, 294-303.

小松孝至（2006）. 母子の会話の中で構成される幼児の自己 ：「自己と他者との関連づけ」に着目した 1 事例の縦断的検討 発達心理学研究, **17**, 115-125.

紺田広明（2010a）. 動的因子分析による個人内変動のモデル化.　関西大学大学院心理学研究科修士論文(未刊行).

紺田広明（2010b). Amos による動的因子分析―R によるブロック・トープリッツ行列の構成と DAFS モデルの推定―　心理学叢誌, **3**, 9-22.

紺田広明（2011）. 動的因子分析における適切な測定日数の探索―多変量時系列における小包化の効果―　心理学叢誌, **6**, 27-38.

紺田広明・清水和秋（2009）. 動的因子分析による個人内変動のモデル化―PANAS の 129 日間の測定から―　日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 496.

紺田広明・清水和秋（2012）. 多個人動的因子分析による個人内変動と個人間差異の検討－分析に必要な個人の数の観点から－　日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 487.

紺田広明・清水和秋（2015）. 動的因子分析による個人内変動のモデル化 ―心理時系列データへの同時分析の適用― 行動計量学, **42**, 印刷中

小高　恵（1994）.　親子関係と人格要因との関連性についての一考察　性格心理学研究, **2**, 47-55.

小高　恵（1998）. 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究

教育心理学研究, **46**, 333－342.

小高　恵（2000）．親―青年関係尺度の作成の試み　南大阪大学紀要，**3**，87-96.

小高　恵（2010）. 大学生における親―青年関係について－7 因子での探索的因子分析の結果から－ 心理学叢誌，**4**，55-64.

小高　恵（2011）. 大学生の親―青年関係のモデル化－母子関係 7 因子についてのモデル－ 心理学叢誌，**5**, 45-55.

小高　恵（2012）. 2001 年～2010 年の親子関係研究の動向と展望－発達心理学研究に掲載された論文を中心に－　心理学叢誌，**8**, 43-53.

小高　恵（2014a）. 大学生の母―青年関係の相関分析　太成学院大学紀要, **16**, 37-48.

小高　恵（2014b）. 大学生の母―青年関係と心理・社会的適応との関連について　発達心理学会第 25 回大会論文集, 637.

小高　恵・紺田広明（2015）. 中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析　－動的因子分析を適用して－ 青年心理学研究, **26**, 109-128.

小高　恵・紺田広明・清水和秋（2011）. 娘母関係の相互作用の分析―（1）ラグ 0 の P 技法を用いて―　日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 974.

小坂千秋・柏木 恵子（2007）. 育児期女性の就労継続・退職を規定する要　発達心理学研究, **18**,　45-54.

久保田桂子（2009）. 青年期の母娘関係の発達差―会話分析による青年期前期と後期の交流の比較―　心理学研究, **79**, 530-535.

Lafore, G. G. (1945). Practices of parents in dealing with preschool children. *Child Development Monographs, 31*, New York: Teacher's College, Columbia University.

Laursen, B., Coy, K. C., & Collins, W. A. (1998). Reconsidering changes in parent-child conflict across adolescence: A meta-analysis. *Child Development,* **69**, 817-832.

Levy, D.M. (1931). Maternal overprotection and rejection. *Journal of Nervous and Mental Diseases*, **73**, 65-77.

Levy, D.M. (1943). *Maternal overprotection.* New York: Norton. Columbia University.

Manongdo, J. A. & Ramírez García, J. I. (2011). Maternal parenting and mental health of Mexican American youth: A bidirectional and prospective approach. *Journal of Family Psychology,* **25**, 261-270.

Martin, J. A. (1981). A longitudinal study of the consequences of early mother-infant

interaction: A microanalytic approach. Monographs of the Society for Research in Child Development, 190(46, Serial No.3).

松岡弥玲・岡田　涼・谷　伊織・大西将史・中島俊思・辻井正次 (2011). 養育スタイル尺度の作成 ： 発達的変化と ADHD 傾向との関連から　発達心理学研究, **22**, 179-188.

McCord, J. (1988). Parental aggressiveness and physical punishment in long-term perspective. In G. T. Hotaling, D. Finkelhor, J. T. Kirpatrik, & M. A. Straus (Eds.), *Family abuse and ins consequences:* New directions in research (pp.93-38). Beverly Hills, CA: Sage.

Medinnus, G. R. (1959). Research implications of several parent– child concepts. *Marriage and Family Living,* **21***,* 329–333.

Meredith, W. (1993). Measurement invariance, factor analysis and factorial invariance. *Psychometrika,* **58**, 525-543.

Metcalf, K., & Gaier, E. L. (1987). Patterns of middle-class parenting and adolescent underachievement. *Adolescence*, 22, 919-928.

Miller, J. B. (1976). Toward a New Psychology of Women. Beacon Press. (ジーン・ベーカー・ミラー著, 河野貴代美監訳,『イエス, バット～フェミニズム心理学をめざして』, 新宿書房, 1989)

Miller, P. A., Bernzweig, J., Eisenberg, N., & Fabes, R.A. (1991). The development socialization of prosocial behavior. In R. Hinde & J. Groebel (Eds.), Cooperation prosocial behavior (pp. 54-77). New York: Cambridge University Press.

三砂ちづる・竹原健二・嶋根卓也・野村真利香(2006). 153 母娘関係尺度作成の試み 民族衛生, **72**,153-159.

三浦武・森重敏・島田俊秀(1971). 父－母－子関係の分析(17)－ PCRT と子どもの性格との関係 (2) －　日本心理学会第 35 回大会発表論文集, 393-396.

宮城音弥(1960).　性格　岩波書店

水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味 ： 精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, **21**, 254-265.

水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係－「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の 4 類型モデル」の検討 教育心理学研究, **59**, 462-473.

Molenaar, P. C. M. (1985). A dynamic factor model for the analysis of multivariate time series. *Psychometrika,* **50**, 181-202.

森 巌 (2012). 日米青年の自我同一性 ―相互独立－相互協調性および親への愛着との関連において― 青年心理学研究, **24**, 31-43.

森下正康 (1979). 子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性 心理学研究, **50**, 145-152.

森下正康 (1988). 児童期の母子関係とパーソナリティの発達 心理学評論, **31**, 60-75.

森下正康 (1990). 親の養育態度と子どもの自己変容の発達 日本教育心理学会総会発表論文集, **32**, 157.

森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, **17**, 182-192.

森山貴仁（2010）. スポックの子どもたち：1940 年代から 60 年代における育児書の子ども像と世代言説 パブリックヒストリー, **7**, 44-63.

諸井克英 (2006). 女子青年における父親の魅力―父親との接触経験の影響― 総合文化研究所紀要, **23**, 71-80.

Moulton, R. W., Burnstein, E., Liberty, P. G., & Altucher, N. (1966). Patterning of parental affection and disciplinary dominance as a determinant of guilt and sex typing. *Journal of Personality and Social Psychology,* **4**, 356-363.

Mulaik, S. A. (2010). *Linear causal modeling with structural equations*. New York, NY: Chapman & Hall/CRC.

長屋佐和子 (2005). 乳幼児表情写真(IFEEL Pictures)を用いた母親の情緒応答性の測定：子どもの性差・人数・年齢が与える影響 発達心理学研究, **16**, 156-164.

中井大介 (2013). 中学生の親に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, **24**, 539-551.

中野貴博 (2002). 自覚的コンディションの系列的変動の分析評価 筑波大学大学院体育科学研究科博士論文

中野貴博・山田剛史・西嶋尚彦 (2003). 動的因子分析法によるコンディション変動の要因構造分析 体育学研究, **48**, 369-381.

中島俊思・岡田 涼・松岡弥玲・谷 伊織・大西将史・辻井正次 (2012).発達障害児の保護者における養育スタイルの特徴 発達心理学研究, **23**, 264-275.

中谷美奈子・中谷素之（2006）. 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響 発達心理学研究, **17,** 148-158.

根ヶ山 光一（2010）. 巨大地震への対応にみられる親子関係 ： 子別れの観点からの検討 発達心理学研究, **21**, 386-395.

西平直喜（1988）. 青年心理研究の当面する課題　西平直喜・久世敏雄（編）　青年心理学ハンドブック　福村出版　Pp.3-42.

西平直喜（1990）. 成人（おなな）になること：生育史心理学から　東京：東京大学出版会

丹羽智美（2005）. 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程　パーソナリティ研究, **13**, 156-169.

信田さよ子（1997）. 一卵性母娘な関係　主婦の友社

小原倫子（2005）. 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連 発達心理学研究, **16**, 92-102.

小保方晶子・無藤隆（2005）. 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, **16**, 286-299.

落合良行（1995）. 心理的離乳への 5 段階仮説過程　筑波大学心理学研究, **17**, 51-60.

落合良行・佐藤有耕（1996）. 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.

岡本清孝・上地安昭（1999）. 第二の個体化からみた親子関係および友人関係　教育心理学研究, **47**, 248–258.

岡本依子・菅野幸恵・根ケ山光一（2003）. 胎動に対する語りにみられる妊娠期の主観的な母子関係 ： 胎動日記における胎児への意味づけ 発達心理学研究, **14**, 64-76.

岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・八木下(川田)暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・高橋千枝（2010）. 親が抱く子どもの安全への心配 ： 妊娠期から小学校入学までの縦断研究から 発達心理学研究, **21,** 353-364.

岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下（川田）暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井三弥子・川田　学・須田　治（2014）. 親はどのように乳児とコミュニケートするか ： 前言語期の親子コミュニケーションにおける代弁の機能　発達心理学研究, **25**, 23-37.

小野寺敦子（1984）. 娘からみた父親の魅力　心理学研究, **5**, 289-295.

小野寺敦子（2008）. ego-resilience が母親の養育態度に与える影響　目白大学心理学研究,

4, 25-34.

小野寺敦子（2009). 親子関係が青年の無気力感に与える影響 ―エゴ・レジリエンスが果たす機能―　目白大学心理学研究, **5,** 9-21.

小野寺敦子（2014). 親と子の生涯発達心理学　勁草書房

大鐘啓伸（2011). 母子通園施設を利用した母親の心理状態 ： 支援過程において障害児を持つ母親の表出された気持ちから　発達心理学研究, **22**, 308-317.

大日向雅美（1999). 子育てと出会うとき. 日本放送出版協会

大野　久（2010). 序章　青年期を理解する　エピソードでつかむ青年心理学(大野　久編著）ミネルヴァ書房：京都

大島聖美（2009). 妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響 発達心理学研究, **20**, 351-361.

大島聖美（2013). 中年期母親の子育て体験による成長の構造 ： 成功と失敗の主観的語りから　発達心理学研究, **24**, 22-32.

大島聖美（2013). 婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差　発達心理学研究, **24**, 55-65.

大鷹円美・菅原正和・熊谷賢（2009). 母子関係と子どものソーシャルスキル発達の阻害要因 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **8**, 119-129.

尾山智子・仲　真紀子（2013). 幼児によるポジティブ,ネガティブな出来事の語り ： 親が出来事を選定した場合と子どもが出来事を選定した場合　発達心理学研究, **24**, 1-12.

小沢一仁・湯沢理恵子（1989a). 親と子の絆の研究－１(青年期の心理的離乳についての質問紙の作成）日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集, 165.

小沢一仁・湯沢理恵子（1989b). 親と子の絆の研究－２(青年期の同一性と親子関係）日本教育心理学会第 31 回総会発表論文集,166.

小沢一仁・湯沢理恵子（1989c). 青年期の心理的離乳と同一性－心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関連－　帝京学園短期大学研究紀要, **3**, 63-74.

Paitich, D & Langevin, R. (1976). The Clarke Parent-Child Relations Questionnaire: A Clinically Useful Test for Adults *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 428-436.

Parker, G. (1983a). Parental “affectionless control” as an antecedent to adult depression: A risk factor delineated. *Archives of General Psychiatry, 40*, 956–960.

Parker, G. (1983b). *Parental overprotection: A risk factor in psychosocial* d*evelopment.* New York: Grune & Stratton.

Parker, G. (1986). Validating an experiential measure of parental style: The use of a twin sample. *Acta Psychiatria Scandinavica, 73,* 22–27.

Peterson, G. W., Rollins, B. C., & Thomas, D. L. (1985). Parental influence and adolescent conformity: Compliance and internalization. *Youth and Society,* **16**, 397–420.

Perris, C., Arrindell, W. A., & Eisemann, M. (Eds.). (1994). *Parenting and psychopathology*. New York: Wiley.

Perris, C., Jacobsson, L., Lindström, H., von Knorring, L., & Perris, H. (1980). Development of a new inventory for assessing memories of parental rearing behavior. *ActaPsychiatria Scandia, 61*, 265–274.

Pulkkinen, L. (1982). Self control and continuity from childhood to adolescence. P. B. Bates & O.B. Brim (Eds.), *Life span development and behavior* (Vol. 4, pp. 63-105). New York: Academic Press.

Raphael-Leff, L. (1986). Facilitators and regulators: Conscious and unconscious processes in pregnancy and early motherhood. *British Journal of Medical Psychology,* **59**, 43-55.

Renson, G. J., Schaefer, E. S., & Levy, B. I. (1968). Cross - national validity of a spherical conceptual model for parent behavior. *Child Development,* **39***,* 1229-1235.

Rice, K. G., Cole, D. A., & Lapsley, D. K. (1990). Separation-individuation, family cohesion, and adjustment to college: Measurement validation and test of a theoretical model. *Journal of Counseling Psychology,* **37**, 195-202.

Roe, A. & Siegleman, M. (1963). A parent-child relations questionnaire. *Child Development*, **34**, 355-369.

Rohner, R. P. (1960). *Child acceptance–rejection andmodal personality in three Pacific societies*. Unpublished master's thesis, Stanford University.

Rohner, R. P. (1975). *They love me, they love me not: A worldwide study of the effects of parental acceptance and rejection*. New Haven, CT: HRAF Press.

Rohner, R. P. (1986). The warmth dimension: Foundations of parental acceptance–

rejection theory. Beverly Hills, CA: Sage.

Rohner, R. P. (2004a). The parental "acceptance-rejection syndrome": Universal correlates of perceived rejection. *American Psychologist*, **59**, 830-840.

Rohner, R. P. (2004b). *Extended bibliography on parental acceptance–rejection (1920's to the present)* [Extended bibliography section]. Retrieved May 30, 2004, from http://vm.uconn.edu/_rohner/

Rohner, R. P., & Britner, P. A. (2002). Worldwide mental health correlates of parental acceptance–rejection: Review of cross-cultural and intracultural evidence. *Cross-Cultural Research*, **36**, 16–47.

Rohner, R. P., & Cournoyer, D. E. (1994). Universals in youths' perceptions of parental acceptance and rejection: Evidence from factor analyses within eight sociocultural groups worldwide. *Cross-Cultural Research,* **28**, 371–383.

Rohner, R. P., & Veneziano, R. A. (2001). The importance of father love: History and contemporary evidence. *Review of General Psychology,* **5***,* 382–405.

Rollins, B. C., & Thomas, D. L. (1979). Parental support, power, and control techniques in the socialization of children. In W. R. Burr, R. Hill, F. I. Nye, & I. L. Reis (Eds.), *Contemporary Theories about the Family* (Vol. 1, pp. 317–364). New York: Free Press.

齋藤　有・内田伸子 (2013). 幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響 ： 「共有型」と「強制型」の横断的比較　発達心理学研究, **24**, 150-159.

西條剛央 (2002). 母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究 ： ダイナミックシステムズアプローチの適用 発達心理学研究, **13**, 97-108.

西條剛央 (2004). 母子間の"離抱"に関する横断的研究 ： 母子関係を捉える新概念の提唱とその探索的検討 発達心理学研究, **15**, 281-291.

西條剛央 (2007). ライブ講義・質的研究とは何か (SCQRM ベーシック編) 新曜社.

坂上裕子 (2002). 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的変化 ： 母子における共変化過程の検討 発達心理学研究, **13**, 261-273.

坂上裕子 (2003). 歩行開始期における母子の共発達 ： 子どもの反抗・自己主張への母親の適応過程の検討 発達心理学研究, **14**, 257-271.

酒井　厚・菅原ますみ・真栄城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友

との心理関係と学校適応　教育心理学研究, **50**, 12-22

酒井厚・菅原ますみ・菅原健介・木島伸彦・眞榮城和美・詫間武俊・天羽幸子 (2003). 子どもによる親への対人的信頼感 ： 児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討 発達心理学研究, **14**, 191-200.

酒井 厚・菅原ますみ・木島伸彦・菅原健介・眞榮城 和美・詫摩武俊・天羽幸子 (2007). 児童期・青年期前期における学校での反社会的行動と自己志向性 - 短期縦断データを用いた相互影響分析 パーソナリティ研究, **16**, 66-79.

Sameroff, A. J., & Feil, L. A. (1985). Parental concepts of development. In I. Sigel (Ed.), Parental belief systems: *The psychological consequences for children* (pp.83-105). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

佐藤鮎美・内山伊知郎 (2012).　乳児期における絵本共有が子どもに対する母親の働きかけに及ぼす効果 ： 絵本共有時間を増加させる介入による縦断的研究から　発達心理学研究,　**23**, 170-179.

佐藤朗子(1993). 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大學教育學部紀要, **40**, 215-226.

Schaefer, E. S. (1959). A circumplex model for maternal behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology,* **59***,* 226-235.

Schaefer, E. S. (1961). Converging conceptual models for maternal behavior and for child behavior. In J. C. Glidewell (Ed.), *Parental attitudes and child behavior* (pp. 124–146). Springfield, IL: Charles C Thomas.

Schaefer, E. S. (1965a). Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, **36**, 413-424.

Schaefer, E. S. (1965b). Configurational analysis of children's reports of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, **29**, 552-557.

Schermerhorn, A.C., Chow, S-M., & Cummings, E. M. (2010). Developmental family processes and interparental conflict: Patterns of microlevel influences. *Developmental Psychology*, **46**, 869-885.

Schludermann, E., & Schludermann, S. (1970). Replicability of factors in children's report of parent behavior (CRPBI). *Journal of Psychology,* **76**, 239-249.

Schludermann, S., & Schludermenn, E. (1971). Adolescent perception of parental

behavior (CRPBI) in Hutterite communal society. *Journal of Psychology, 79*, 29–39.

Schludermann, S., & Schludermann, E. (1983). Sociocultural change and adolescents' perceptions of parent behavior. *Developmental Psychology,* **19**, 674–685.

Sears, R. R., Maccoby, E, E., & Levin, H. (1957) *Patterns of childrearing.* Evanston, IL: Row, Peterson.

石 暁玲・桂田恵美子（2010). 保育園児を持つ母親のディストレス：相互協調性・相互独立性およびソーシャル・サポートとの関連 発達心理学研究, **21**, 138-146.

篠原郁子（2011). 母親の mind-mindedness と子どもの信念・感情理解の発達：生後 5 年間の縦断調査　発達心理学研究, **22**, 240-250.

鹿内啓子（2010). 大学生における親の就職への態度および親との関係と職業意識との関連　北星学園大学文学部北星論集，**47**, 1-12,

鹿内啓子（2012). 大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連 北星学園大学文学部北星論集，**49**, 1-11.

島　義弘・上嶋菜摘・小林邦江・小原倫子（2012). 母子相互作用において母親が使用する情報：内的作業モデルの影響　発達心理学研究，**23**, 36-43.

島　義弘（2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか : 内的作業モデル媒介効果　発達心理学研究, **25**, 260-267.

清水和秋（2003a). 因子分析における探索の意味と方法　関西大学社会学部紀要，**34**(2), 1-36.

清水和秋（2003b). 構造方程式モデリングによる平均構造の解析モデル 関西大学社会学部紀要, **34(2)**, 83-108.

清水和秋（2013). 構造方程式モデリング パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 Pp.669-675.

清水和秋・三保紀裕・紺田広明・青木貴寛（2014). SEM 適合度指標と適合度の報告（1）―心理学研究と教育心理学研究を対象として― 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 521.

清水和秋・柴田由己（2008). 大学生の Emotional Intelligence Scale (EQS) の構造とモデル化 関西大学社会学部紀要, **39**(2), 13-34.

清水和秋・山本理恵（2007). 小包化した変数によるパーソナリティ構成概念間の関係性のモデル化　－Big Five・不安（STAI）・気分（POMS）－　関西大学社会学部紀要, **38**(3),

61-96.

清水和秋・山本理恵（2008）. 感情的表現項目による Big Five 測定の半年間隔での安定性と変動　関西大学社会学部紀要, **39**(2), 35-67.

清水紀子（2004）. 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ　発達心理学研究, **15**, 52-64.

品川不二郎・品川孝子（1958）. 田研式親子関係診断テストの手引　日本文化科学社

白石尚大･岡本祐子（2005）. 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達,家族機能の関連性　青年心理学研究, **17**, 1-13.

塩崎尚美・無藤　隆（2006）. 幼児に対する母親の分離意識 ： 構成要素と影響要因　発達心理学研究, **17**, 39-49.

Siegelman, M. (1965a). College student personality correlates of early parent– child relationship. *Journal of Consulting Psychology,* **29**, 558–564.

Siegelman, M. (1965b). Evaluation of Bronfenbrenner's questionnaire for children concerning parental behavior. *Child Development*, **36**, 163-174.

Slater, P. E. (1962). Parental behavior and the personality of the child. *The Journal of Genetic Psychology: Research and Theory on Human Development*, **101**, 53-68.

荘島幸子（2010）. 性別の変更を望む我が子からカミングアウトを受けた母親による経験の語り直し　発達心理学研究, **21**, 83-94.

Spits, R. A. (1965). The first year of life: *A psychoanalytic of normal and deviant patterns of objet relations*. New York: International Universities.

Steinberg, L. S., Elman, J. D., & Mounts, N. S. (1989). Authoritative parenting, psychosocial maturity and academic success among adolescents. *Child Development,* **60**, 1424–1436.

Steinberg, L., Lamborn, S., Dornbusch, S., & Darling, N. (1992). Impact of parenting practices on adolescent achievement: Authoritative parenting, school involvement, and encouragement to succeed. *Child Development,* **63**, 1266–1281.

菅井洋子・秋田喜代子・横山真貴子・野澤祥子（2010）. 乳児期の絵本場面における母子の共同注意の指さしをめぐる発達的変化 ： 積木場面との比較による縦断研究　発達心理学研究, **21**, 46-57.

菅野幸恵（2001）. 母親が子どもをイヤになること ： 育児における不快感情とそれに対す

る説明づけ 発達心理学研究, **12**, 12-23.

菅野幸恵・岡本依子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗香・高橋千枝・八木下(川田)暁子（2009). 母親は子どもへの不快感情をどのように説明するか：第1子誕生後2年間の縦断的研究から 発達心理学研究, **20**, 74-85.

菅原ますみ(2004). 前方向視的研究からみた小児期の行動異常のリスクファクター:発達精神病理学的研究から（特集 発達障害の今日的課題）精神保健研究, **50**, 7-15.

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則（2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連 ：家族機能および両親の養育態度を媒介として 教育心理学研究, **50**, 129-140.

杉村和美・山崎瑞紀・竹尾和子（2002). 日本の青年における「親子関係の親密さ」尺度の構成（1）－関係性の認知について－　日本心理学会第66回大会発表論文集, 1037.

Symonds, P.M. (1937). Some basic concepts in parent-child relationships *The American Journal of Psychology.,* **50**, 195-206.

Symonds, P. M. (1938). A study of parental acceptance and rejection. *American Journal of Orthopsychiatry*, **8**, 679-688.

Symonds, P. M. (1939). *The psychology of parent-child relationships.* NY: D. Appleton-Century Company.

Symonds, P. M. (1949). *The dynamics of parent– child relations*. New York: Columbia University Press, Bureau of Publications, Teacher's College.

高田　明（2002). サンにおける養育行動とその発達的意義 ：ジムナスティック･授乳場面の特徴 発達心理学研究, **13**, 63-77.

高木秀明・藤田仁美（1988). 親子関係と青年の自己意識－自我同一性，自尊感情との関連－　日本教育心理学会第30回総会発表論文集,　360-361.

高木紀子・柏木恵子（2000). 母親と娘の関係　発達研究, **15**, 79-94.

高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子（2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス ：母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係 発達心理学研究, **19**, 121-131.

高橋恵子（1970). 依存性の発達的研究：Ⅲ　教育心理学研究, **18**, 65–75.

高橋道子（1994). 自発的微笑から外発的･社会的微笑への発達 ―微笑の内的制御から外的制御への転換をめぐって―　東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学, **45**, 213-237.

高橋由利子（2001）．　青年期の自我同一性の発達と親子関係について　日本教育心理学会総会発表論文集, **43**, 220.

竹尾和子・高橋 登・山本登志哉・サトウタツヤ・片 成男・呉 宣児（2009）．お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達的変化 発達心理学研究, **20**, 406-418.

竹尾和子・杉村和美・山崎瑞紀(2002)．日本の青年における「親子関係の親密さ」尺度の構成（3）－確認的因子分析－　日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 1039.

田中あかり（2009）．母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響 発達心理学研究, **20**, 362-372.

徳田治子（2004）．ナラティヴから捉える子育て期女性の意味づけ ： 生涯発達の視点から発達心理学研究, **15**, 13-26.

遠山孝司(2005)．回想的な方法による親と教師の威厳ある養育・指導態度尺度の作成　東海心理学研究, **1**, 21-29.

Torgersen, S., & Alnaes, R. (1992). Differential perception of parental bonding in schizotypal and borderline personality disorder patients. *Comprehensive Psychiatry,* **33**, 34–38.

外山美樹・樋口 健・宮本幸子（2014）．高校受験期における母親からのソーシャル・サポートが子どもに与える影響　発達心理学研究, **25**, 1-11.

外山紀子（2008）．食事場面における 1～3 歳児と母親の相互交渉 ： 文化的な活動としての食事の成立 発達心理学研究, **19**, 232-242.

豊田秀樹（1998）．共分散構造分析[入門編]― 構造方程式モデリング― 朝倉書店.

豊田秀樹（2000）．共分散構造分析[応用編]― 構造方程式モデリング― 朝倉書店.

辻岡美延・小高　恵（1991）．親子関係の相互認知Ⅱ（小嶋氏の原資料の再分析）関西大学社会学部紀要, **23**, 167-192.

辻岡美延・小高　恵（1993）．親子関係の認知構造 ―小嶋のデータと小高のデータとの群別比較―関西大学社会学部紀要 , **24**, 265-281.

辻岡美延・山本吉廣（1975a）．　斜交軸回転による因子構造の交叉妥当化 － 親子関係テストについての一結果 － 関西大学社会学部紀要, **6**, 53-66.

辻岡美延・山本吉廣（1975b）．　親子関係の四次元 －Schaefer の CR- PBI の分析－関西大学社会学部紀要, **7**, 146-160.

辻岡美延・山本吉廣（1976）．親子関係診断尺度ＥＩＣＡの作成－因子的真実性の原理によ

る項目分析－ 関西大学社会学部紀要，7, 1-14.

辻岡美延・山本吉廣（1977). 親子関係の相互認知－小嶋氏の原資料の一分析－ 教育心理学研究, 25, 18-29.

辻岡美延・山本吉廣（1978). 親子関係の類型. 教育心理学研究, 26, 84-93.

塚田みちる（2001). 養育者との相互交渉にみられる乳児の応答性の発達的変化 ： 二項から三項への移行プロセスに着目して　　発達心理学研究，12, 1-11.

塚田-城 みちる（2008). 12 ヶ月時から 24 ヶ月時における子どもの行為制御の発達 ： 親子間の事物をめぐる葛藤の変化に注目して 発達心理学研究，　19, 331-341.

常田美穂（2007). 乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割 発達心理学研究, 18, 97-108.

上村佳世子・加須屋裕子（2008). 30 ヶ月児の親子三者間相互行為への参加と親から提供される言語環境 発達心理学研究, 19, 342-352.

氏家達夫・二宮克美・五十嵐　敦・井上裕光・山本ちか・島　義弘（2010). 夫婦関係が中学生の抑うつ症状におよぼす影響 ： 親行動媒介モデルと子どもの知覚媒介モデルの検討 発達心理学研究, 21, 58-70.

内海緒香（2013). 青年期養育尺度（PAS）の作成　心理学研究, 84, 238-246.

若原まどか（2003). 青年が認識する親への愛情や尊敬と,同一視および充実感との関連 発達心理学研究, 14, 39-50.

渡邊恵子（1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的関係 母子研究, 18, 23-31.

渡邉恵子（2003). 母親と娘はなぜ親密か －青年期から成人期にかけて－　柏木恵子・高橋恵子(編)　心理学とジェンダー：学習と研究のために　有斐閣，pp.31-36.

渡邉賢二・平石賢二（2010). 母親の養育スキルと子どもの心理的適応に関する縦断的検討 家族心理学研究, 24, 171-184.

Waters, E., & Crandall, V. J. (1964). Social class and observed maternal behavior from 1940–1960. *Child Development*, 35, 1021–1032.

Watson, G. (1934). A comparison of the effects of lax versus strict home training. *Journal of Social psychology*, 5, 102-105.

Willoughby, T. & Hamza, C.A. (2011) A longitudinal examination of the bidirectional associations among perceived parenting behaviors, adolescent disclosure and problem behavior across the high school years. *Journal of Youth and Adolescence*, 40,

463-478.

Whitbeck, L. B., Conger, R. D., & Kao, M. Y. (1993). The influence of parental support, depressed affect, and peers on the sexual behavior of adolescent girls. *Journal of Family Issues,* **14**, 261–278.

Witmer, H. L., Leach, J., & Richman, E. (1938). The outcome of treatment of children rejected by their mothers. *Smith College Studies in Social Work,* **8**, l87–234.

Wood, P., & Brown, D. (1994). The study of intraindividual differences by means of dynamic factor models: Rationale, implementation, and interpretation. *Psychological Bulletin*, **116**, 166-186.

山田裕子・宮下一博 (2007). 青年の自立と適応に関する研究：これまでの流れと今後の展望 千葉大学教育学部研究紀要, **55**, 7-12.

山田安彦 (1962). 景観構成要素としての社会規範―12 表法の場合―岩手大学学芸学部研究年報, **20**, 51-78.

山田裕子(2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, **23**, 1-18.

山岸明子 (2000). 女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係 青年心理学研究, **12**, 31-46.

山岸明子 (2004). 女子青年がもつ現在の対人的枠組みと生育史に記述された母親及び友人との関係の質との関連 発達心理学研究, **15**, 195-206.

山岸明子 (2005). 青年後期と成人期初期に記述された生育史と対人的枠組みの変化との関連 ：7 年間の縦断的研究 青年心理学研究, **17**, 15-26.

山岸明子 (2009). 成人期女性の現在の母親認知と青年期の母親認知の関連, 及びその規定要因 青年心理学研究, **21**, 53-68.

山岸明子 (2013). 青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連 ―内的作業モデルを手がかりにして― 青年心理学研究, **25**, 29-44..

山本彩留子・岡本祐子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ，対人態度の関連性 広島大学心理学研究, **8**, 107-120.

山本吉廣(1977). 親子関係の類型と子どもの人格特性 ―親子関係診断尺度 EICA と YG 性格検査― 関西大学大学院人間科学, **9**, 51-68.

山根隆宏 (2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づ

け：人生への意味づけと障害の捉え方との関連　発達心理学研究, **23**, 145-157.

山下俊郎・三浦武・森重敏・八重島健二・島田俊秀（1962). 父―母―子関係分析(7)－母―子関係の因子―　日本心理学会第 26 回大会発表論文集, 200.

山下俊郎・三浦武・森重敏・八重島健二・島田俊秀（1964). 父―母―子関係分析(13)－母―子関係の分析―日本教育心理学会第 6 回総会発表論文集, 62-63.

山内星子（2010). 母親の感情特性が青年の感情特性に与える影響：感情のデュアルプロセスモデルの枠組みから 発達心理学研究, **21**, 287-295.

山内星子･伊藤大幸（2008). 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響：青年自身の恋愛関係を媒介変数として 発達心理学研究, **19**,　294-304.

山崎瑞紀・竹尾和子・杉村和美（2002). 日本の青年における「親子関係の親密さ」尺度の構成（2）－価値観について－　日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 1038.

山崎瑞紀・杉村和美・竹尾和子（2002). 「親子関係の親密さ」尺度の構成，及び発達差の検討 －日本的相互協調性の視点から－　日本青年心理学会大会発表論文集, **10**, 76-79.

矢藤優子（2007). 乳児と母親のおもちゃ遊び場面における注意の共有と母親の発話：7 カ月齢と 12 カ月齢を比較して 発達心理学研究, **18**, 55-66.

謝辞

2015 年 9 月，博士論文を提出し，関西大学大学院心理学研究科より博士号（心理学）の学位を取得するにあたり，お世話になりました方々への謝辞を著したいと思います。

最初に，学部時代から今日まで，長年に亘りご指導をいただきました関西大学社会学部教授の清水和秋先生に，心から謝意と敬意を申し上げます。

約 30 年前，関西大学社会学部に入学し，心理学の演習授業を受講したのが先生との最初の出会いでした。ちょうど，先生がアメリカから帰国されたばかりで，行動計量学の最新の研究について熱く語ってくださったことを今でも覚えています。

学部を終え，関西大学大学院社会学研究科に入学した私は，故辻岡美延先生に師事することとなりました。辻岡研究室の先輩である故山本吉廣氏の親子関係研究に興味を抱いたのが，私の親子関係の研究の始まりであったと思います。辻岡先生からは，「データを我が子のように大事にしなさい」と言われ，辻岡研究室で開発された Fortran の多変量解析のプログラムを使って，幾度も分析し，検討し直したことを昨日のことのように思い出します。辻岡先生には，本当に丁寧に，そして厳しく指導していただき，多くのことを教えていただきました。今の私の研究の基礎を作って下さったのは辻岡先生のお蔭と思っています。改めて，心から感謝と敬意を申し上げます。

社会学研究科博士課程修了後，私は大阪短期大学（現太成学院大学）に勤務することになりました。10 年余りの時は流れて，職場環境にも慣れ，子育ても落ち着いた時に，学位を取得したいという気持ちが再び高まり，辻岡研究室の先輩でもある清水先生に相談しましたところ，救いの手を差し伸べて下さり，再び，心理学研究科で学ぶ機会を与えて下さいました。進学後は，これまで使ったことのない，SEM や DFA 等，新しい手法について学ぶことができました。最新の研究について学ぶことは，私にとって喜びでもありました。また清水先生からは，根気強く，丁寧にご指導いただきました。このご恩は一生忘れることはありません。

博士論文の審査におきましては，社会学部雨宮俊彦教授，文学部田中俊也教授に，お世話になりましたことを，心より感謝致します。今後は，更なる親子関係研究を行い，少しでも社会に貢献できる研究を目指していきたいと考えております。

さらに筆者が所属した関西大学大学院の清水ゼミの皆様には，いつも温かい励まし，様々なアドバイスをいただき，苦しい中を支えて頂いたと感謝しています。

そして，学部時代の指導教授であった故柴田満先生にも感謝の気持ちを表したいと思います。柴田先生には，学部時代から色々お世話になり，これまでの研究で，多くのご助言をいただきました。先生が亡くなられて，約 15 年の月日が経ちました。先生の研究への情熱を見習って，更なる研究を行っていきたいと思います。

また，調査に協力してくださった学生の方々，100 日を超える調査に快く協力してくださったお母様，お子様には篤くお礼申し上げます。特に，100 日を超える調査に参加してくださったお母様，お子様には多くの時間を割いていただきました。本当にありがとうございました。

最後になりますが，これまで支えてくれた家族には，本当に感謝しています。亡き父，母には，温かい家庭環境を作って私を育ててくれたこと，また大学院まで進学を認めてくれたことにとても感謝しています。また同じ心理学の研究者である夫には，研究の相談にのってもらったり，励ましてもらったり，多くの助言をもらいました。博士論文提出締め切りの 2 ヶ月前に，中学生の娘は，突然，病気を発症し，入院を余儀なくされました。私のいい加減な子育てが，娘を病気にさせてしまったのではないかと思い悩み，博士論文を完成させる気力を失いかけていましたが，娘から「自分のことは自分で何とかするから，お母さんは仕事に専念して欲しい」と言われ，何とか，博士論文を提出することができました。娘は，その言葉通り，病院の方々に助けられながら，辛い治療に耐えてくれました。本当に多くの人々に支えられ，博士論文を提出することができたと感謝しています。今後は，学生の育成を行い，少しでも社会に貢献できるよう努力していきたいと思います。

2015 年 9 月

小高　恵